熊本県文化財調査報告　第45集

興善寺 II

—熊本県八代市興善寺町所在興善寺四郎丸・興善寺志水遺跡の調査—

1980

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第45集

興善寺 II

―熊本県八代市興善寺町所在興善寺四郎丸・興善寺志水遺跡の調査―

1980

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代市の「興善寺遺跡」に関するものであります。

興善寺は昭和35年に熊本大学松本雅明教授により調査され、法起式の伽藍配置が復原されていたもので、自動車道はこの一隅および周辺を通過することになりました。調査の結果、築地の東南隅や周辺の関連遺構等が確認されました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いであります。

発掘調査の実施に当たりましては、日本道路公団当局の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生方、地元の方々からの御協力を賜りました。

ここに心からお礼を申しあげます。

昭和55年３月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

調査の経緯

日本道路公団の九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線の建設計画に伴い、昭和46年度に熊本県教育委員会では国庫補助を受けて松橋－八代間の文化財分布調査を実施した。その結果、33ヵ所の遺跡が認められ「文化財分布調査報告書」として報告を行った。正式のルートが決定されると八代地区には発掘調査の必要な遺跡が８ヵ所あることがわかり、日本道路公団からの委託をうけて、熊本県教育委員会が昭和51年度から発掘調査を実施することになった。

今回報告を行う興善寺遺跡はその中の一つである。当初、興善寺遺跡として一括されたが、面積的に非常に広いことから子字界をもって、興善寺馬場遺跡と興善寺志水遺跡とに分割して調査を行うことになった。

道路建設工事に先がけ、昭和51年11月18日から興善寺志水遺跡の発掘調査を開始した。調査を進めると多くの須恵器や土師器を出土する包含層が検出され、翌52年３月には馬場遺跡の発掘調査も開始された。両遺跡の調査の結果、遺跡はさらに北側に向って伸びることが判明したため、同年９月からは興善寺四郎丸遺跡として発掘調査を行うことになった。興善寺志水遺跡と興善寺四郎丸遺跡の調査の組織は下記のとおりである。

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　岩崎辰喜（文化課長）
境信三郎（元文化課長）
合志太助（元文化課長）

調査総括　隈　昭志（文化課文化財調査係長）

調査員　江本　直（文化課学芸員）
丸山武水（文化課調査員）志水遺跡
安達武敏（文化課調査員）志水遺跡
倉原謙治（文化課調査員）志水遺跡
中山清美（文化課調査員）志水遺跡
鶴島俊彦（文化課調査員）志水遺跡

専門調査員　内藤芳篤（長崎大学医学部第二解剖学教室教授）
松下孝幸（長崎大学医学部第二解剖学教室助手）
斎藤林次（熊本県文化財審議員）
高橋俊正（熊本大学教養部助教授）
長谷義隆（熊本大学理学部助手）

調査指導協力者　松本雅明（熊本大学文学部名誉教授）
白木原和美（熊本大学文学部教授）
田辺哲夫（熊本県立玉名高校長）
小田富士雄（北九州市立博物館主幹）
三島　格（元福岡市立歴史資料館長）
甲元真之（熊本大学文学部助教授）
東　光彦（熊本市博物館）
富田紘一（熊本市博物館）
花岡興輝（熊本県立美術館）
高橋　章（九州歴史資料館大宰府調査事務所・技師）
日隈正道（明言院）

八代市教育委員会

調査事務局　田辺宗弘（文化課長補佐）
前田利郎（元文化課長補佐）
田中　繁（元文化課長補佐）
村上孝司（文化課管理係長）
望野正雄（元文化課管理係長）

遺物整理　上野辰夫（文化課主幹）
山城仁恵（文化課嘱託）

興善寺四郎丸遺跡

こうぜんじしろうまる

—八代市興善寺町所在遺跡の調査—

例　　言

1．この報告書は昭和52年度に日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査として実施した八代市興善寺四郎丸遺跡の発掘調査に関する報告書である。

2．発掘調査は熊本県教育委員会が主体となり実施したもので、興善寺遺跡は興善寺四郎丸・馬場・志水遺跡の三ヵ所で発掘調査を行った。報告書は馬場遺跡を『興善寺Ⅰ』とし、四郎丸・志水遺跡を『興善寺Ⅱ』としてまとめた。

3．調査および報告書の作成は主に江本直があたったが、下記の方々の手をわずらわせた。

平板測量　村井真輝
遺物実測　高谷和生
布目瓦一覧表　広瀬正照

4．人骨の調査については、長崎大学医学部内藤芳篤教授・松下孝幸助手の来訪があり、現地での御指導を受け、玉稿をいただきました。深く謝意を表します。

5．遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫で行い、遺物も同庫に保管している。なお、人骨については、長崎大学医学部解剖学第二教室に保管をしている。

6．写真撮影は江本が行った。

（江本）

本　文　目　次

序　文

調査の経緯

例　言

Ⅰ　調査の経過……5

Ⅱ　遺跡の位置……6

Ⅲ　調　査……8

1．トレンチの設定……8

2．炉跡遺構……11

3．住居跡状遺構……13

4．土　坑……15

5．古墳石材……16

6．ＳＴＡ 154＋60中心杭付近出土遺物……16

7．その他の出土遺物……39

8．墓　坑……41

Ⅳ　熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨……59

Ⅴ　むすび……69

表　目　次

第１表　住居跡状遺構出土土器一覧表……15

第２表　出土土器一覧表（001～013）……27

第３表　出土土器一覧表（014～033）……28

第４表　出土土器一覧表（034～053）……29

第５表　出土土器一覧表（054～073）……30

第６表　出土土器一覧表（074～099）……31

第７表　布目瓦一覧表　（100～108）……32

第８表　数珠玉一覧表……55

第９表　墓坑一覧表……55

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……7

第２図　遺跡全図……9

第３図　Ａ－５トレンチ東側断面実測図…… 10
第４図　炉跡遺構実測図…… 12
第５図　住居跡状遺構…… 13
第６図　住居跡状遺構出土土器…… 14
第７図　古墳石材・土坑実測図…… 15
第８図　出土土器実測図　須恵器（001～020）…… 17
第９図　出土土器実測図　須恵器（021～039）…… 18
第10図　出土土器実測図　須恵器（040～051）…… 20
第11図　出土土器実測図　須恵器（052～061）…… 22
第12図　出土土器実測図　須恵器（062～066）…… 23
第13図　出土土器実測図　須恵器（067～076）…… 24
第14図　出土土器実測図　土師器（077～089）…… 25
第15図　出土土器実測図　土師器（090～099）…… 26
第16図　出土遺物実測図　布目瓦（100～102）…… 33
第17図　出土遺物実測図　布目瓦（103～105）…… 34
第18図　出土遺物実測図　布目瓦（106～108）…… 35
第19図　出土土器実測図　青磁・瓦器（109～116）…… 37
第20図　出土土器実測図　磁器・その他（117～128）…… 38
第21図　出土遺物実測図　五輪塔・鞴口（129～133）…… 40
第22図　墓坑全体図…… 42
第23図　第１号・第４号墓坑実測図…… 43
第24図　第２号・第３号墓坑実測図…… 44
第25図　第５号・第６号墓坑実測図…… 46
第26図　第７号墓坑・第８号遺構実測図…… 47
第27図　第９号・第10号墓坑実測図…… 48
第28図　第12号・第13号墓坑実測図…… 49
第29図　第14号墓坑実測図…… 50
第30図　数珠玉・鉄釘実測図　(1)表土層（２～７）第２号墓坑
（８～19）第３号墓坑　鉄釘（1～6）第一号墓坑…… 52
第31図　鉄釘実測図（７～９）第１号墓坑　(10～18)第３号墓坑
(19～24)第４号墓坑　(25～35)第５号墓坑…… 53
第32図　鉄釘実測図　(36)第５号墓坑　(37～45)第６号墓坑　(46～50)第11号墓坑
(51)第13号墓坑　(52～60)第14号墓坑…… 54

図　版　目　次

図版１　上：調査地遠景……75
　　下：調査前の状況（北側から）……75
図版２　右：Ａ－５トレンチ東壁土層……76
　　左：Ａ－５トレンチ調査……76
図版３　上：古墳石材出土状態……77
　　下：住居跡状遺構……77
図版４　上：炉跡遺構……78
　　下：炉跡遺構　壁と土器出土状況……78
図版５　上：露出を終えた墓石……79
　　下：墓石……79
図版６　上：墓石……80
　　下：墓坑の検出……80
図版７　右：第２号墓坑……81
　　左：第１号墓坑……81
図版８　右：第４号墓坑……82
　　左：第３号墓坑……82
図版９　右：第６号墓坑……83
　　左：第５号墓坑……83
図版10　上：第７号墓坑……84
　　下：第８号遺構……84
図版11　上：第９号墓坑・第10号墓坑……85
　　下：第11号墓坑……85
図版12　上：第12号墓坑……86
　　下：第13号墓坑……86
図版13　上：第13号人骨……87
　　下：第14号墓坑……87
図版14　右：１号人骨（壮年・男性）……88
　　左：１号人骨、四肢骨（壮年・男性）……88

図版15　右：２号人骨（熟年・男性）……89
左：２号人骨、四肢骨（熟年・男性）……89
図版16　弥生式土器……90
図版17　出土遺物（001～013）……91
図版18　出土遺物（015～021）……92
図版19　出土遺物（022～036）……93
図版20　出土遺物（039～053）……94
図版21　出土遺物（054～061）……95
図版22　出土遺物（080～110）……96
図版23　出土遺物（111～127）……97
図版24　鞴口……98
図版25　上：表土層出土数珠玉……99
下：第２号墓坑出土数珠玉……99
図版26　上：第２号墓坑出土数珠玉……100
下：第３号墓坑出土鉄釘……100

Ⅰ　調査の経過

昭和51年11月から興善寺志水遺跡の発掘調査がはじまり、昭和52年３月からは近接した興善寺馬場遺跡の調査が行われた。

興善寺志水遺跡は昭和52年８月末日で発掘調査が終了したが、さらに興善寺馬場遺跡の北にある興善寺四郎丸遺跡の発掘調査が実施されることになった。調査は興善寺志水遺跡につづいて筆者が担当することになり、志水遺跡から発掘器材を９月５日現地に運び調査の準備にかかった。

発掘調査は道路公団のＳＴＡナンバーの 154＋00～ 155＋20までを対象にして実施することになった。現地は用地買収のあとは放置されていたため雑草がおい繁り、表面採集もままならぬ状態であった。作業はこれらの雑草の除去作業からはじめ、そのあとトレンチを設定することにした。

９月６日からバックフォーによって、雑草の除去および一部表土剝ぎ作業を行った。この作業に３日間を要した。

９月９日にはＡ～Ｇトレンチを設定し、一部掘り込み作業をはじめた。トレンチ調査の結果、ＳＴＡ 155＋00から南側は大谷川の氾濫地であることがわかり、調査の対象から除外してよいとの判断ができた。

９月12日からはＣトレンチの調査を行った。このトレンチの北側の傾斜面からはスラッグや鞴口が出土したため、北側および東側へトレンチの拡張を行い調査を行った。

９月20日からはＡ地区の調査に移る。Ａ－１～Ａ－５トレンチを設定した。Ａ－２トレンチからは青磁片や擂鉢など中世時代の遺物が出土した。

９ 月26日からはＡ－４トレンチを調査した。須恵器の高杯や土師器の甑把手など古墳～歴史時代の遺物も出土した。

９月28日からはＡ－５・６トレンチを調査したが、このトレンチからは遺物はほとんど出土しなかった。

10月４日からはＡ－５トレンチをさらに南側に約20ｍ延長し調査を行う。南隅から陶磁器片の出土がある。傾斜面に客土して整地されていた。Ｄトレンチの調査もはじめ、五輪塔の水輪が１個出土した。以前このＤトレンチ付近には古墳と古墓があったが、柑橘の栽培を行うため土地の造成を行った際に壊してしまったと近くの人が伝えてくれた。

10月20日、道路公団と工事を担当する清水建設の担当者が集まり定期連絡会議を行う。本遺跡に関しては公団側から工事用のパイロットロードを早急につくりたいので東側の調査を急い

で欲しいとの要望がある。

10月21日からはＳＴＡ 154＋60の中心杭付近の表土剝ぎ作業をはじめる。古墳時代から近世の遺物が多く出土し、石灰岩や凝灰岩が多く見られた。

11月１日には古墳の石材が出土したが、古墳そのものは検出できなかった。石組みの露出作業をつづけた結果、石組みは墓であり、その下に墓坑があることを確認した。

11月９日からはＣトレンチの東側を拡張して再度、遺構の検出につとめる。

11月21日、Ｃトレンチではスラッグは出土するが、遺構を検出するまでには至らず、スラッグを採集しＣ地区の調査は終了する。

11月22日以降の調査はＡ地区を主として行うことにして、表土剝ぎを終えていないＡ－７トレンチ南側の調査を行った。その結果、貝殻を包含する住居跡状の落ち込みや土坑、それに炉跡遺構を検出し、ひきつづき調査をつづけた。11月25日にはこれらの遺構の実測や写真撮影を終えた。

11月30日、道路公団・清水建設と再度、定期連絡会議があり、調査状況の報告を行う。調査は12月中旬終了する予定であることをつたえる。

12月１日から最後の調査として、すでに露出を終えていた石囲いを除去し、墓坑を掘りはじめた。墓坑は14基を検出し、人骨が出土した。

12月10日、人骨は、長崎大学医学部内藤芳篤教授と松下孝幸助手に調査をお願いした。

12月14日、人骨の調査も終了し、最終的な写真撮影と実測を終了する。

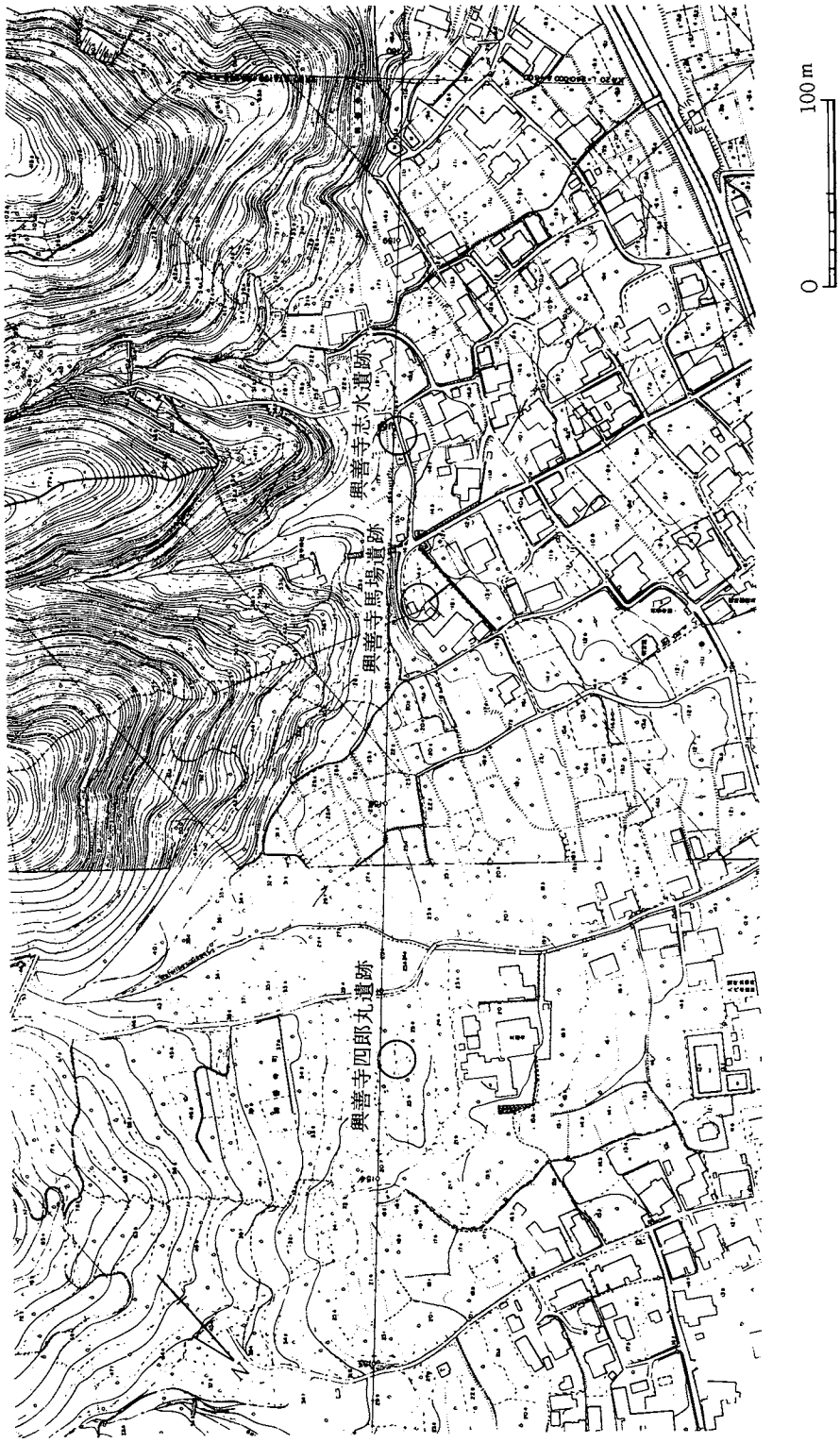
12月15日、出土した遺物と、調査器材をまとめ熊本県文化財収蔵庫に運び、発掘調査を終了した。

（江本）

II　遺跡の位置

興善寺四郎丸遺跡は行政区、熊本県八代市興善寺町四郎丸に位置する。興善寺馬場遺跡の北東部にあたり、直線にして約 250ｍである。国道３号から左手、八代市立竜峰小学校へと折れ、南東方向へさらに約 300ｍ過ぎれば、光厳寺を経て本遺跡へと通じる。調査地は油谷山の西側山麓台地上にあり、北側を谷川、南側を大谷川が流れる。双つの谷部に挟まれた傾斜地である。海抜約30ｍをはかり、地目は畑地で、主に果樹の栽培が行われている。付近の石を集め野づら積みによる石垣をつくり、段々畑がつくられている。

調査地を道路公団のSTAナンバーで示せば、STA154＋00からSTA155＋20までにあたる範囲を調査対象地とした。くしくも九州縦貫自動車道は薩摩往還と称される旧道とルートを同じくしている。調査地のすぐ上には「オツメ所」と呼ばれるところがある。街道に係わる防御を目的



第１図　遺跡位置図

とした施設があったのだろうか。八代から熊本への主要道路とともに、竜峰山を越えて東陽村、さらには五木村へと向かう主要な峠越えの道にもあたる。本遺跡の真下には真宗光厳寺がある。元文17年、僧教円法師によって建てられ、寛永17年龍起によって現在地に移築されたといわれる。その後、大発展をとげ城南最大の名刹となっている。いずれも興善寺地区の歴史的な風土をかもしだしている。

ＳＴＡ 154＋20から北側は７～８ｍの比高があり、急傾斜をもって水田へとつづく。湧水もあり水田をうるおす。ＳＴＡ 155＋20を過ぎると南に大谷川がある。日頃の水量は少なく、夏を過ぎれば枯渇する小河川であるが、梅雨の時期は山から多量の水が流れ出す。多量の土砂を伴うことが多く、しばしば水田を荒らし、時には民家にも洪水を生じさせる。上流の土質が水に弱いためで、山津波の災害があったことも伝えられる程である。

民家は220ｍ程西側に南北に連なり、水田耕作は国道３号から西に広がる八代平野で行われる。

Ⅲ　調　査

１．トレンチの設定

STA 154＋27から155＋20 を調査の対象地として、全体を網羅しながら、遺構や遺物の有無をを確認することを目的として合計７ヶ所に設けた。

道路の中心線から東側部分で、北側を谷への傾斜地、南側を里道とに挟まれたところをＡ地区とした。地形的には今回の調査地の中ではもっとも高いところで、５枚の畑に分けられている。ＳＴＡ 154＋40区にＡ－１～Ａ－３トレンチを設け、ＳＴＡ 154＋20区の一段低い畑地にＡ－４トレンチを設けた。東側の幅杭にそってＡ－５トレンチとＡ－６トレンチを設け、さらに、ＳＴＡ 154＋60区にはＡ－７トレンチを設けた。

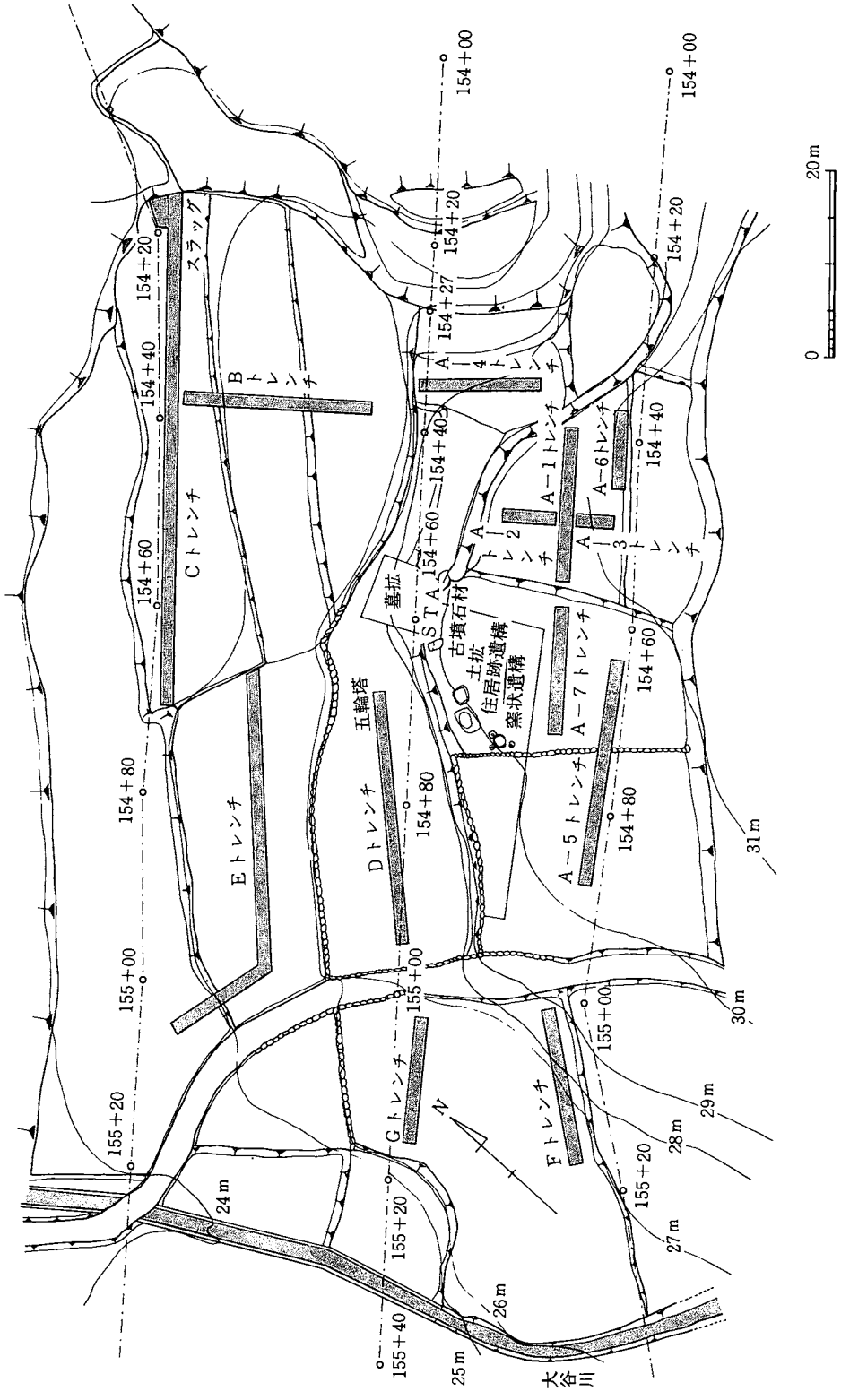
Ｂトレンチは ＳＴＡ 154＋40の中心杭と西側の幅杭とを結んだ線に平行し、３枚の畑地を横切る状態に設置した。

Ｃトレンチは ＳＴＡ 154＋20区からＳＴＡ 154＋60区までの西側の幅杭に平行した状態で設けた。このトレンチを調査した結果、北隅からスラッグや近世磁器が出土したため、ＳＴＡ 154＋00区へ拡張を行った。

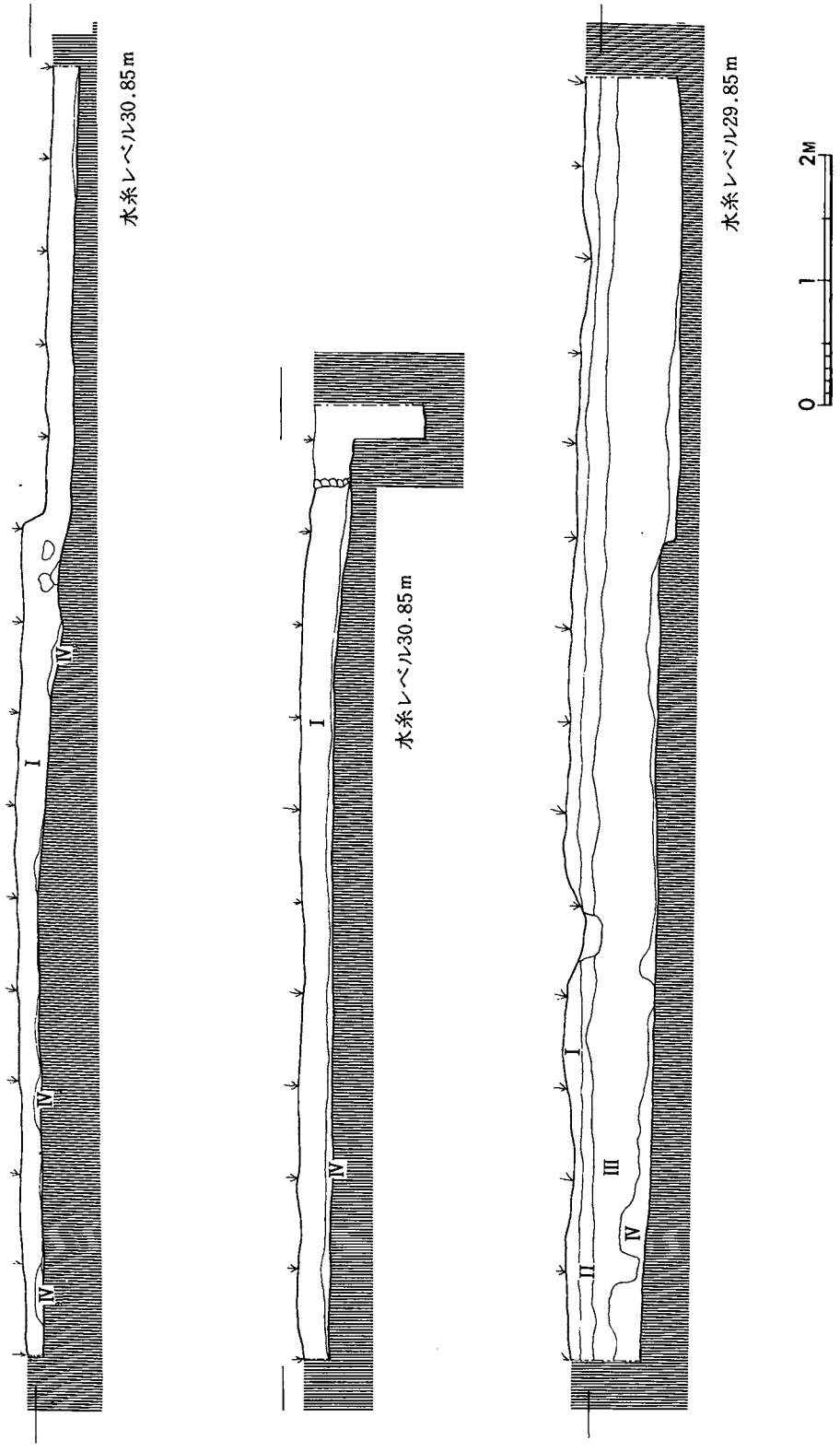
Ｄトレンチは ＳＴＡ 154＋60～80区の中央部で石垣に平行した状態に設けた。

Ｅトレンチは ＳＴＡ 154＋60～ 155＋00区の西側部分に設けた。石垣に平行し、ＳＴＡ 155＋00区付近からは里道に沿い右に折れた。

Ｆ・Ｇトレンチは里道より南側部分に、主に土層状態を調査する目的で設けた。Ｆトレンチは ＳＴＡ 155＋00区の東側の幅杭にそって、またＧトレンチは同じく 155＋00区の中心線の東側に設けた。


スラッグ
Cトレンチ
Bトレンチ
Eトレンチ
Dトレンチ
Gトレンチ
Fトレンチ
A−1トレンチ
A−2トレンチ
A−3トレンチ
A−4トレンチ
A−5トレンチ
A−6トレンチ
A−7トレンチ
墓拡
STA
古墳石材
土拡
住居跡遺構
窯状遺構
五輪塔
大谷川
N
0
20m
24m
25m
26m
27m
28m
29m
30m
31m
154+00
154+20
154+27
154+40
154+60
154+80
155+00
155+20
155+40

第2図　遺跡全図



第3図　A－5トレンチ東側断面実測図

各トレンチの規模については下記に示すとおりである。

A－1トレンチ	17m× 1.5m	B	トレンチ	20.5m× 1.5m
A－2トレンチ	6m× 1.5m	C	トレンチ	55m× 1.5m
A－3トレンチ	4m× 1.5m		拡　張	4m× 2m
A－4トレンチ	13m× 1.5m	D	トレンチ	27m× 1.5m
A－5トレンチ	24.5m× 1.5m	E	トレンチ	44m× 1.5m
A－6トレンチ	8.5m× 1.5m	F	トレンチ	17m× 1.5m
A－7トレンチ	14m× 1.5m	G	トレンチ	13.5m× 1.5m

また、A－7トレンチの西側およびＳＴＡ 154＋60の中心杭周辺については多くの土器片が採集されたため、全面の表土剝ぎを行った。

以上のトレンチおよび表土剝ぎ作業によって下記の遺構や遺物を検出し調査を行った。

炉跡・土坑・住居跡状遺構・古墳石材・五輪塔・墓坑14基

なお、A－5トレンチ東側断面図によって、土層の状態について示しておきたい。（第3図）

第Ⅰ層　耕作土で、暗褐色を呈する。小礫石や砂粒を含む。樹根が多い。

第Ⅱ層　第Ⅰ層と同じく暗褐色を呈する。小礫石や砂粒と粘質土が混じりあっており固い。樹根がはいり攪乱を多く受けている。

第Ⅲ層　黒褐色を呈し、第Ⅱ層よりもさらに砂礫が多くなる。粘性も強くなり非常に固い。南側にいくにしたがい厚くなり、南端では70cmを越える。第Ⅱ層の土に第Ⅳ層の黄褐色土を混ぜ合わせた状態である。

第Ⅳ層　黄褐色を呈する固い土質である。花崗岩が変化したものと考えられる。

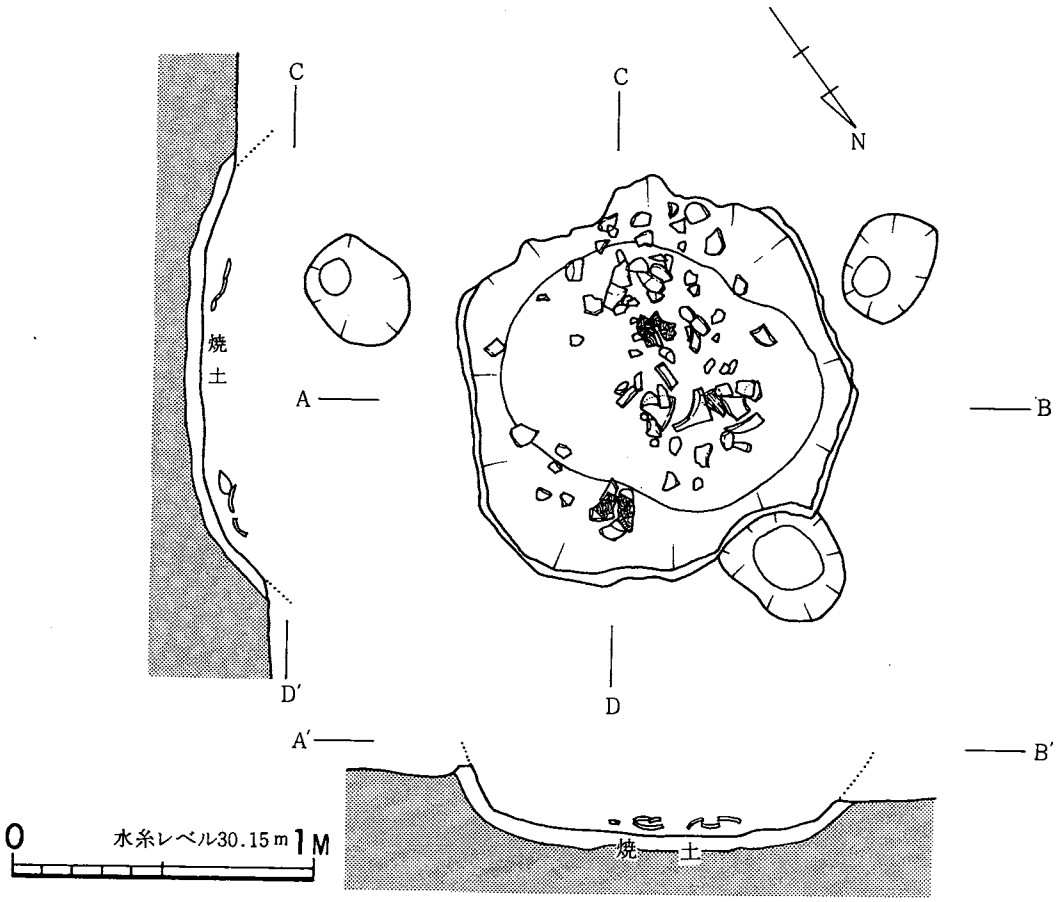
A－5トレンチ東側断面では以上のような土層状態を示している。第Ⅱ層と第Ⅲ層とには陶磁器片が含まれていることから新しい時代に整地のため客土されたものであろう。A地区の最も高いＳＴＡ 154＋40区では、耕作土の直下は第Ⅳ層である。地形的に高いところが削平され、南側の低い部分を埋め平坦な畑地に整地を行ったものと思われる。

2．炉　跡　遺　構

STA154＋60区のA－7トレンチの西側で検出した。形状はほぼ円形を呈し、最大径は 146cmである。上部は削平されている。床は浅く皿状にあり、最も深いところで20cmである。床および壁は厚さ15～16cmで赤褐色に焼けている。床面からやや浮いた状態で土器が出土した。土器片はいずれも細片であったが、可能なかぎり実測を行った。

第14図 079～082 は土師器の杯で、第11図 060は須恵器の甕である。

079は底部と体部は丸みをもち境部の器壁が厚い。体部、口縁部は外傾し立ち上がり、口縁部はやや外弯ぎみで端部は丸くおさまる。器面は一部横ナデが認められるが他は荒れているため不明瞭である。



第4図　炉跡遺構実測図

胎土は精良であるが、焼成は不充分である。色調は浅黄橙色を呈する。

080も底部と体部は丸みをもち、境部の器壁は厚い。底部の器壁は非常にうすい。体部・口縁部は外傾し立ち上がり端部が丸くおさまる。器面はもろく非常に荒れており、調整は不明瞭である。胎土は精良であるが焼成は不充分である。色調は浅黄橙色を呈する。

081は、底部と体部は丸みをもち、境部の器壁は厚く底部はうすい。体部・口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外弯ぎみで、端部は丸くおさまる。横ナデ調整が行われている。胎土は精良であるが焼成は不充分である。色調は橙色を呈する。

082は底部と体部はくびれている。体部と口縁部は外傾し立ち上がり端部は丸くおさまる。横ナデ調整が行われている。胎土は精良であるが焼成は不充分である。色調は浅黄橙色を呈する。

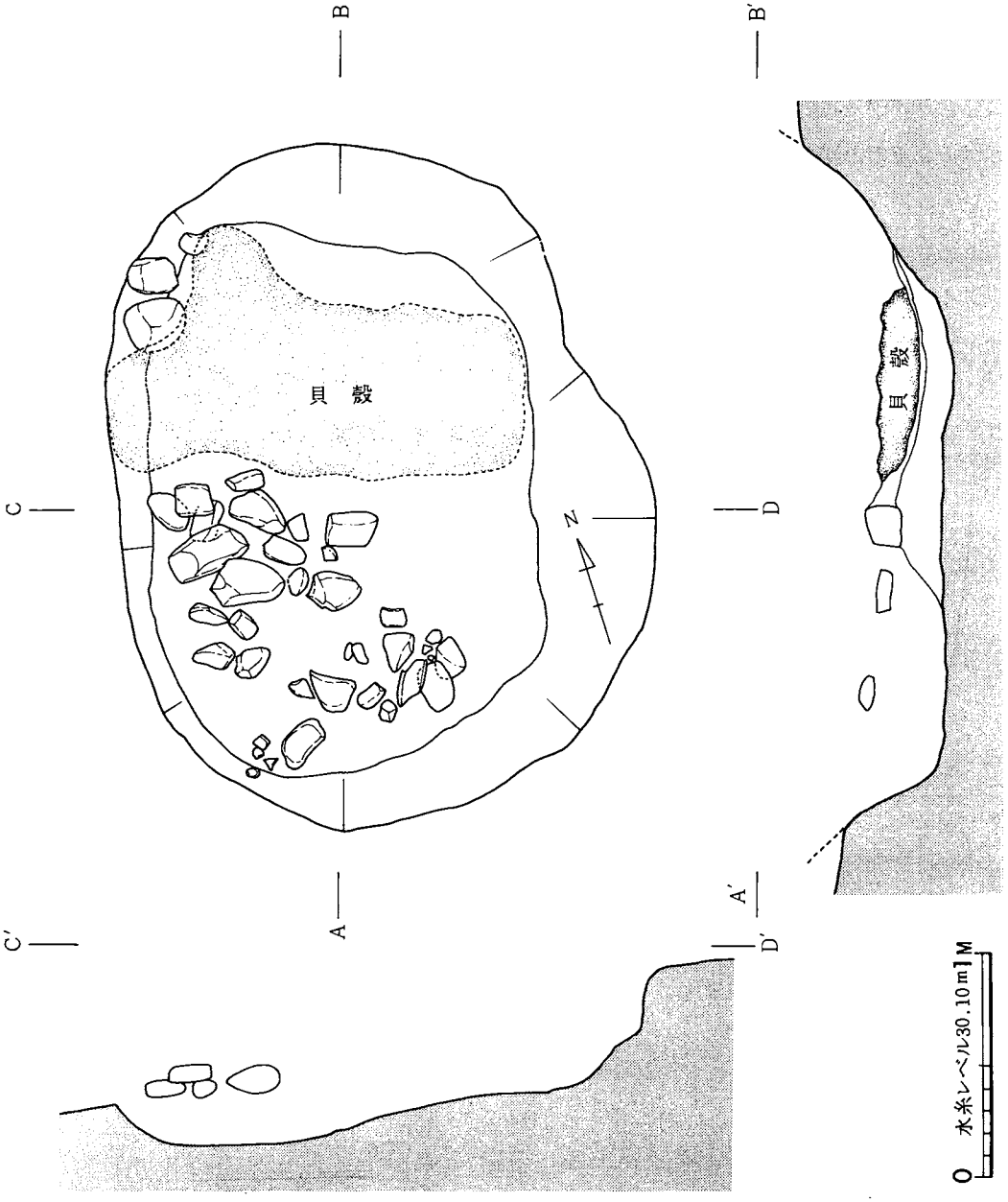
第11図 060は須恵器の甕である。口径は推定で18.2cmである。体部以下を欠失している。肩はあまり張らないものと思われ、口頸部は短く外反する。口縁端部に1条の浅い凹線をめぐらす。肩外面に格子目叩き、内面には同心円文が認められる。胎土は精良であるが焼成は不充分である。色調は明オリーブ灰色を呈する

以上、出土した土器はいずれも焼成が不充分で生焼けの状態を示している。炉跡の床面や壁面は5～6cmが焼土となっており、かなり高い温度が上がっていたことがうかがわれる。床面

に土器の破片が多く出土していることから、小規模に土器が焼かれていたのかもしれない。

3．住居跡状遺構

炉跡遺構の北側で検出した。いくぶん南北に長く長楕円形を呈している。主軸をN－18°－Eにとり、長軸3.02m×短軸2.40mである。中央部の床面までの深さは50.5cmである。床面はさほどの固さはもたない。北および東側の壁面の立ち上がりはゆるやかである。床面の直上は黒色土層が10～25cmの厚さで覆い、その上は黒褐色である。北側の約半分は黒色土層の上に黄褐色粘質土層があり、その上は多くの炭化物や貝殻（マガキ・アサリ）が混じった腐植土である。



第5図　住居跡状遺構

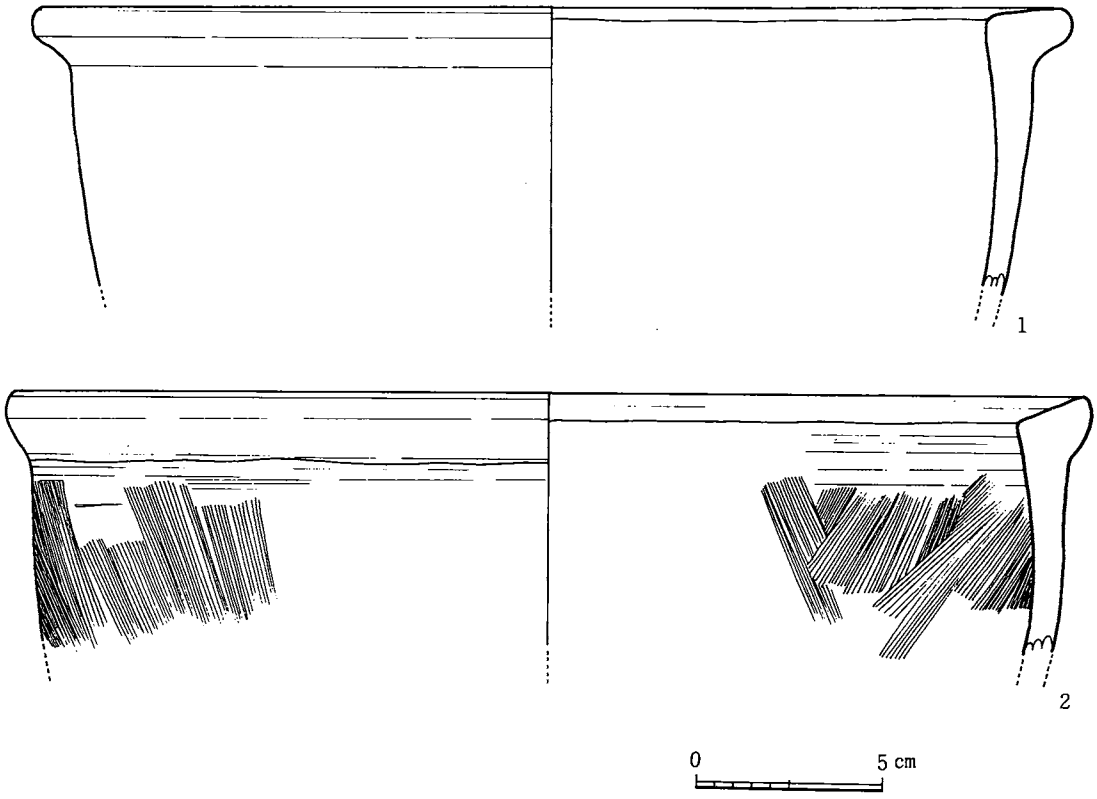
厚さは約20cmである。高度をほぼ同じくして、南側には礫石が出土した。少量の土器片が礫石や腐植土に混じって出土している。

出土土器（第６図１・２）

(1)は甕の口縁部で復原すれば口径28.1cmである。口端面は平坦でいく分内傾し、内側はかなりシャープな稜を有する。横ナデによる丁寧な調整を行っている。胎土は多量の砂粒が混じり、焼成は良好である。色調は内面が浅黄色で外面が黒色を呈する。外面には多くの煤が付着している。

(2)も同じく甕の口縁部片で復原すると口径29.2cmである。口端面は平坦であるが、(1)よりも内傾が著しい。外面・内面ともハケ目と横ナデを施し丁寧な調整を行っている。胎土は多量の砂粒を含み焼成は良好である。色調は内面が暗灰黄色で外面は黒色を呈する。

以上２点の土器はいずれも弥生時代中期前半に相当する。住居跡状遺構の床面直上から出土したものでないだけに直接的な結びつけを行うのはさけておきたい。八代北部地区は弥生時代の遺跡数が少なく実態があまり明らかにされていなかったが、昨今、遺跡の数が次第に増えつつある。本遺跡と同じく九州縦貫自動車道関係の発掘調査によって、下記の遺跡から遺構や遺物が検出されている。



第６図　住居跡状遺構出土土器

八代市岡谷川　境遺跡　　住居跡一基・後期土器・石包丁など

八代市興善寺　興善寺馬場遺跡　　後期土器

八代市川田東　車塚古墳　　後期土器

八代市川田西　川田遺跡　　後期土器などがある。

このほか、八代郡竜北村野津では、昭和51年度の圃場整備作業中に水田下から多くの弥生時代の土器が出土することが確認されている。

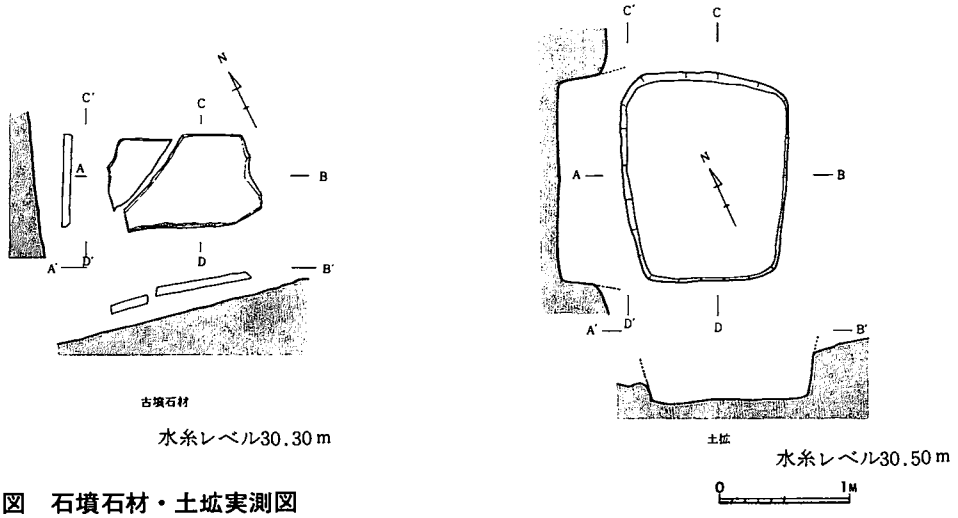
以上のように弥生時代後期の遺物が多く、それも一帯の水田下に遺跡が広がる様相を強くしめしている。本遺跡の土器は、先述の遺跡から出土した土器よりも古い時期のもので、県内でも数少ない中期のものである。この地区において、確実に弥生時代中期の土器が出土することを明らかにするとともに、今後、遺跡や出土遺物が増加し、弥生時代についての実態が明らかになることが期待される。

第１表　住居跡状遺構出土土器一覧表

挿図番号	器種	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	出土地点	備考	図版番号
第６図１	甕	破片	△口径　28.1	口縁は平坦、シャープな稜を有する、	横ナデ調整	多量の砂粒が混じる	良好	浅黄色	住居跡状遺構（上層）	煤が付着	図版16(1)
第６図２	甕	破片	△口径　29.2	口縁は平坦、内傾する、	クシ目調整	多量の砂粒が混じる	良好	暗灰黄色	住居跡状遺構（上層）	煤が付着	図版16(2)

４．土　坑（第７図）

住居跡状遺構のすぐ北側で検出した。形状は隅丸方形を呈し、主軸をＮ－25°－Ｅにとる。長軸は1.64ｍ、短軸は1.28ｍである。上半を削平されており最も深いところで33cmである。



第７図　石墳石材・土坑実測図

遺物の出土はないが、形状から墓坑と思われる。

5．古墳石材（第７図）

ＳＴＡ 154＋60の中心杭付近で古墳の石材が出土した。石材は傾斜面に捨てられた状態で出土した。いずれも硬質砂岩の板石で、長さ1.18ｍ幅72cmで厚さ６cmである。加工痕があり組み合わせるための溝を彫っている。表面の一部には赤色顔料が認められる。

溝の加工痕があることから、古墳の石室の石障に用いられたものと考えられ、近くに古墳が存在していたことを示唆している。著名な装飾古墳門前古墳がすぐ近くにあるが、門前古墳の装飾文様は硬質砂岩の板石を用いた石障に施されており、もし残存しておれば装飾古墳であった可能性もあり非常におしまれる。

6．ＳＴＡ 154＋60中心杭付近の出土遺物

ＳＴＡ 154＋60中心杭付近では表面から土器片が採集されていたため、約７ｍ× 7.5ｍの範囲で表土剝ぎ作業を行った。その結果、古墳時代から近世に至るまでの遺物が出土し、さらには石囲い遺構とその下から墓坑14基を検出した。

この調査区付近はかなり急な勾配を呈する斜面であり、畑地として利用できない場所であるため墓地として利用されたものと思われる。さらに耕作の邪魔になる礫石や土器片などを集めて捨てた場所にあたるものであろう。

石囲い遺構と墓坑については後述するとして、この調査区から出土した遺物と、他のトレンチから出土した遺物を一括して報告したい。出土した遺物は次のとおりである。

須恵器・土師器・布目瓦・瓦器・青磁・近世磁器・滑石製品・五輪塔・鞴口

須恵器　須恵器には杯蓋・杯・高杯・盤・甕・壺などがある。

杯　蓋（001 ～ 026）

杯蓋は26点が実測可能であった。

ａ類：ツマミを持たないもので天井部が高いもの

ｂ類：ツマミを持たないもので天井部が低いもの

ｃ類：ツマミを有するものでかえりをもつもの

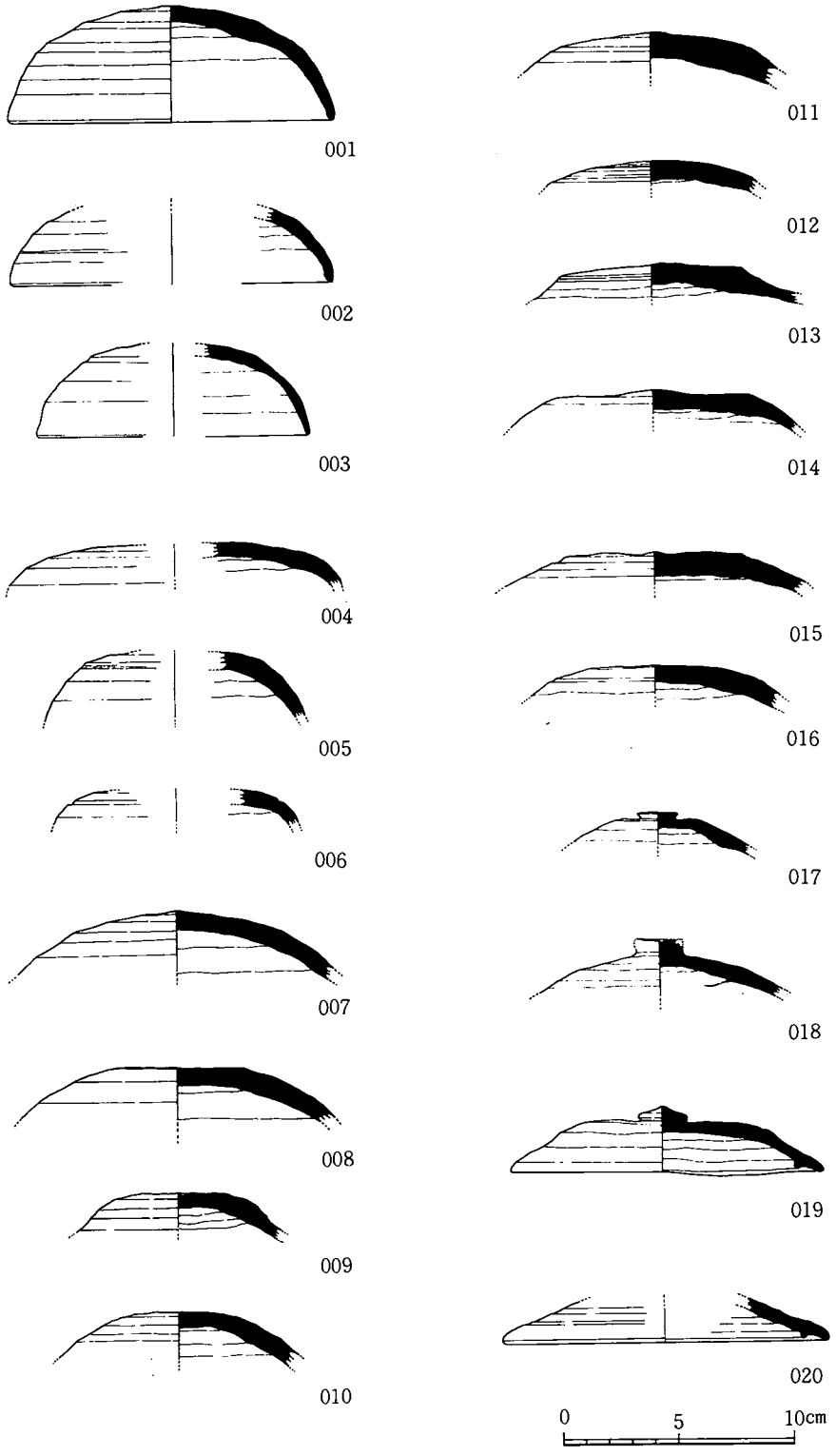
ｄ類：ツマミを有するものでかえりをもたないもの

以上のように大別することができよう。

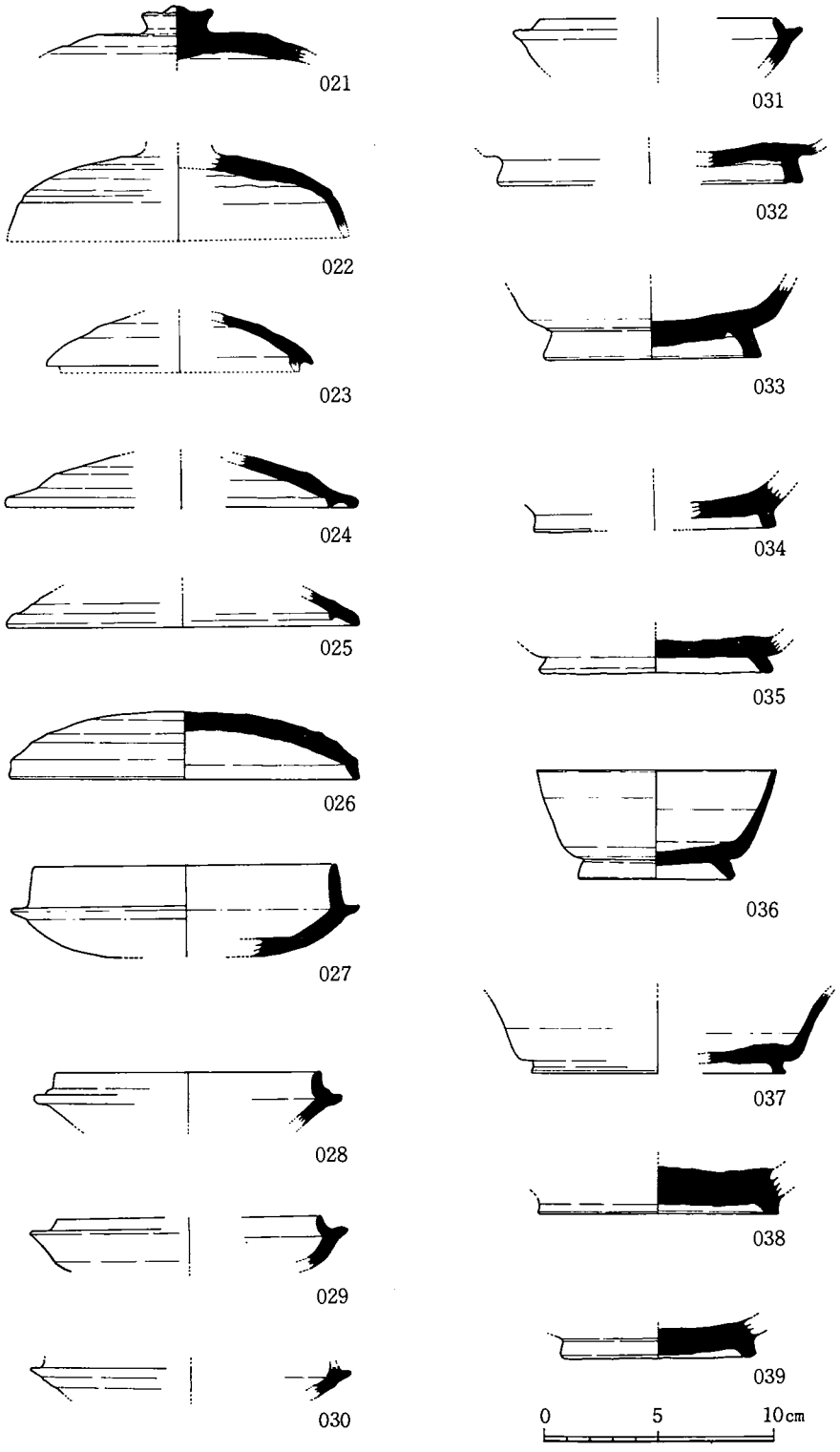
（001）は天井部が比較的高い。器全体は丸みをもち、天井部は体部にくらべていくぶん凹んでいる。内面は弱い段を有している。天井部のヘラ削りの範囲は約$\frac{3}{4}$である。（002 ・ 003）も天井部が比較的高い。

（007）は天井部が低く、体部との境界はほとんど認められない。天井部のヘラ削りは$\frac{4}{5}$ほどである。

（011）は天井部と体部がいくぶん段をなす。天井部のヘラ削りは$\frac{4}{5}$ほどである。（013）は



第8図　出土土器実測図　須恵器（001～020）



第９図　出土土器実測図　須恵器（021～039）

焼きひずみが生じている。天井部と体部との境界は著しい段々をなす。天井部のヘラ削りは$\frac{4}{5}$ほど施されているが雑である。

（019）は天井部に低い宝珠形のツマミを有する。内面のかえりは口端部よりやや上にある。ヘラ削りは天井部の約$\frac{3}{4}$の範囲に施されている。焼きひずみがあり形は変形している。天井部内面に↑のヘラ記号がみえる。口径13.6cm、かえり径11.6cm、器高 2.8cm。胎土は精良で、焼成良好である。色調は灰色を呈している。

（021）のツマミは（017 ～ 019）にくらべてより大きく偏平である。

杯（027 ～ 042）

杯は17点が実測可能であった。

a類：蓋受けの立ち上がりがあるもの

b類：高台をもつもの

c類：その他のもの　　以上の3類に大別することができよう。

a類（028 ～ 031）

（027）は推定で口径13.2cm、器高 4.0cmである。立ち上がりは比較的高く内傾する。端部は細く丸くおさまる。受部は立ち上がりとの境に浅い凹線をもち、ほぼ真横に引き出す。体部から扁平な丸みをもって底部へ続く。底部の$\frac{3}{4}$ほどにヘラ削りを行っている。胎土は精良で白色砂粒を含んでいる。焼成は良好で色調は灰色を呈している。（028 ～ 031）の立ち上がりはやや外弯しながら内傾している。いずれも立ち上がりは短い。受部はやや上方に引き出す。体部はやや丸みをもって底部へ続いている。

b類（032 ～ 041）

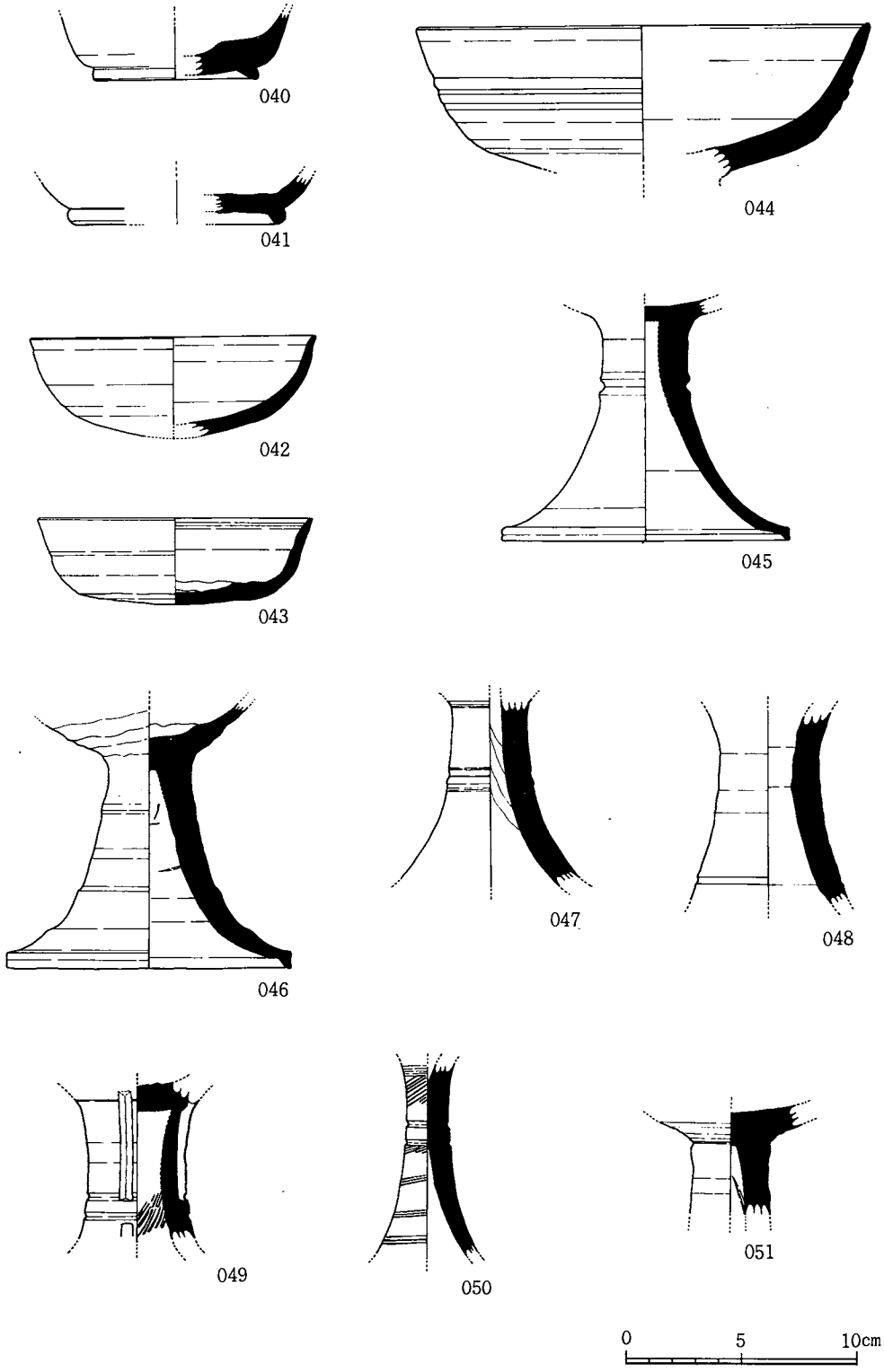
（032 ・ 033）は比較的高い高台がつく。（033）は高台を接合したあと凹むほどおさえている。また、内面にはヘラ記号がある。（036）はハリツケ高台で比較的高い。高台は外方へ伸び脚端は丸い。底部と体部の境は丸みをもち、体部・口縁部は外傾し立ち上がる。端部は丸くおさまる。端正な形状を示している。

c類（042 ・ 043）

（042）、底部は丸く体部との境は不明瞭である。口縁部にはソリがみられ、端部は丸くおさまる。底部のヘラ削りは約$\frac{3}{4}$の範囲に施されている。（043）は、底部と体部との境が丸く、体部でやや外弯しながら立ち上がる。端部は丸くおさまる。底部は約$\frac{4}{5}$の範囲でヘラ削りを施している。

高　杯（044 ～ 051）

（044）は杯部片である。底部と体部の境は丸みをもち、体部・口縁部は外傾し立ち上がる。体部中央に2条の凹線をめぐらしている。（045 ～ 051）は脚部片である。（045）は筒部の中央部付近に凹線をめぐらす。杯部との接合部付近がもっとも窄まり、脚端に向かって次第に



第10図　出土土器実測図　須恵器（040～051）

開いてゆき、脚端部はかえりを有する。焼成が悪く、色調は赤褐色を呈する。（046）は焼きひずみがあり杯部が傾いている。脚部は（045）と似ているが筒部には凹線が施されていない。（047）は筒部中央部付近に浅い凹線をめぐらしている。（049）は筒部中央部付近に二条の凹線をめぐらし、その上下に長方形の透孔を三方に配している。しかし、上方のいずれの透孔も切り込みが不充分で内面まで貫通していない。（050）は筒部径が小さい。体部中央に２条の浅い凹線をめぐらし、器面には多くのカキ目を施している。

盤（052 ・ 053）盤は２点出土した。

（052）は推定で口径23.9cm、器高 4.6cmである。底部から体部へは丸みをもち、ゆるやかに外反する。口唇部は平たく、外側に一条の凹線をなしている。底部はヘラ削りを施し、内面は横ナデ調整を行っている。胎土は精良で、焼成良好である。色調は青灰色を呈する。（053）も同じ形状・調整であるが、底部がいくぶん上がり気味である。焼成は良好である。

甕・壺・その他（054 ～ 076）

いずれも破片であり器形はほとんどが不明瞭である。（054 ～ 056 ・ 060）は甕の口縁で、（057）は壺の口縁部といえようか。（058）は壺の高台、（059）は瓶の一部と思われる。（061）は双耳瓶の一部といえよう。

（062 ～ 076）はいずれも甕もしくは壺の胴部片である。（062）は大型の壺の口縁部すぐ下にあたる破片と思われる。内面に青海波文のタタキ痕があり、外面は平行タタキのあとカキ目調整を施している。（064）の内面は太目の平行タタキを行ったあと青海波文のタタキを重ねている。外面は平行タタキを縦と横に重ね格子目をなしている。（063・066・067・068・072）の内面のタタキは同心円文である。（071 ・ 073）の外面には丁寧なカキ目調整を施している。（073 ・ 074）の内面は青海波文と平行タタキを重ねている。（075）は内面がカキ目調整で外面は格子目のタタキ痕が明瞭に残っている。

土師器（077 ～ 099）

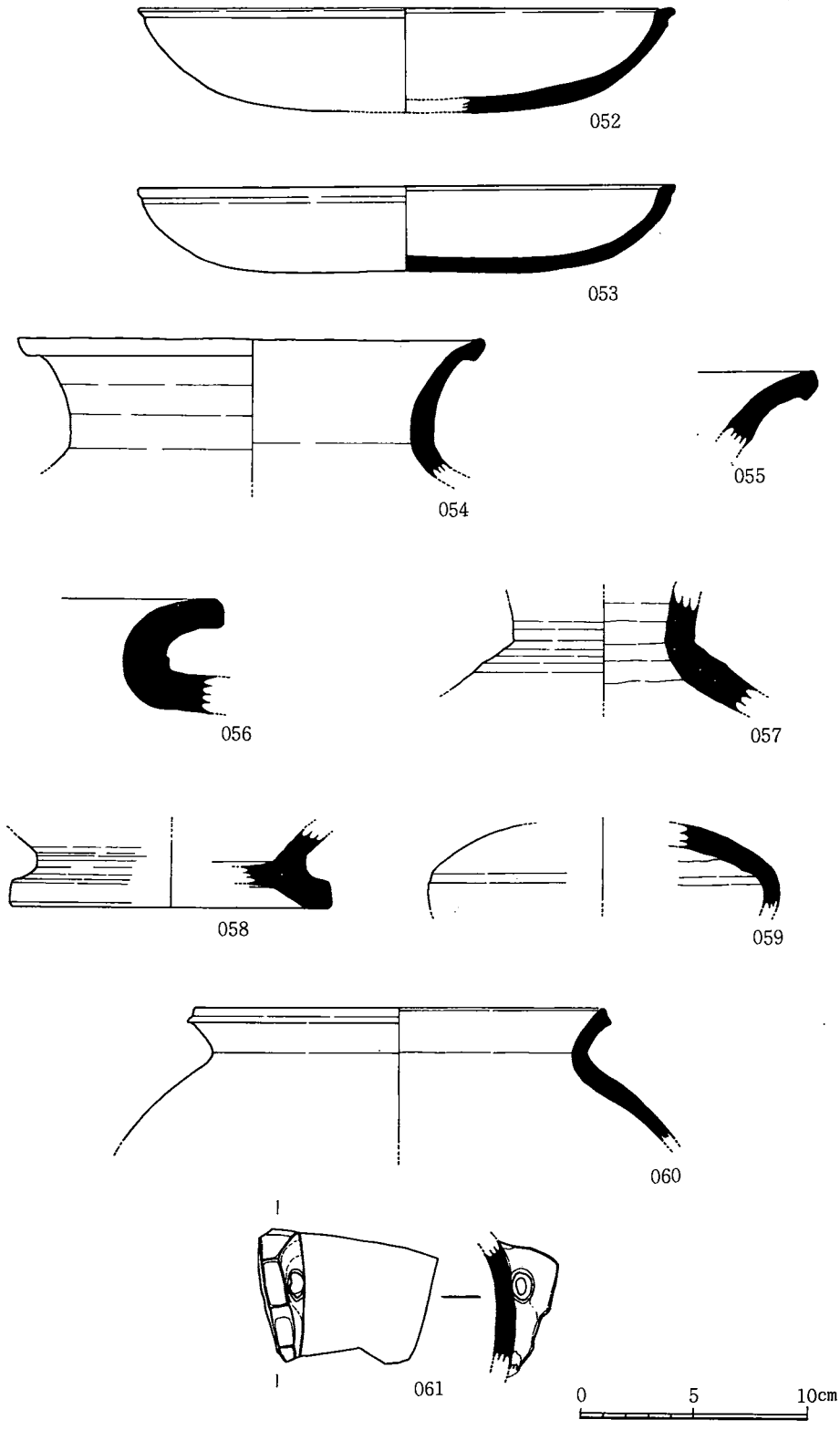
土師器は椀・杯・高杯・甑が出土した。

椀（077 ～ 078）

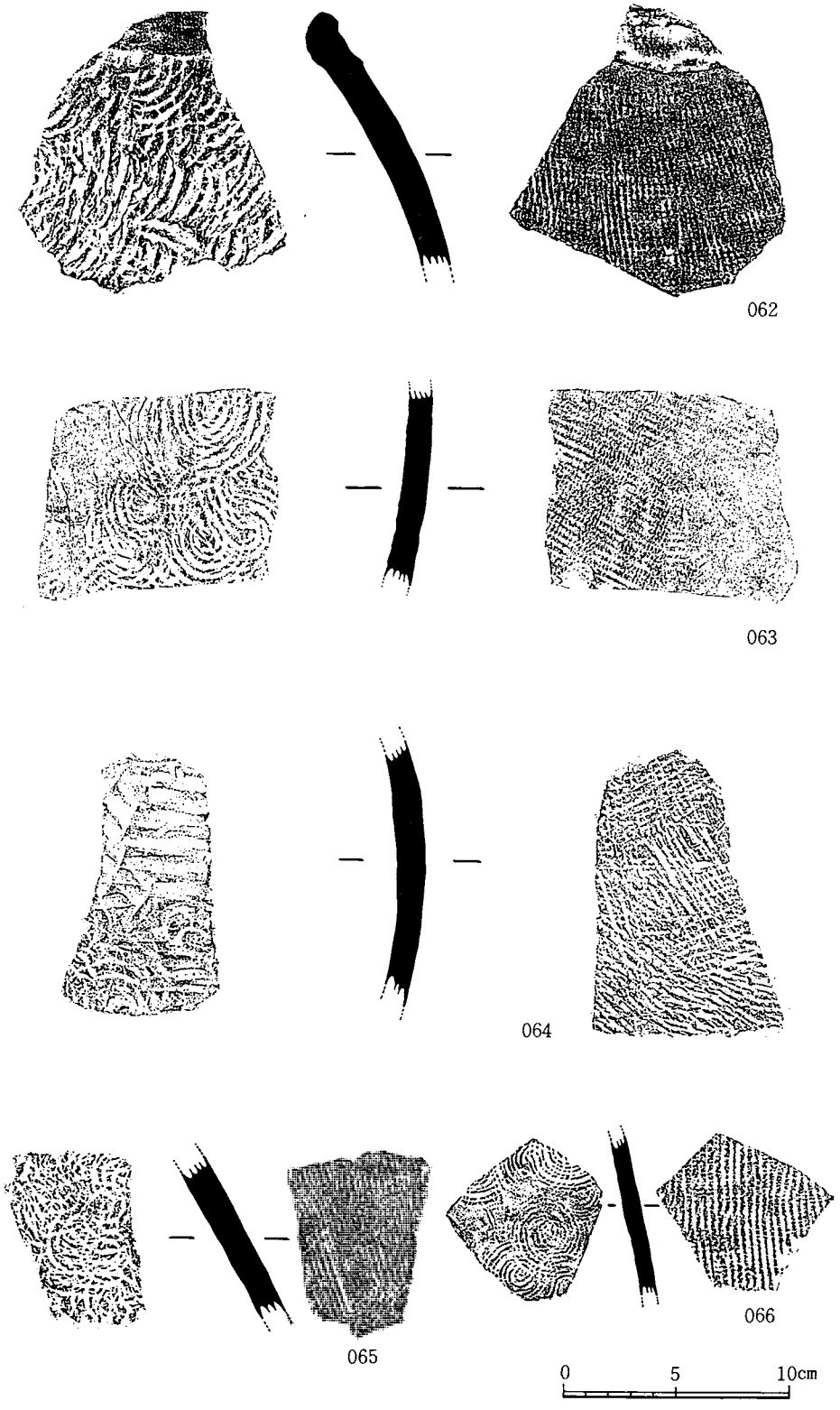
（077）は胴部から肩部にかけて大きく内弯している。胎土は２～３mmの小石を多く含んでいる。焼成が不充分で器面は非常に荒れている。色調は黄橙色を呈する。（078）、底部と体部との境が丸くなり、内弯ぎみに口縁はほぼ垂直に立ち上がる。端部はやや細く、丸くおさまっている。底部には粗いヘラ切りの離し痕がある。内面は横ナデ調整を施している。胎土は精良であるが、焼成が不充分で器面は非常にもろい。

杯（079 ～ 083）

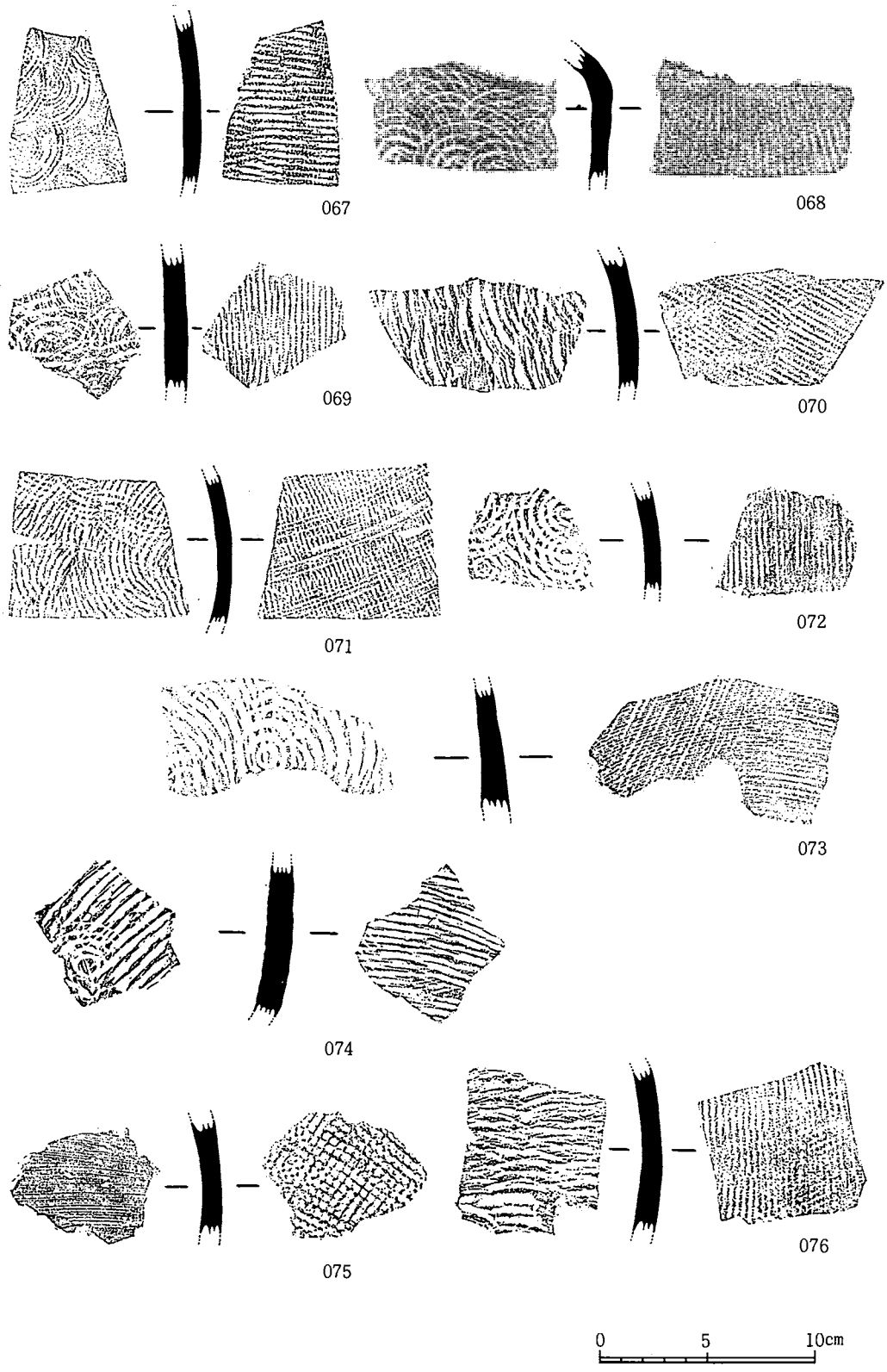
（079 ～ 082）については炉跡遺構ですでに述べたとおりである。（083）は底部と体部は屈曲しており、体部・口縁部は外傾し立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさまる。横



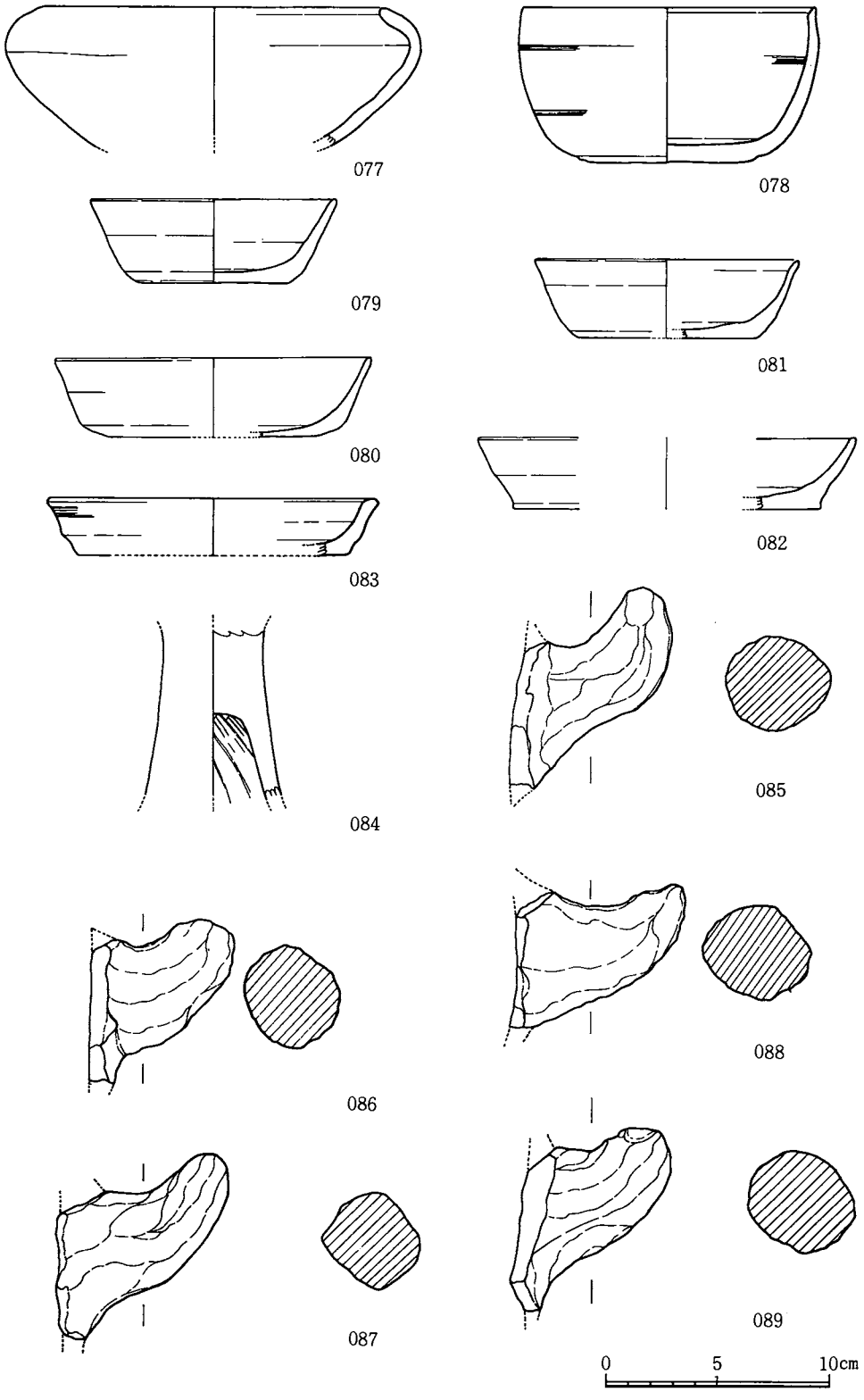
第11図　出土土器実測図　須恵器（052～061）



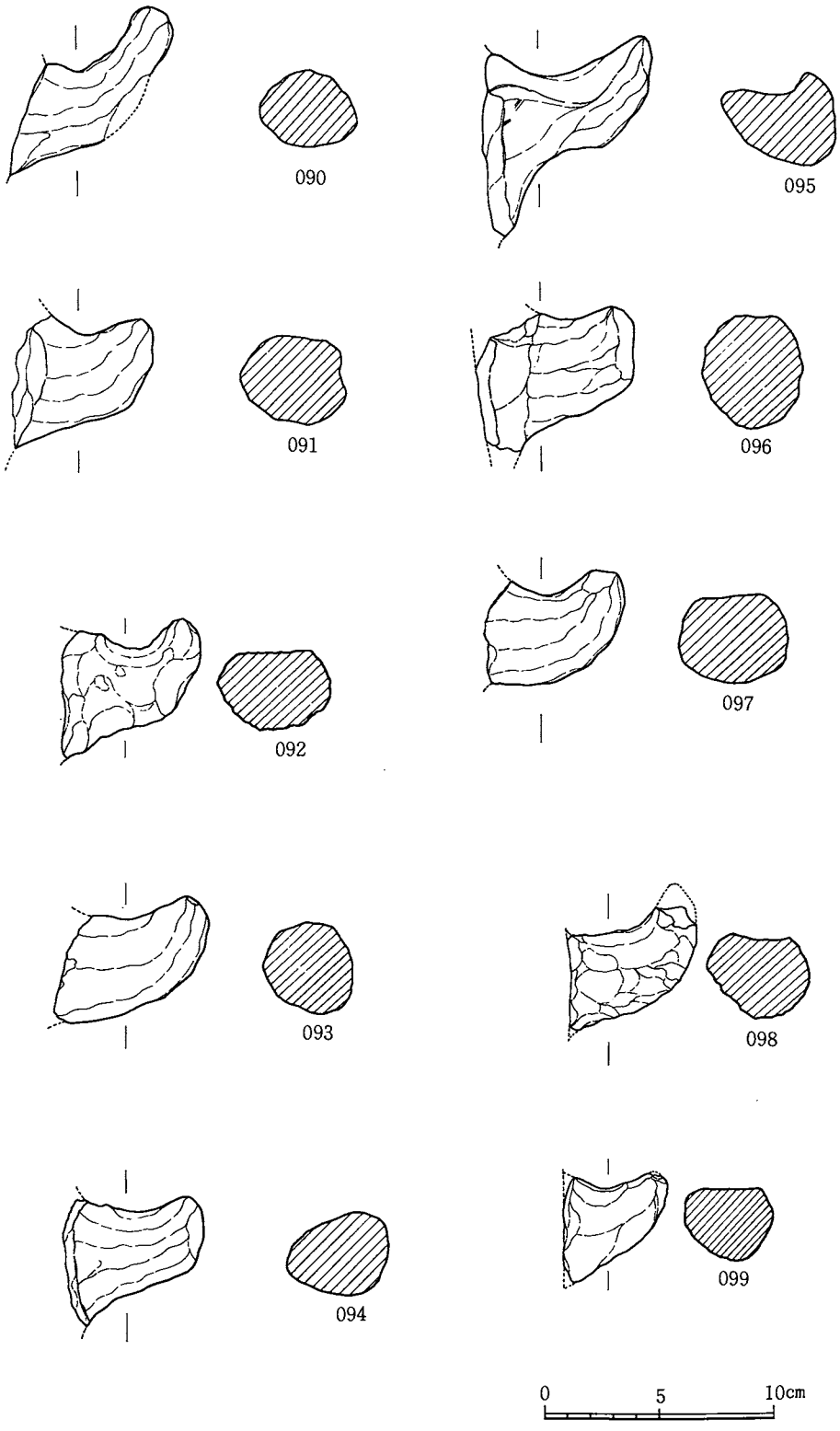
第12図　出土土器実測図　須恵器（062～066）



第13図　出土土器実測図　須恵器（067～076）



第14図　出土土器実測図　土師器（077～089）



第15図　出土土器実測図　土師器（090～099）

ナデによって調整している。胎土は精良であるが、焼成はやや不充分である。色調はにぶい橙色を呈する。

高　杯（084）

（084）は高杯の脚部片である。破片であるため詳細については不明である。筒部内側にヘラ削りによる調整がある。胎土は砂粒混じりで、焼成は不充分である。色調は橙色を呈する。

甑（085～099）

いずれも甑の把手である。大きさについてはあまり差異は見られず、形状についても大きな変化はない。手で形をつくったあと手ナデにより粗雑な調整を行っている。いずれも甑との接合部から離れたものである。

第2表　出土土器一覧表（001～013）

△印は推定値

挿図番号	器種名	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	出土地点	備考
第8図001	杯　蓋（蓋）	破片	△口径14.2 器高 4.9	天井部は比較的高い 器全体は丸みをもつ	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	精良・砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	STA 154+60 中心杭周辺	
第8図002	杯　蓋（蓋）	破片	△口径14.1	天井部は比較的高い		精良・白色砂粒を含む　良好　暗オリーブ灰色	〃	
第8図003	杯　蓋（蓋）	破片	△口径11.9	天井部は比較的高い	横ナデ調整	精良・微砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	〃	焼きひずみあり
第8図004	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部は低い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第8図005	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部はやや高い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	精良・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第8図006	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部はやや高い	横ナデ調整	精良　良好　灰色	〃	沈線あり
第8図007	杯　蓋（蓋）	$\frac{1}{3}$	—	天井部は低い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰白色	〃	
第8図008	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部はやや高い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第8図009	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部は丸くやや高い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	精良　良好　灰色	〃	天井部片
第8図010	杯　蓋（蓋）	破片	—	天井部はやや高い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	〃	
第8図011	杯　蓋（蓋）	$\frac{1}{3}$	—	天井部と体部は、段をなす	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰白色	〃	厚い
第8図012	杯　蓋（蓋）	$\frac{1}{4}$	—	天井部は低い	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	粗・小石を含む　良好　灰色	〃	
第8図013	杯　蓋（蓋）	$\frac{2}{5}$	—	天井部と体部は、段をなす	外面の約$\frac{1}{2}$は回転ヘラ削り	やや粗　良好　灰色	〃	焼きひずみあり 天井部は厚い

第3表　出土土器一覧表（014～033）

△印は推定値

挿図番号	器種名	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	出土地点	備考
第8図014	杯 蓋（蓋）	破片	—	天井部は低い	外面の約½は回転ヘラ削り	やや粗　良好　灰色	〃	
第8図015	杯 蓋（蓋）	1/5	—	天井部はやや高い	外面の約½ほ回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	〃	
第8図016	杯 蓋（蓋）	破片	—	天井部は低い	外面は回転ヘラ削り	精良　良好　灰色	〃	
第8図017	杯 蓋（蓋）	破片	ツマミ径1.7 ツマミ高さ0.3	天井部は低い	外面は回転ヘラ削り	精良　やや不良　明オリーブ灰色	STA 154+60 中心杭周辺	ツマミあり
第8図018	杯 蓋（蓋）	破片	△ツマミ径2.1 ツマミ高さ0.6	天井部はやや高い	外面は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	ツマミあり
第8図019	杯 蓋（蓋）	4/5	口径13.6　かえし径11.6　器高2.8 ツマミ径2.1 ツマミ高さ0.7	かえりは口縁部よりやや上にある	外面の約½は回転ヘラ削り	精良　良好　灰色	〃	ツマミあり 焼きひずみあり 窯印あり
第8図020	杯 蓋（蓋）	破片	△口径14.2 △かえし径12.2	天井部は高い 小さなかえりがある	外面は横ナデ調整	精良　良好　オリーブ灰色	〃	かえりあり
第9図021	杯 蓋（蓋）	破片	△ツマミ径3.1 ツマミ高さ1.1	天井部は低い	粗い回転ヘラ削り	やや粗　良好　灰色	〃	ツマミあり
第9図022	杯 蓋（蓋）	破片	△口径14.9	天井部は高い	カキ目調整	精良　良好　オリーブ灰色	〃	
第9図023	杯 蓋（蓋）	破片	△口径11.5 △かえし径10.4	天井部はやや高い	外面の約½は回転ヘラ削り	精良　良好　灰色	〃	かえりあり
第9図024	杯 蓋（蓋）	破片	△口径15.4 △かえし径13.2	天井部はやや高い	外面の約½は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　不充分　黄灰色	STA 154+60 中心杭周辺	かえりあり
第9図025	杯 蓋（蓋）	破片	△口径15.3 △かえし径13.0	小さなかえりを持つ	外面の約½は回転ヘラ削り	精良　良好　暗緑灰色	〃	かえりあり
第9図026	杯 蓋（蓋）	破片	△口径15.3 器高 2.9	天井部は比較的高い 端部は丸くおさまる	外面の約½は回転ヘラ削り	精良　良好　灰色	〃	
第9図027	杯 蓋（身）	破片	△口径13.2 器高 4.0 △受部径15.2	立ち上がりは比較的高く内傾する	外面の約½は回転へら削り	精良・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第9図028	杯 蓋（身）	破片	△口径11.6 △受部径13.4	立ち上がりはやや外弯し内傾する	横ナデ調整	精良　良好　灰色	〃	
第9図029	杯 蓋（身）	破片	△口径11.5 △受部径13.8	立ち上がりはやや外弯し内傾する	横ナデ調整	精良　良好　灰色	〃	
第9図030	杯 蓋（身）	破片	△受部径14.0	立ち上がりはやや外弯し内傾する	横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	〃	
第9図031	杯 蓋（身）	破片	△口径10.3 △受部径12.6	立ち上がりはやや外弯し内傾する	横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第9図032	杯	破片	△高台径13.3	比較的高い高台がつく	横ナデ調整	精良　良好　暗灰色	〃	高台付き
第9図033	杯	1/5	高台径 9.4	比較的高い高台がつく	横ナデ調整	精良　良好　緑灰色	〃	高台付き 窯印あり

第4表　出土土器一覧表（034～053）

△印は推定値

挿図番号	器種名	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	出土地点	備考
第9図034	杯	破片	△高台径10.6	高台の端部は平たい	ヘラ切り痕が残る	精良　良好　暗緑灰色	〃	高台付き
第9図035	杯	破片	△高台径10. 1	高台の端部は平たい	粗いヘラ切り痕が残る	精良　良好　灰色	STA 154+60 中心杭周辺	高台付き
第9図036	杯	½	口径10.4 高台径 6.8	高台は外方へ伸び端部は丸い 体部、口縁部は外傾する	横ナデ調整	精良　良好　灰白色	〃	高台付き
第9図037	杯	破片	△高台径11.0	体部、口縁部は外傾する 高台の端部は平たい	ヘラ切り痕が残る 横ナデ調整	精良　良好　暗灰色	〃	高台付き
第9図038	杯？	破片	△高台径10.5	底部は厚い 高台の端部は平たい	ヘラ切り痕が残る	やや粗・砂粒を含む　良好　暗緑灰色	〃	高台付き
第9図039	杯	破片	△高台径 8.5	杯・底部は厚い	粗いヘラ切り痕が残る	やや粗・白色砂粒を含む　やや不充分　オリーブ灰色	〃	高台付き
第10図040	杯	破片	△高台径 7.2	高台の端部はやや尖がる	横ナデ調整	精良　良好　灰色	〃	高台付き
第10図041	杯	破片	△高台径 9.4	高台の端部は丸みをもつ	粗いヘラ切り痕が残る	精良　良好　オリーブ灰色	〃	高台付き
第10図042	杯	破片	△口径12.4 器高 4.3	口縁部はやや外弯する 端部は丸い	底部の約$\frac{3}{4}$は回転ヘラ削り	精良　良好　オリーブ灰色	〃	
第10図043	杯	破片	△口径11.9 器高 3.7	体部はやや外弯しながら立ち上がる	底部の約$\frac{3}{4}$は回転ヘラ削り	やや粗・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第10図044	高杯	破片	△口径19.9	体部、口縁部は外傾する 体部中央に二条の凹線	横ナデ調整	精良　良好　黄褐色	〃	杯部
第10図045	高杯	約½	△脚部径12.5 脚部高さ 9.4	筒部の中央部に凹線 脚端部にかえりを有する	横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　不充分　赤褐色	〃	脚部
第10図046	高杯	⅓	△脚部径12.3 脚部高さ 8.5	筒部に凹線	横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	焼きひずみあり
第10図047	高杯	破片	筒部中央部径3.9	筒部中央に浅い凹線	横ナデ調整	精良　良好　灰色	STA 154+60 中心杭周辺	脚部片
第10図048	高杯	破片	筒部中央部径4.6		横ナデ調整	精良　良好　灰色	〃	脚部片
第10図049	高杯	破片	スカシ長さ4.6 スカシ幅 0.5	筒部中央に二条の凹線 二段のスカシ	横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　暗青灰色	〃	スカシあり 脚部片
第10図050	高杯	破片	筒部中央部径2.0	体部中央に二条の浅い凹線	カキ目調整	精良・白色砂粒を含む　良好　暗青灰色	〃	脚部片
第10図051	高杯	破片	筒部径 3.2		横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　暗青灰色	〃	脚部片
第11図052	盤	破片	△口径 23.9 △器高 4.6	底部から体部は丸みをもつ 口縁部に一条の凹線	底部はヘラ削り 内面は横ナデ調整	精良　良好　青灰色	〃	
第11図053	盤	½	△口径 23.8 器高 3.7	底部から体部は丸みをもつ 口縁部に一条の凹線	底部はヘラ削り 内面は横ナデ調整	精良　良好　青灰色	〃	

第5表　出土土器一覧表（054～073）

△印は推定値

挿図番号	器種名	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	出土地点	備考
第11図054	甕	破片	△口径　20.6	口縁部は外反する	横ナデ調整	精良　良好　暗青灰色	〃	口縁部片
第11図055	甕	破片	—	口縁部は外反する	横ナデ調整	精良　良好　灰オリーブ色	〃	
第11図056	甕	破片	—	頸部・口縁部は大きく外反する端部は平たい	外面タタキ調整	粗　良好　灰色	〃	
第11図057	壺	破片	—		外面カキ目痕	精良　良好　灰色	〃	
第11図058	不明	破片	△高台径　14.2	低い高台	内面青海波文	精良　良好　灰色	〃	高台片
第11図059	不明	破片	—		横ナデ調整	精良・白色砂粒を含む　良好　オリーブ灰色	〃	
第11図060	甕	破片	△口径　18.2	口頸部は短く外反する口縁端部に一条の凹線をめぐらす	内面同心円文外面格子目タタキ調整	精良　不充分　明オリーブ灰色	炉跡遺構	口縁部片
第11図061	双耳瓶	破片	孔径　1.2×0.9	長楕円の孔を有する	横ナデ調整	精良　良好　灰色	STA 154×60 中心杭周辺	ツマミの部分一部自然釉がかかる
第12図062	甕？	破片	—	—	内面青海波文タタキ外面平行タタキカキメ調整	精良　良好　灰色	〃	
第12図063	甕？	破片	—	—	内面同心円文外面カキ目調整	精良・小石を含む　良好　灰オリーブ色	〃	
第12図064	甕？	破片	—	—	内面平行タタキ・青海波文外面平行タタキ	精良・小石を含む　良好　オリーブ黄色	〃	一部自然釉がかかる
第12図065	甕？	破片	—	—	内面同心円文タタキ外面カキ目調整	やや粗・小石を含む　やや不充分　灰オリーブ色	〃	
第12図066	甕？	破片	—	—	内面同心円文タタキ外面カキ目調整	精良　良好　灰色	STA 154+60 中心杭周辺	
第13図067	甕？	破片	—	—	内面同心円文外面カキ目調整	精良　良好　灰色	〃	
第13図068	甕？	破片	—	—	内面青海波文タタキ外面カキ目調整	精良　良好　オリーブ灰色	〃	
第13図069	甕？	破片	—	—	内面青海波文タタキ外面カキ目調整	精良　良好　灰オリーブ色	〃	
第13図070	甕？	破片	—	—	内面青海波文タタキ外面カキ目調整	精良・白色砂粒を含む　良好　灰オリーブ色	STA 154+60 中心杭周辺	自然釉がかかる
第13図071	甕？	破片	—	—	内面青海波文タタキ外面カキ目調整	精良　良好　灰色	〃	
第13図072	甕？	破片	—	—	内面同心円文タタキ外面カキ目調整	精良・白色砂粒を含む　良好　灰色	〃	
第13図073	甕？	破片	—	—	内面青海波文平行タタキ外面カキ目調整	精良　良好　灰色	〃	

第6表　出土土器一覧表（074～099）

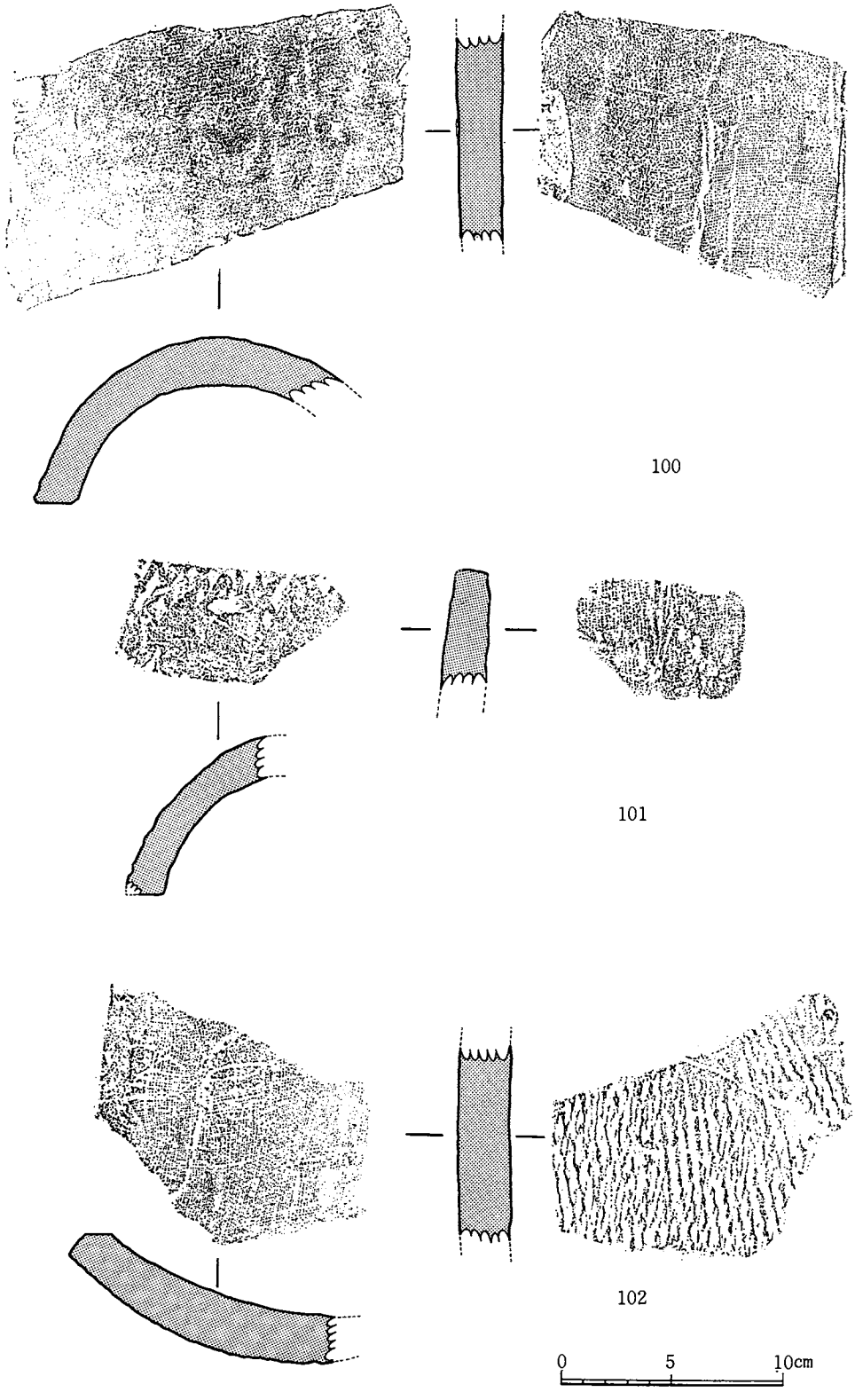
挿図番号	器種名	残存部	大きさ cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	出土地点	備考
第13図074	甕？	破片	—	—	内面青海波文 平行タタキ 外面平行タタキ	精良　良好　灰色	〃	
第13図075	甕？	破片	—	—	内面カキ目調整 外面格子目タタキ	精良　良好　暗緑灰色	〃	
第13図076	甕？	破片	—	—	内面青海波文 タタキ 外面カキ目調整	精良　良好　オリーブ灰色	〃	自然釉がかかる
第14図077	椀	約$\frac{1}{3}$	△口径15.3	胴部から肩部は大きく内弯する	内外面横ナデ調整	多量の砂粒混じり　不充分　黄橙色	〃	
第14図078	椀	約$\frac{1}{3}$	△口径13.2 器高 6.9	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる	内外面横ナデ調整	精良　不充分　橙色	〃	
第14図079	杯	約$\frac{1}{3}$	△口径11.0 器高 3.7	体部、口縁部は外傾 口縁部はやや外弯ぎみ	横ナデ調整	精良　不充分　浅黄橙色	炉跡遺構	器面が荒れている
第14図080	杯	約$\frac{1}{4}$	△口径14.3 器高 3.5	体部、口縁部は、外傾	横ナデ調整	精良　不充分　浅黄橙色	〃	器面はもろく荒れている
第14図081	杯	約$\frac{1}{4}$	△口径11.9 器高 3.5	体部、口縁部は外傾 口縁部はやや外弯ぎみ	横ナデ調整	精良　不充分　橙色	〃	
第14図082	杯	約$\frac{1}{4}$	△口径17.0 器高 3.2	底部と体部はくびれる 体部と口縁部は外傾	横ナデ調整	精良　不充分　浅黄橙色	〃	
第14図083	杯	破片	△口径14.9 器高 2.5	体部、口縁部は外傾	横ナデ調整	精良　やや不充分　にぶい橙色	STA 154+60 中心杭周辺	
第14図084	高杯	破片	胴中央部径 4.8		筒部内部はへら削り調整	砂粒混じり　不充分　橙色	STA 154+60 中心杭周辺	胴部片
14 085 第14図 15 099	甑		—		手ナデによる粗雑な調整	砂粒混じり	〃	把手

布目瓦（100 ～ 108）

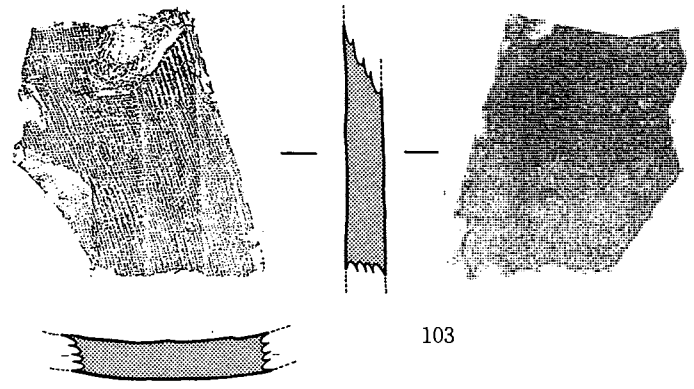
布目瓦は９点が出土した。いずれも細片であるが、丸瓦片２点で他は平瓦片である。それぞれについての観察結果は一覧表としてまとめた。

第７表　布目瓦一覧表（100～108）

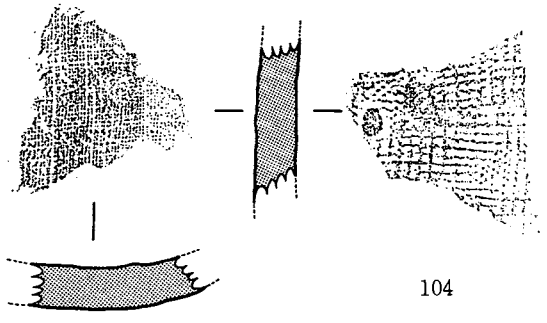
		凸面							凹面													
No	瓦の種別	叩きの有無	叩き目の種類	叩き目の大きさ	叩き板の大きさ	叩きしめの順序と方向	凸面側側端部の縁取り	凸面側広狭端部の縁取り	布痕の状態	糸切痕の有無と方向	布の縫い目痕の有無	粘土の継ぎ目痕の有無	凹面側側端部の縁取り	凹面側広狭端部の縁取り	模骨痕の有無	分割方法	厚さ	色調	胎土	焼成	出土地点	備考
100	丸瓦	ナシ	／	／	／	／	ナシ	ナシ	部分的につづれてゆがんでいる	ナシ	ナシ	ナシ	有り 方向下→上 篦削り	ナシ	5本有り	下→上 内側	2.1～1.7㎝	凹凸面褐灰色 内部灰赤色	緻密	堅緻		分割截面が残る
101	丸瓦	有	斜格子	格子内径 8×4㎜ 刻線幅 約3㎜	不明	不明	ナシ	広端篦切り	下端部は不明瞭	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	3本有り	下→上 内側	1.5～1.3㎝	凹凸面内部共にしぶい褐色	緻密	2次焼成の可能性有り		分割截面が残る
102	平瓦	有	縄目 Lr	縄1目 縦8㎜ 幅2㎜	不明	不明	ナシ	ナシ	部分的に破れがあり、粗の部分と密の所がある	ナシ	ナシ	ナシ	有り 方向不明 左篦削り	ナシ	3本有り	方向不明 内側	2.2～2㎝	凹凸面灰白色 内部中心明褐灰色	砂粒の混入多い	良		
103	平瓦	ナシ	／	／	／	／	ナシ	ナシ	均一に布目痕がある 1×1㎝の糸痕 タテ9本 ヨコ10本	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	4本有り	不明	1.5～1.3㎝	凸面灰色 凹面灰黄褐色 内部中心明褐灰色	緻密	良		
104	平瓦	有	格子	格子内径 2.5×2.5㎜ 刻線幅 1.5㎜	不明	不明	ナシ	ナシ	均一に布目痕がある 1×1㎝内の布痕 タテ8本 ヨコ8本	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	3本有り	不明	1.5㎝	凹凸内部共に灰色	緻密	良		
105	平瓦	ナシ	／	／	／	／	ナシ	ナシ	風化のため不明	不明	不明	ナシ	ナシ	ナシ	不明	不明	2.0㎝	凹凸面によい黄橙色 内部褐灰色	砂粒の混入多い	可能性有り 2次焼成の		
106	平瓦	有	平行叩き	凹部幅 4㎜ 長さ不明 刻線幅 5～4㎜	不明	不明	ナシ	ナシ	布痕ナシ 荒い 篦削り	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	不明	不明	1.9～1.7㎝	凹凸面によい黄橙色 内部によい橙色	良	良		
107	平瓦	有	格子	凹部幅 3×3㎜ 刻線幅 1㎜ 深さ わずか	不明	不明	ナシ	ナシ	湾曲した布痕がある 1×1㎝内の糸数 タテ6本 ヨコ7本	有 方向不明	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	不明	不明	1.9～1.6㎝	凹凸面灰色 内部によい褐色	緻密	堅緻		
108	平瓦	有	縄目 Lr	縄1目 縦8㎜ 幅2㎜	不明	不明	ナシ	ナシ	均一な布痕がある 1×1㎝内の糸数 タテ7本 ヨコ7本	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	不明	調整により2次的篦削り 不明	1.9㎜	凹凸面内部共によい橙色	砂粒の混入多い	可能性有り 2次的焼成の		分割截面を2次的に篦削りを施している



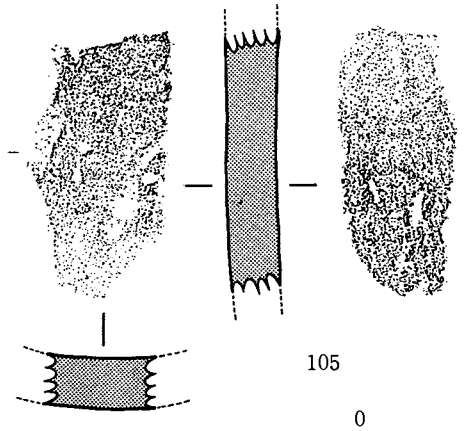
第16図　出土遺物実測図布目瓦（100～102）



103



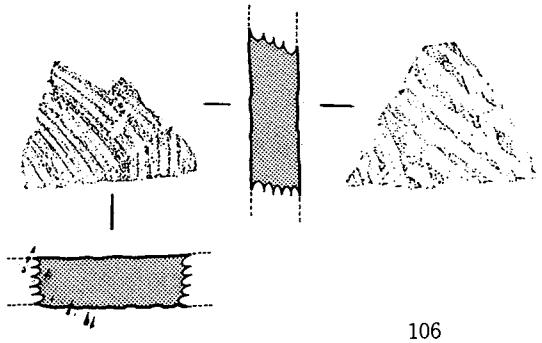
104



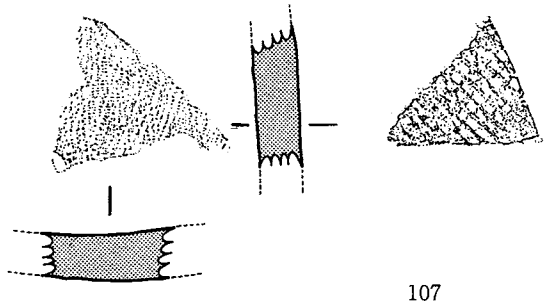
105

0　5　10cm

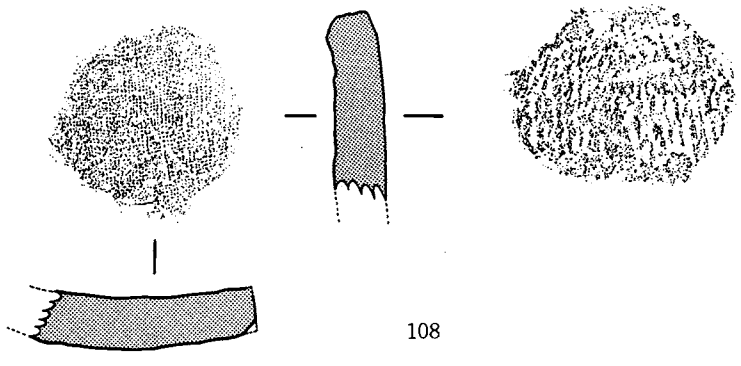
第17図　出土遺物実測図布目瓦（103～105）



106



107



108

0　5　10cm

第18図　出土遺物実測図布目瓦（106～108）

(註) (1)色調の観察用語は財団法人日本色彩研究所「新版標準土色帖」によった。

(2)各瓦の観察項目の中でナシとしたものは、その瓦片の中に見いだせないもので、完形の場合に於ての有無ではない。

(3)不明とした項目は、それについての観察が器面の荒れ等によって不可能なものである。

(広瀬)

青　磁 (109 ～ 110)

青磁は2点が実測可能であった。(109) は碗の破片で、復原すると口径は15.4cmである。体部は丸みをもち口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさまる。外面体部に蓮弁の文様を有し、低い鎬である。釉色はオリーブ褐色を呈する。気泡や嵌入が多くはいっている。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈している。

(110) も碗の底部片であり、低い高台である。見込みと体部の境は浅い凹部がめぐる。内底見込みにはキノコ状の文様を施している。釉色は灰オリーブ色を呈し、気泡が見られる。

以上、2点の青磁片は中国竜泉窯系の青磁と見ることができよう。

瓦　器 (111 ～ 113・115・116)

瓦器には火鉢 (111)・茶釜 (112・113)・擂鉢 (115・116) がある。

(111) は火鉢の口縁部片である。口縁端部は平坦で二条の突帯を有している。二条の突帯の間には梅花文のスタンプを施している。胎土は砂粒混じりで焼成はやや不充分である。色調は灰オリーブ色を呈する。

(112・113) は茶釜の口縁部と胴部片である。口径は推定で18.5cmである。(112) は口縁部端部は平たく肩部は丸い。肩部には菊花文のスタンプを施している。内面には粗いカキ目調整を行っている。胎土には砂粒が混じり、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。(113) は胴部片でツバである。ツバは 1.8cm突出している。復原するとツバの周りは24.4cmである。胴部との接合部分にはカキ目痕があり、内面にもカキ目痕が残っている。胎土は精良であるが、焼成はやや不充分である。色調は灰色を呈し、外面には煤の付着が見られる。

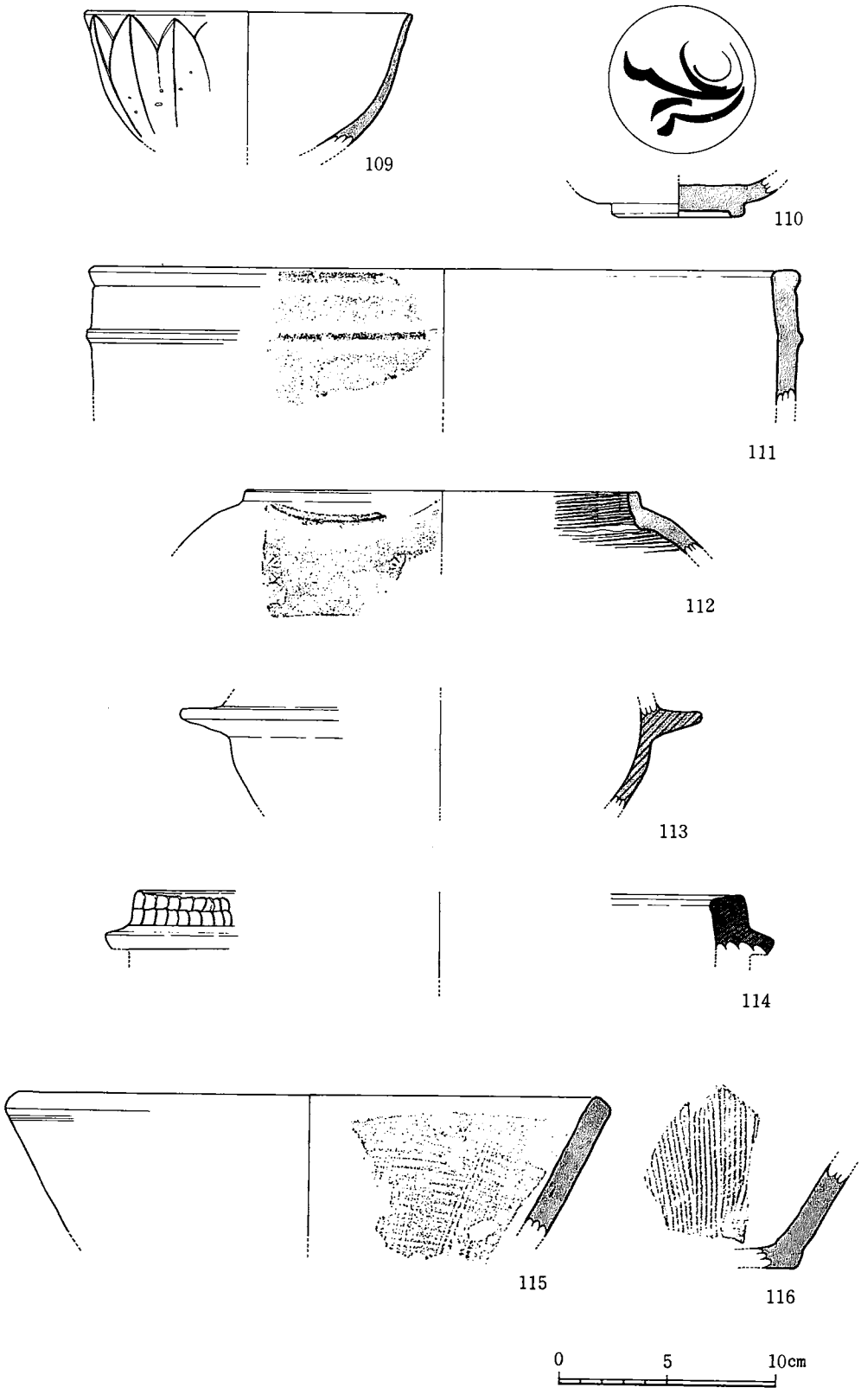
(115・116) は擂鉢片である。(115) は口縁部片で (116) は底部片である。口縁端部は平たい。内面に7条の深いカキ上げを施している。胎土はやや粗く焼成は良好である。色調は灰色を呈する。(116) の底部は平たく、胴部から外反し立ち上がる。内面は6条もしくは7条の深いカキ上げを施している。胎土はやや粗いが焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

滑石製品 (114)

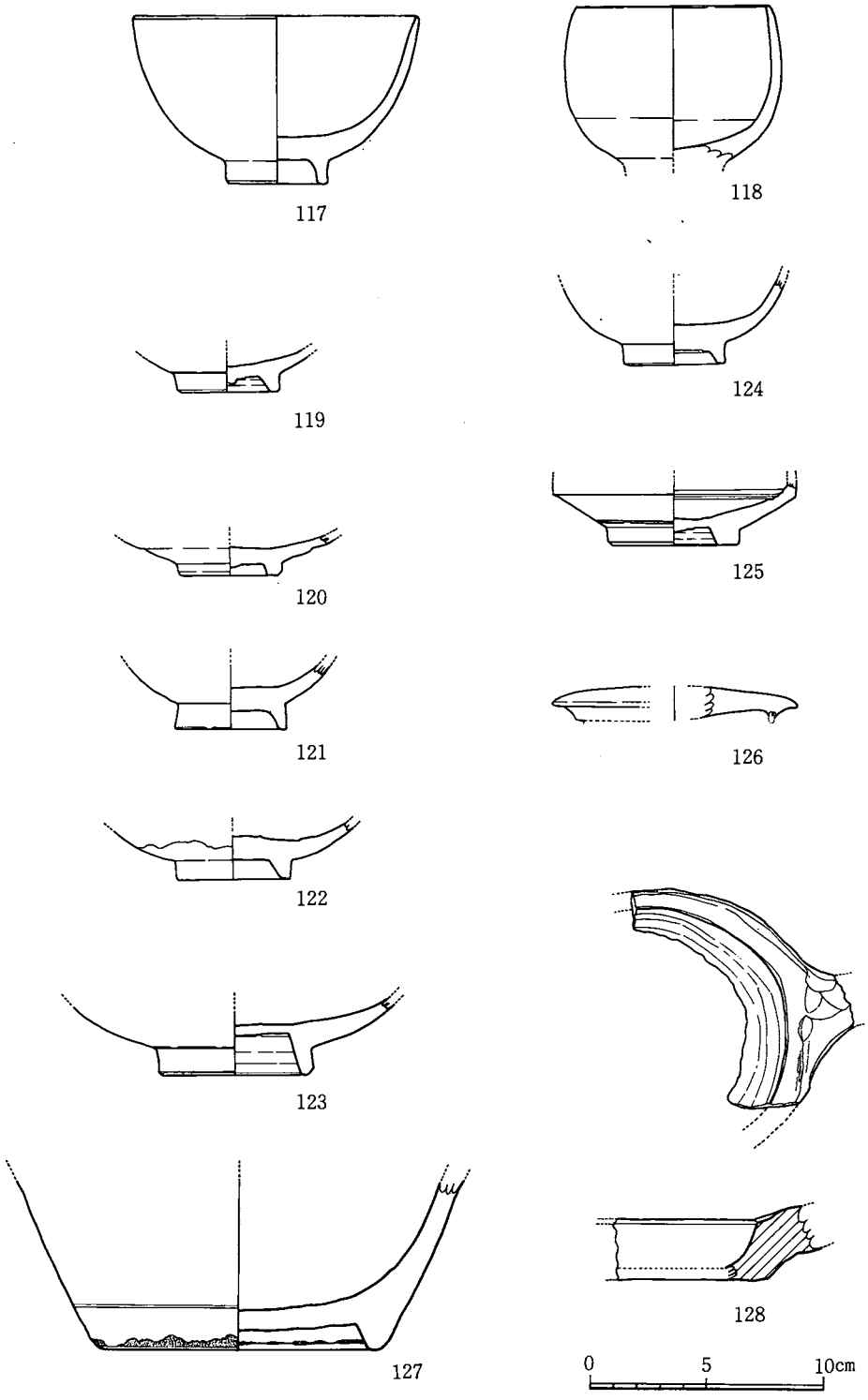
(114) は滑石製の石鍋の破片である。胴部のツバの部分で、1.2cmが外に出ている。細かな調整痕が認められる。煤が付着している。

磁器・その他 (117 ～ 128)

近世磁器は11点が実測可能であった。碗・皿・鉢・瓶・壺がみられる。



第19図　出土土器実測図　青磁・瓦器（109～116）



第20図　出土土器実測図　磁器・その他（117～128）

（117）は高台付碗である。推定で口径12.3cm、高さは 7.1cmである。体部は丸みをもちながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面に浅黄色を呈する灰釉を施し嵌入がある。高台の端部には離れ砂が付着している。胎土は淡黄色を呈し精良である。

（118）は小型の碗で、口径は推定で 8.2cmである。体部は内弯し、口縁はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさまる。暗オリーブ色を呈するアメ釉を施している。胎土は精良で灰色を呈する。

（119）は底部片である。淡黄色の施釉があり、嵌入や気泡が見られる。見込みには３ヶ所の目あとがあり、底部にはチリメンジワが見られる。胎土は淡黄色を呈し精良である。唐津窯産のものと考えられる。

（120）も底部片である。緑灰色を呈する施釉がある。見込みに４ヶ所の目あとがあり、高台端部にも残っている。胎土は灰白色で精良である。唐津窯産のものと考えられる。

（121）は底部片である。にぶい黄色の施釉がある。胎土は淡黄色を呈し精良である。嬉野窯産のものと考えられる。

（122）も底部片である。古伊万里、蛇目剝染付の皿である。高台内側に離れ砂が付着する。染付は青灰色を呈する。

（123）は深い高台の鉢である。褐色を呈する施釉があり見込みには目あとがある。胎土は灰黄褐色を呈し精良である。武雄窯のものと考えられる。

（124）は底部片である。灰オリーブ・青色を呈する銅釉の施釉がある。気泡がはいる。胎土は淡黄色を呈し精良である。唐津系の窯産と思われる。

（125）は瓶の底部片である。にぶい黄色の施釉がある。底部にはチリメンジワが認められる。胎土は灰黄色を呈し精良である。唐津窯産のものと考えられる。

（126）は鉄釉がかかった蓋である。胎土は灰色を呈し堅緻である。

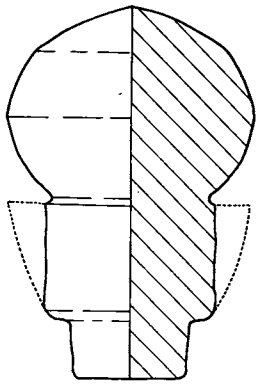
（127）は壺の底部片である。オリーブ黒色の施釉がある。底部には多くの離れ砂が付着している。胎土は灰オリーブ色を呈し砂粒が混じる。

（128）は瓦質土器であるが器種ははっきりしない。把手状の突出物がある。色調は浅黄色を呈する。胎土はやや粗く焼成良好である。

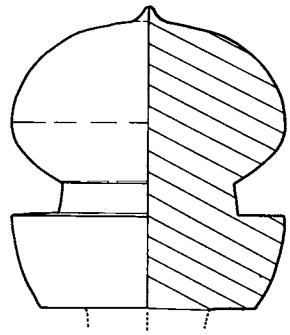
以上の磁器はいずれも佐賀県の唐津窯や伊万里・武雄・嬉野窯で焼かれたものと考えられ、江戸時代前期～中期にかけてのものがほとんどである。本遺跡の周辺でも多く出土しており、海上をとおしての佐賀県地方との盛んな交易をものがたっている。

7．その他の出土遺物

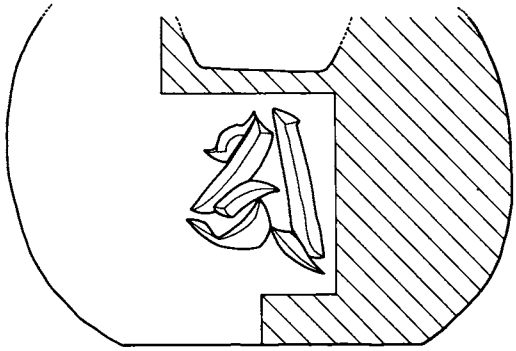
五輪塔は空風輪・水輪各２個が出土している。（129）の空風輪はＳＴＡ 154＋60中心杭西側の斜面から出土した。高さは39.4cmで空輪径は20cmである。石材は凝灰岩で表面はかなり痛み、宝珠形をなした先端の尖がりはなくなり、風輪は大半を欠失している。火輪との接合のた



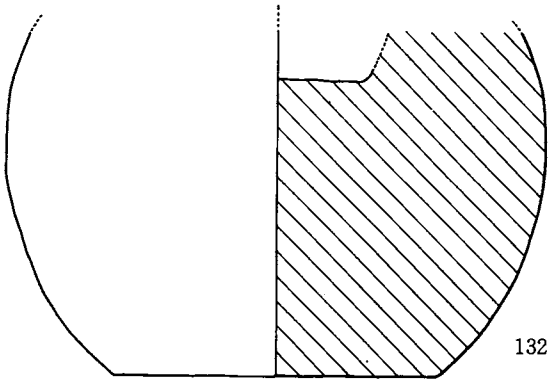
129



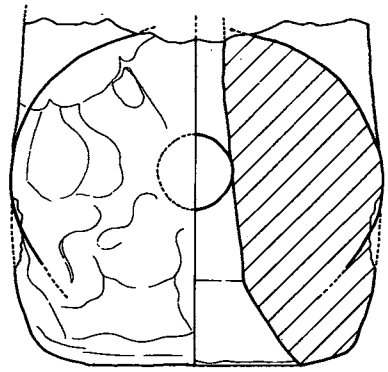
130



131



132



133

0　5　10cm

第21図　出土遺物実測図・五輪塔・鞴口　(129～133)

めの凸は完全な状態で残っている。

（130）の空風輪はＳＴＡ 154＋60中心杭東側斜面から出土した。高さ24cm、空輪径22.2cmで、石材はややもろい凝灰岩である。火輪と接合するための凸部は欠失している。空輪と風輪とを分けるえぐりは大きく、先端の尖がりも丁寧に仕上げられている。

（131）の水輪はＣトレンチの東側から出土した。胴径は40.6cmである。上面を欠失しているが、凹部底までの高さを求めると22cmである。石材は良質の凝灰岩である。上部に火輪と接合するための凹部をつくっている。肩のはらない円形を呈している。中央部に梵字が刻まれ「ア」東を意味している。梵字が刻まれたあとに墨を塗った痕跡が認めらるれる。

（132）の水輪はＤトレンチの北側から出土した。胴径は43.2cmである。（131）と同じく上面を欠失している。凹部底までの高さは23cmである。石材はやや質の悪い凝灰岩で摩滅を受けている。上部は火輪と接合するために凹部をなしているが、浅く横に広くつくられている。梵字が刻まれていたことは確かであるが、摩滅しているため読みとることはできない。

鞴　口

（132）はＣトレンチから出土した鞴口の破片である。石材には砂岩を用いており、一部欠失している。残存している部分での長さは13.8cmである。短い円筒状を呈し、先端径 4.0cm、末端径 8.2cmで裾部がやや広がっている。芯径は約 2.8cmで、厚さは約 5.8cmである。鞴口の先端外面に黒色に焼けた部分があり、高熱にさらされたことを示唆している。破片で、ただ１点の出土であり、性格や時期等については明確にしえない。

８．墓坑

ＳＴＡ 154＋60中心杭周辺の表土剝ぎ作業を行った結果、約10ヶ所に石囲い遺構が見られた。石囲いは付近に多くある30～40cm大の石灰岩を集めたものである。２ヶ所では石囲いの上にさらに凝灰岩の切石の台石が置かれていた。これらの石囲い遺構を取り除くと下に墓坑を確認することができた。墓坑は14基を検出した。

第１号墓坑

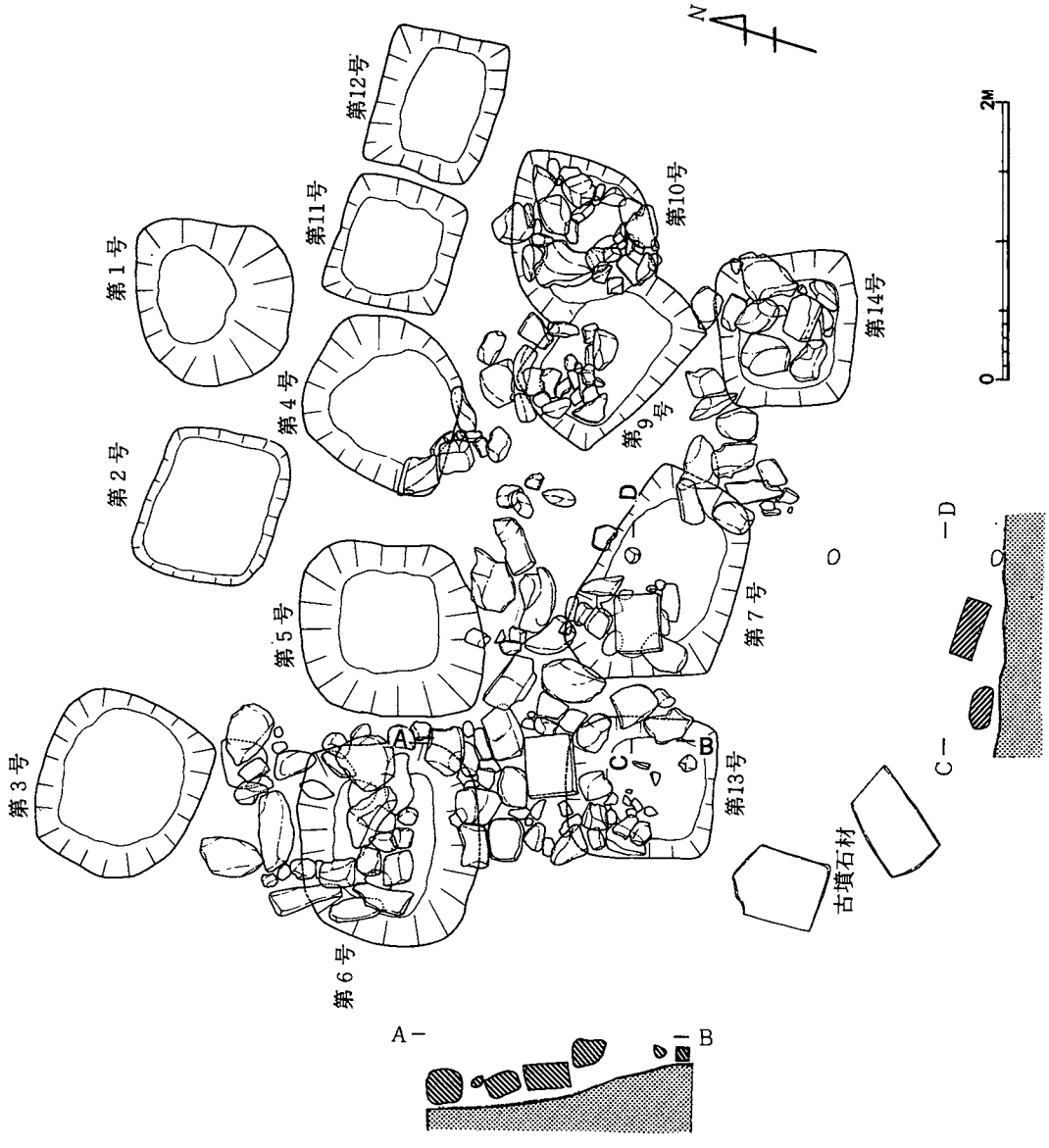
傾斜面の最も低いところで検出した。上部はほとんど削平されてしまっている。形状は円形を呈し、長径1.25ｍで深さは0.40ｍが残る。底部には人骨の一部が残り頭蓋骨と下肢骨を確認できた。人骨は側臥屈葬で中央部に数珠が置かれ、木棺葬であったらしく鉄釘が出土している。

第２号墓坑

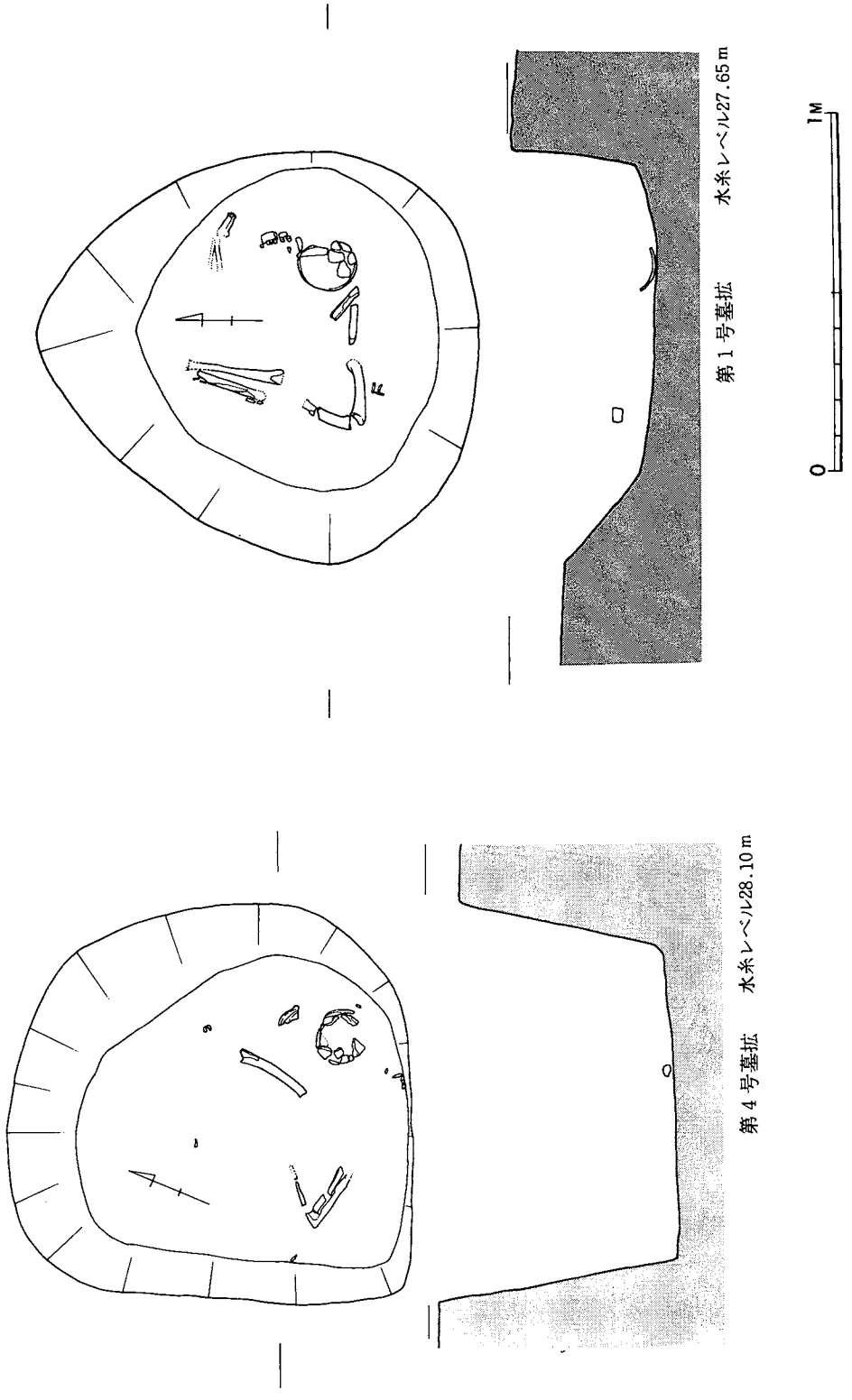
第１号墓坑の南側に近接してある。形状は方形を呈し長軸1.04ｍで短軸0.85ｍで深さ0.16ｍである。上部はほとんど削平されてしまっている。底部には人骨が残り、頭蓋骨と下肢骨を確認でき、座臥屈葬である。中央部に数珠玉が出土した。

第３号墓坑

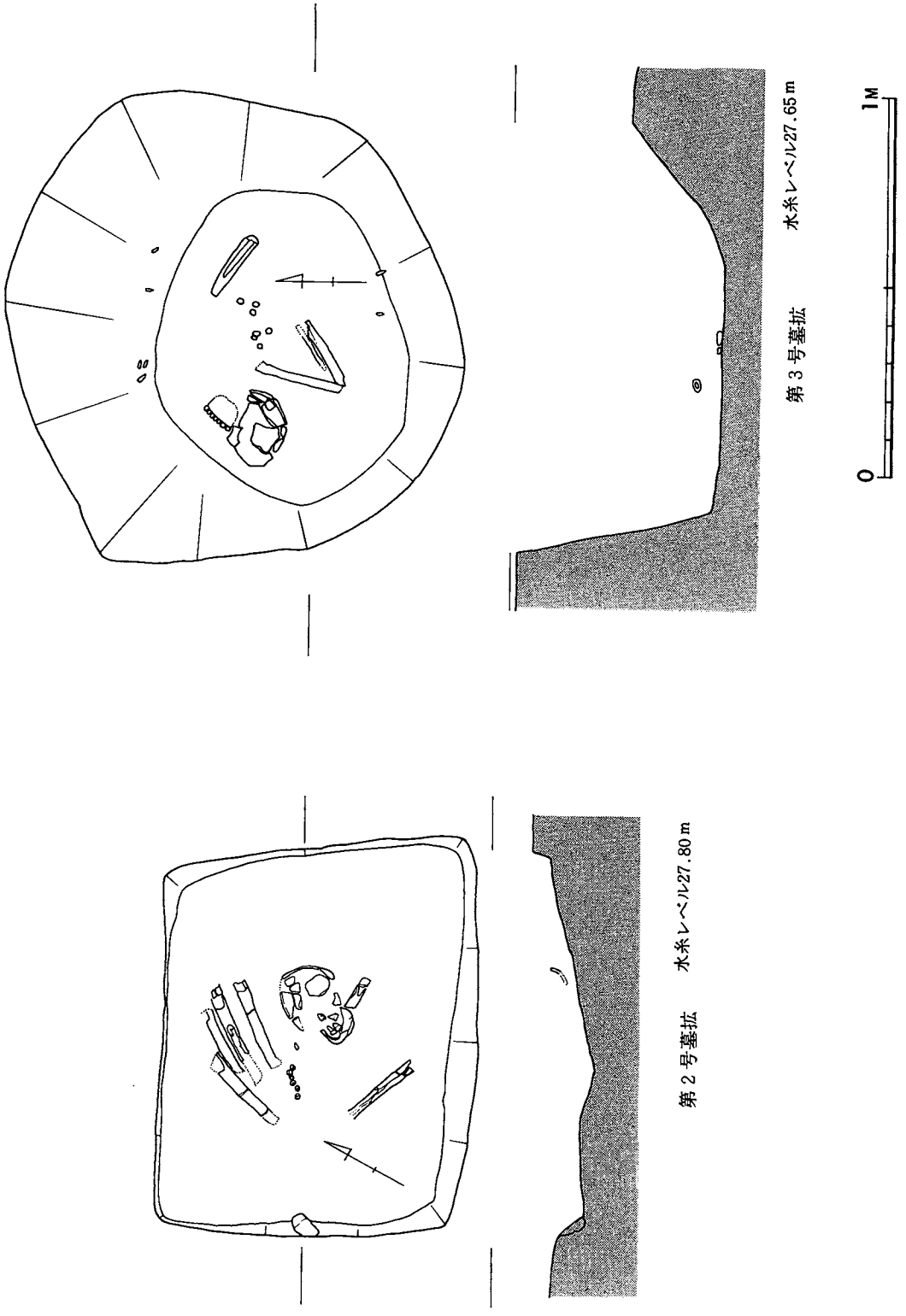
傾斜地の最も低い位置にあり、第１号・第２号墓坑と同じく上面を削平されている。形状は


第1号
第2号
第3号
第4号
第5号
第6号
第7号
第9号
第10号
第11号
第12号
第13号
第14号
古墳石材
A
B
C
D
N
0
2M

第22図　墓坑全体図



第23図　第1号・第4号墓拡実測図



第24図　第2号・第3号墓坑実測図

円形を呈し、長径1.24mで深さ0.55cmである。人骨の一部が残り、下肢骨の一部は立った状態にあることから座臥屈葬であろう。数珠玉と鉄釘が出土している。墓坑の形状が円形で、規模が小さく、座臥屈葬の葬法をとるとみられることから、桶棺に埋葬しはものと思われる。

第4号墓坑

第1号～第3号墓坑の東側で一段高いところに位置する。上面には石囲い遺構が一部残存していた。墓坑の形状は方形を呈し、長軸1.16mで短軸1.12m、深さ0.69mである。底部には人骨の一部が残っている。鉄釘も出土した。

第5号墓坑

第4号墓坑の南側で検出した。墓坑の残りは良好である。形状は方形を呈し、長軸1.39m、短軸1.27mで深さは1.11mである。人骨は残っておらず、鉄釘11本が出土した。

第6号墓坑

第5号墓坑の南側で検出した。上面は方形で長軸約1.40m、短軸1.18mの大きさの石囲いが行われていた。墓坑の形状は方形を呈し、長軸1.41m、短軸1.28m、深さ1.01mである。底部に人骨の頭蓋骨と下肢骨の一部を確認することができた。右側臥屈葬と思われ、墓坑の形状や鉄釘の出土状態から見て木棺葬と判断できよう。

第7号墓坑

第5号墓坑の位置よりさらに一段高いところで検出した。上面には石囲い遺構が一部残存しており、凝灰岩の切石が置かれている。墓石の台石であるが、台石にのる他の墓石は認められない。台石は傾いていた。墓坑は第13号墓坑と切り合わないように意識をしたのか変形した形状を呈している。大きさは長軸1.54mで短軸1.14m、深さは0.66mが残っている。人骨はほとんどが腐植してしまっており、わずかに腰骨・下肢骨と認めることができる。

第8号遺構

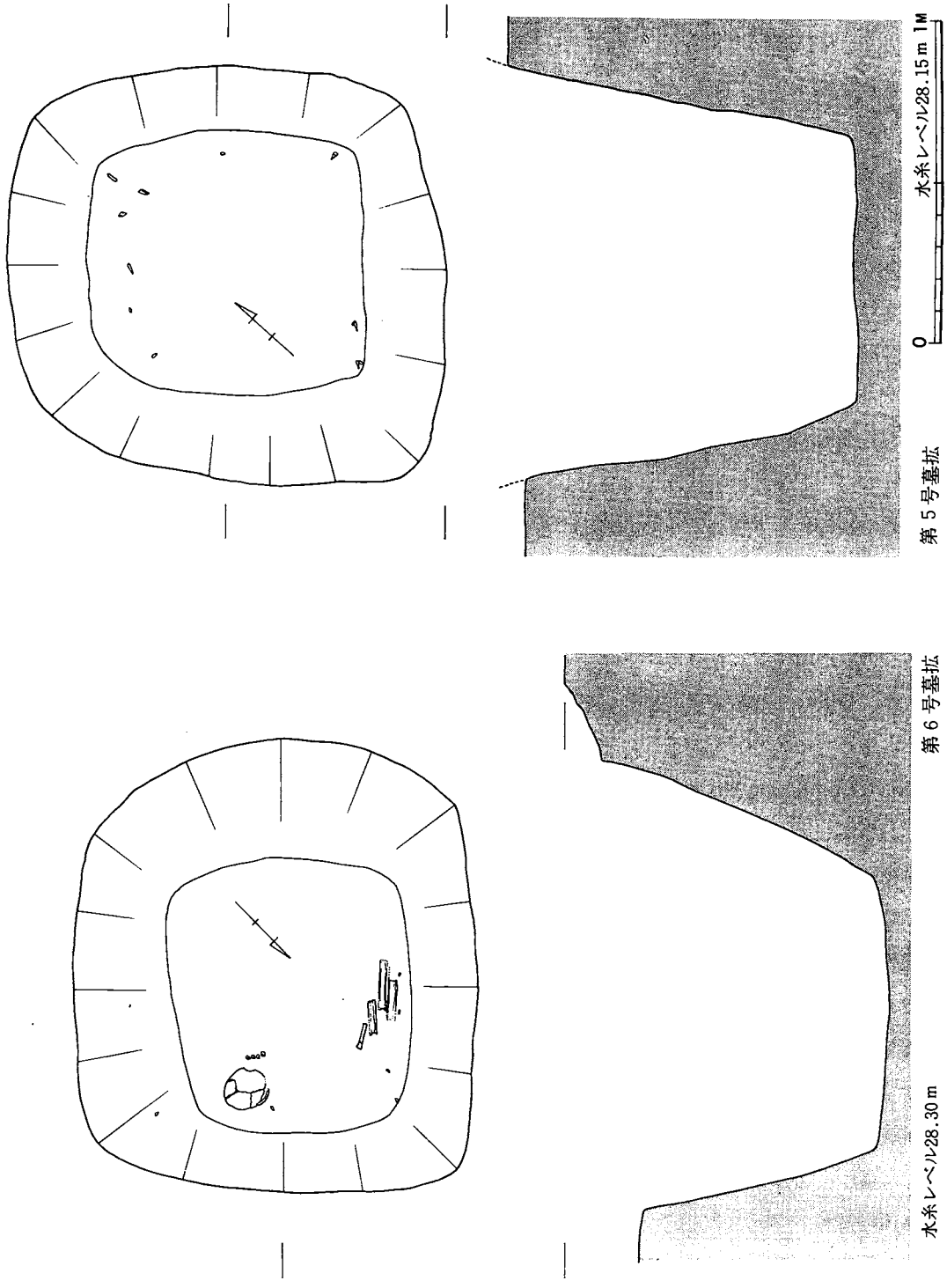
第7号墓坑と第9号墓坑との間に方形を呈する浅い掘り込みがあり、獣骨が出土した。獣骨は犬の骨であることが判明した。

第9号墓坑

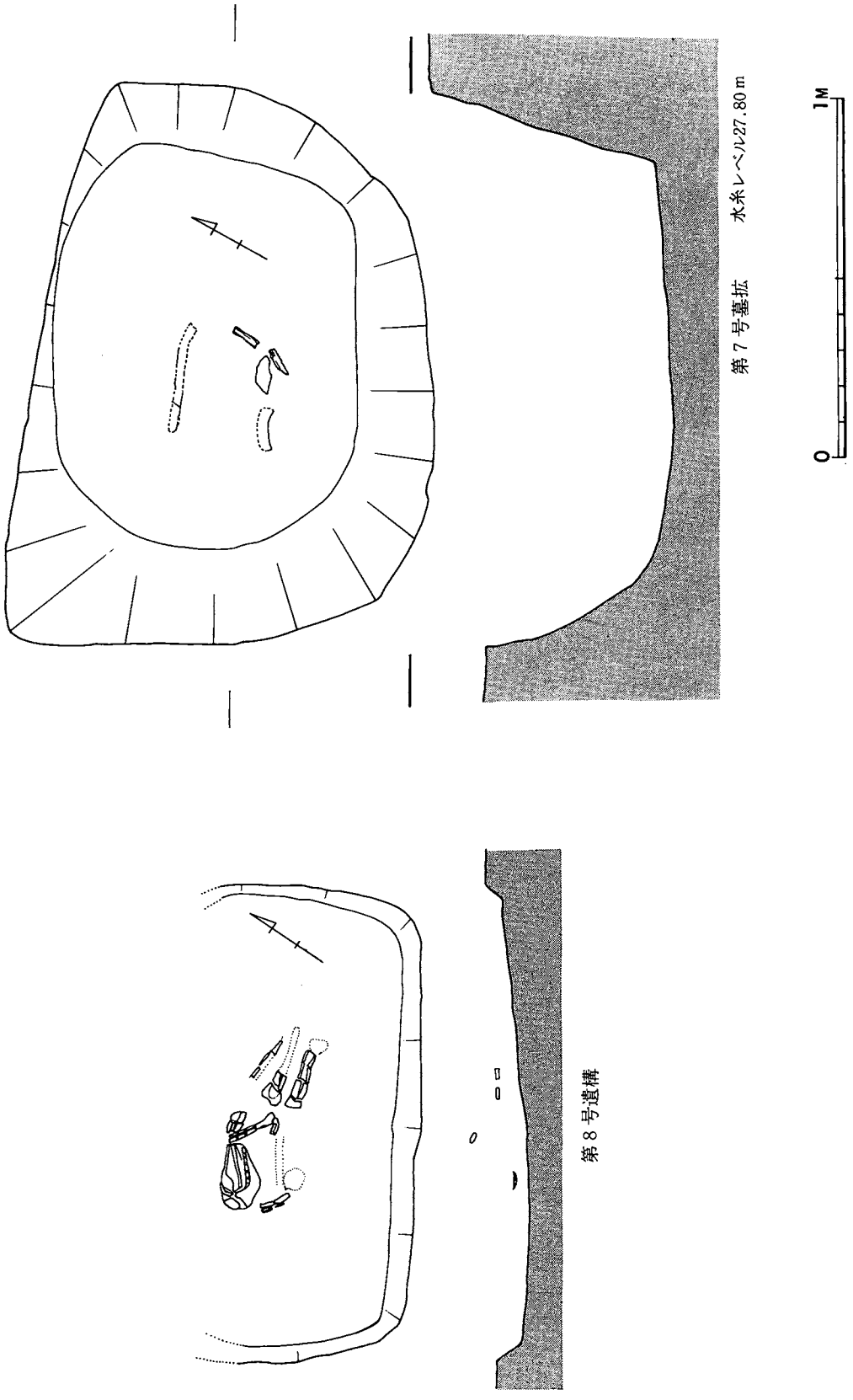
第7号墓坑の東側にあり、第10号墓坑と切り合っている。上面には方形で長軸0.98m、短軸0.72mの規模をもつ石囲い遺構がある。墓坑の形状は方形を呈し、大きさは長軸0.96m、短軸0.94m、深さ0.39mである。底部には人骨片がいくぶん残っていた。数珠玉が出土している。第10号墓坑に切られている。

第10号墓坑

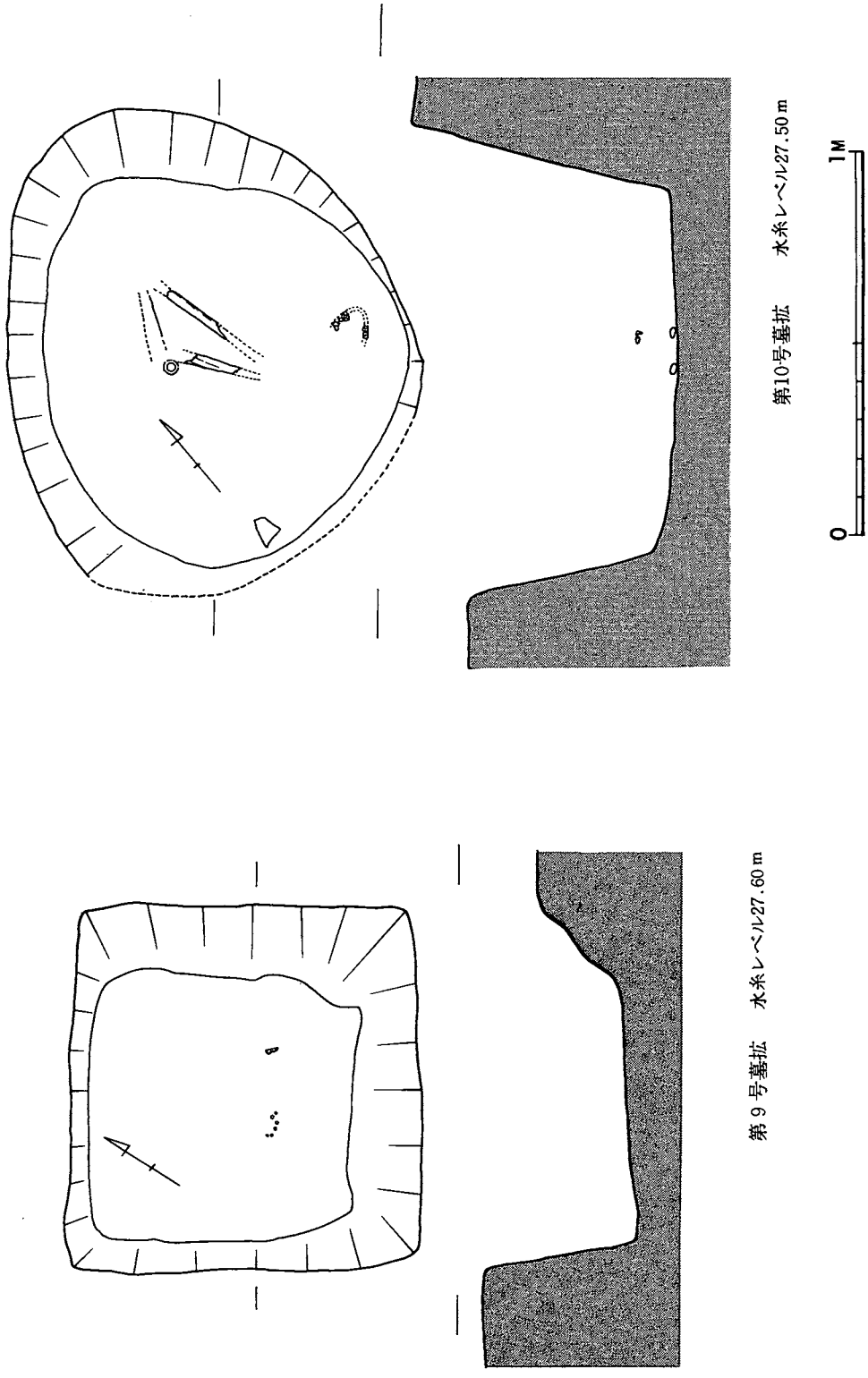
第9号墓坑と切り合いがある。墓坑の上面には方形で長軸1.24m、短軸0.98mの規模をもつ石囲い遺構がある。墓坑の形状は円形を呈し、径は東西に長く1.26mで南北径は1.08mである。深さは0.72mである。底部に人骨片がわずかに認められる。切り合いの関係から第9号墓坑よ



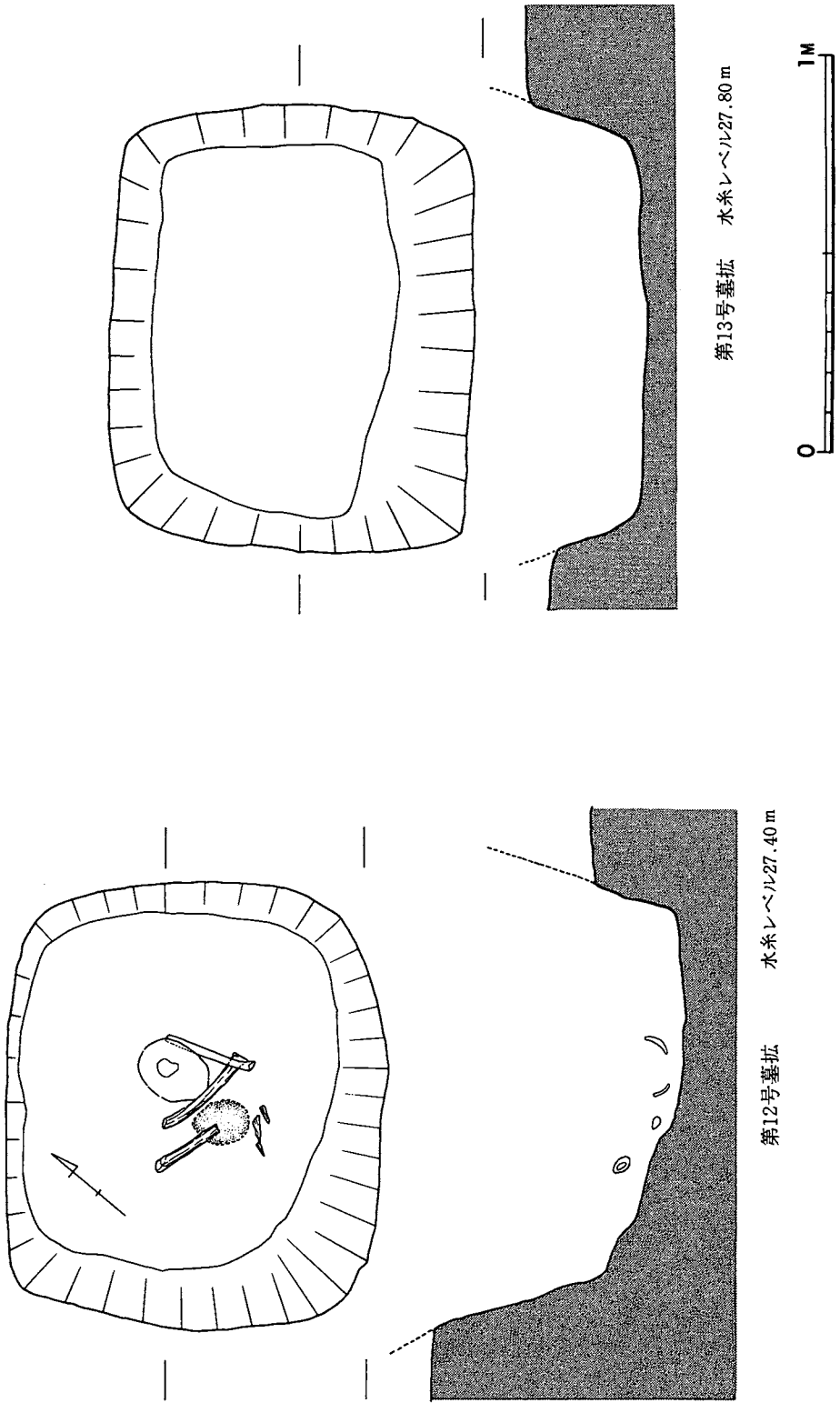
第25図　第5号・第6号墓坑実測図



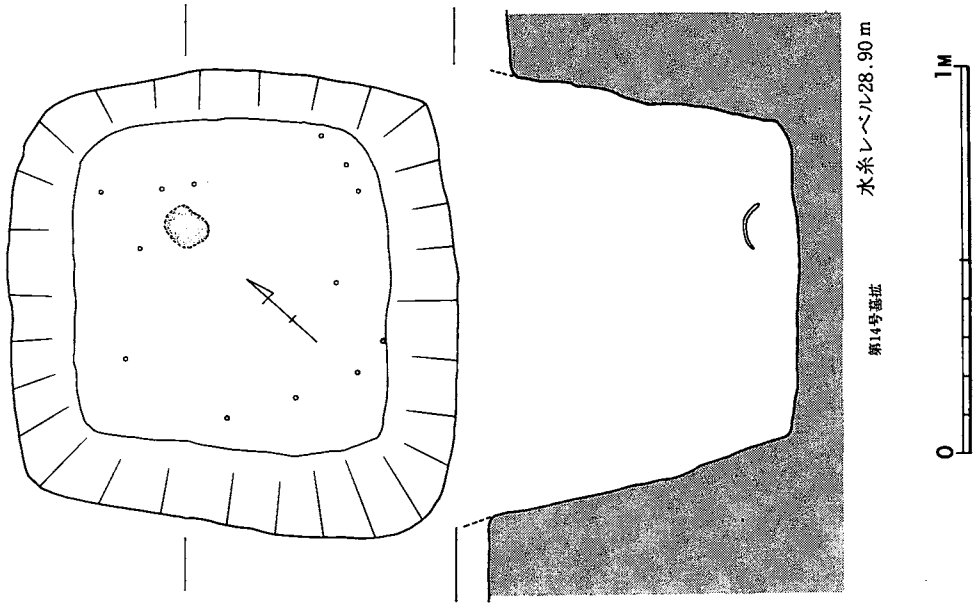
第26図　第７号墓拡・第８号遺構実測図



第27図　第 9 号・第10号墓拡実測図



第28図　第12号・第13号墓拡実測図



第29図　第14号墓坑実測図

りも後につくられている。

第11号墓坑

第10号墓坑の北側にあり、第４号墓坑と第12号墓坑とにはさまれている。墓坑の形状は方形を呈し、大きさは長軸0.92m、短軸0.89mで深さは0.75mである。人骨はほとんど腐植してなくなってしまっており、歯が一部確認できる程度である。数珠玉が出土している。

第12号墓坑

第11号墓坑のすぐ東側で検出した。形状は方形を呈しており、大きさは長軸1.13ｍ、短軸0.94mである。上部はほとんどなくなっており、深さは0.29mだけであった。人骨は腐植してしまっており確認できない。

第13号墓坑

第７号墓坑の南側に近接して並んでいる。上部には石囲い遺構が残存している。凝灰岩の切石が置かれている。形状は方形を呈し長軸約1.26m、短軸1.00mの範囲にある。墓坑の形状は方形を呈し、大きさは長軸1.13m、短軸0.97mで深さは0.68mである。底部には人骨がわずかに残存している。頭蓋骨と下肢骨である。下肢骨が立った状態にあることから座臥屈葬の可能性が強い。また墓坑の形状は円形を呈し、規模の小さなもので鉄釘も出土していないことなどから桶棺葬であろう

第14号墓坑

第９号墓坑の南側に近接してある。上部には石囲い遺構がある。石囲い遺構の形状は方形で

長軸1.02m、短軸0.92mの大きさである。墓坑の形状は方形を呈し、大きさは長軸1.18m、短軸1.15mで深さは0.79mである。人骨は頭蓋骨がわずかに残っていた。鉄釘が出土した。

数珠玉

第30図は表土と墓坑から出土した数珠玉である。19個の実測を行った。いずれもガラス玉であり表面は腐蝕して灰白色を呈している。ほぼ中央にあたる部分に孔がある。孔の大きさは両端とも変化はない。

(1)は表土剝ぎ作業中に出土したものである。最も大きいもので径1.29cm、厚さ1.00cmある。孔径は逆に最も細く0.17cmである。両端が細まり狭い平坦面をなす。中央部でふくらみを持ち、不明瞭な稜を有している。

（2～7）は第2号墓坑から出土したものである。両端が細まり中央部でふくらみを持つ。いずれも不明瞭な稜を有するが両端面は孔のため変形がみられる。

（8～19）は第3号墓坑から出土したものである。第2号墓坑出土のものと類似しているが、多少の差異もみられる。（8～11・16）はやや小さめで薄めである。（12～14）はさらに小さく、そして薄い。形状もいくぶんいびつである。（15・18・19）は径が小さく縦に長い形状を呈し、両端も変形している。

鉄　釘

鉄釘は第1号、第3号、第4号、第5号、第6号、第11号、第13号、第14号墓坑から出土している。断面が四角形の角釘である。

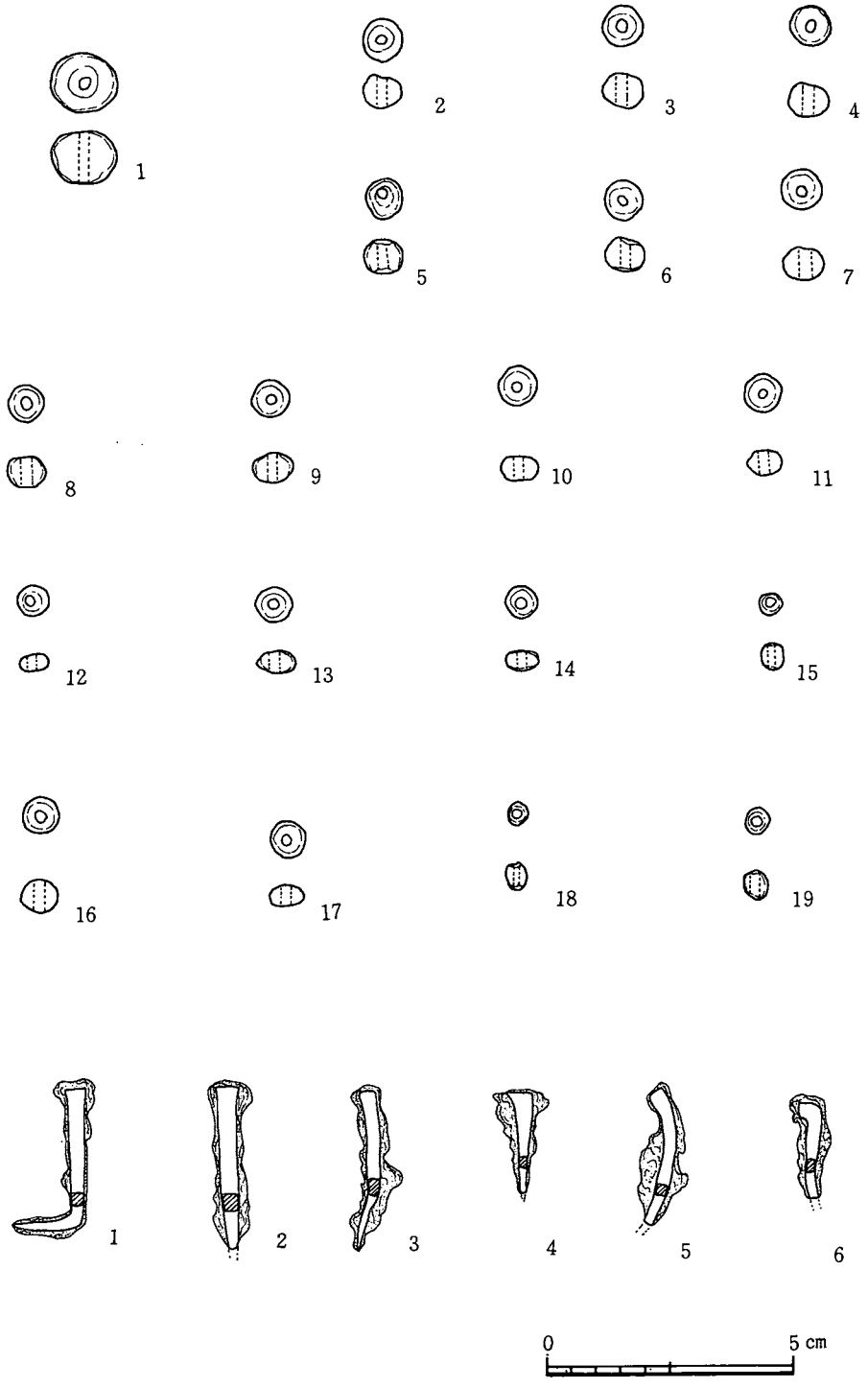
（1～9）は第1号墓坑から出土したものである。いずれも細く、断面は四角を呈する。(1)は先端で折れ曲がっているが、伸ばせば4.3cmであることから1寸5分釘であろう。（2・3・5・7・8・9）も同じく1寸5分釘であろう。（4・6）は3cm弱であり1寸釘であろう。

（10～18）は第3号墓坑から出土したものである。9点の中で6点は先端で折れ曲がっている。(10・11）は約3cmの部分で折れ曲がっており、2枚の5分板を接合し、余ったところを折り曲げたのであろうか。（12・13）は折れ曲がり方が顕著である。（16・18）は1寸釘であろう。

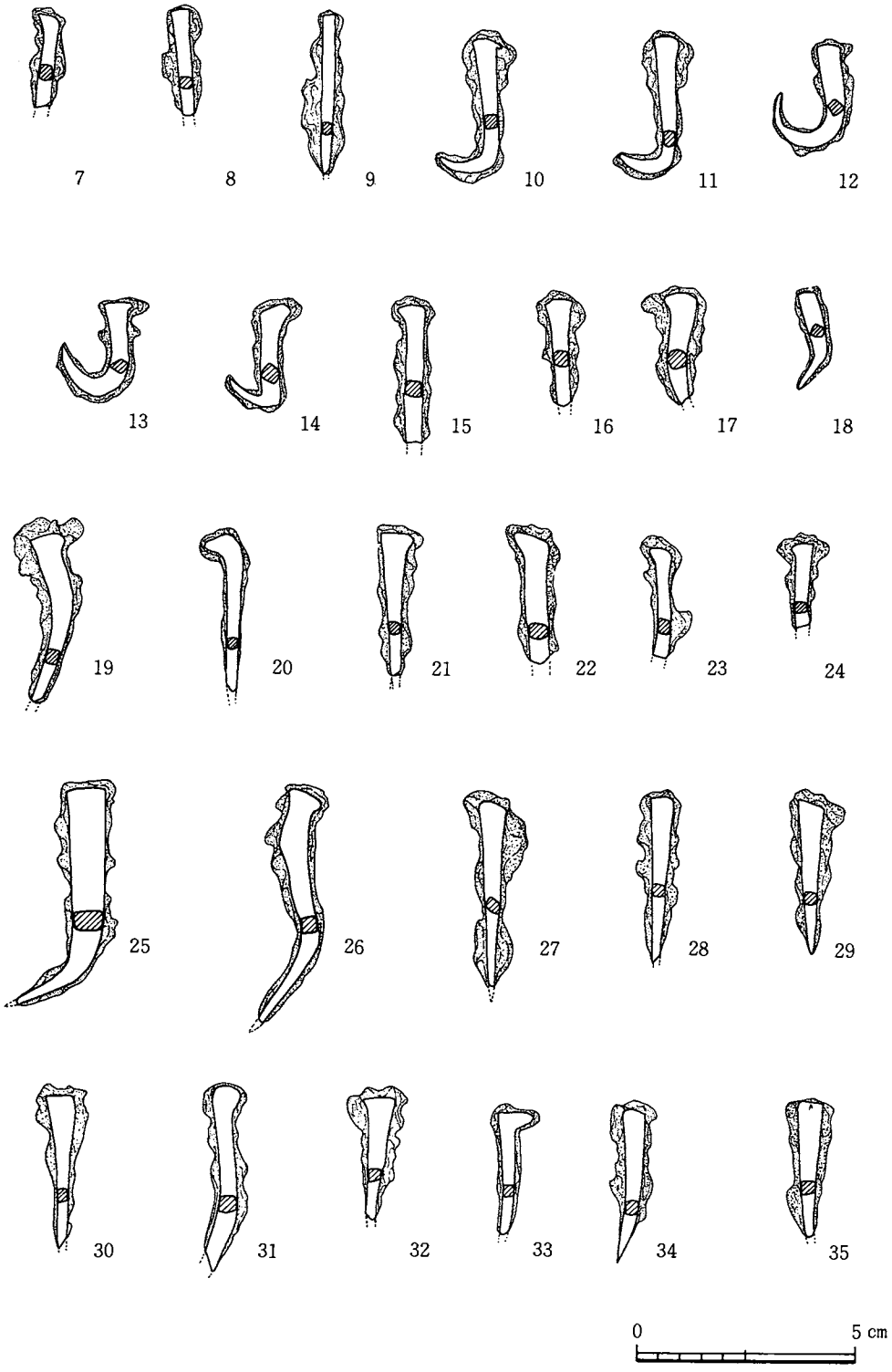
（19～24）は第4号墓坑から出土したものである。（19～22）は1寸5分釘で（23・24）は一寸釘であろう。（25～36）は第5号墓坑から出土したものである。（25・26）は長さが6cmを越え2寸釘と思われる。（25）は横幅が広く扁平な形状を呈する。（26）は固い材木に打たれたのであろうか、途中で曲がっている。（27・31）は1寸5分釘で、他は1寸釘であろう。

（37～45）は第6号墓坑から出土したものである。（37～41）は1寸5分釘と思われる。（46～50）は第11号墓坑から出土したものである。（46・47）が1寸5分釘で他は1寸釘であろう。

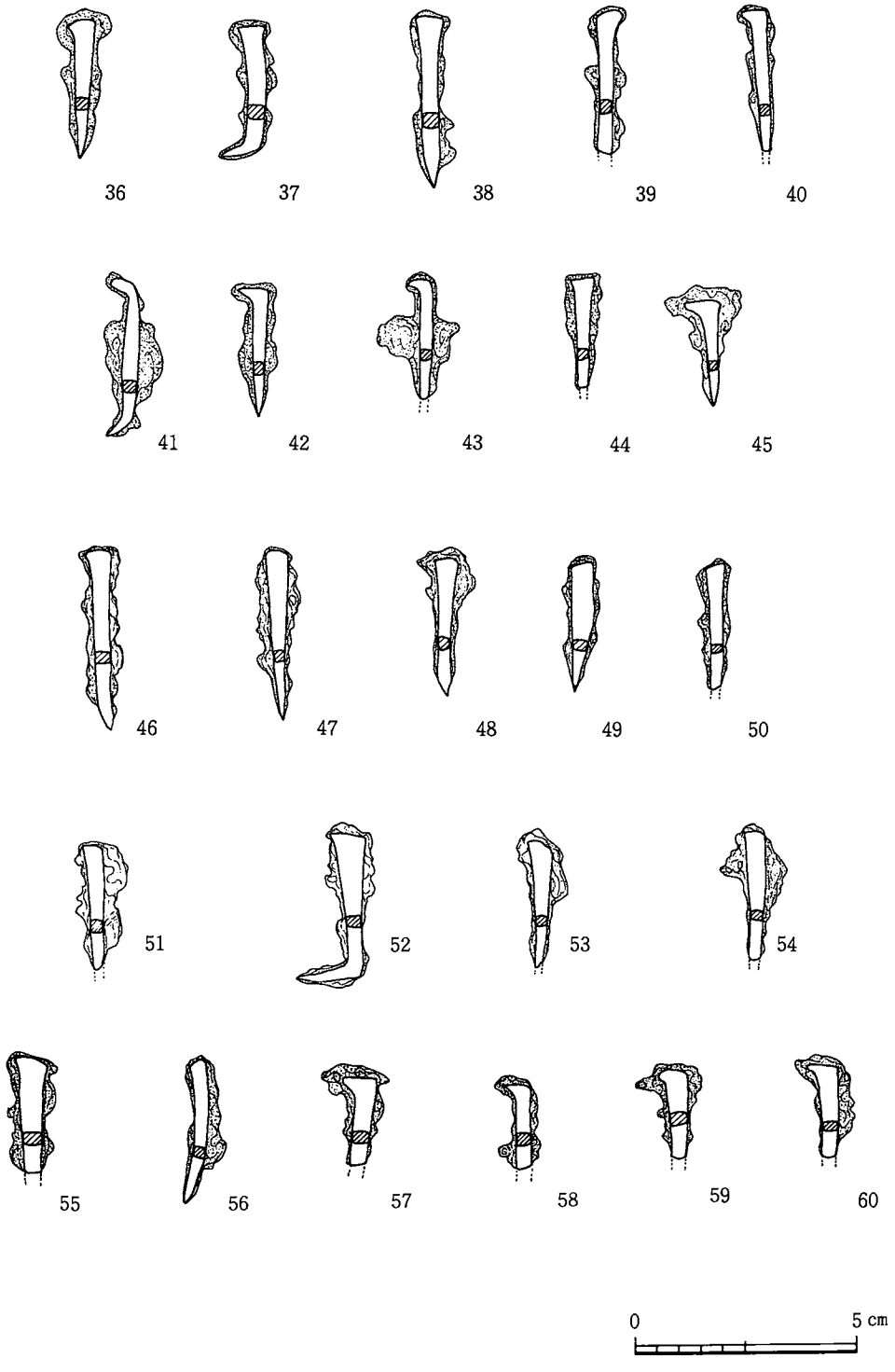
（51）は第13号墓坑から出土したもので、（52～60）は第14号墓坑から出土したものである。(52）は3cm強のところで折れ曲がっており5分板2枚を接合したものであろうか。（51・53・54）はいずれも1寸釘であろう。



第30図　数珠玉・鉄釘実測図 (1)表土層　（2～7）第2号墓坑　（8～19）第3号墓坑　鉄釘　（1～6）第1号墓坑



第31図　鉄クギ実測図、(7～9) 第1号墓坑　(10～18) 第3号墓坑 (19～24) 第4号墓坑 (25～35) 第5号墓坑



第32図　鉄クギ実測図（36）第５号墓坑（37～45）第６号墓坑（46～50）第11号墓坑（51）第13号墓坑（52～60）第14号墓坑

第8表　数珠玉一覧表

No.	外径cm	長(厚)径cm	孔　径cm	色　調	出土場所	備　　考
1	1.29	1.00	0.17	灰白色	表　土　層	STA154+60 中心杭周辺
2	0.81	0.60	0.22	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
3	0.79	0.64	0.24	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
4	0.79	0.60	0.22	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
5	0.79	0.59	0.23	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
6	0.76	0.62	0.26	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
7	0.74	0.63	0.24	灰白色	第2号墓坑	墓　坑　内
8	0.69	0.60	0.26	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
9	0.70	0.50	0.24	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
10	0.68	0.60	0.24	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
11	0.66	0.56	0.20	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
12	0.70	0.50	0.20	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
13	0.68	0.46	0.20	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
14	0.66	0.40	0.20	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
15	0.50	0.60	0.22	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
16	0.60	0.42	2.30	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
17	0.60	0.46	0.20	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
18	0.50	0.59	0.21	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内
19	0.49	0.58	0.19	灰白色	第3号墓坑	墓　坑　内

第9表　墓坑一覧表

号	石囲い		墓坑			埋葬		被葬者	遺物		備　　考
	形状	規　模	形状	規　模m	長軸の方向	葬　法	葬　位		封土内	墓坑内	
1	—	—	円形	1.25×1.15×0.40	N－1°－W	木棺？	側臥屈葬	人　骨	—	数珠玉 鉄クギ	
2	—	—	方形	1.04×0.85×0.16	N－62°－E		座臥屈葬	人　骨	—	数珠玉	
3	—	—	円形	1.24×1.23×0.55	N－88°－E	桶棺？	座臥屈葬	人骨片	—	数珠玉 鉄クギ	
4	不明	一部残存	方形	1.16×1.12×0.69	N－66°－E			人　骨	—	鉄クギ	
5	—	—	方形	1.39×1.27×1.11	N－49°－E			—	—	鉄クギ	

号	石囲い		墓坑			埋葬		被葬者	遺物		備考
	形状	規模	形状	規模m	長軸の方向	葬法	葬位		封土内	墓坑内	
6	方形	1.40×1.18	方形	1.41×1.28×1.01	N−43°−E	木棺？	右側臥屈葬？	人骨片	—	鉄クギ	
7	不明	一部残存	方形	1.54×1.14×0.66	N−61°−E			人骨片	—	—	石囲いに凝灰岩切石あり
8	—	—	方形	1.34×—×0.11	N−58°−E			犬	—	—	犬の骨であった
9	方形	0.98×0.72	方形	0.96×0.94×0.39	N−32°−W			人骨片	—	数珠玉	第10号と切り合う
10	方形	1.24×0.98	円形	1.26×1.08×0.27	N−41°−E			人骨片	—	—	第9号と切り合う
11	—	—	方形	0.92×0.89×0.75	N−？−			—	—	数珠玉 鉄クギ	
12	—	—	方形	1.13×0.94×0.29	N−68°−E			—	—	—	
13	方形	1.26×1.00	方形	1.13×0.97×0.68	N−62°−E	桶棺？	座臥屈葬？	人骨片	—	鉄クギ	石囲いに凝灰岩切石あり
14	方形	1.02×0.92	方形	1.18×1.15×0.79	N−48°−E			人骨片	—	鉄クギ	

以上のようにＳＴＡ 154＋60中心杭周辺の調査によって約10基の石囲い遺構と、その下から14基の落ち込みを検出することができた。その中で第８号は獣骨であったため除外するとして、13基の墓坑を調査することができた。

石囲い遺構と墓坑とを図面にとるといくらかのズレが見られた。これは墓地が形成されたところはかなり急な斜面であるためにズレたものと思われる。また、墓石は埋葬してから何年かたってから設けるという風習があり、時間がたってから石囲いを設けたために墓坑との位置がズレたとも考えられる。

石囲い遺構の中では、第６号・第９号・第10号・第13号・第14号墓坑の上面で検出したものが良好に残存していた。いずれも方形に囲われて、墓坑の大きさとほとんど同じ規模でつくられている。したがって、墓坑の大きさがある程度わかる状態の時につくられた可能性が強い。

石囲い遺構の高さは30〜40cmである。石材のほとんどは付近に多く見られる石灰岩である。付近には石灰岩が多く、意識的に石灰岩だけを選んだということではないと判断している。

第７号墓坑と第13号墓坑では石囲い遺構の上に凝灰岩の切石が置かれていた。この切石は縦46cm、横38cmであり端正な整形が行われている。この切石は墓石の台石と思われる。石囲い遺構の上にはすべて墓石が置かれていたのであろうか。また、墓石がない場合には墓標が置かれていたのであろうか。石囲いは墓石の基礎固めになるのは勿論であるが、墓標をささえ固めるのにも有効である。

墓坑の形状は方形を呈するものが10基であり、円形を呈するものはわずかに３基であった。最も大きいのは第７墓坑であり、長辺が1.54ｍである。最も小さいのは第７号墓坑で長辺が0.92ｍである。被葬者の大きさによって変化をみたものであろうか。特殊な様相を有するよう

な墓坑は認められない。円形の形状を示すものは、長径がそれぞれ1.24、1.25、1.26mであり全く同じような規模でつくられている。もし円形を呈する墓坑は棺桶による埋葬であったとするなら、棺桶も一定の大きさでつくられていたものと思われる。

墓坑の深さは、上面を削平されているものは不明である。石囲いのない墓坑の中で最も深いのは第5号墓坑で1.11mである。上面に石囲いがある墓坑で最も残存が良好なのは第6号墓坑であり、深さは1.01mである。この第5号・第6号墓坑から判断すれば、墓坑の深さは1.00mを越え、その上に40～50cmの土マンジュウ状の盛土と石囲いを行っていたものと思われる。さらにいくつかには墓石が置かれていたのであろう。

葬法としては、墓坑の形状はほとんどが方形を呈することから木棺が多かったものと考えられる。特に鉄釘が多く出土しており、木棺に使用されていたものと理解しておきたい。墓坑の形状が円形を呈するのは第1号・第3号・第10号墓坑である。第1号墓坑の人骨は側臥屈葬と判断できたが、側臥屈葬は桶棺ではできにくい葬法であるので、木棺とみるべきであろう。第3号墓坑の人骨は座臥屈葬と判断できたが、桶棺の可能性が最も強い。

人骨は全体的に遺存状態がよくない。骨粉と化したものまで含めると10基であるが、葬位まで判断できるのは5基だけであった。前述、第1号と第6号墓坑は右側臥屈葬で、第2号と第3号・第13号墓坑は座臥屈葬と判断することができた。木棺もしくは桶棺で埋葬するのが一般的と思われ、座臥屈葬と側臥もしくは仰臥屈葬がノーマルであったと思われる。

墓坑からは数珠玉と鉄釘が出土したが、各遺物については先に述べたとおりである。数珠玉はいずれもガラス玉で5基から出土しており、数珠を一緒に埋葬することは一般的な現象であるように思える。数珠が出土していないのは木製の数珠であったかもしれない。

石囲い遺構の上に墓石の台石と見られる凝灰岩の切石があった。台石の上の墓石があれば、年号等によって13基の墓坑についての時期判断に手がかりを与えてくれたはずであるが。

墓坑の上層で出土した土器は、古墳時代から近世に至るさまざまの遺物であり、直接的に結びつけることのできるものはない。

ＳＴＡ 154＋60中心杭付近のもとの土地所有者は興善寺地区在住の人である。土地所有者の先祖の墓であることがわかっていたため、今回の調査の前にいくつかの人骨が発掘され、他の場所にある墓地に納骨されている。13基にものぼる墓坑があることは伝えられていなかったようである。墓地が明治時代の頃のものであれば、先祖の墓としてもっとはっきり伝えられていたと考えられるので、明治時代以前の墓地の可能性が強い。

13基の墓坑は狭いスペースに第9号と第10号墓坑に切り合う現象があるだけで、このほかには切り合いは見られない。むしろ、第11号墓坑や第12号墓坑のように近接する墓坑とは切り合わないように配慮しながらつくられたと見ることができるものもある。したがって墓として忘れられていない状況の中で13基の墓坑がつくられつづけた可能性が強く、割と短い期間のうち

に家族墓的な性格をもってつくられたものと考えられる。

墓石を持つ墓は江戸中期頃から見られるようになり、江戸時代後期頃から墓石を有するのが一般化している。

今回の調査では石囲いがあり、先に述べたように一部に台石があることから墓石が置かれていたと思われ、墓石がない場合には墓標が立てられていたのではないだろうか。この現象は、墓坑の上に石囲いを行っていたもの、もしくは墓標をたてていたものが、次第に墓石を設けるようになる過渡的な様相を示す時期のものであるのか。

すでに墓石を用いることが普遍的な時期において、経済性などの原因で墓石を建てることができずに石囲いだけ、もしくは石囲いと墓標だけであったのか。

人骨はほとんどが腐植してしまっており、かなり腐植をさせやすい土壌であるといえよう。そのような土質の状態の中で鉄釘は相当量残存していた。このことは、人骨のほとんどは腐植させてしまったが、鉄釘を腐蝕させてしまう程の時間は経ていない。すなわち、墓坑がつくられた時期はあまり古くさかのぼることはないのではあるまいか。江戸時代中期～後期にかけての墓地であろうと述べておきたい。

（江本）

Ⅳ　熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨

長崎大学医学部解剖学第二教室

松　下　孝　幸

分　部　哲　秋

はじめに

熊本県八代郡興善寺町にある四郎丸遺跡の土坑から、1977年の発掘調査によって人骨が合計10体出土した。この人骨は考古学的所見から近世に属するものである。

人骨の保存状態は一般的に悪く、その中では1号人骨と2号人骨とが比較的遺存が良く、その他はほとんどが人骨の一部を残すだけであったが、できるだけ詳細な観察を行なったので、その結果を報告したい。なお、8号墓から出土したのは犬骨だったので本報告から除外した。

資　料

1号人骨

保存状態は悪く、頭蓋骨と下顎骨の一部および歯が残存しているだけで、また四肢骨も残りが悪く、大腿骨の骨体、脛骨骨体の中央部、右上腕骨骨体および尺骨と橈骨のごく一部が残存するだけである。

1号人骨は下記の所見から、壮年男性骨と推定される。

2号人骨

保存状態は良くない。頭蓋骨は前頭骨の鼻部および眼窩部が残っており、その他矢状縫合をはさむ左右の頭頂骨の一部と、左右の側頭骨の錐体および後頭骨の内後頭隆起部が残存しているにすぎない。下顎骨は正中部を除く下顎体の歯槽部が残存しており、歯は遊離しているものの、大部分が残っていた。

四肢骨の残りも悪いが、出土人骨の中では最も良好なものであった。左上腕骨骨体と右上腕骨の一部、左右の大腿骨骨体、左右の脛骨の骨体と左の腓骨の骨体が残存していた。

2号人骨は下記の所見より熟年男性骨と推定される。

3号人骨

保存状態はきわめて悪く、頭蓋骨の一部と歯が残存するだけである。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

4号人骨

保存状態は悪く、頭蓋骨は左側頭骨の錐体が残存している他は後頭骨などの一部が残っていたにすぎない。

四肢骨の遺存程度も不良で、上腕骨、大腿骨、脛骨のそれぞれ一部が残っていただけで、いずれも左右の判別もつかないものである。

性別は骨質が厚いことから男性の可能性が強い。年齢は不明である。

5号人骨

2本の遊離歯が残存するだけである。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度から壮年と考えられる。

6号人骨

頭蓋と歯および四肢骨の小片が残存していた。頭蓋は頭蓋冠の左半分が残存しているが、表面の剝落と破損がひどく、頭蓋内に土が充塡してかろうじて形を保っているという状態である。

四肢骨は長骨の小片のみである。

7号人骨

保存状態はきわめて悪く、頭蓋の小片と下顎骨の右歯槽部の一部および歯が残存していたにすぎない。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度から熟年と考えられる。

9号人骨

残っていたのは歯のみであった。

性別は不明であるが、年齢は下記の所見より、幼児と推定される。

10号人骨

保存状態は良くない。頭蓋骨は頭蓋冠の一部が残っていたが、外板の剝落がひどく、頭蓋内の土で型を保っているにすぎない。その他前頭骨の小片などが存在する。歯は十数個残っていたが、いずれも歯冠のみである。

四肢骨の残りもきわめて悪く、長骨のごく一部が遺存するだけである。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度より壮年と推定される。

11号人骨

歯が9本残存するだけである。

年齢は幼児で性別は不明である。

以上の出土人骨10体の性別、年齢は次の通りである。

人骨番号	性別	年齢
1号人骨	男性	壮年
2号人骨	男性	熟年
3号人骨	不明	壮年
4号人骨	男性	不明
5号人骨	不明	壮年
6号人骨	不明	壮年

7号人骨	不明	壮年
9号人骨	不明	幼児
10号人骨	不明	熟年
11号人骨	不明	幼児

所　　見

1号人骨

(1) 頭蓋

保存状態はきわめて悪く、外板の剝落が甚しく、観察もほとんど不可能である。

下顎骨は下顎体のうち正中部と右側の一部が残存していたが、残存部分から推定しても下顎骨はあまり大きくないようである。

歯は両顎合わせて、12本残っていたが、遊離歯はすべて歯冠のみであり、歯式で示すと次の通りである。

					$\dot{C}$	$\dot{I}_1$		$\dot{I}_2$			
$\dot{M}_3$	$\dot{M}_2$	$\dot{M}_1$	P_2	P_1	○	$\dot{I}_2$	○	○	I	$\dot{P}_1$	$\dot{P}_2$

○　歯槽開放
・　遊離歯

咬耗度はBroca の2度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 上腕骨

右側の骨体が残存していたにすぎないが、骨体は頑丈で、三角筋粗面の発達も非常に良く、骨体には扁平性も認められる。中央と推定される位置での計測値は、最大径が（23mm）、最小径が（18mm）、中央周は（66mm）であり、骨体断面示数は（78.26 ）となり、弱い扁平性がうかがえる。

2. 尺骨

右側の骨体近位部が残存するだけであるが、骨質はやや頑丈である。

3. 橈骨

骨体中央のごく一部が残存するだけなので左右の別も判じ得ないものであるが、太くてやや頑丈である。

2) 下肢骨

1. 大腿骨

左右共骨体が残っているが、右側は破損と変形が著しく、計測や観察に耐え得るものではない。左側は太くて頑丈で、やや強い柱状形成の像も認められる。また骨体上部にも弱い扁平性が認められる。

左側の計測値は推定中央位での矢状径が(31mm)、横径が(26mm)で、中央断面示数は(119.23)で大きく、また中央周は (91mm) と周径も大きい。上骨体断面示数は78.13 となり骨体上部はやや扁平である。

2. 脛骨

左側の方が残りが良く、骨体が残存していたが、右側は大破しており、骨体の一部のみが残存していたにすぎない。左側も前縁が破損してはいるものの、径は大きく、頑丈であるが、ヒラメ筋線の発達は強い方ではない。

計測は推定中央位での横径のみが可能で、(32mm) あり、矢状径は計測できないが、あまり大きいものではないようで、扁平性は全く認められない。なお断面形はヘリチカのⅠ型である。

性別は四肢骨の諸径が大きいことや筋付着部がよく発達していることから男性と考えられ、年齢は歯の咬耗が弱いことから壮年と考えられる。

2号人骨

(1) 頭蓋

頭蓋骨は1号人骨と同様に外板が剝落しており、観察も困難であるが、眉上弓はやや隆起している。また、矢状縫合は内板が癒着しており、外板にも癒合が進行している。

歯は下顎の右の第1大臼歯と第2大臼歯 ($\overline{M_2 M_1}$) および左の第1大臼歯 ($\overline{M_1}$) が釘植している他はすべて遊離しているが、大部分の歯が遺存していた。歯式で示すと次の通りである。

/ $\dot{M}_2$ $\dot{M}_1$ $\dot{P}_2$ / $\dot{C}$ $\dot{I}_2$ $\dot{I}_1$	/ $\dot{I}_2$ $\dot{C}$ $\dot{P}_1$ $\dot{P}_2$ $\dot{M}_1$ / /
/ M_2 M_1 $\underset{\cdot}{P_2}$ $\underset{\cdot}{P_1}$ $\underset{\cdot}{C}$ / /	/ $\underset{\cdot}{I_2}$ $\underset{\cdot}{C}$ $\underset{\cdot}{P_1}$ $\underset{\cdot}{P_2}$ M_1 $\underset{\cdot}{M_2}$ /

(/ 不明
· 遊離歯)

咬耗度はBroca の3度である。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 上腕骨

左側は骨体の大部分が残存し、右側は骨体遠位部が残存するだけである。左側も表面の剝落がひどく、計測することはできないが、やや細長く、扁平性も認められず、三角筋粗面の発達もあまり良い方ではない。

2) 下肢骨

1. 大腿骨

左右共に骨体の大部分が残っていたが、右側の方が保存が良い。左右共に大きく頑丈で、粗線の発達も良好である。

右側の計測値は推定中央位での矢状径が（28mm）、横径が（27mm）、中央周は（87mm）で、中央断面示数は（103.70）となり、骨体はやや変形はしているが、上骨体断面示数は77.42となりやや扁平である。左側も大きく頑丈で、粗線の発達は右側よりも良いが緻密質の破損が甚しく、計測は不可能である。

2. 脛骨

右側は骨体中央部が、左側は骨体の大部分が残っており、左右共大きく頑丈で、扁平性も認められる。

推定中央位での計測値は、右側で最大径が（32mm）、横径が（21mm）、骨体周は（85mm）となり、中央断面示数は（65.63）を示し、強い扁平性が認められる。一方、左側は最大径が（30mm）、横径が（23mm）、骨体周が（84mm）で、中央断面示数は（76.67）となり、やや扁平ではあるが、その程度は右側より弱い。また、両側共に骨間縁が鋭く発達し外側縁が陥凹しているが、右側は後面が狭く、その中央に稜が形成され、断面型はヘリチカのⅣ型を呈しており、左側は後面がやや広く、その断面型はⅡ型を示している。

3. 腓骨

左側の骨体遠位部が残存するだけなので計測は不可能であるが、径は大きく頑丈である。特に矢状径が大きいので、骨体には扁平傾向がうかがえる。

性別は四肢骨の諸径が大きく、筋付着部や稜の発達が良好なことから男性骨と推定され、また年齢は歯の咬耗度と矢状縫合の癒着進行度より熟年と推定される。

3号人骨

頭蓋骨片が残存していたが、その中から後頭骨と側頭骨の一部を同定できた他はすべて細片である。

歯は$\overline{C\ P_1}$を除いて他はすべて遊離歯で、ほとんどが歯冠のみしか残存していなかった。歯式は次の通りである。

		$\dot{I}_2$ $\dot{I}_1$	$\dot{I}_1$			
$\dot{M}_1$				C	P_1	$\dot{M}_1$ $\dot{M}_2$

（・　遊離歯）

咬耗は弱く、Broca の１度である。

年齢は咬耗度から壮年と考えられるが、性別は不明である。

4号人骨

保存が悪く、計測はもちろん大部分が観察にも耐えられないものであるが、残っている部分の骨質は厚い。

上記のことから男性骨と考えられるが、年齢は不明である。

5号人骨

上顎左中切歯と下顎の右犬歯の2本の歯の歯冠のみが残存していたにすぎない（$\lfloor I_1, \overline{C} \rfloor$）。歯冠部分の大きさは小さいものではなく、また咬耗度は弱く、Broca の1度で、壮年の歯と考えられる。

性別は不明である。

6号人骨

頭蓋冠の左半分がかろうじて形を保っているという状態ではあるが、変形が著しく、破損も大きいので、計測は不可能であり、頭型を知ることはできない。なお後頭平面の隆起は強い。

歯は6本残存していた。いずれも歯冠のみであるが、その浮彫像は豊かである。歯式は次の通りである。

$$\begin{array}{r|l} M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2 & \\ \hline I_1 & \end{array}$$

（すべて遊離歯）

咬耗度はBroca の2度で、年齢は壮年と考えられるが、性別は不明である。

7号人骨

頭蓋は多数の小片の状態でしか残っておらず観察の対象になる資料ではない。

下顎骨は左側の歯槽部の一部が残存しており、その他5本の遊離歯の歯冠が残っていたのでその部分を歯式で示すと次のとおりである。

$$\begin{array}{r|l} /\ /\ \dot{M}_1 /\ \dot{P}_1\ /\ /\ \dot{1}_1 & \\ \hline /\ /\ \underset{\cdot}{M_1}\ P_2\ P_1\ C\ /\ / & \end{array}$$

（／　不明（破損）
・　遊離歯）

咬耗度はBroca の3度である。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度より熟年と推定される。

9号人骨

17本の歯のみが残っていたが、いずれも歯冠だけである。歯冠は大きく、浮彫像も豊かである。なお歯式は次の通りである。

$$\begin{array}{r|l} M_1\ m_2\ \ \ \ \ \ \ \ I_2\ I_1 & I_1\ I_2 \\ \hline M_1\ m_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1 & I_1\ \ \ C\ P_1\ P_2\ m_2\ M_1 \end{array}$$

（すべて遊離歯）

下顎の両側と右上顎とに第2乳臼歯が残っていることや、永久歯のいずれにも咬耗の跡がほとんどみられないことから、9号人骨は幼児と考えられるが、性別は不明である。

10号人骨

① 頭蓋

保存が悪く、頭蓋冠の一部が土に付着する状態で残っているにすぎず、その他前頭骨の一部が残っていた。剝落がひどく特徴を知ることはできない。

歯は20本の遊離歯が残っているが、すべて歯冠のみである。歯式は次の通りである。

M_1 P_1 C	I_1 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2	I_2 P_1 P_2

（すべて遊離歯）

咬耗度はBrocaの1度である。

(2) 四肢骨

四肢骨の保存もきわめて悪く、長骨の一部が残存するだけである。

性別は不明であるが、年齢は歯の咬耗度から壮年と推定される。

11号人骨

8本の乳歯と1本の永久歯の合計9本の遊離歯の歯冠が残っていた。咬耗はいずれも弱く、歯式は次の通りである。

m_2 m_1 c	c m_1
m_2 m_1	m_1 m_2 M_1

（すべて遊離歯）

性別は不明であるが、年齢については幼児と推定される。

総　　括

四郎丸遺跡の近世土壙墓から合計10体の人骨が出土した。保存状態は良くなかったが、出土人骨群の特徴は次の通り要約できる。

1. 10体のうち8体が成人骨で、2体は幼児骨である。また成人のうち3体が男性で、残りの5体は性別不明であり、年齢は壮年が5体、熟年が2体、不明が1体である。
2. 頭蓋の特徴を知ることができる程保存の良いものは1例も存在しない。
3. 歯の遺存状態は比較的良く、4号を除くすべての人骨に残っていた。咬耗は一般的に弱い。
4. 四肢骨が観察できるのは1号人骨と2号人骨のみであるが、上腕骨については、1号が大きく頑丈で三角筋粗面の発達も良好で扁平性が認められるのに反し、2号人骨はやや細い傾向を示し、三角筋粗面の発達も良くなく、扁平性も認められない。
5. 大腿骨については、1号人骨も2号人骨も共に大きくて頑丈であり、粗線の発達も良く

骨体近位部には扁平性も認められる。

6. 脛骨は1号人骨も2号人骨も共に大きく頑丈ではあるが、後者が扁平なのに反し、前者には扁平性が認められない。

7. 以上の様に四郎丸遺跡出土の近世人骨の頭蓋については明らかではないが、男性の四肢骨については大きくて頑丈であり、扁平性のうかがわれる例もみられた。

(擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課、ならびにご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。)

参 考 文 献

1. 鈴木　尚，他，1957：深川雲光院出土の江戸時代人頭骨について．日本人類学会日本民族学協会連合大会第11回紀事．

2. 鈴木　尚，1962：東京都芝白金．旧海軍墓地に埋葬された江戸末、明治初年の日本人頭骨．人類誌，70：105－120．

3. 鈴木　尚，1963：日本人の骨．岩波書店，東京．53－57．

4. 寺沢俊男，1975：東京都台東区下車坂町から出土した江戸時代人脛骨の形質人類学的研究．東京慈恵会医科大学雑誌，90（2）：231－238．

5. 内藤芳篤，1974：仁兵衛島出土の人骨．対馬：106－112．

6. Martin－Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie Bd. I. Gustar Fischer Verlag, Stuttgart.

7. 森本岩太郎，他，1976：江戸時代における日本人形質の漸進的変化―東京都一橋高校遺跡出土頭蓋を中心に―．人類誌，84（4）：317－318．

V　む す び

興善寺四郎丸遺跡の発掘調査は九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の事前調査として実施したものである。「松橋」―「八代」インター間においては昭和49年度から昭和53年までに19ヶ所の遺跡の発掘調査が行われている。それらの中ですでに「竹崎城」「五ツ穴横穴群」「立神ドトク遺跡」については調査の報告書が刊行されている。

昭和51年から発掘調査が開始された八代市地区の遺跡を北側から述べれば八代市岡町所在「境古墳・境遺跡」、同市岡町所在「平原野中遺跡」、同市岡町所在「清水古墳」、同市岡町所在「玉泉寺遺跡」がある。さらに南下すれば同市興善寺町があり３ヶ所の遺跡に分けられた。調査は南側の興善寺志水遺跡からはじめられ、北側の興善寺馬場遺跡がつづいて行われ、最後に本遺跡の発掘調査が開始されたものである。

興善寺地区の旧村名は八代郡竜峰村であり、昭和35年に八代市と合併をしている。合併をする前年に刊行された竜峰村史によれば、興善寺地区には布目瓦や古代の遺物が多く見られることから、熊本大学法文学部松本雅明教授を中心とした調査団によって発掘調査が実施されている。その結果、法起寺式の伽藍配置をもつ寺院が存在したことが明らかにされている。興善寺馬場遺跡は松本氏の想定される伽藍配置によれば、周囲の築地の部分にあたると思われた。また、興善寺志水遺跡では表面に土師器片が採集でき、寺院に係わる官舎等が存在しているのではないかと疑われた。事実、両遺跡の発掘調査を進めると築地や住居跡状遺構が検出されるに至った。

本遺跡は両遺跡よりもさらに北側にあたり、土器片やスラッグ等が地元の人によって採集されていたところである。現在の主要道路の国道３号は斜面を下った西側を通っているが、薩摩往還と呼ばれる旧道は本遺跡の中央を通っている。興善寺志水遺跡と興善寺馬場遺跡でも旧道と重なり、旧道にそって遺跡が広がる傾向がうかがわれ、両遺跡と同じく寺院に関係する遺構や遺物が出土する可能性がもたれた。また、近くにオツメ所と呼ばれるところがあり、中世の遺構が出土すると思われた。

発掘調査は道路公団ＳＴＡナンバー 154＋20～155 ＋20間を対象地とした。各所にトレンチを設けて調査を行った結果、主にＡ地区に遺構や遺物が認められた。出土状況や遺物については前章までに述べたとおりである。

以下、各時代ごとに簡単にまとめてみたい。

弥生時代

Ａ地区で出土した住居跡状遺構の上層から弥生式土器が出土している。土器は弥生時代中期前葉に位置づけられるものである。県内では弥生時代前期から中期前葉にかけての遺跡は非常

に少ない。弥生時代前期から中期前葉の土器を出土する主な遺物は次のとおりである。

鹿本郡植木町白石遺跡

菊池郡大津町牟田原遺跡

菊池郡大津町西矢護免遺跡

熊本市江津苗代津

熊本市　　加勢川川底遺跡

下益城郡城南町沈目立山遺跡

下益城郡城南町塚原上ノ原遺跡　などがあげられ、白川・緑川水系流域に認められている。

八代地方は弥生時代の遺跡が少なく、実態が不明瞭な地域である。近年、遺跡数が少しずつ増えだしているがいずれも弥生時代後期のものが多く、前期や中期の遺物は報告されていない。

中期の特徴的なカメ棺は今のところ宇土市境目遺跡を南限としている。以上のような状況の中で中期の土器が出土したことは大いに注目されよう。八代地区に中期土器が出土するという既成事実をつくるとともに、今後、弥生時代遺跡が増加するであろうことを示唆している。

古墳時代：

油谷山・竜峰山とつづく山麓一帯には数多くの古墳が所在しているが、不思議なことに興善寺地区では古墳は確認されていない。谷を越えた北側では清水古墳群や岡谷古墳群が所在しており、興善寺地区にも存在したものが何らかの理由によって消滅したと考えるべきであろう。

長年に亘る傾斜面の耕地化や果樹園の造成工事等によって消滅したものであろうか。また、この地方独特の崩れやすい地質のため地形の変化があり、壊されたのであろうか。

今回の調査ではA地区から、古墳の石材と見てよい板石が出土した。板石を組み合わせるための加工痕も認められ、石室の中の石障に用いられた石材の可能性が強い。近くに古墳が存在していたであろうことを裏づけている。装飾古墳として知られる門前第3号古墳がすぐ近くにある。石障に円文を彫り込んだ装飾文様を有している古墳である。距離的にも近く、同様の石障を持つなどの共通性があり、装飾古墳の可能性もあったもので非常に惜しまれる。

さて、古墳時代の土器としては、まず、(027～031) をとり上げることができよう。いずれも須恵器杯蓋の身である。特に (027) の立ち上がりは高く内傾をゆるさず、時期としては6世紀の前半の所産と見ることができよう。(028～031) はこれにつづくもので6世紀後半のものであろう。

杯蓋では(001・002) が天井部が高く (027) に伴うものとみたい。また (049) の高杯脚には二段のスカシが施され6世紀のものと考えられ、ほかの高杯は一部並行か、もしくはいくぶん遅れる時期のものであろう。

(019) はツマミとかえしのついた杯蓋であり、(020・023・024・025) などが同様の特徴を有

しており、7世紀の所産といえよう。(052・053) の盤や、台付長頸壺と思われる (057・058) なども同じく7世紀のものと考えられる。

奈良～平安時代：

(032～041) の高台付椀は8世紀～9世紀のものと考えられる。この中では (032・033) がより高い高台がつき古い様相を示しているといえよう。(060・061) もこの時期のものと見るることができる。A地区で検出した炉跡遺構から (060) が出土していることから、炉跡遺構はこの時期9世紀のものと判断しておきたい。(060) と同じく炉跡遺構から出土した土師器の椀 (079～082)、それと (077・078) の椀や (084) の高杯も同時期のものであろう。(083) は器高が低く、焼成にも違いがあり、燈明皿的様相がうかがえるもので時期的に新しくなるであろう。(085～099) はいずれも甑の把手であるが、分けることはむずかしい。古墳時代から奈良・平安時代のものまで含まっていよう。

このほかでは (100～108) の布目瓦がある。丸瓦の凹面には桶枠痕があり分割截面が残っている。(104) は焼成が非常によく須恵質である。平瓦では凸面に縄目・格子・平行叩きが施こされ、凹面に布目痕が多く残されている。報告できるのは以上のような漠然としたことだけであるが、一応、奈良時代～平安時代前期頃のものと述べておきたい。出土量が少なく、今回の調査地内に布目瓦を葺くような建物があったとは考えられない。

鎌倉～室町時代：

(109・110) はいずれも中国竜泉窯産の青磁であり鎌倉時代のものと思われる。(111～116) の火鉢・茶釜・滑石製石鍋・スリ鉢はいずれも鎌倉～室町時代のものと思われる。五輪塔や鞴口は室町時代後半か、もしくは江戸時代のものと思われる。

江戸時代：

ＳＴA154＋60中心杭周辺の調査で検出した13基の墓壙については、先に江戸時代中期～後期にかけてのものであろうと述べた。墓壙から出土した人骨についての詳しい所見も前章のとおりである。耕作地に不適である傾斜面に墓地をつくったものであろう。狭いスペースにつくられており、墓壙の数も13基で、さして多くはないことから家族墓と見ることができよう。(117～127) に報告した磁器はいずれも佐賀県の伊万里・武雄・嬉野・唐津窯で焼かれたものと思われ、主に江戸時代中期から後半のものであり、墓地にそなえられていたものかもしれない。

以上のように本遺跡から各時代の遺物が出土しているが、各時代の状況を素描してむすびとしたい。

生活跡に係わるものには住居跡状遺構と、８～９世紀のものと考えた炉跡遺構がある。住居跡状遺構の上層から出土した弥生式土器には煤が付着し煮たきにつかわれたものであり、弥生時代は小規模の住居があったであろう。

つづく古墳時代は、古墳が築造され、出土した６世紀～７世紀の土器は副葬されていたものであろう。生活の場は西側のもっと水田に近いところにあり、古墳だけが地形的に高いところにつくられていたものと思われる。

奈良時代から平安時代については、前記、生活跡的様相の強い炉跡遺構があることから、いくつかの住居が営まれていたものであろう。甑の把手はそれを裏づけるであろうし、寺院とともに周囲には多くの住居が広がっていたのであろう。布目瓦は当時の人々が何らかの理由で寺院から運んできたのであろう。

鎌倉～室町時代は遺物が少なく、耕作地であったと思われる。

江戸時代はほとんどが耕作地で、その中に墓地がつくられていたイメージが強い。Ｃトレンチの北隅でスラッグや磁器片が出土しているため、トレンチから西側には住居が営まれていたのであろう。現在の住居と重複する状況にある。

（江本）

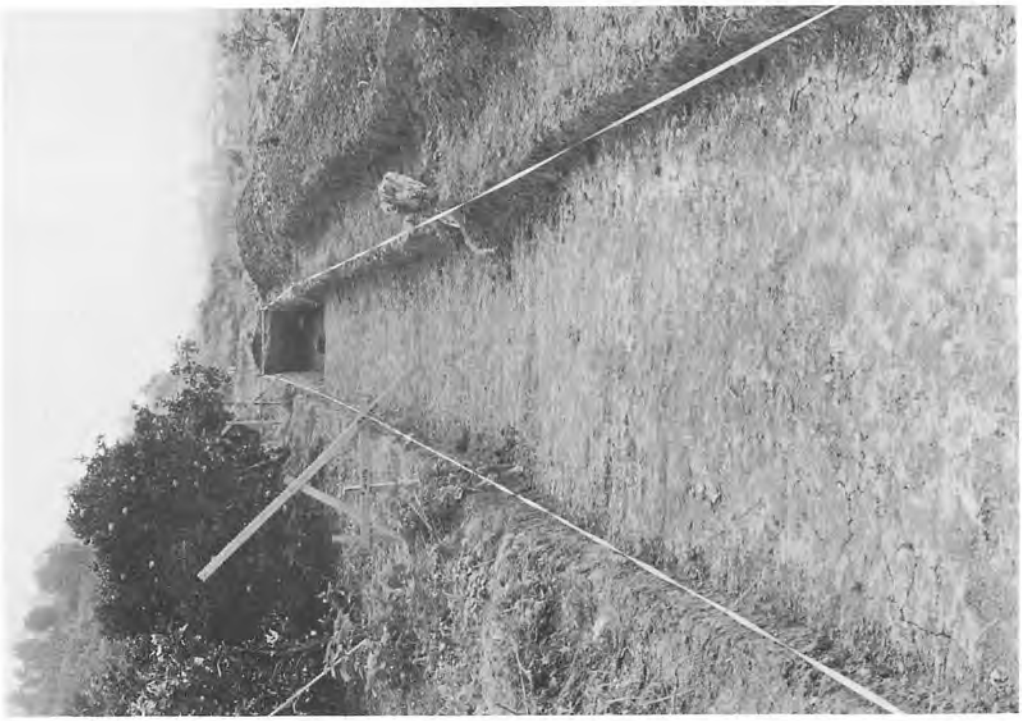
図　版

調査地遠景

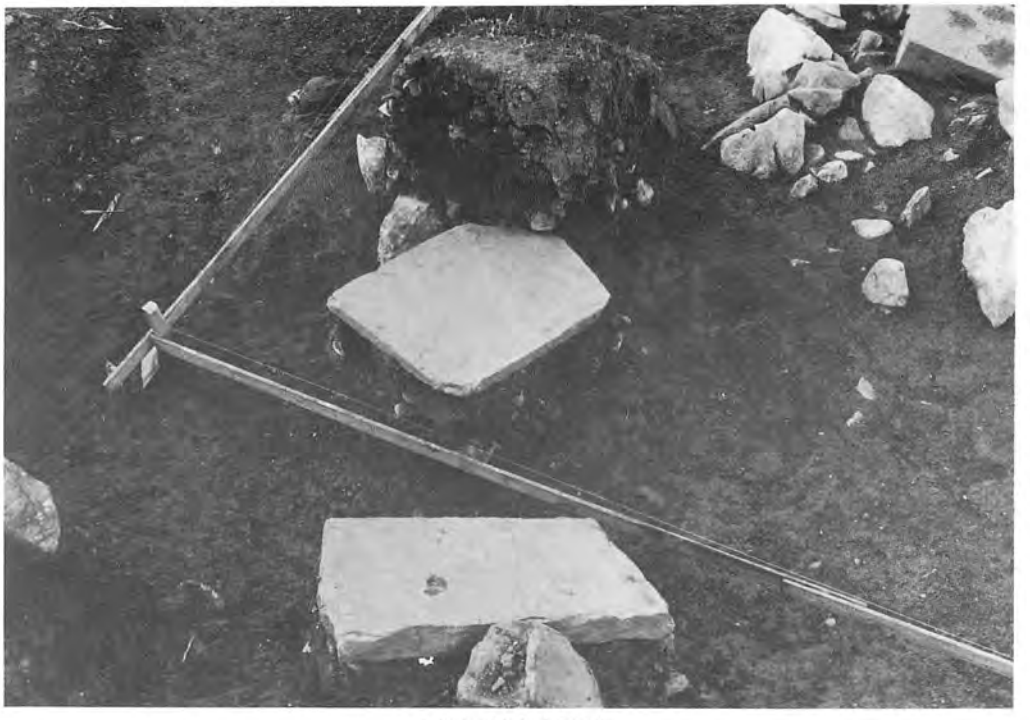
調査前の状況（北側から）

図版 2

A－5トレンチ東壁土層



A－5トレンチ調査



古墳石材出土状態

住居跡状遺構

図版 4

上、炉跡遺構

下、壁と土器
出土状況

露出を終えた墓石

墓石

図版 6

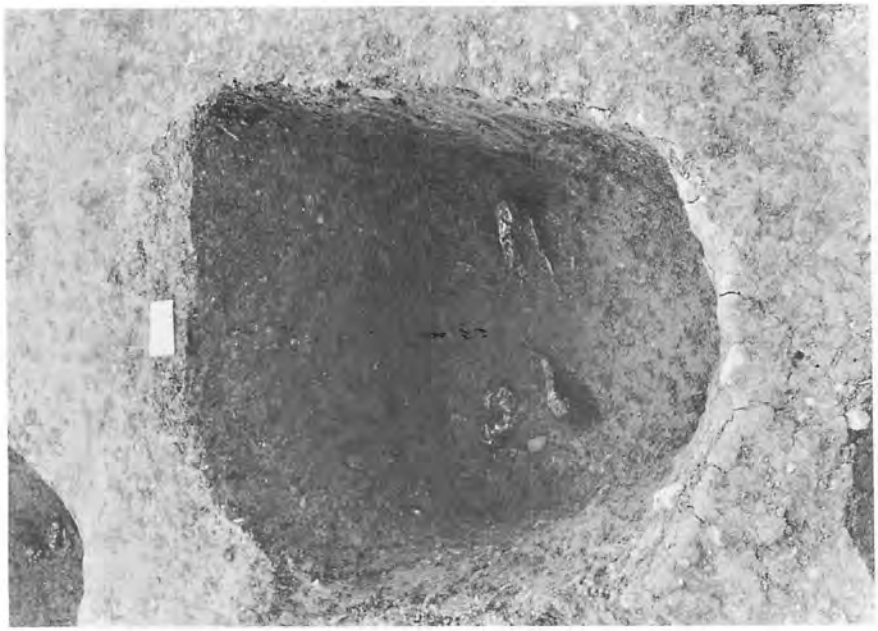
墓石

墓坑の検出

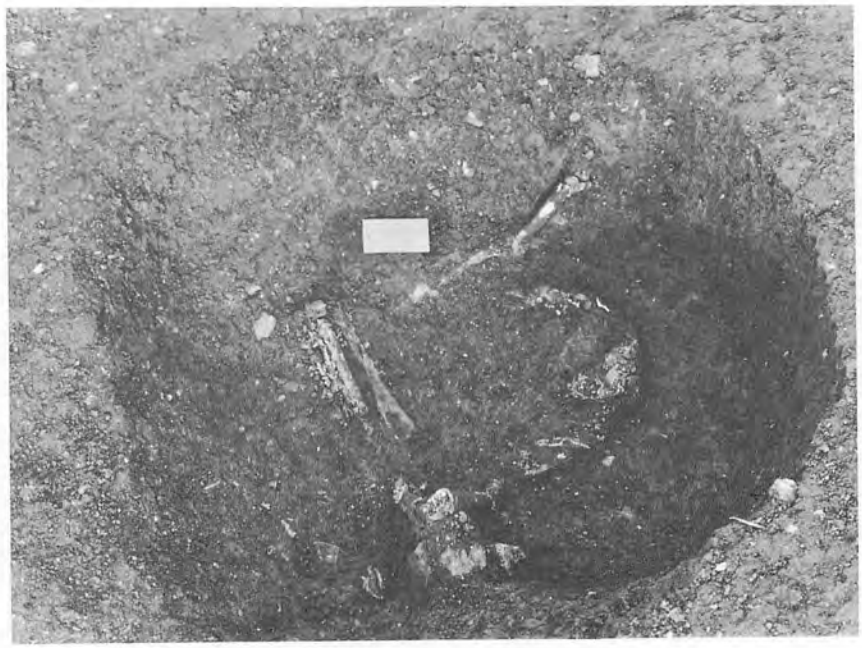
第１号墓坑

第２号墓坑

図版 8

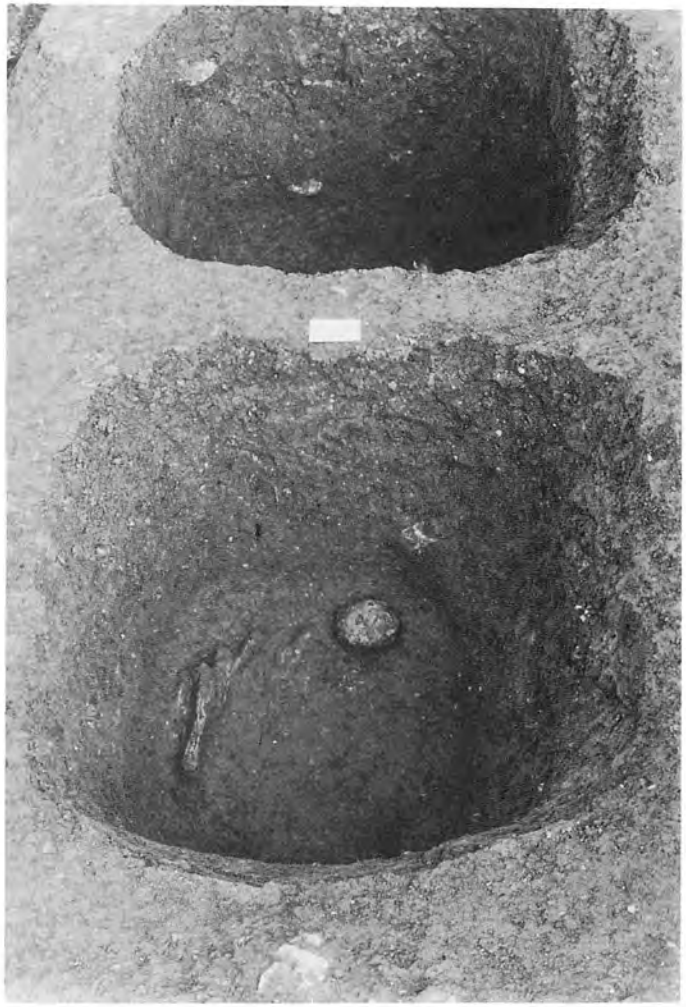


第 4 号墓坑



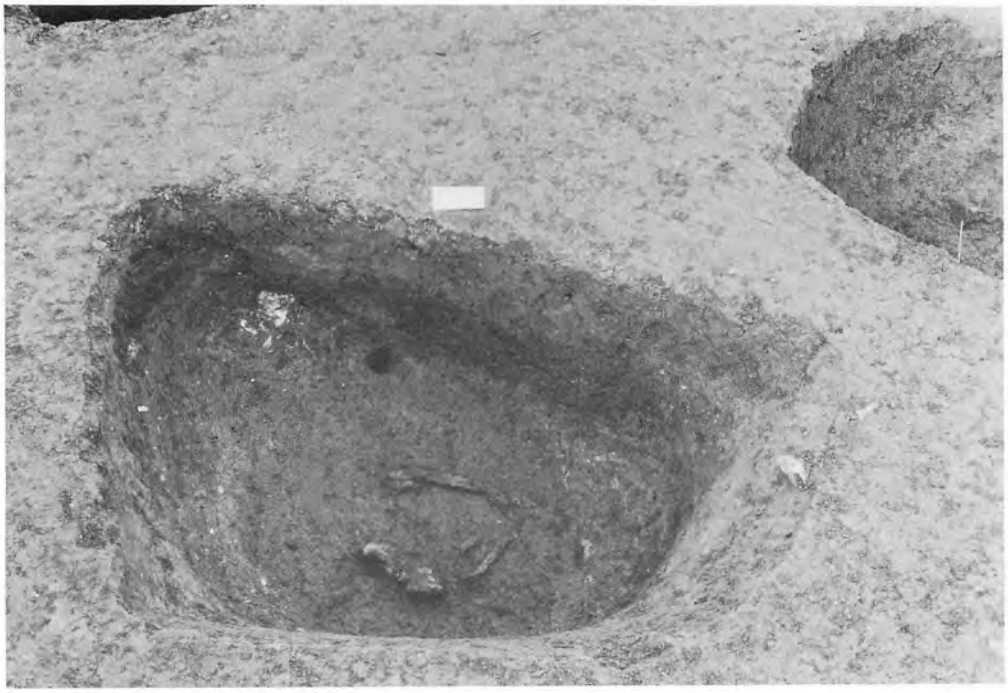
第 3 号墓坑

第 5 号墓壙



第 6 号墓壙

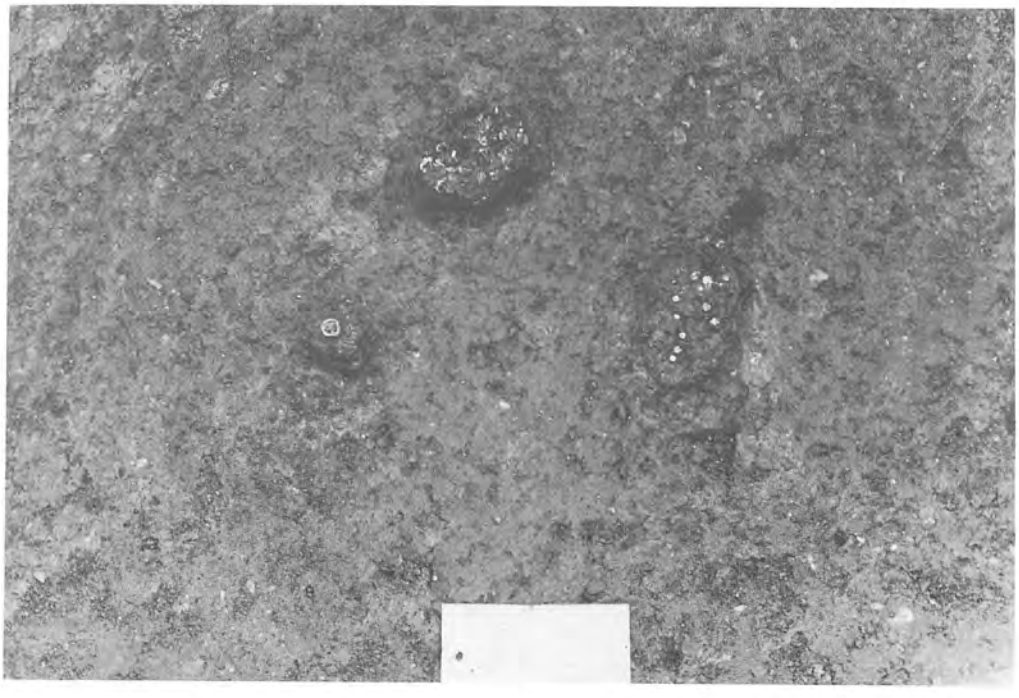
図版10



第 7 号墓坑

第 8 号遺構

第 9 号墓坑　第10号墓坑



第11号墓坑

図版12

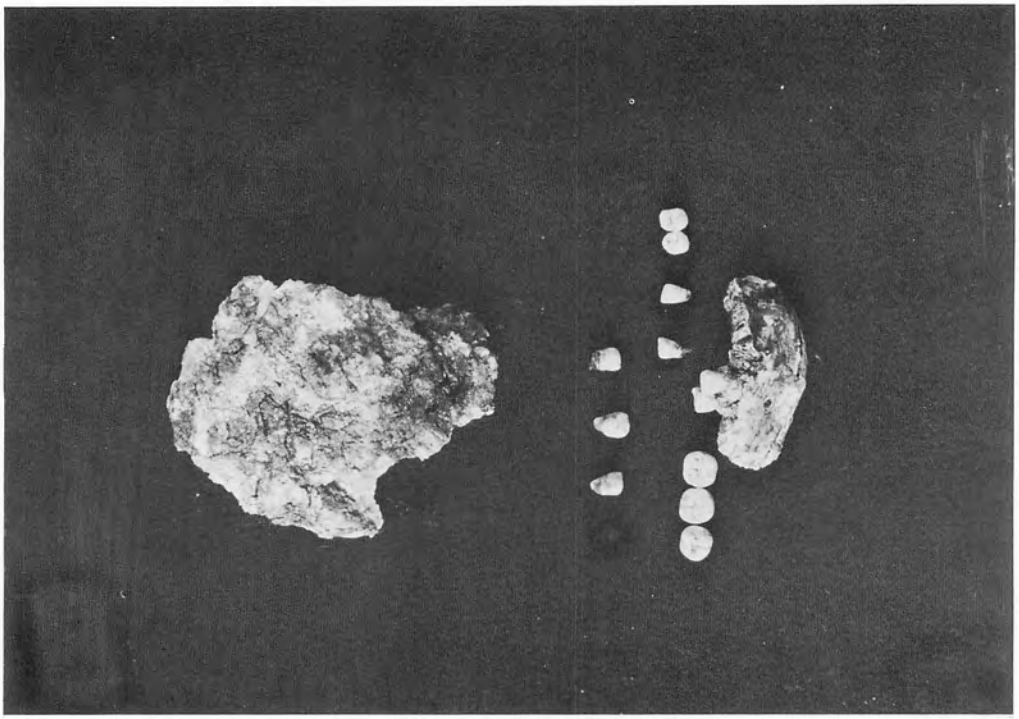
第12号墓坑

第13号墓坑

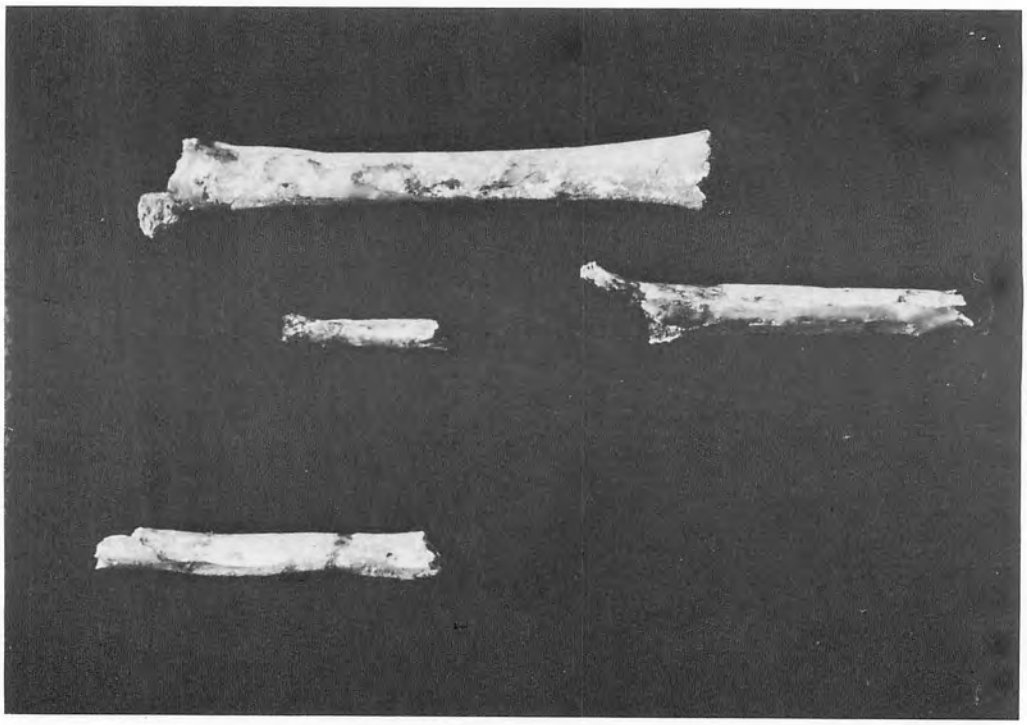
第13号人骨

第14号墓坑

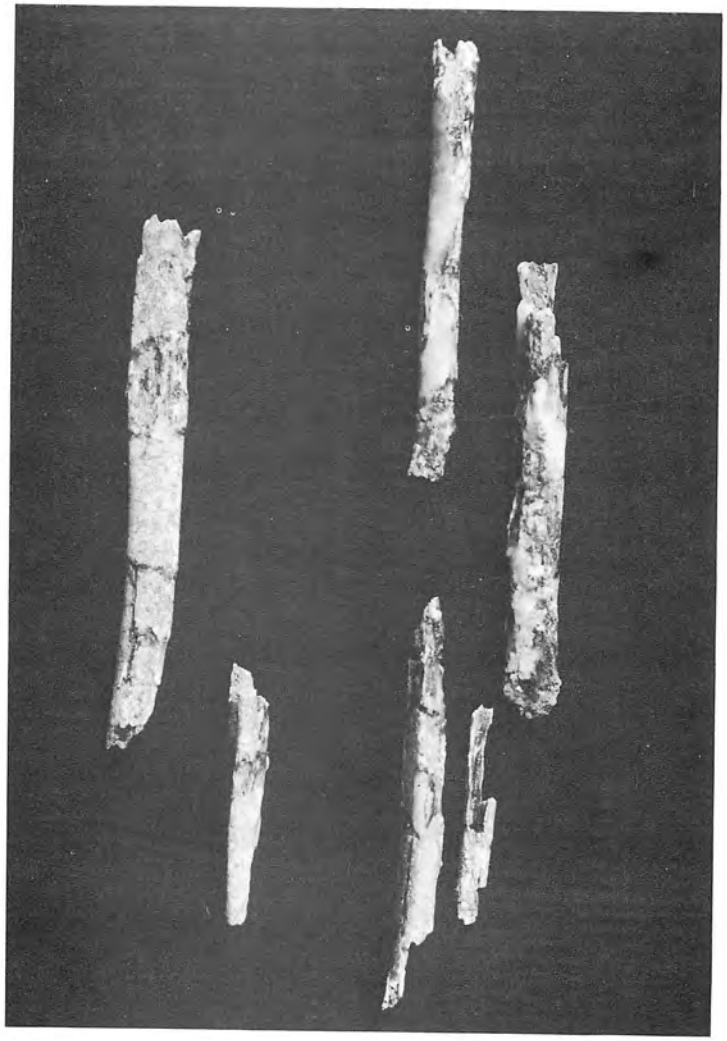
図版14



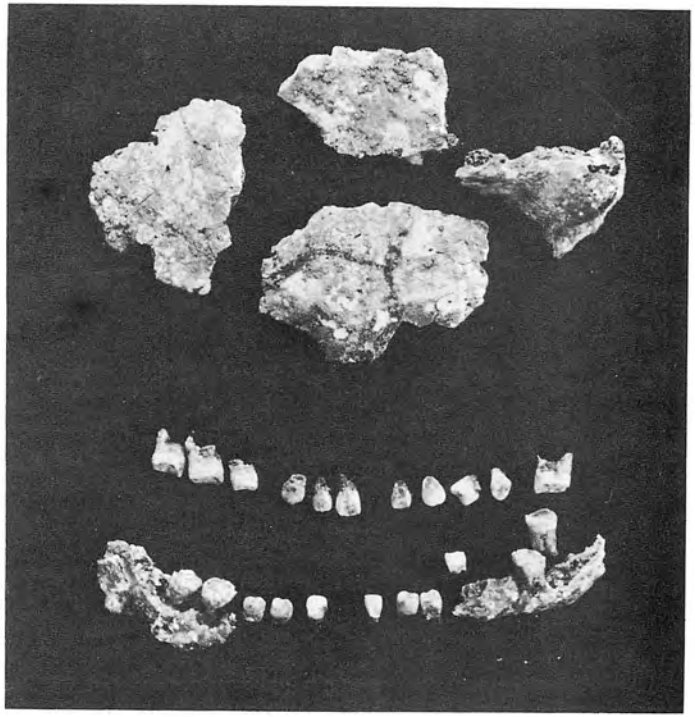
1号人骨（壮年・男性）



1号人骨、四肢骨（壮年・男性）

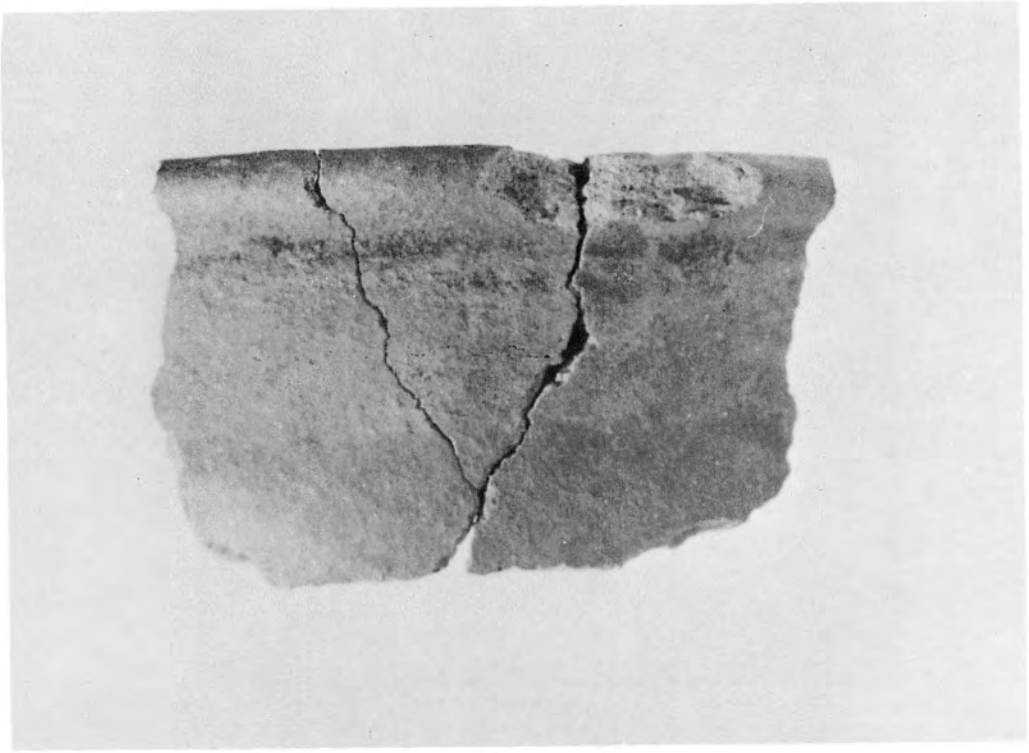


2号人骨、四肢骨（熟年・男性）

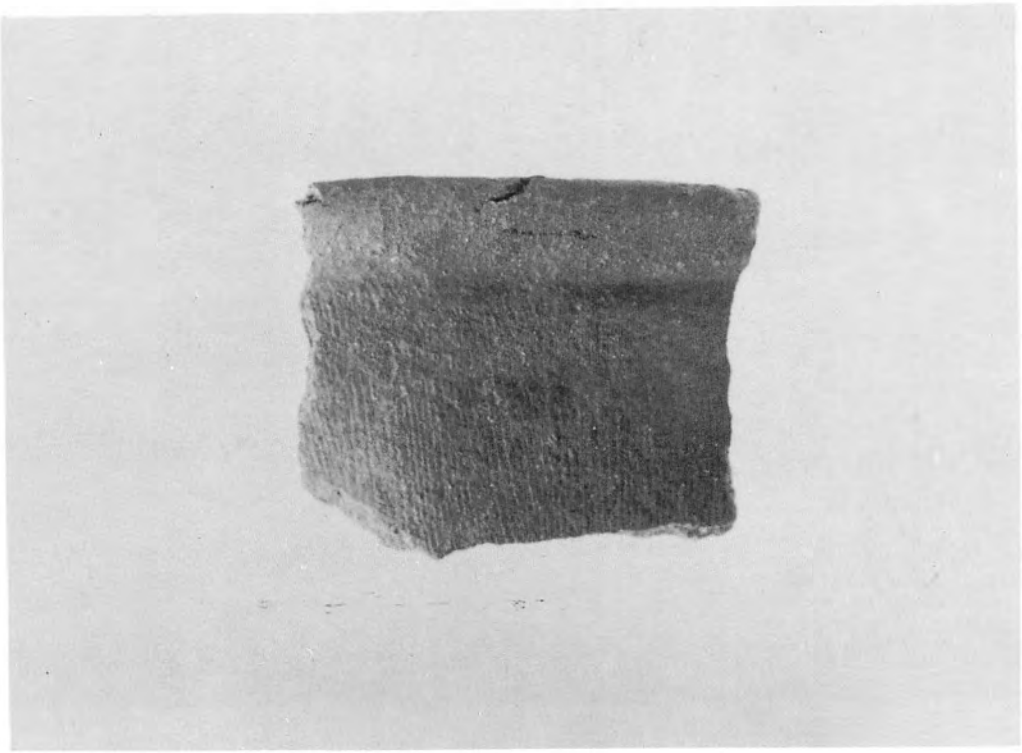


2号人骨（熟年・男性）

図版16



(1)

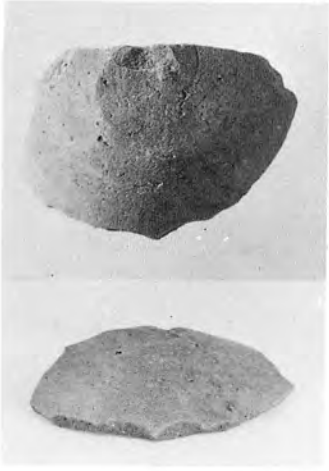


(2)

弥生式土器

001

003



008

009

011

012

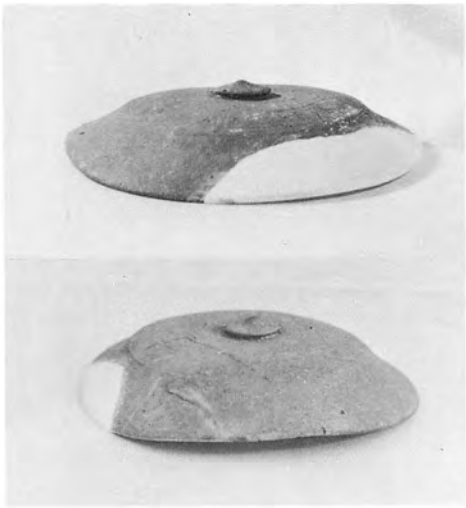
013

出土遺物（001～013）

図版18

015

015



019

019

017

020

018

021

018

021

出土遺物（015～021）

022

032

026

033

026

033

027

034

028

036

出土遺物（022～036）

図版20

039

047

048

042

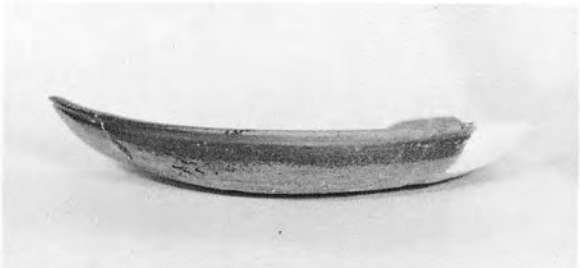
049

050

045

052

046

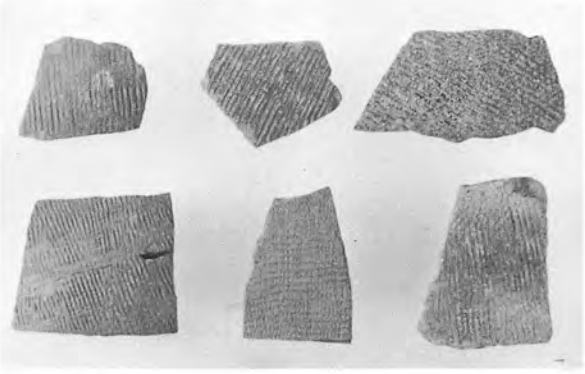


053

出土遺物（039～053）

054

058



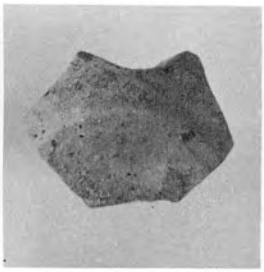
060

061

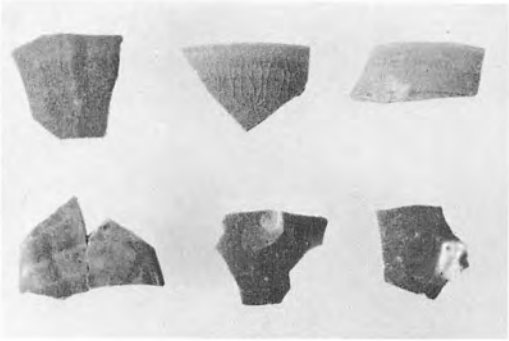
出土遺物（054～061）

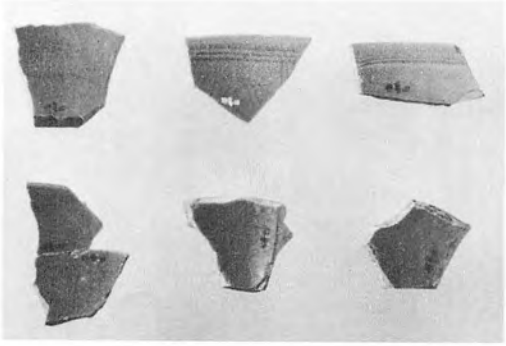
図版22

080

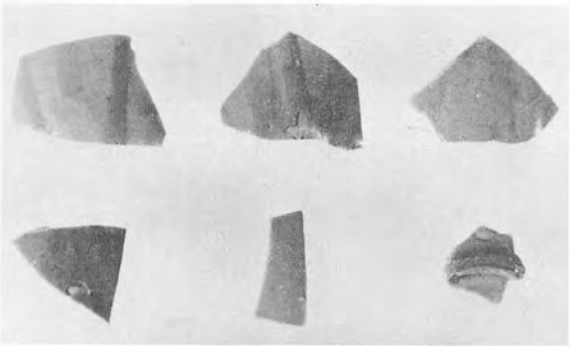


081

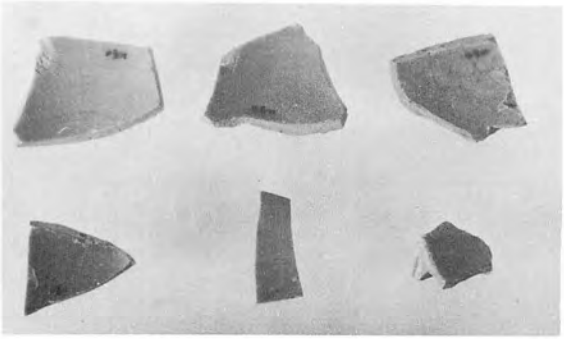




109



110



出土遺物（080～110）

111

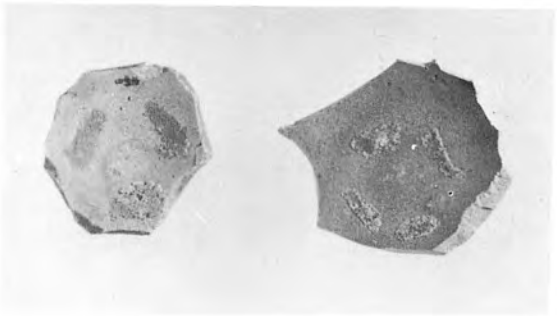
114

112

117

124

113



120

115

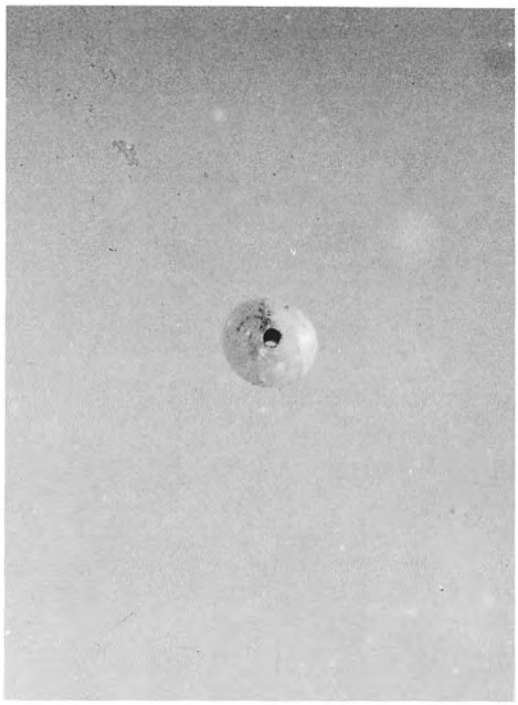
116

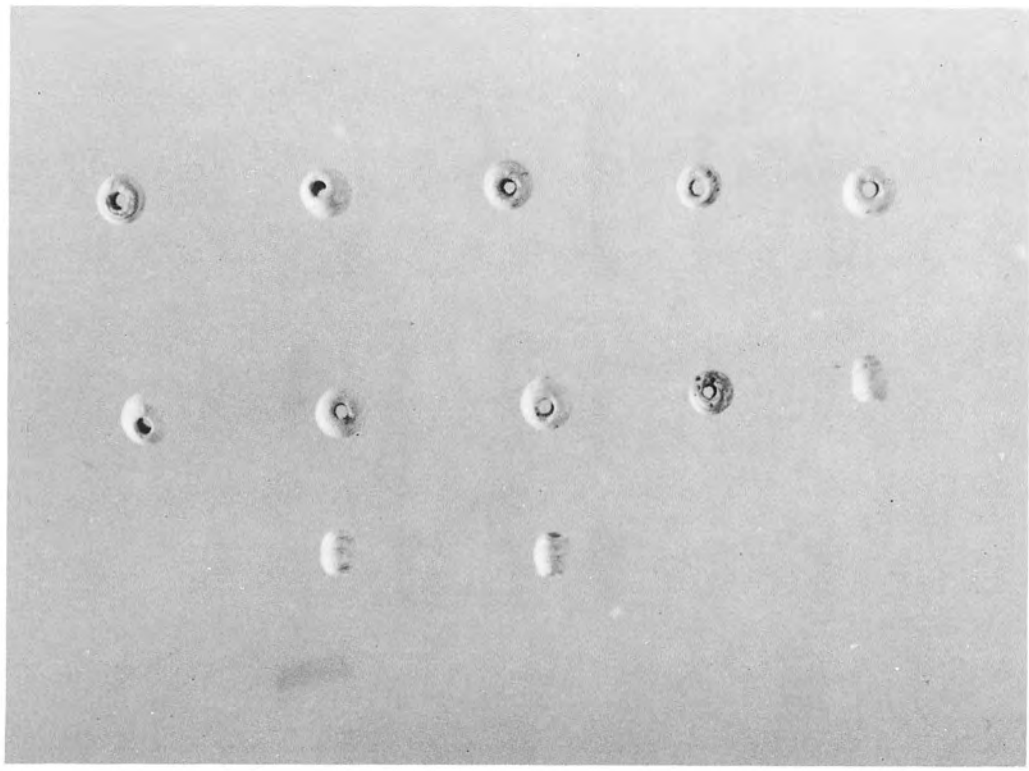
127

出土遺物（111～127）

図版24

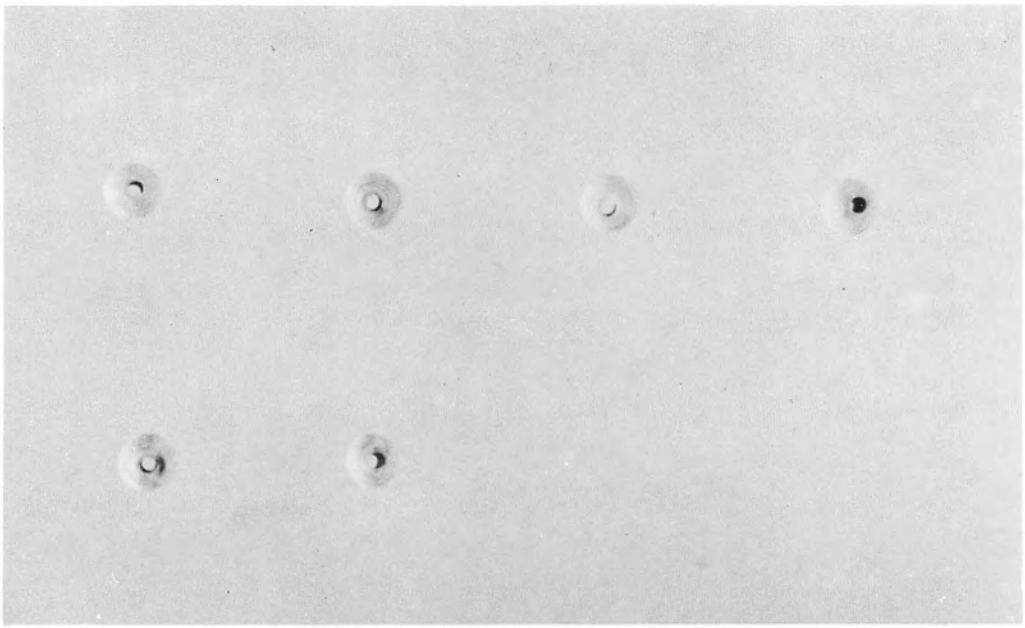
鞴口

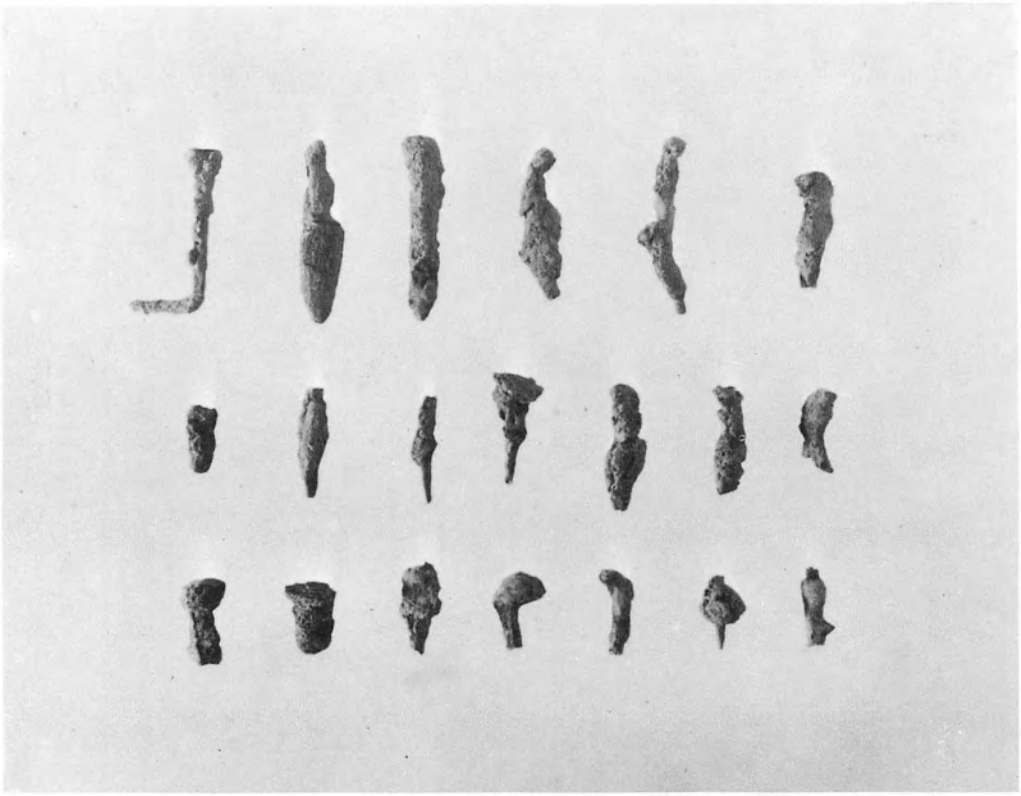




上、 表土層出土数珠玉　　下、第２号墓坑出土数珠玉

図版26





上、第3号墓坑出土数珠式 下、第3号墓坑出土鉄釘

興善寺志水遺跡

こうぜんじしみず

—八代市興善寺町所在遺跡の調査—

例　　言

1．本書は昭和51・52年度に日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査として実施した八代市興善寺町、興善寺遺跡の中で志水地区の発掘調査に関する報告書である。

2．発掘調査は熊本県教育委員会文化課が実施したもので調査及び本書の執筆は主に江本直があたったが、第Ⅲ章2―(ハ)、(3)、瓦については広瀬正照、第Ⅲ章2―(1)ハ、須恵器・第Ⅲ章4―(4)イ、(5)の須恵器については高谷和生が執筆を行った。

3．発掘調査にあたっては熊本大学松本雅明名誉教授、同大学文学部白木原和美教授、同大学同学部甲元真之助教授、田辺哲夫玉名高校長、三島格元福岡市立歴史資料館長ほか多数の方々の来訪を受け御教授、御指導をいただきました。また地質に関しては斉藤林次熊本県文化財審議員や熊本大学教養学部高橋俊正助教授と同大学理学部長谷義隆助手の御教授、御指導を受けました。深く謝意を表します。

4．調査地での実測は安達武敏、丸山武水、倉原謙治、中山清美、鶴島俊彦、江本が行った。出土遺物の実測は瓦については広瀬、須恵器については高谷・高野信子、これ以外は江本が行い、沢田宗順、古庄浩明氏の助力を得た。写真撮影とトレースは江本が行った。

5．出土遺物の整理は熊本県文化財収蔵庫で行い保管を行っている。

6．編集は江本が行った。　　(江本)

本 文 目 次

例　言…… 103

第Ⅰ章　調査の経過…… 107

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境…… 112

第Ⅲ章　調　査…… 113

1．トレンチの設定…… 113

2．A地区の調査…… 114

(1)第1号遺構…… 114

イ．土　層…… 116

ロ．遺物の出土状況…… 119

ハ．出土遺物…… 120

須恵器　青磁・白磁
土師器　五輪塔
瓦
土　馬　板　碑
子持勾玉・滑石製小玉

(2)第2号遺構…… 177

(3)小　結…… 178

3．柱穴群と出土遺物（第52図～56図）…… 184

4．B地区の調査…… 189

(1)土　層…… 189

(2)土　坑…… 190

(3)遺物の出土状況…… 190

(4)出土遺物…… 192

イ．須恵器…… 192

ロ．土師器・その他…… 197

(5)小　結…… 207

第Ⅳ章　む す び…… 216

表 目 次

表1　A地区蓋BⅠ類法量図…… 209

表2　A地区蓋BⅡ類法量図…… 209

表3　A地区杯A類法量図…… 209

表4　A地区杯C類法量図…… 209

表5　A地区杯B類法量図…… 211

表6　須恵器焼成表…… 214

表7　須恵器ロクロ回転方向一覧表(No 1)… 214

表8　須恵器ロクロ回転方向一覧表(No 2)… 214

表9　熊本県内における円面硯出土遺跡一覧表…… 216

挿 図 目 次

第1図　調査地区全図…… 109

第2図　A地区第1号遺構実測図…… 115

第3図　A地区第1号遺構・東西・南北トレンチ断面実測図…… 116

第4図　A地区第1号遺構遺物出土状況…… 117

第5図　A地区A－3トレンチ遺物出土状況 120

第6図　A地区出土遺物実測図・須恵器(001～031)…… 121

第7図　A地区出土遺物実測図・須恵器(032～062)…… 122

第8図　A地区出土遺物実測図・須恵器(063～093)…… 123

第9図　A地区出土遺物実測図・須恵器(094～120)…… 124

第10図　A地区出土遺物実測図・須恵器(121～141)…… 125

第11図　A地区出土遺物実測図・須恵器(142～161)…… 126

第12図　A地区出土遺物実測図・須恵器(162～182)…… 127

第13図　A地区出土遺物実測図・須恵器(183～204)…… 128

第14図　A地区出土遺物実測図・須恵器(205～226)…… 129

第15図　A地区出土遺物実測図・須恵器(227～247)…… 130

第16図　A地区出土遺物実測図・須恵器(248～267)…… 131

第17図　A地区出土遺物実測図・須恵器(268～294)…… 132
第18図　A地区出土遺物実測図・須恵器(295～310)…… 133
第19図　A地区出土遺物実測図・須恵器(311～320)…… 134
第20図　A地区出土遺物実測図・須恵器(322)・円面硯…… 135
第21図　A地区出土遺物実測図・須恵器(323)・円面硯…… 135
第22図　A地区出土遺物実測図・須恵器(324～331)…… 136
第23図　A地区出土遺物実測図・須恵器(332～336)…… 137
第24図　A地区出土遺物実測図・須恵器(337～342)…… 138
第25図　A地区出土遺物実測図・土師器(001～007)…… 146
第26図　A地区出土遺物実測図・土師器(008～021)…… 147
第27図　A地区出土遺物実測図・土師器(022～034)…… 148
第28図　A地区出土遺物実測図・土師器(035～048)…… 149
第29図　A地区出土遺物実測図・土師器(049～051)…… 150
第30図　A地区出土遺物実測図・土師器(052～056)…… 151
第31図　A地区出土遺物実測図・土師器(057～070)…… 152
第32図　A地区出土遺物実測図・土師器(071～086)…… 153
第33図　A地区出土遺物実測図・土師器(087～098)…… 154
第34図　A地区出土遺物実測図・土師器(099～115)…… 155
第35図　A地区出土遺物実測図・土師器(116～135)…… 156
第36図　A地区出土遺物実測図・土師器(136～150)…… 157
第37図　A地区出土遺物実測図・紡錘車・土錐(151～158)…… 158
第38図　A地区出土遺物実測図・瓦(1～3)…… 162
第39図　A地区出土遺物実測図・瓦(4～7)…… 163
第40図　A地区出土遺物実測図・瓦(8～9)…… 164
第41図　A地区出土遺物実測図・瓦(10～12)…… 165
第42図　A地区出土遺物実測図・瓦(13～15)…… 166
第43図　目板瓦実測図(16～19)…… 167
第44図　A地区出土遺物実測図・土馬(1)…… 172
第45図　A地区出土遺物実測図・土馬(2)…… 172
第46図　A地区出土遺物実測図・子持勾玉・滑石製小玉…… 173
第47図　A地区出土遺物実測図・青磁・白磁(1～10)…… 174
第48図　A地区出土遺物実測図・拓影・五輪塔(1)…… 175
第49図　A地区出土遺物実測図・拓影・五輪塔(2)…… 176
第50図　A地区鎮守堂板碑拓影…… 177
第51図　A地区第2号遺構実測図…… 178
第52図　A地区柱穴群全図…… 181
第53図　A地区第1号掘立柱建物実測図…… 185
第54図　A地区第2号掘立柱建物実測図…… 185
第55図　A地区遺物出土状況実測図(№67・甕)…… 185
第56図　A地区出土遺物実測図・磁器・甕(1～4)…… 186
第57図　B地区B－1～5トレンチ土層実測図…… 187
第58図　B地区B－2トレンチ東側断面実測図…… 190
第59図　B地区B－1トレンチ南側拡張部遺物出土状況実測図…… 191
第60図　B地区土坑実測図…… 191
第61図　B地区B－2トレンチ遺物出土状況実測図…… 191
第62図　B地区B－2トレンチ東側拡張部遺物出土状況実測図…… 191
第63図　B地区出土遺物実測図・須恵器(343～366)…… 193
第64図　B地区出土遺物実測図・須恵器(367～384)…… 194
第65図　B地区出土遺物実測図・須恵器(385～393)…… 195
第66図　B地区出土遺物須恵器ヘラ記号…… 213
第67図　B地区出土遺物実測図・土師器(165～170)…… 198
第68図　B地区出土遺物実測図・土師器(171～180)…… 199
第69図　B地区出土遺物実測図・土師器(181～188)…… 200
第70図　B地区出土遺物実測図・土師器(189～193)…… 201
第71図　B地区出土遺物実測図・土師器(194～201)…… 202
第72図　B地区出土遺物実測図・土師器(202～216)…… 203
第73図　B地区出土遺物実測図・土師器(217～231)…… 204
第74図　B地区出土遺物実測図・土師器・紡錘車・砥石(232～239)…… 205
第75図　B地区出土遺物実測図・土師器(240～242)…… 206

図版目次

図版1　A地区調査風景…… 249
図版2　A地区第1号遺構全景・南北トレンチ断面…… 250
図版3　A地区第1号遺構南北トレンチ断面・遺構出土状況…… 251
図版4　A地区第1号遺構・東西トレンチ断面・凹地…… 252

図版５　Ａ地区第２号遺構・板碑・五輪塔・Ａ―３トレンチ遺物出土状況…… 253
図版６　Ａ地区遺物出土状況…… 254
図版７　Ａ地区柱穴・Ｂ地区Ｂ―１・２トレンチ調査状況…… 255
図版８　Ｂ地区Ｂ―１・２トレンチ調査状況…… 256
図版９　Ｂ地区遺物出土状況…… 257
図版10　Ａ地区出土遺物・須恵器…… 258
図版11　Ａ地区出土遺物・須恵器…… 259
図版12　Ａ地区出土遺物・須恵器…… 260
図版13　Ｂ地区出土遺物・須恵器…… 261
図版14　Ａ地区出土遺物・瓦…… 262
図版15　Ａ地区出土遺物・瓦…… 263
図版16　Ａ地区出土遺物・瓦…… 264
図版17　Ａ地区出土遺物・・瓦…… 265
図版18　Ａ地区出土遺物・土師器…… 266
図版19　Ａ地区出土遺物・土師器・土馬・子|持勾玉・青磁・白磁…… 267
図版20　Ｂ地区出土遺物・土師器…… 268
図版21　Ｂ地区出土遺物・土師器…… 269

第Ⅰ章　調査の経過

昭和51年11月11日、発掘調査予定地に行き現地の踏査を行う。同日、近くの明言院を尋ね展示してある興善寺跡出土の布目瓦や須恵器を見学する。このあと、八代市役所・竜峰支所や興善寺地区の区長宅を尋ねて、11月中旬から発掘調査を行う予定であることを伝え、調査のご協力をお願いした。帰庁後、現地踏査をもとにして発掘調査の計画を行った。

11月18日　現地に調査事務所のプレハブを建て、翌19日から発掘調査を開始することにした。八代市教育委員会に行き、発掘調査を開始することを伝えご協力を願った。

11月22日　調査地をＡ・Ｂ・Ｃ地区に分け、Ａ・Ｃ両地区は建物や立木がすべて撤去されてないためＢ地区から作業を行った。雑草・雑木の伐採・焼却や不用物の撤収作業からはじめる。

11月24日　Ｂ地区の清掃作業を終えて、Ａ地区についても雑草・雑木の伐採・焼却と不用物の撤収作業を行う。同日、八代市教育委員会社会教育課久保実・中田好則両氏が来訪さる。

11月25日　Ａ地区はＡ－Ⅰ、Ａ－Ⅱ地区とに分けＡ－Ⅰ地区の一部は表土剝ぎ作業をはじめた。

11月29日～12月１日　Ａ－Ⅰ地区の表土剝ぎ作業を終えてＡ－Ⅱ地区に移る。

12月２・３日　雨のため作業を中止する。図面や日誌の整理や、表土剝ぎ作業中に出土した遺物の水洗い作業などを行う。

12月６日　排土作業に使うブルドーザーを般入する。７日からは機械力がはいったためＢ地区の表土剝ぎ作業に移り、石垣や木の根の除去を行い作業を進めた。

12月９日～10日　Ｂ地区の表土剝ぎ作業を行った結果は土師器の細片が数点出土したにとどまり顕著な遺構・遺物は認められなかった。表土下の状態が不明であるため、Ｂ－１、Ｂ－２トレンチを設定した。

12月13日～17日　Ｂ－１、Ｂ－２トレンチを調査する。Ｂ－１トレンチの地表下約１ｍのところから須恵器が出土する。Ｂ－２トレンチでも須恵器と土師器が出土することを確認し、トレンチを北側へ20ｍ延長する。

12月20日～24日　Ｂ－１・Ｂ－２トレンチをひき続き調査した。両トレンチに遺物が出土することから、Ｂ地区はさらにトレンチをふやして調査を行う必要があることを確認する。Ａ地区についても遺構・遺物の有無を確認するためＡ－１、Ａ－２トレンチを設定し調査をはじめた。

昭和51年12月27日～昭和52年１月８日は年末年始のため現場作業を休む。

１月10日～14日　Ａ－１・Ａ－２トレンチの調査を行った結果、Ａ－１トレンチからは多量の須恵器や土師器が出土し、Ａ－２トレンチからも青磁片が出土した。Ｂ地区と同じくＡ地区についてもトレンチをふやして調査を行う必要があることを確認する。Ｃ地区にもＣ－１・Ｃ－２トレンチを設定し調査を行った。

１月17日～21日　Ａ地区とＣ地区のトレンチの調査を行った。Ａ－１トレンチは黒色を呈す

る遺物の包含層をもち、須恵器・土師器・青磁などの出土があり、住居跡などの遺構に結びつく可能性があるため東側にトレンチを拡張し調査を行う。このようにA地区では両トレンチから遺物が出土したことから、遺物の面的な広がりを調べるため東側にあたる1652番地にA－3トレンチを設定する。なお、C地区のC－1・C－2トレンチからは顕著な遺構・遺物は認められず調査の対象地から除外してよいと判断した。

1月24日～28日　A－3トレンチからも遺物が出土し、1652番地までは確実に広がっていることがわかり、さらに東側にあたる1653番地にA－4トレンチを設定する。A－1トレンチの西側の1646・1647番地にはA－2トレンチと直角にA－5トレンチを設定する。A－5トレンチの北側の1645番地にもA－6・A－7トレンチを設定し面的な広がりを調査する。

1月30日～2月4日　A－5トレンチでは柱穴遺構を確認する。A－6・A－7トレンチからは遺物が出土せず調査の対象地から除外した。以上のように、A地区は調査が必要である範囲をほぼつかむことができた。つづいてB地区の遺物の出土する範囲を確認するためB－3～B－5トレンチを設定し調査を行った。このB－3～B－5トレンチからは遺物の出土はなく、B地区の調査を行う必要のある範囲は、B－1・B－2トレンチ周辺にせばめられた。

2月14日～18日　A地区、A－1トレンチ東側1648・1651・1652番地の表土剝ぎ作業と遺構の検出。

2月21日～25日　鎮守堂東側1649・1650番地の表土剝ぎ作業と遺構の検出。

2月28日～3月4日　A－5トレンチ西側1646番地の表土剝ぎ作業と遺構の検出。

3月7日～11日　A－5トレンチ西側表土剝ぎ作業と遺構の検出を行う。8日、三島格、東光彦、富田紘一氏らの来訪があり、9日には花岡興輝・高橋章氏の来訪がある。つづいて10日に下條信行・後藤直氏、11日には松本雅明氏の来訪があった。

3月14日～18日　A地区は遺構の検出作業。B地区は各トレンチの断面清掃作業のあと土層の写真撮影と実測を行う。

3月21日～25日　A－3トレンチの東側を拡張して調査を行う。24日熊本大学高橋俊正助教授の来訪がありB地区を中心に土層の状態について観察を願った。

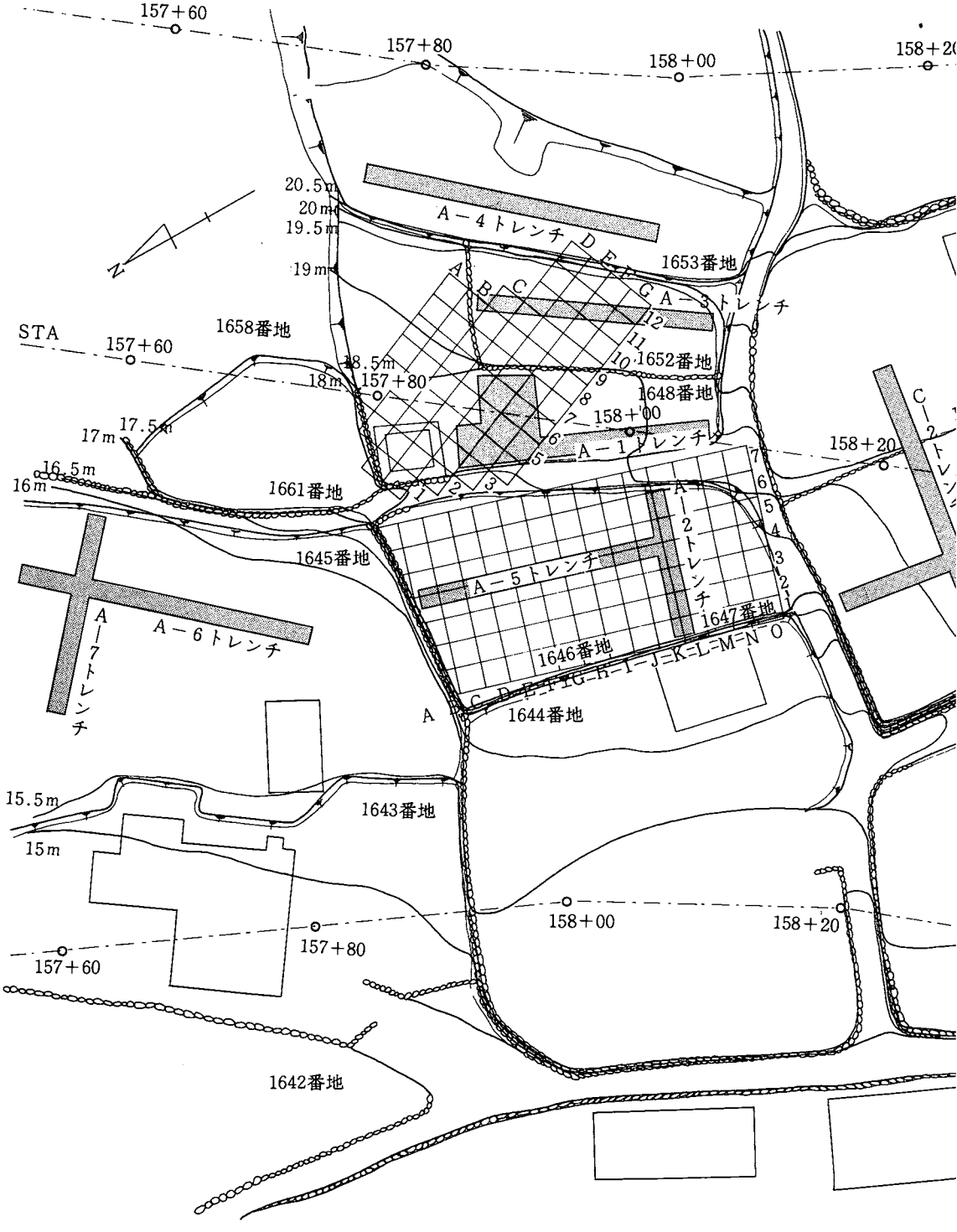
3月28日～31日　A－3トレンチ拡張部の調査を行う。29日熊本大学理学部長谷義隆助手の来訪があり、31日には熊本県文化財審議員斎藤林次氏の来訪があり地質について御教授していただいた。

4月4日～8日　鎮守堂が移転したため、堂下を掘りはじめる。6日、堂下の調査で鬼面文軒丸瓦と鬼瓦各1点が出土した。

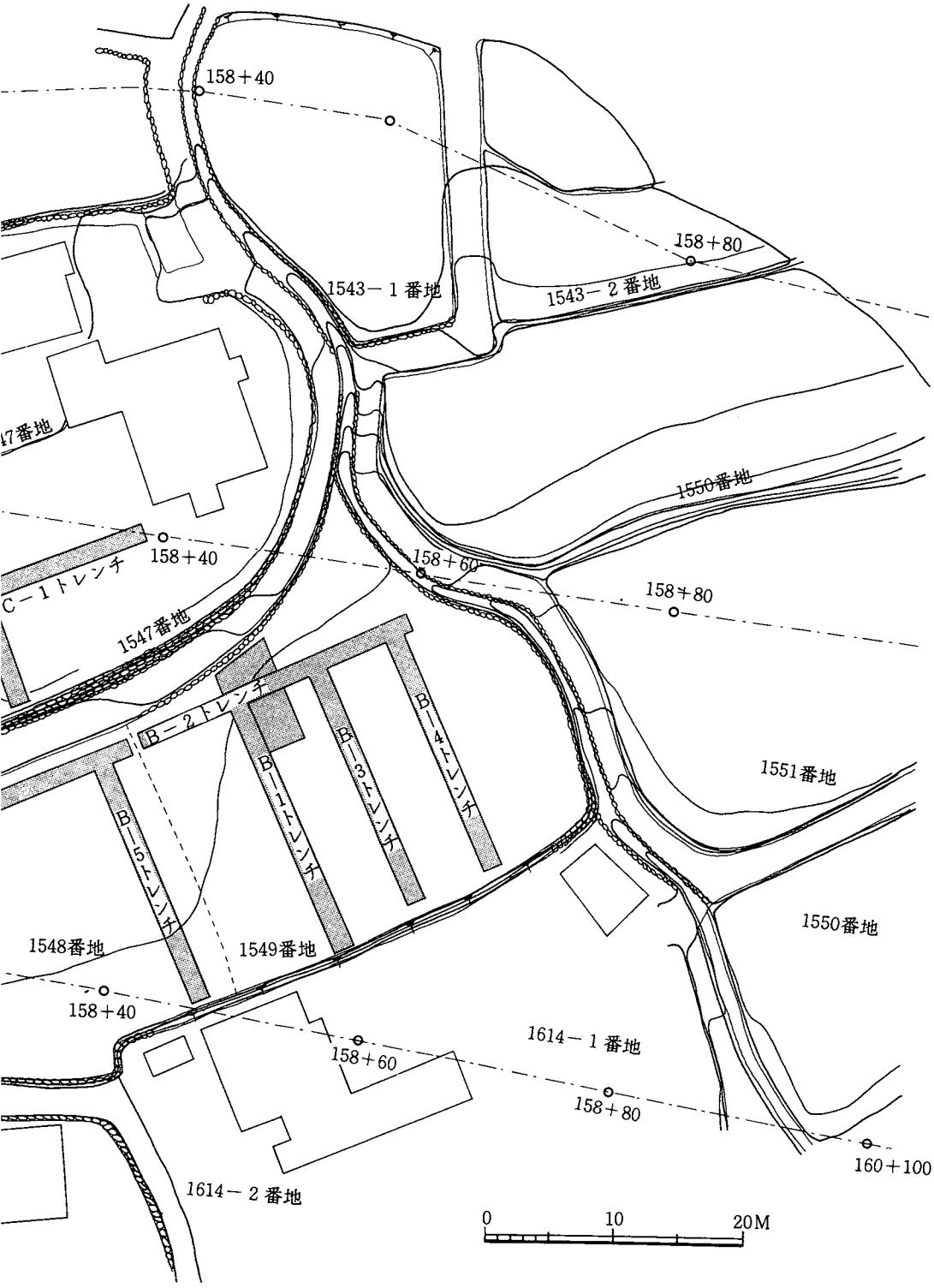
4月11日～15日　住居跡状遺構のプランの一部を検出し、第1号～第3号遺構と仮称する。

4月18日～22日　鎮守堂下の掘り下げと第1号遺構の掘り下げを行う。20日、八代市奥野広隆、名和康長氏の来訪がある。滑石製の子持勾玉が一点出土する。

4月25日～29日　第1号遺構を十字に区切り南西部の掘り込み作業を行う。


157＋60
157＋80
158＋00
158＋20
20.5m
20m
19.5m
19m
A－4トレンチ
D E F G
A－3トレンチ
1653番地
A B C
12 11 10 9 8 7 6 5
1652番地
1648番地
STA
157＋60
1658番地
18.5m
18m
157＋80
158＋00
17.5m
17m
A－1トレンチ
158＋20
16.5m
16m
1661番地
1 2 3
A－2トレンチ
1645番地
A－5トレンチ
7 6 5 4 3 2 1
1647番地
A－6トレンチ
A－7トレンチ
1646番地
C D E F G H I J K L M N O
A
C
1644番地
15.5m
15m
1643番地
158＋00
158＋20
157＋80
157＋60
1642番地

第１図　調査地区全図


158＋40
158＋80
1543－1番地
1543－2番地
47番地
1550番地
158＋40
158＋60
158＋80
C－1トレンチ
1547番地
B－2トレンチ
B－4トレンチ
B－3トレンチ
B－1トレンチ
B－5トレンチ
1551番地
1550番地
1548番地
1549番地
158＋40
158＋60
1614－1番地
158＋80
160＋100
1614－2番地
0
10
20M

5月9日～13日　第1号遺構南西部の掘り込み作業をひきつづいて行う。9日には道路公団・清水建設とパイロットロード建設について打合せが行なわれた。11日、第1号遺構の北西部の掘り込みで土馬が一点出土した。また、獣骨（イノシシ）も検出された。

5月16日～20日　第1号遺構北東部の掘り込みとA地区の 100分の1による平板測量を行う。後半には東西・南北トレンチ壁面の清掃を行い20分の1による実測を行う。

5月23日～28日　第1号遺構北東部の掘り込み。床面清掃・柱穴の検出などを行う。28日には文化課文化財調査係の現地検討会があった。

5月31日～6月4日　第1号遺構北東部コーナーの検出、溝状遺構の掘り込みを行う。

6月6日～11日　A地区、第1号遺構南北トレンチ東壁の清掃作業と20分の1による実測を行う。つづいて東西トレンチの南壁の清掃、実測も終了する。B地区も各トレンチの土層断面の実測を行う。

6月13日～17日　A地区、第1号遺構北西部コーナーの検出と掘り込みを行う。B地区はB－2トレンチの遺物の検出を行ったあと出土状況の写真撮影と実測を終了する。

6月20日～24日　第1号遺構の土層断面の観察のため残しておいた断面の除去作業をはじめる。B地区はB－2トレンチの下層の遺物を検出しはじめた。

6月27日～7月1日　A地区は第1号遺構西断面の除去作業を行う。B地区はB－2トレンチ下層の掘り込みで予想以上の多量の遺物が出土したため東側へトレンチを拡張して調査を行う。

7月4日～8日　A地区はA－2・A－5トレンチで検出した柱穴群の清掃と新たな柱穴の検出作業を行う。B地区はB－2トレンチを西側にも拡張して遺物の検出を行う。

7月11日～16日　A地区は柱穴群の検出作業を続ける。B地区はB－1トレンチ南側拡張部とB－2トレンチ東側拡張部分の遺物検出を行う。

7月18日～23日　A地区は第1号遺構の清掃作業と写真撮影を終える。B地区はB－2トレンチ東側拡張部の遺物検出を行い、B－1トレンチ南側拡張部分の遺物取り上げを行う。

7月25日～29日　B－2トレンチ東側拡張部分の遺物検出作業を終了する。A地区の第1号遺構の実測をはじめる。

8月1日～9日　A地区、第1号遺構の遺物出土状況の実測と写真撮影を終了し遺物を取り上げる。

8月10日～12日　A地区、柱穴群と第1号遺構の 100分の1による平板測量を終える。

8月17日～23日　A地区、柱穴群の10分の1による実測を終え遺物の取り上げを行う。

8月24日～31日　最後の調査としてB－1トレンチ南側拡張部の遺物出土状況の実測と遺物の取り上げを終了する。

このあと出土遺物は熊本県文化財収蔵庫で整理をはじめた。報告書の作成は昭和54年11月からとりかかる。　（江　本）

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

興善寺志水遺跡は行政区　熊本県八代市興善寺町字志水に位置する。日本道路公団の九州縦貫自動車道建設計画に基づき、熊本県教育委員会文化課が事前に埋蔵文化財の調査として現地を踏査した際に土器片が発見されている。発見された土器は、須恵器および土師器片で奈良時代～平安時代のものと判断された。興善寺地区はかって熊本大学法文学部松本雅明教授らを中心とした調査によって興善寺廃寺が所在していたことが明らかにされ、廃寺の伽藍配置の復原もなされていた。その復原によると志水遺跡は南側の築地のすぐ南に位置することになり、踏査によって発見[註1]された土器片は、廃寺の僧房などに係る遺構が存在するのではないかと推察されたため、発掘調査が行なわれることになったものである。

興善寺地区は広い面積を有するため、三カ所に分けて発掘調査が実施されることになったもので、北側から興善寺四郎丸遺跡、つづいて興善寺馬場遺跡、それに興善寺志水遺跡である。興善寺四郎丸遺跡については先に本書で報告したとおりであり、興善寺馬場遺跡については熊本県文化財調査報告書第45集「興善寺Ⅰ」として報告を行っている。

海抜 517.2m をはかる竜峰山がせまり、本遺跡はこの西山麓上に位置し登山口にあたる。竜峰山の山頂は城跡と伝えられるが、八代平野を広く眺望できることから砦や烽台が設けられていたのであろうか。山頂への途中には興善寺城（関城）がある。字名を「城の平」といい「陣の平」「越中ケ城」という名も残っている。谷を挟み「前の城」と「後の城」の二つの城があり、それぞれに平場や曲輪が認められ、掘り切りの痕跡が残されている。薩摩往還と呼称される旧道は竜峰山の山裾を通り、今回の調査地の東側を北走している。この旧道の横に鎮守堂[註2]があり付近は「オチッさん」、「タッチョ」と呼ばれている。この鎮守堂には正平拾？五年の年号が刻まれた板碑が祀られている。時の征西将軍懐良親王が菊池から八代へ入御の時、当寺に休息され御腰を掛けられた石と伝えられている。鎮守堂の東側を「タッチョ」と呼んでいるのは「塔頭」の意味であろうか。堂前には五輪塔[註3]の水輪が一個置かれていた。八城郡誌には「堂前に五輪塔大小二個あり」[註4]とあるが、他の一個は今回の調査によって旧宅地内から発見[註5]することができた。また、新宮・若宮などの呼称もある。新宮は鎮守堂をさすものとされ、以前にはお堂の前に土俵をつくり、近くの村々から子供が集まり盛んな相撲大会が行なわれていたということである。このほか、近くには荒平神社や稲荷神社が古びた段階の上にまつられ、歴史的な風土をかもしだしている。

註　註1．松本雅明「古代」『竜峰村史』竜峰村史研究会　1959
「興善寺調査報告」『熊本県文化財調査報告第1集』　熊本県教育委員会　1959
註2．大田幸博・桑原憲彰他「熊本県の中世城跡」　熊本県文化財調査報告第30集　熊本県教育委員会　1978
註3．『八代郡誌』　1927
＊註4．日隈正道　「地名による興善寺の復元」　1976
＊註5．註3に同じ

第Ⅲ章　調　査

1．トレンチの設定

調査の対象地は道路公団作成高速道地図「松橋一八代」でＳＴＡ157＋40～158＋80間にあたる。北側は荒平神社へと通じる道路までとした。この道路から北側が興善寺馬場遺跡の発掘調査地である。南側は小谷川を境として1549番地までとした。以上の範囲を調査の対象とした中で、調査が可能なところが三ヵ所あり、Ａ・Ｂ・Ｃ地区とそれぞれに仮称した。

Ａ地区はＳＴＡ150＋20付近を東走する道路（竜峰山への登山道）から北側とした。この道路の南側は宅地の石垣を境として、西側の宅地（1548番地）・畑地（1549番地）をＢ地区、東側の宅地（1546・1547番地）をＣ地区とした。

Ａ地区

Ａ地区にはＡ－１～Ａ－７トレンチを設けた。Ａ－１トレンチは鎮守堂から南側（1648・1649番地）へ設けた。鎮守堂には先述の板碑があり、堂前には五輪塔の水輪が一個置かれ、このほかにも五輪塔が出土する可能性があることから設けたものである。調査の結果、多量の土器片が出土したため東側に拡張を行った。Ａ－２トレンチはＡ－１トレンチの西側の野菜畑（1647番地）に東西方向に設けた。Ａ－３トレンチはＡ－１トレンチの東側の畑地（1651・1652番地）に設けた。石垣が築かれＡ－１トレンチの設定地よりも一段高くなっている。Ａ－４トレンチはＡ－３トレンチの東側でさらに一段高くなった畑地（1653番地）に設けた。Ａ－５トレンチはＡ－２トレンチの北側（1646・1647番地）に直角に設けた。Ａ－６・７トレンチは鎮守堂の北側で、約３ｍ低くなった畑地（1645番地）に設けた。各トレンチの長さと幅は次のとおりである。

	長さ　幅		長さ　幅
Ａ－１トレンチ	20 m×1.8m	Ａ－５トレンチ	19 m×1.5m
Ａ－２トレンチ	11.5m×1.5m	Ａ－６トレンチ	23 m×1.5m
Ａ－３トレンチ	18.5m×1.3m	Ａ－７トレンチ	16 m×1.5m
Ａ－４トレンチ	23.5m×1.3m		

Ｂ地区

Ｂ地区はＳＴＡ158＋20～80間にあたり石垣から西側の1548・1549番地である。この中で北側の1548番地は宅地とされていたところで攪乱を多く受けているものと予想され、南側の野菜畑（1549番地）を中心として調査を行った。Ｂ－１、Ｂ－２トレンチを設けた。

Ｂ－１トレンチはＢ地区の中央部の遺物出土状況および土層の状態を調べることを目的とした。Ｂ－２トレンチも同じく南北をとおしての土層の状況を調べる目的で設けた。

両トレンチの調査の結果、双方のトレンチが接する部分に最も多くの遺物が出土したが、このほかにどのような広がりがあるかを調べるために、B－1トレンチの北側および南側に平行した状態でB－3～5トレンチを設けた。結果的にはB－3～5トレンチでは顕著な遺構・遺物は認められなかった。

多量の遺物が出土したB－1トレンチとB－2トレンチとが交わる部分については、B－1トレンチの南側とB－2トレンチの東側とをそれぞれに拡張して調査を行った。各トレンチの長さと幅は次のとおりである。

	長さ　幅		長さ　幅
B－1トレンチ	20m×1.5m	B－4トレンチ	19m×1.5m
B－2トレンチ	35m×1.5m	B－5トレンチ	19m×1.5m
B－3トレンチ	19m×1.5m		

C地区

C地区はA地区の南側にあたり、高い石垣を築き宅地と畑地には果樹が栽培されていた。近くの人によれば石垣は明治時代に築造されたものといわれる。1546・1547番地にC－1・C－2トレンチを十字に設けたが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。したがって、C地区はこれ以降の調査の必要はないと判断できた。

	長さ　幅		長さ　幅
C－1トレンチ	22m×1.5m	C－2トレンチ	25m×1.5m

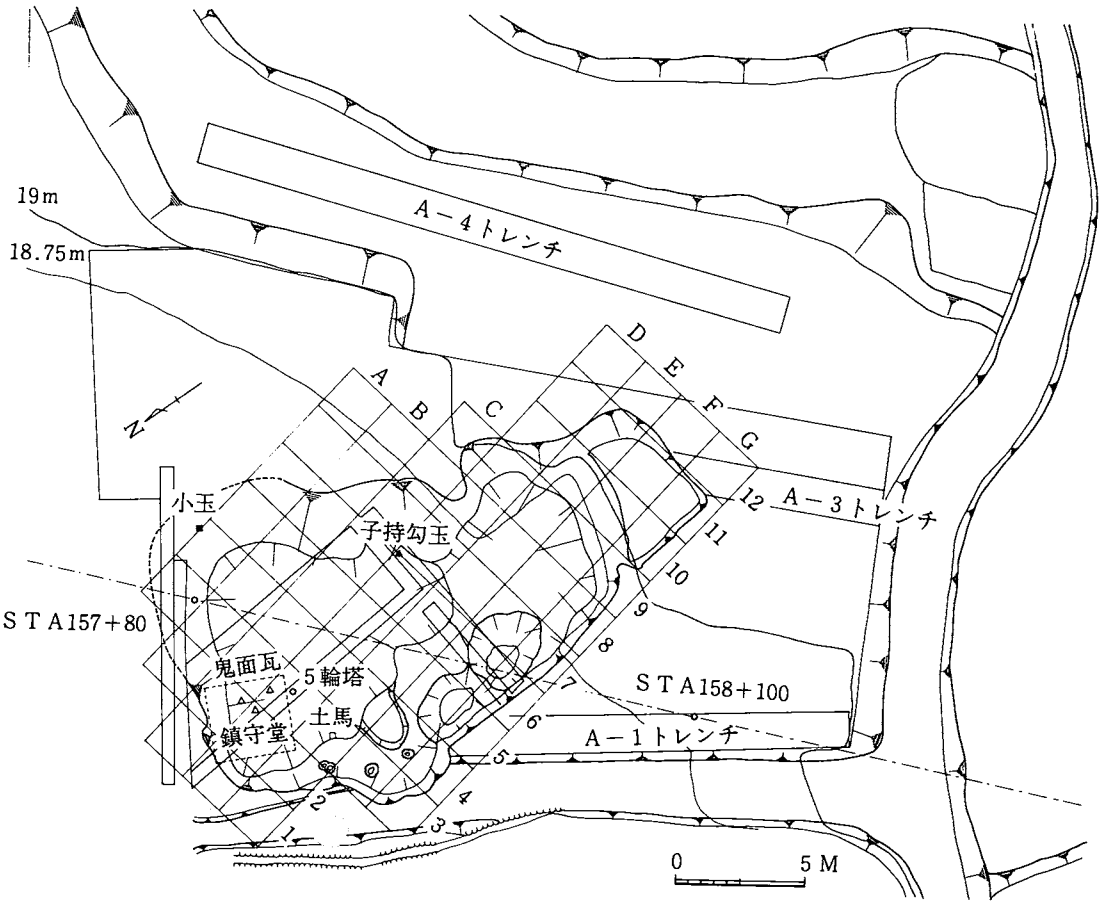
2．A地区の調査

A地区はA－1～A－7トレンチを設けて調査を行った。この中でA－1トレンチでは多量の土器が出土したためトレンチの拡張をまず行った。この拡張部分でも同様の遺物の出土状況が認められた。さらにA－3トレンチでも遺物の出土が見られたため、A－1トレンチとA－3トレンチの間については全面の表土剝ぎを行って調査をつづけた。途中、鎮守堂の移転も行なわれたために堂下にもトレンチを広げて調査を行なった。これらの調査によって住居跡状遺構とカーボン・焼土集中遺構を検出することができた。A－2トレンチとA－5トレンチでは柱穴遺構を検出することができ、全面の表土剝ぎを行って柱穴群の検出を行った。以下、各遺構と出土遺物について報告したい。

(1) 第1号遺構

第1号遺構は鎮守堂および南側で検出できた。住居跡状の遺構で第1号遺構と呼称した。

第1号遺構は主軸をほぼ真北のN－1°－Eにとり最大長さは南北21.2m×東西12.01mを測る。不規則な形状を呈している。わずかに南北および南西隅はほぼ直角にあり、西壁は南西隅から



第２図　Ａ地区第１号遺構実測図

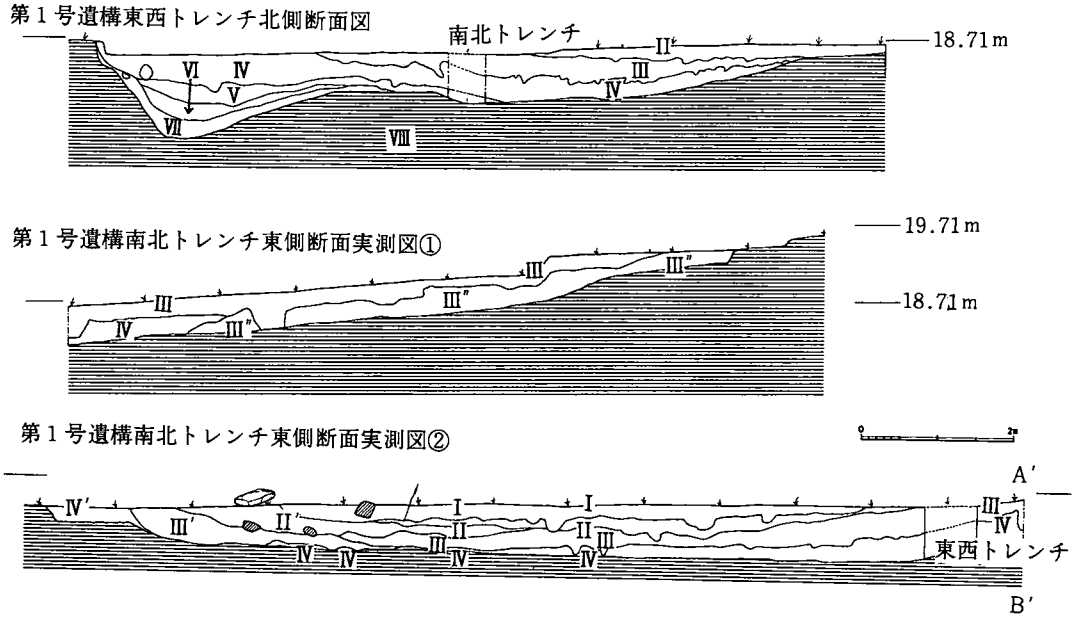
約13.8m がほぼ真北へ直線で伸び規則的な状態にある。北西隅は不規則な弧を描き、東隅は低く不明である。東壁も不規則な弧を描き南東隅へとつながっている。南壁と西壁は急角度で床面へ落ち込むが、北壁および東壁はゆるやかに落ち込んでいる。床面は高低差があり、大きく四ヵ所に分けることができる。いずれも貼り床等の痕跡は認められない。四ヵ所に分けられる床面の中では、南端にあたるＦ－11グリッド付近の床面が最も高い。この床面はほぼ平担であり、最大長さは東西で4.2m 、南北3.5m である。北側はゆるやかに傾斜し中央の床面へと続いている。この中央の床面は、Ｆ－８グリッド付近が最も高く、北側および西側にいくにしたがい低くなっている。最大長さは東西7.2m 、南北5.6m である。同じく北側も傾斜し第３の床面につづいている。この床面の規模が最も大きく、最大長さは南北11.0m 、東西8.4m を測る。浅い皿状を呈し、中央のＣ・Ｄ－4.5グリッド付近が最も低くなっている。残り一つの床面はＦ－３～５グリッドを中心としたところにあり、最大長さは南北6.8m 、東西3.4m を測る。Ｆ－４グリッドには小規模の凹凸が多くみられる。この床面では３個の柱穴を検出した。P_1の規模は45cm×15cmで深さ18cm、P_2は58cm×47cmで深さ32cm、P_3は60cm×38cmで深さ28cmをそれぞれに測る。

このほかではＦ・Ｇ－５～７グリッドに二ヵ所の凹地が見られた。北側の凹地は南北3.1ｍ×東西1.95m の大きさで中央部が床面から26cm落ち込んでいる。南側の凹地は南北3.2m ×東西2.2m あり、最も深いところは1.09m を測る。

性格的な点が不明瞭であるが、住居跡内の貯蔵穴・住居跡に貯る水の排水や水溜め・もしくは湧水を利用した井戸などが考えられよう。

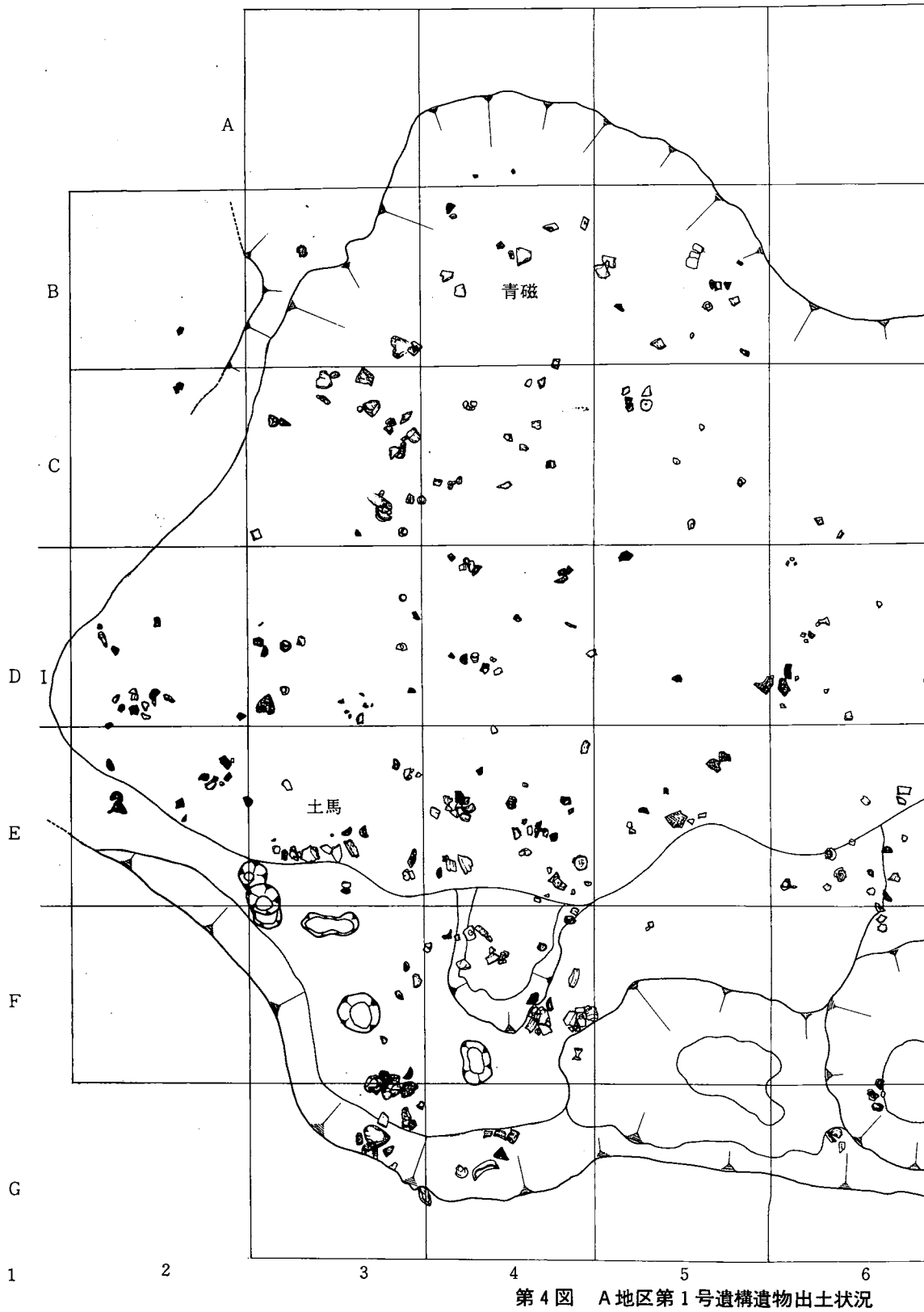
イ，土層

遺構内に堆積した土層については、南北トレンチおよび東西トレンチの断面によって基本的な層位状態と土質について述べておきたい。

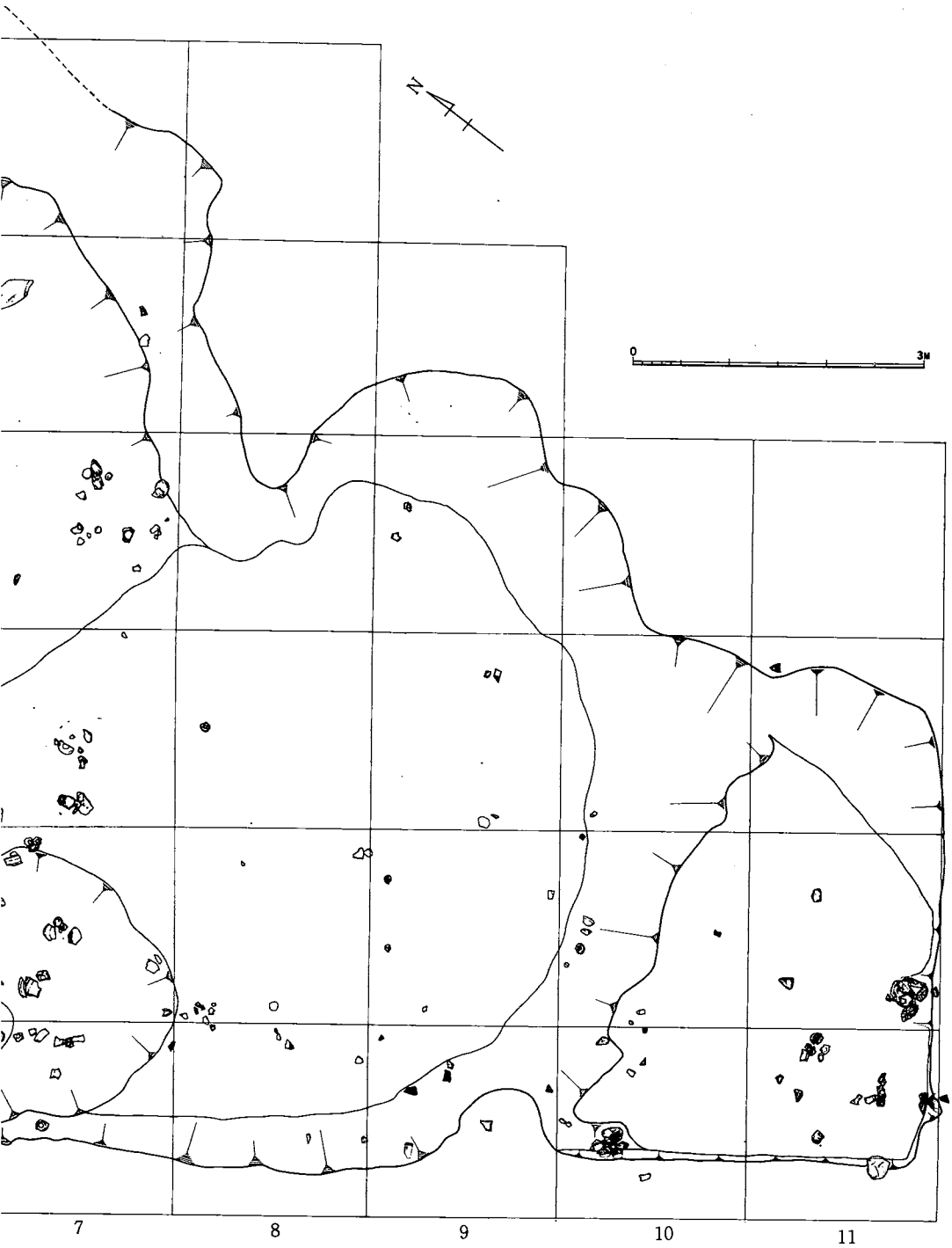


第３図　Ａ地区第１号遺構東西・南北トレンチ断面実測図

第３図は南北トレンチ東壁の断面図である。第Ⅰ層は耕作土で多く黒褐色を呈し、黄褐色砂質土を含んでいる。いく分粘土質性をもつが、全体的にはサラサラとした感じが強く水に流れやすい。第Ⅱ層への落ち込みが数ヵ所に認められる。第Ⅱ層は第Ⅰ層に類似するが、黄褐色砂質土の含まれる割合が多く、逆に有機質の腐植等による汚濁も少なくよりサラサラとした状態にある。水にはもろいが乾燥し固まると非常に堅い。色調は黄褐色を呈する。自然的作用によって短期間のうちに堆積したものであろう。第Ⅱ層は北壁に近いところに部分的に見られるもので黒褐色砂礫層である。比較的大きな石灰岩等の岩石を含み不規則な堆積状態を示している。第Ⅱ層よりも以前に堆積したものと判断されるが人為的作用によるものであろう。第Ⅲ層は粘質をもち、黒色を呈する腐植土層である。粘質は下部にいくにしたがい強くなる。粒子の細かい土質で乾燥すると軽く、サラサラとしている。第Ⅲ′層は北壁に近い位置に、第Ⅱ′層と第Ⅲ層の下にある層で、暗褐色砂礫層である。第Ⅱ′層よりも砂礫の量が少なく粘質は強くなる。不規



第４図　Ａ地区第１号遺構遺物出土状況


N
0
3M
7
8
9
10
11

則な堆積状態であり、第Ⅱ′と同じく人為的作用によるものであろう。第Ⅲ″層は南壁に近い位置にあり、床面直上の淡黄褐色を呈する土層である。粘質は弱く小石を含むが、全体的にサラサラとしている。第Ⅳ層は灰褐色粘質土層で、床面直上に広範囲に見られる。小石を多く含んでおり乾燥をすると固くなる。水分を多く含み粘質が強い土質である。第Ⅳ′層は黒褐色土で、小石を含んでいる。

第3図に東西トレンチ北壁の断面図を示した。

第Ⅰ層から第Ⅳ層までは南北トレンチ南壁の層位と同じくしている。第Ⅴ層は灰褐色粘質土層で砂礫を多く含んでいる。第Ⅳ層に近いが含まれている礫石が大きく量的に多い。第Ⅵ層は第Ⅴ層に類似するが、砂礫の含まれる量が少なくなり粘質が強くなっている。第Ⅶ層は茶褐色粘質土層で細かな砂礫を含んでいる。粒子が細かい土質で粘質が強い。

ロ，遺物の出土状況

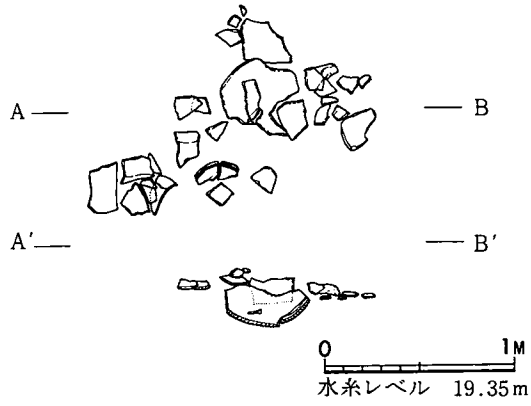
遺物はいずれの層にも含まっているが、最も多いのは第Ⅲ層と第Ⅳ層であり、下層にいくにしたがい土器片が大きくなる傾向が認められた。

第4図は遺物の出土状況の実測図である。主に床面直上にあたる第Ⅲ層と第Ⅳ層から出土した状況である。遺物はほぼ全面に亘って出土しているが北側に比較的多く出土している。遺物の出土状況について北側からみてみたい。

最も北側のコーナーにあたるD－1グリッドからは獣骨（イノシシ）が出土した。E－2グリッドでは一個体に復原可能である須恵器長頸壺の大きな砂片が出土した。B－G－3グリッドでは多くの遺物が出土した。D－3グリッドには焼土が見られ、B－3・4グリッドには河原石が多数出土した。D－3グリッドには須恵器、土師器や獣骨・歯が出土した。E－3グリッドの第Ⅳ層・床面直上からは土馬が横にたおれた状態で出土した。F・G－3グリッドにはB・C－3グリッドと同じく20～30cmの河原石がかたまってみられた。B－G－4グリッドからも多くの遺物が出土し、もっとも遺物の集中する地点にあたる。B－4グリッドでは第Ⅲ層から越州窯青磁片が出土している。E・F－4グリッドは特に遺物が集中し大きな土器片も多い。獣骨片も見られる。F－4グリッドでは大型の瓶の破片が多く見られ、すぐ近くのG－4グリッドでは竈の鍔部分が出土している。いずれも第Ⅳ層の床面直上から出土したものである。B～G－5グリッドは遺物の出土がやや少なくなる。B－5グリッドは布目瓦の出土が多く、大きな破片の丸瓦も見られる。D－5グリッドでも須恵器の甕の大きな破片が出土している。B～G－6グリッドも遺物の出土量はやや少ない。E－6グリッドは須恵器の高台付杯の出土が多く、G－6グリッドは凹地の上部から大型の高杯片が出土した。D～G－7グリッドではE－7グリッドに浅い凹地があり、甑と高台付杯の破片が多い。F・G－7グリッドにかかる凹地では、底部近くまで、多くの土器が落ち込んだ状態で出土している。数量的には高台付杯が最も多く甑、高杯・甕などの器種がみられる。D～G－8～9グリッドは遺物の出土数が少なくほ

とんどが小さな細片である。G—10グリッドの西壁とF—11グリッドの南壁には20～30cm大の自然石が集中していた。G—11グリッドには甑・高台付杯の破片が多い。

以上のような遺物の出土状況を示していたが、このほかで出土した主な遺物の出土状況については子持勾玉が東西トレンチで第Ⅱ層と第Ⅲ層とが接するところから出土している。滑石製の小玉はA—4グリッドの第Ⅰ層から出土し、土師質の土馬もG—4グリッドの第Ⅰ層から出土した。越州窯青磁は北トレンチのD—5グリッドに当る地点の第Ⅱ層から出土している。



第5図　A地区A—3トレンチ遺物出土状況

このほかでは五輪塔の水輪一個が鎮守堂の堂前にあり、堂下の第Ⅰ層と第Ⅱ層から鬼面文軒丸瓦と鬼瓦が出土している。

またA—3トレンチ南西隅においては、須恵器の坏身と土師器の甑とが同一地点から出土した。

ハ，出土遺物

須恵器（第6～24図）

A地区では総数342個体が出土した。蓋杯類が全体の大多数を占め79.2%の高率となった。以下器種ごとに、分類を行ない概要を述べてみたい。なおA地区出土蓋杯類については、法量図を作成したので、この図も参照されたい。

(1)　蓋杯（蓋）[註1]

蓋は総数106個体出土した。古墳時代に属するものと、そうでないものとに大きく分け、そしてつまみを有するものと、無いものに分類し、端部の形状により更に細分化した。

蓋A類（第6図001～002）

双方ともに短いかえりを有し、001は偏平な形状のつまみを有する。

蓋B類（第6図003～第9図102）

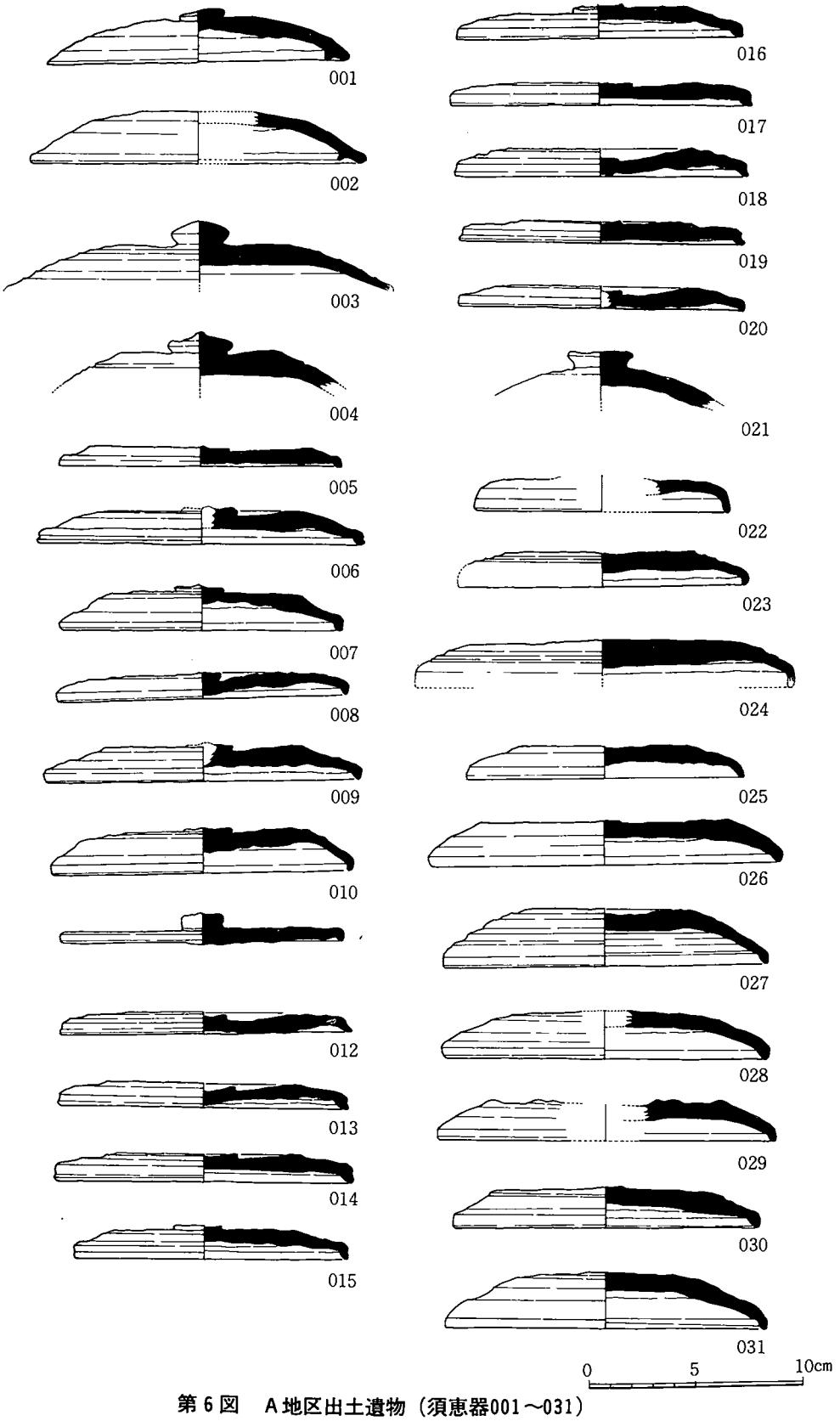
この類は形態上からつまみを有するⅠ類と、つまみを持たないⅡ類に大別される。

蓋BⅠ類（第6図003～021、第7図060、第8図073）

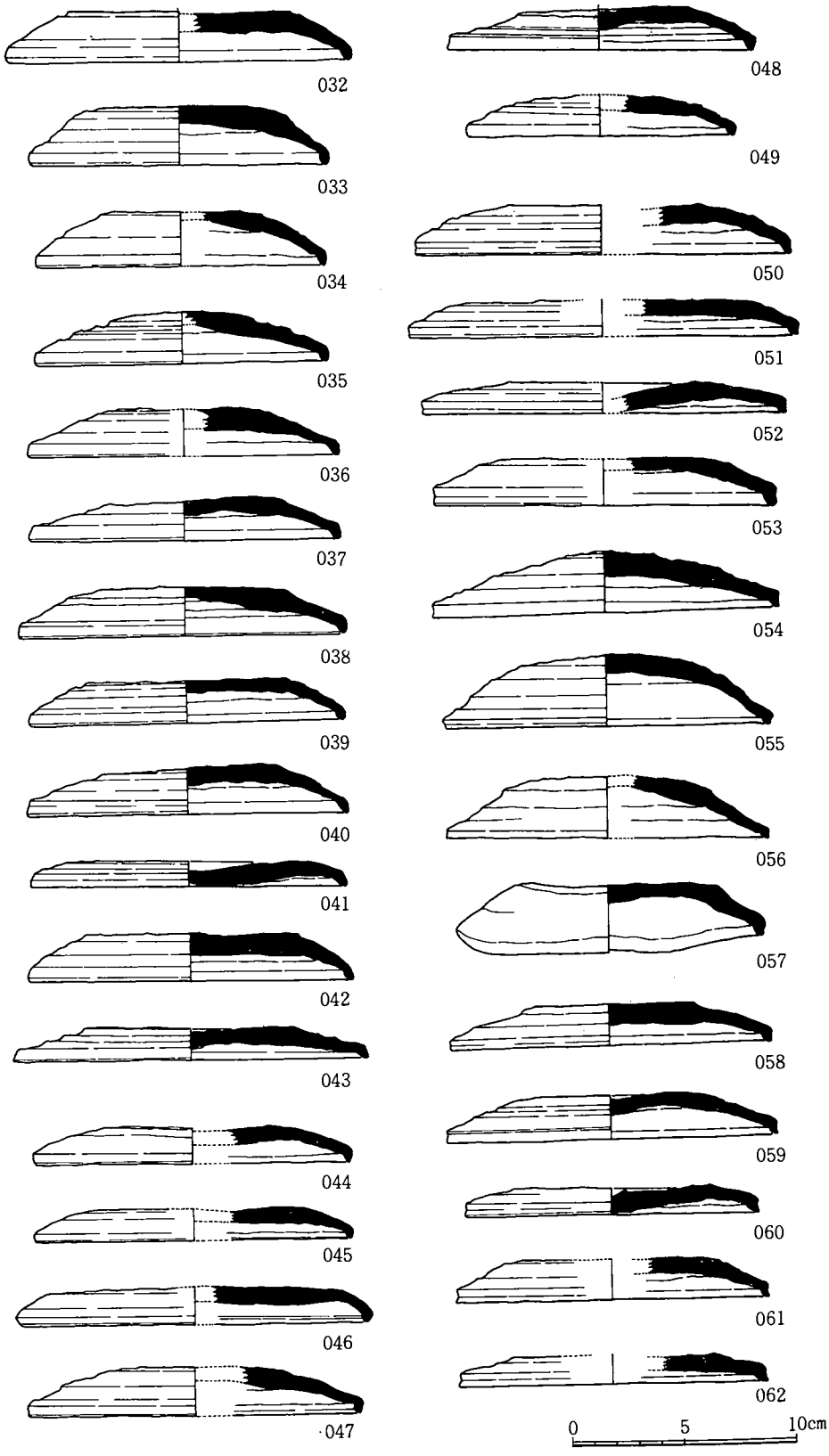
つまみを有するもので総計21個体を数え、形態上から更に2分類できる。

蓋BⅠⅰ類（第6図003～011）

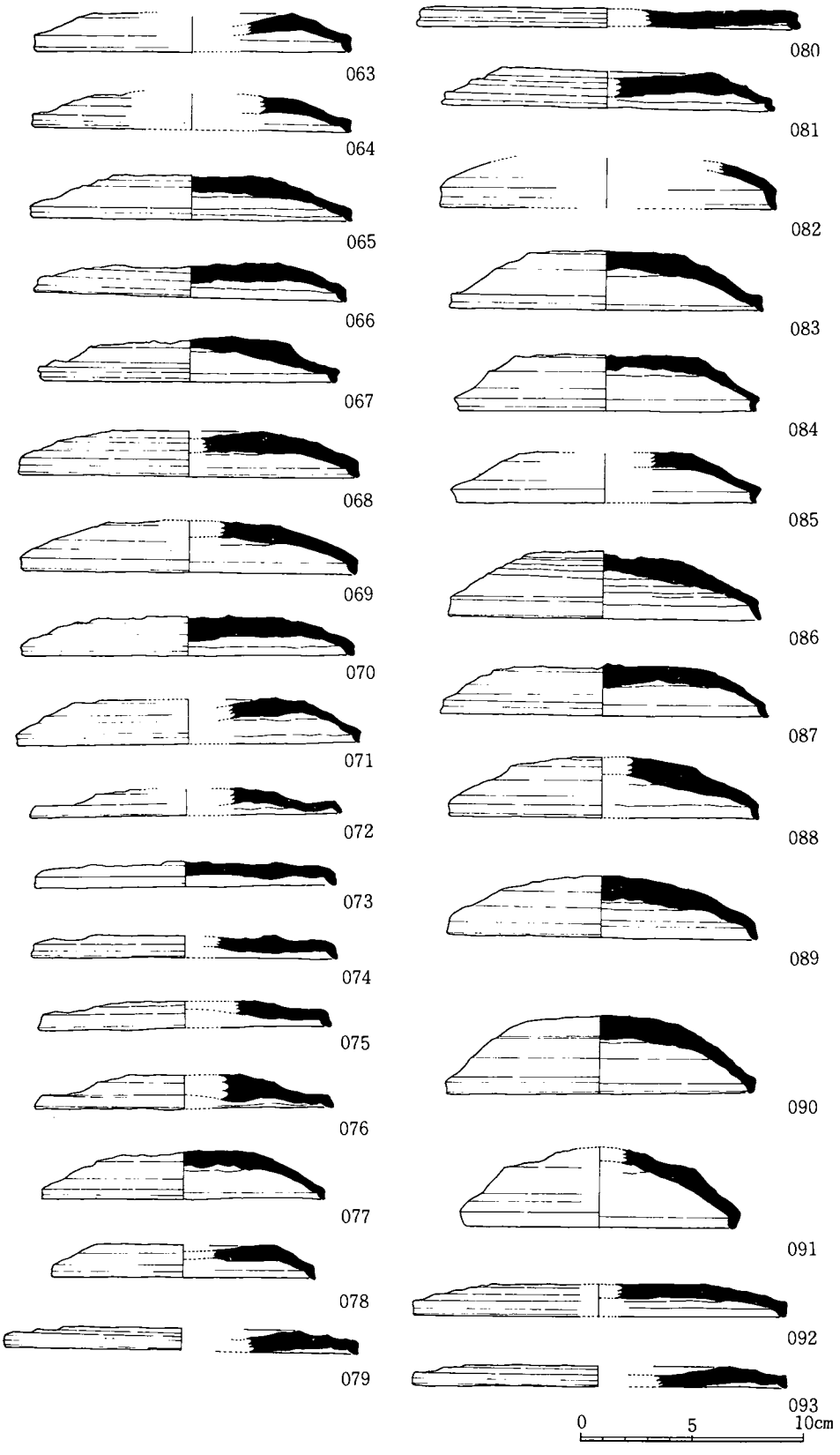
所謂、宝珠形の形状をしたつまみを有する一群であり、総数9個体である。BⅠⅱ類より口径・器高がより大型であり、つまみ高・つまみ径においてもバラつきがある。003、004は端部が欠損しているが大型のつまみを持つ。005は直行した形状をなし、006、007の端部は屈曲し外反



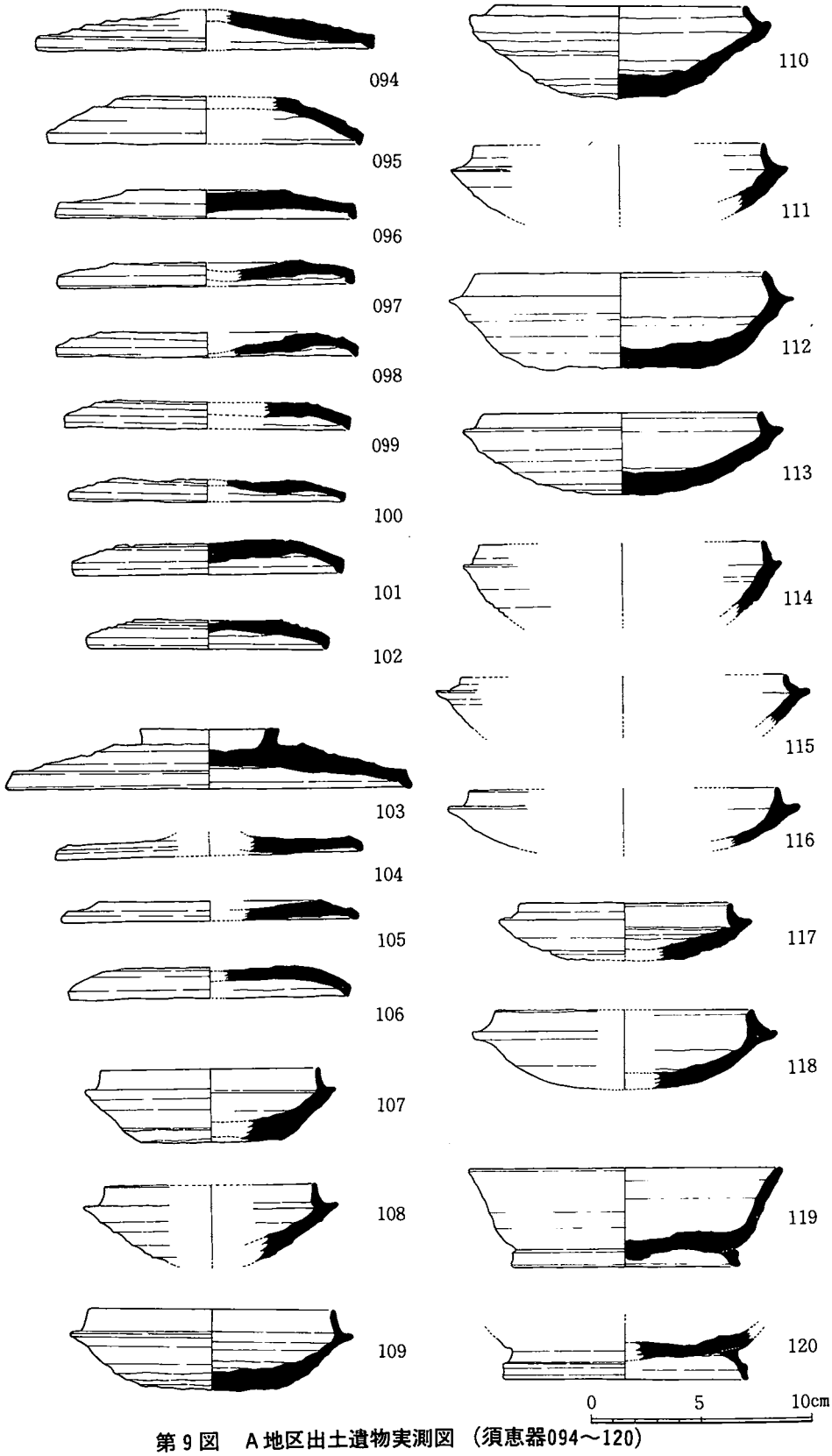
第６図　Ａ地区出土遺物（須恵器001～031）



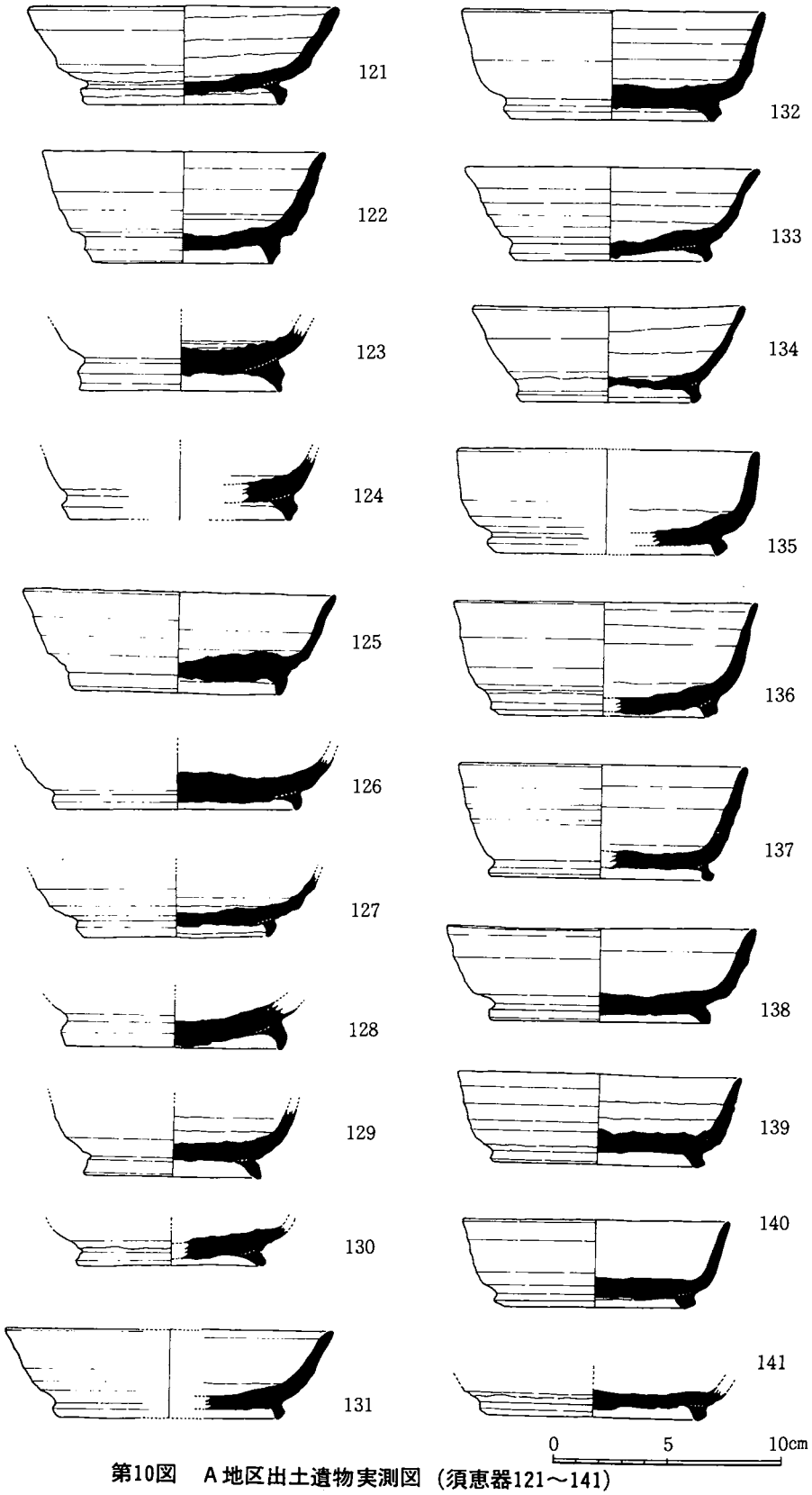
第７図　Ａ地区出土遺物実測図（須恵器032～062）



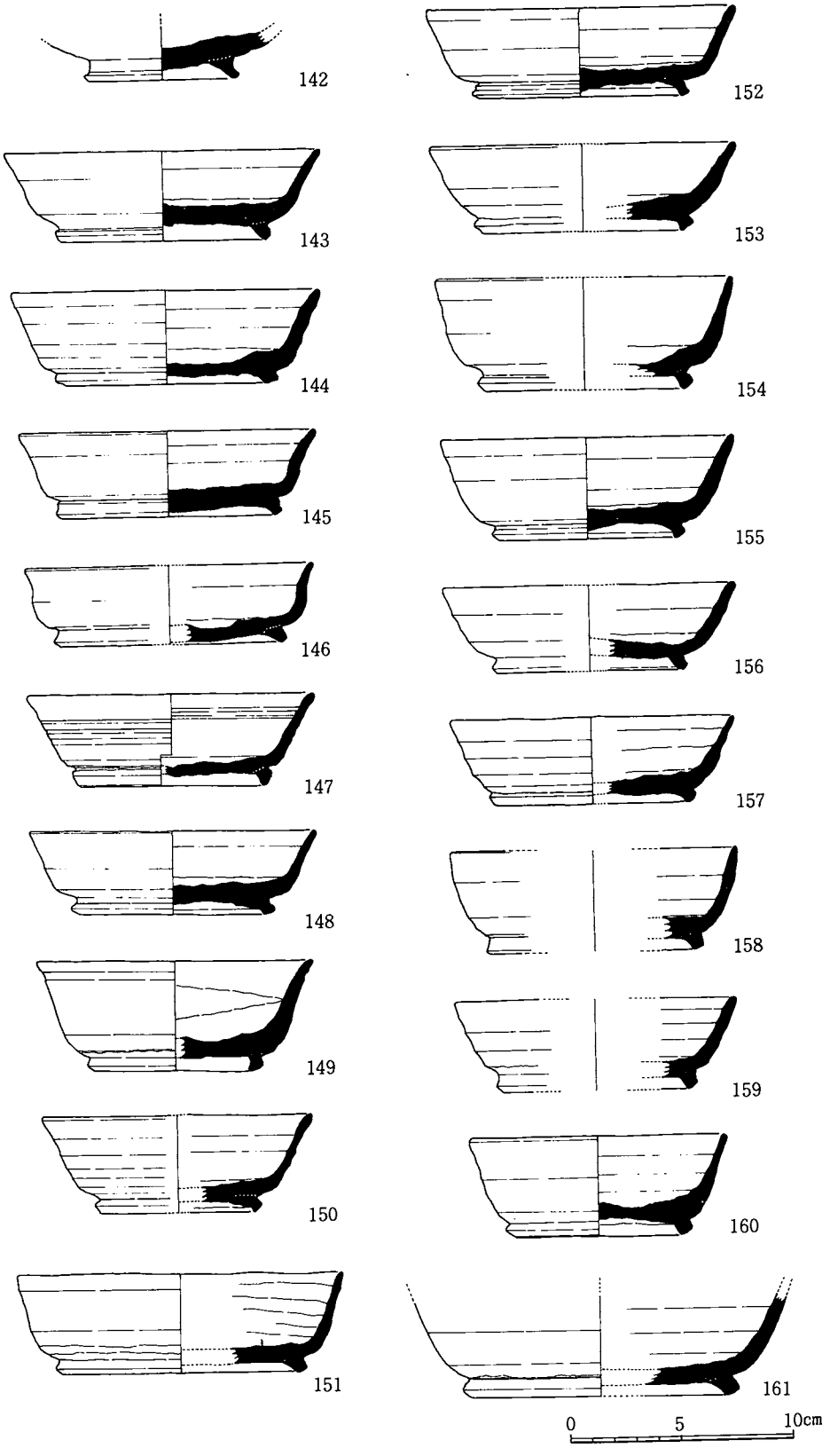
第 8 図　A 地区出土遺物実測図（須恵器063～093）



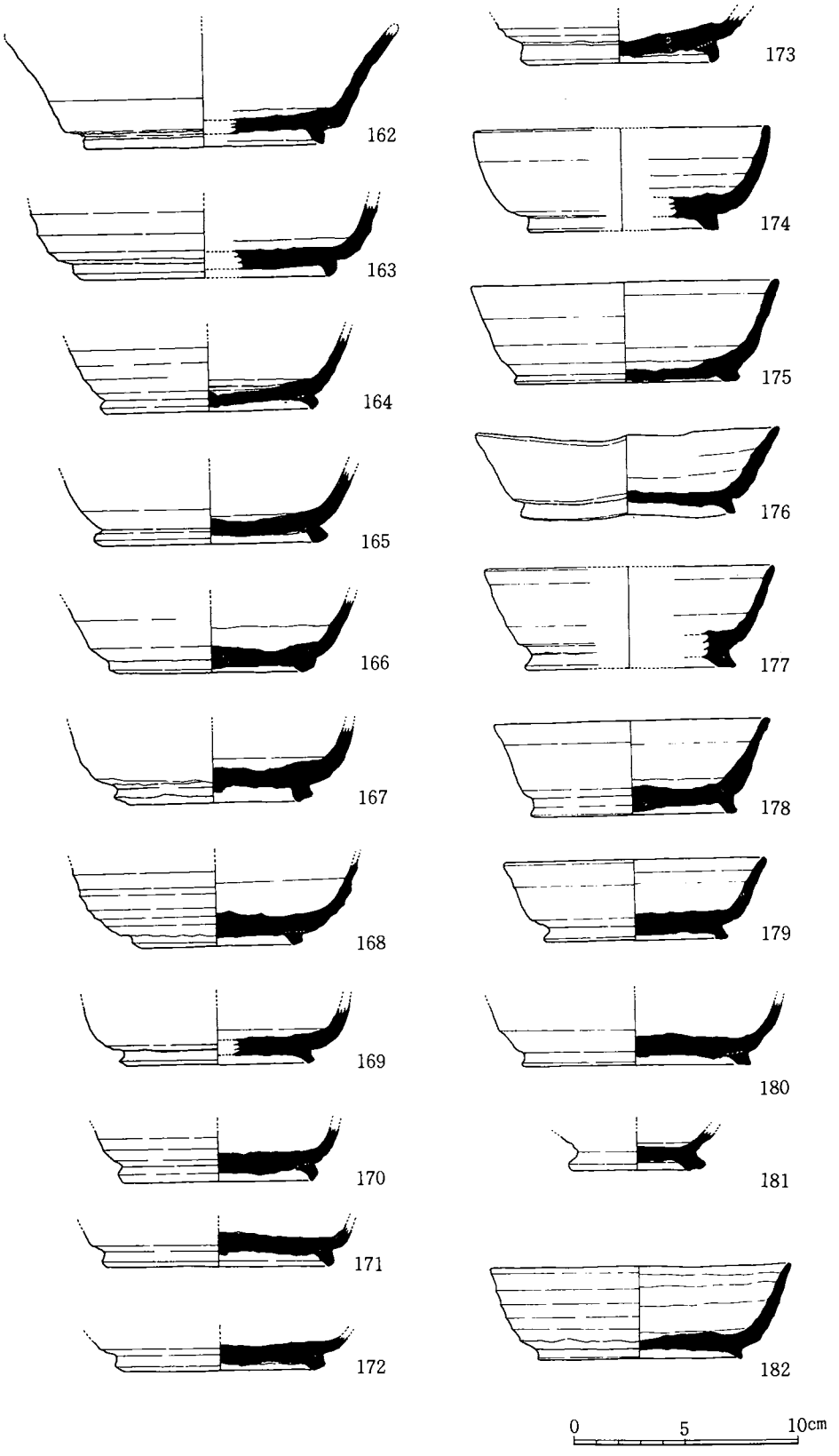
第９図　Ａ地区出土遺物実測図（須恵器094～120）



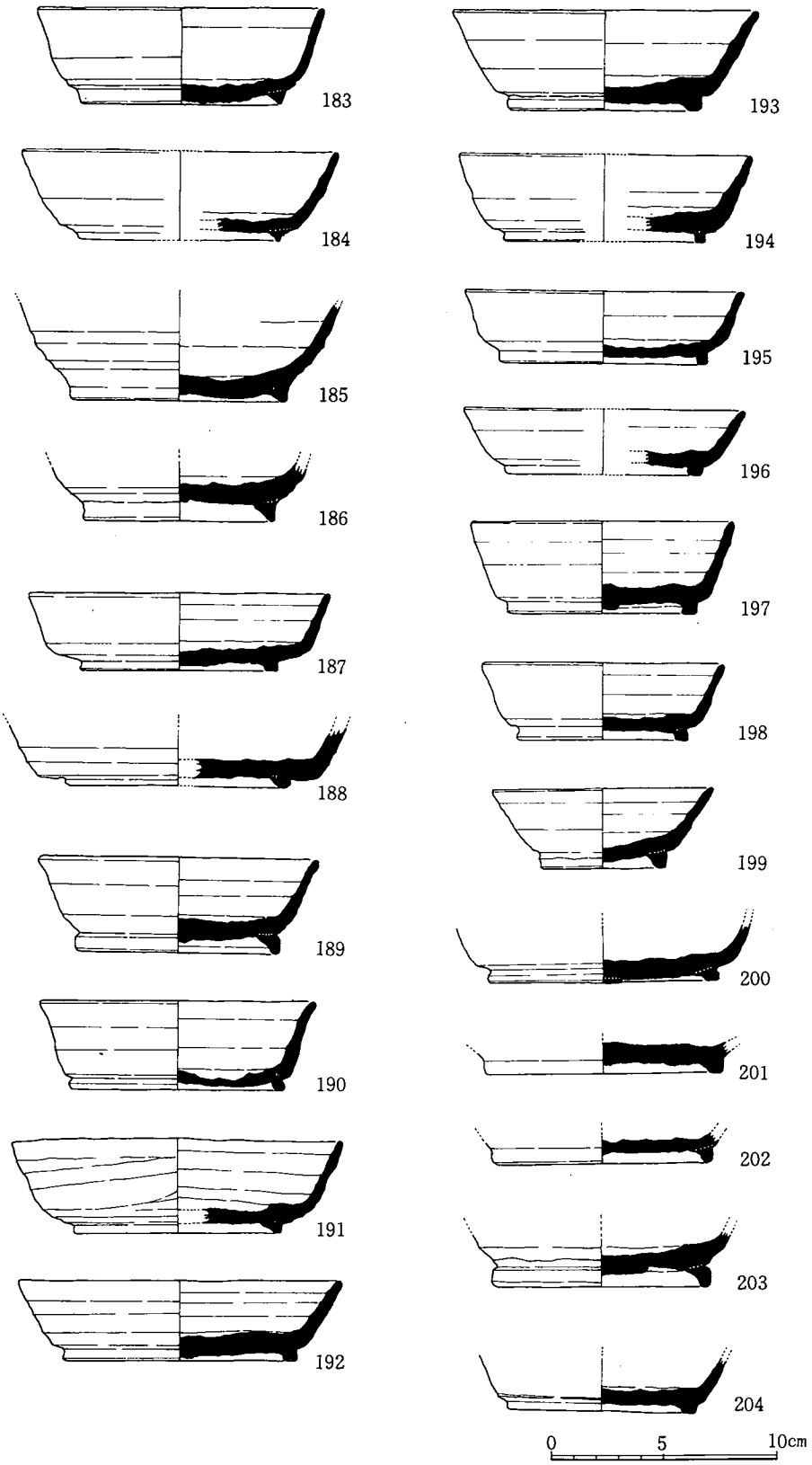
第10図　A地区出土遺物実測図（須恵器121～141）



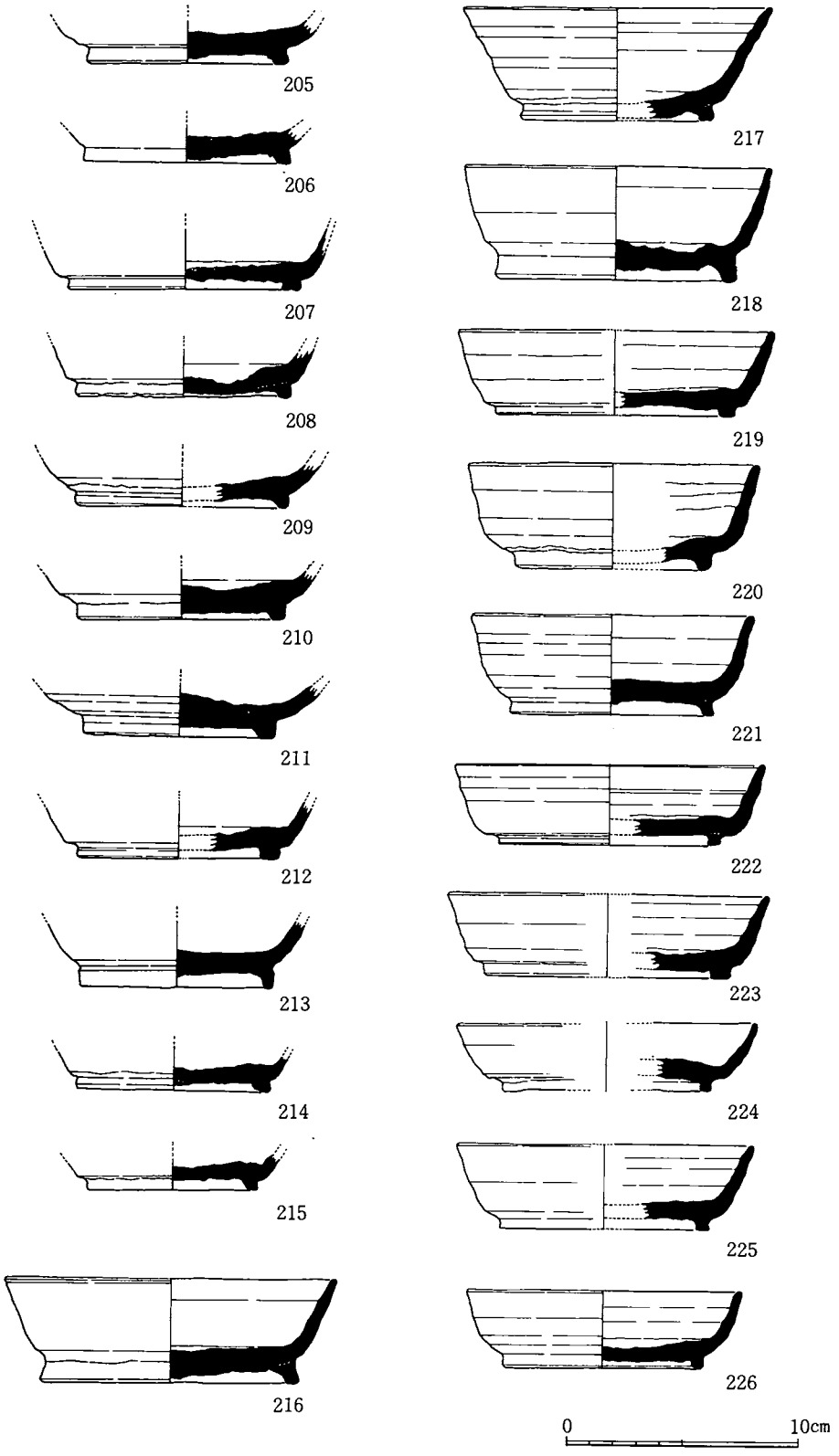
第11図　A地区出土遺物実測図（須恵器142～161）



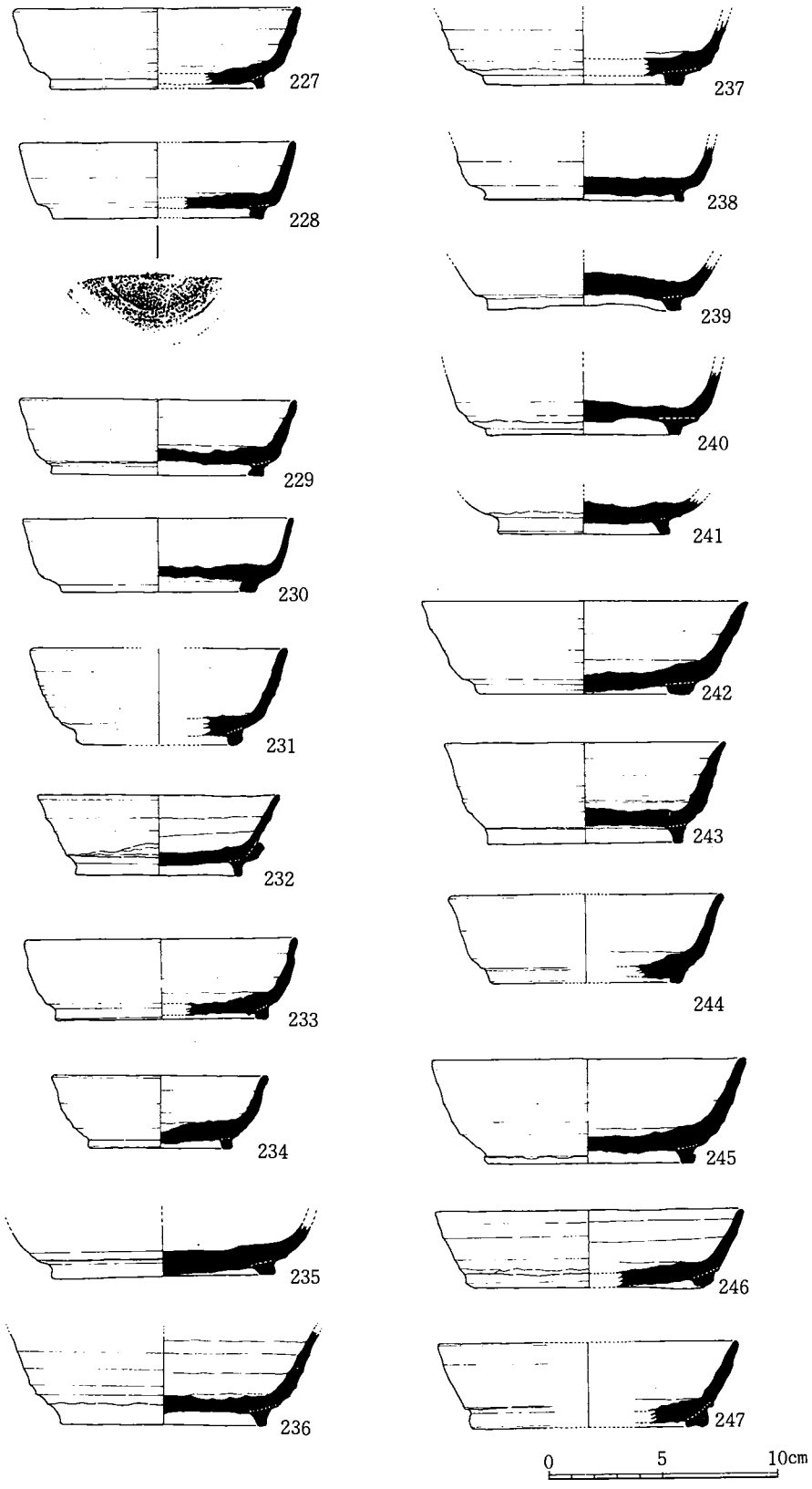
第12図　A地区出土遺物実測図（須恵器162～182）



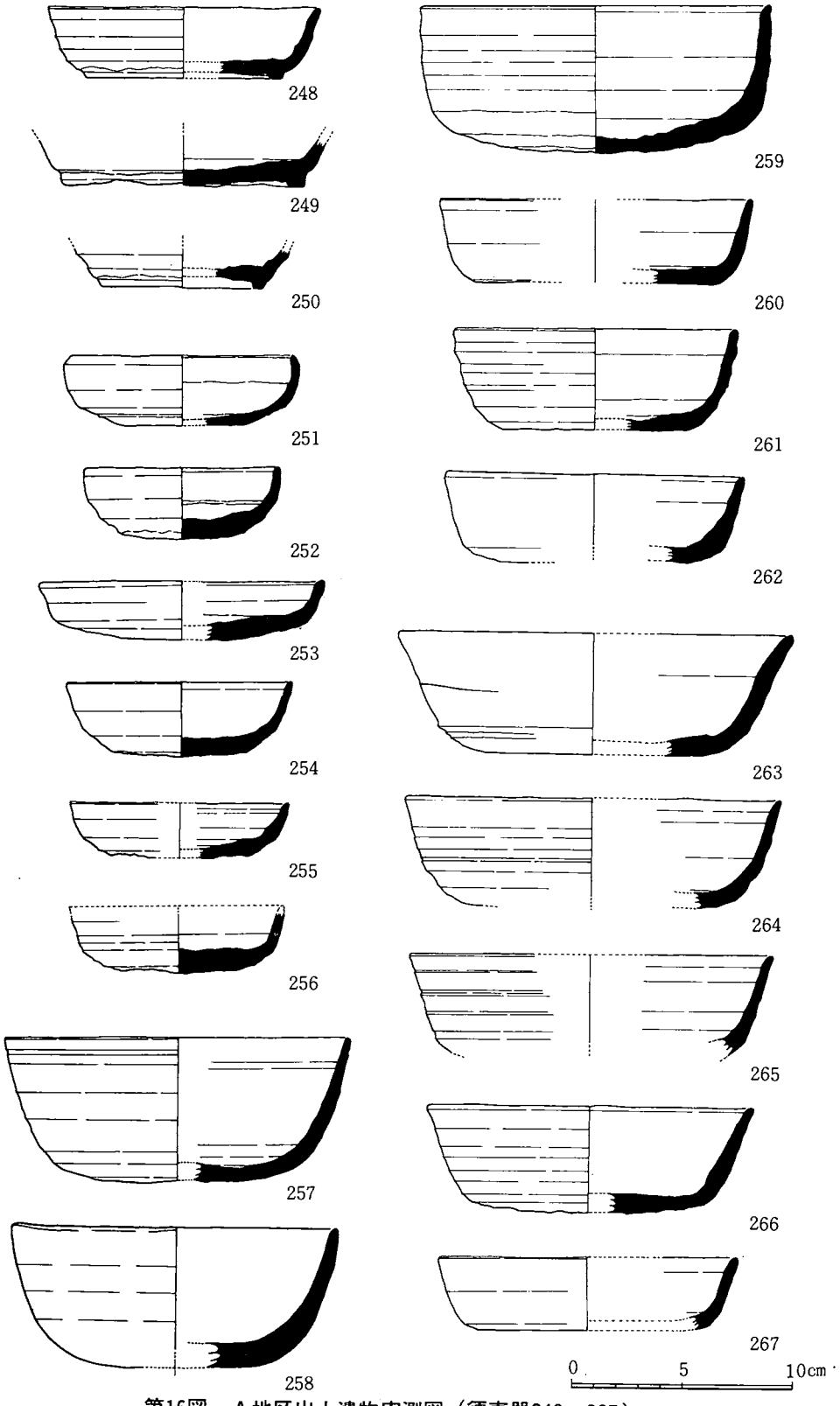
第13図　A地区出土遺物実測図（須恵器183～204）



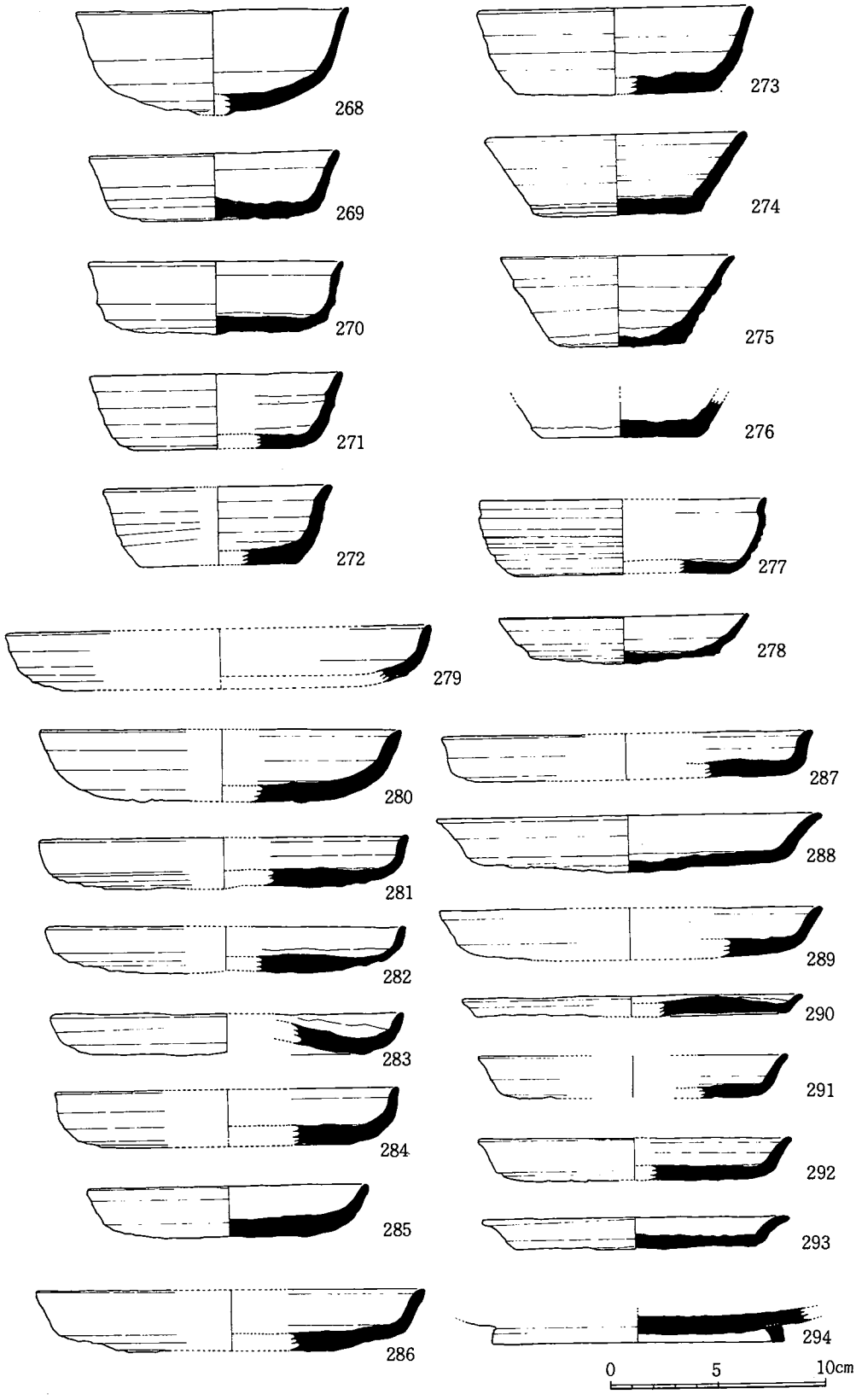
第14図　A地区出土遺物実測図（須恵器205～226）



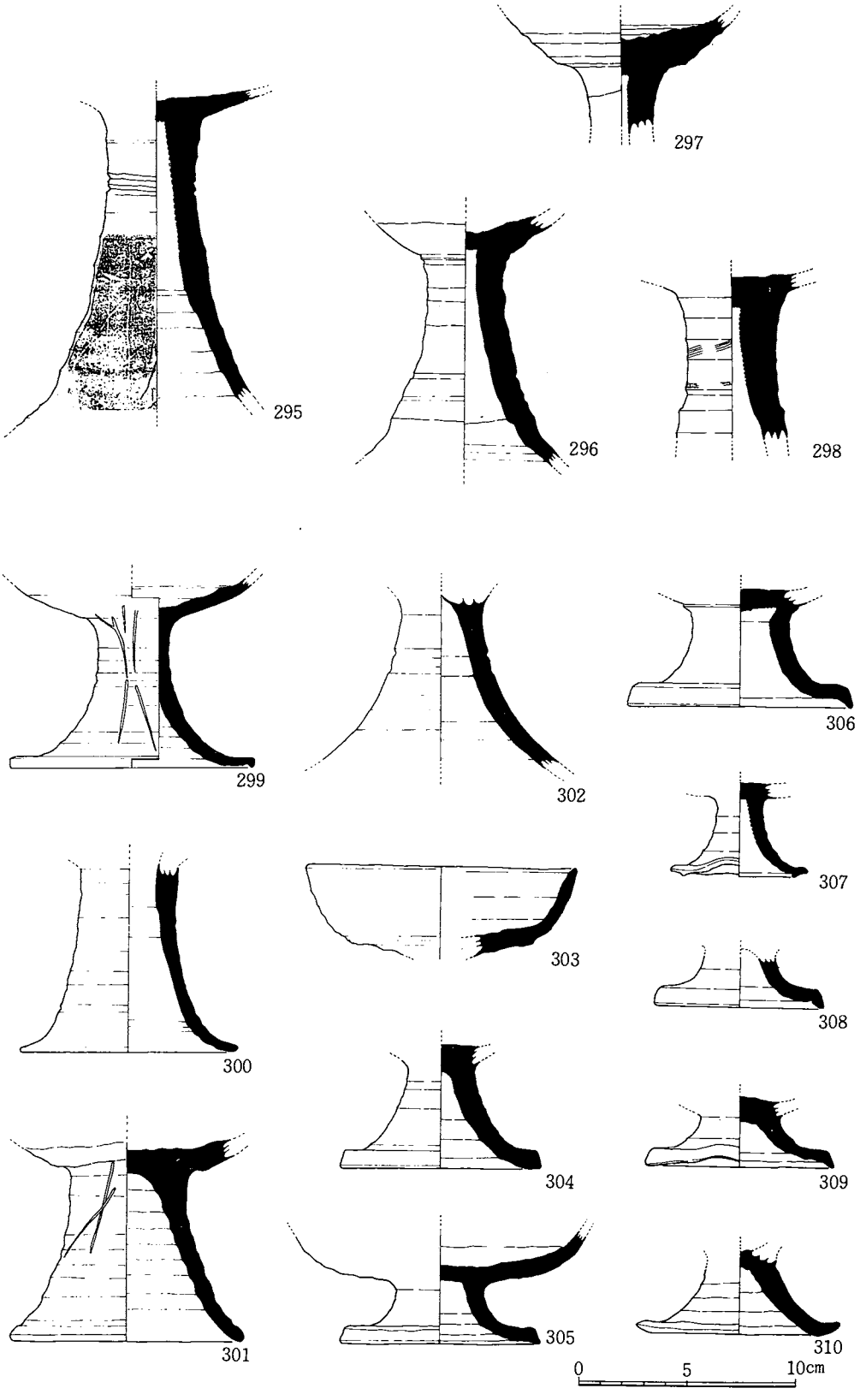
第15図　A地区出土遺物実測図（須恵器227～247）



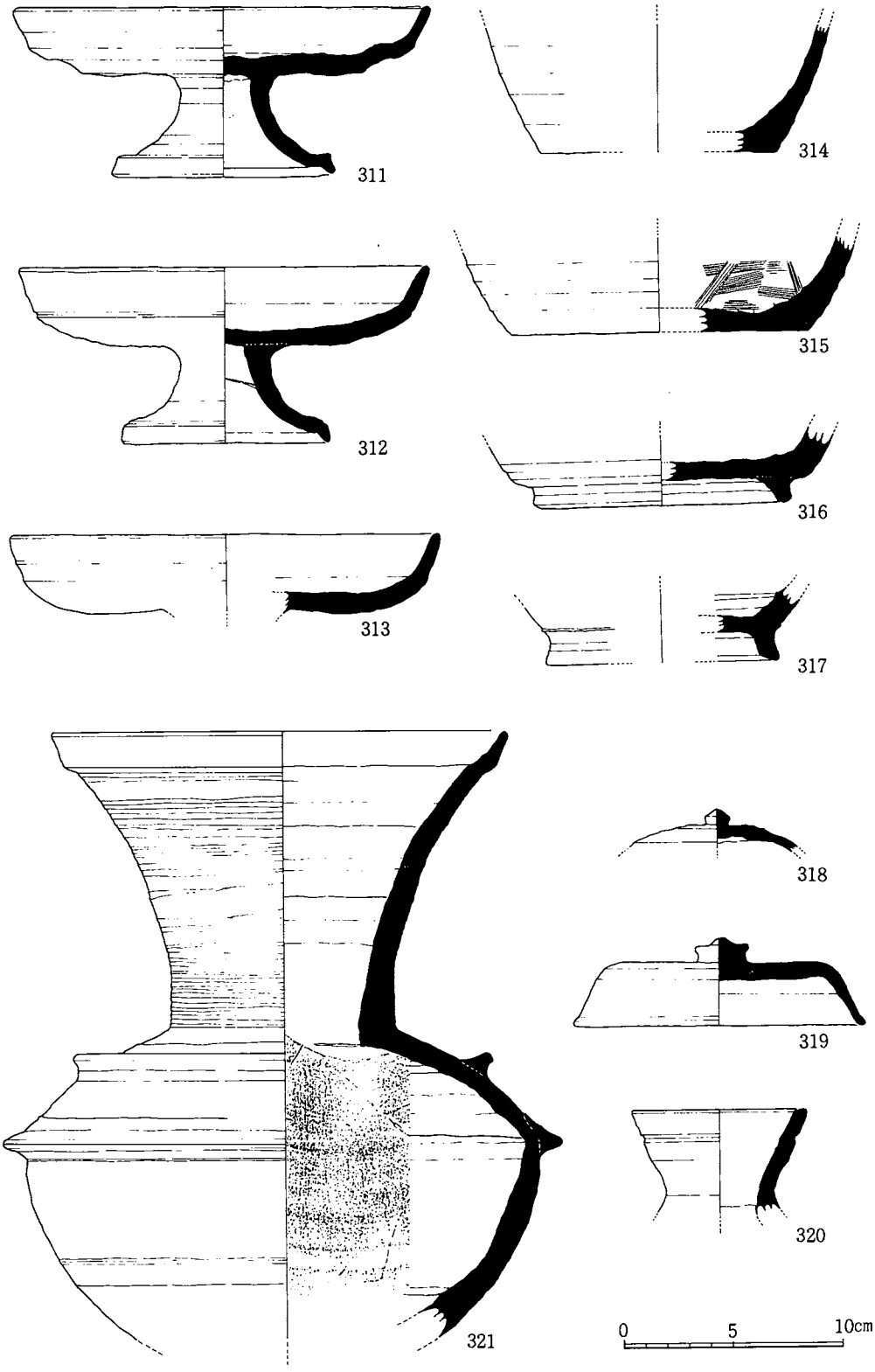
第16図　A地区出土遺物実測図（須恵器248～267）



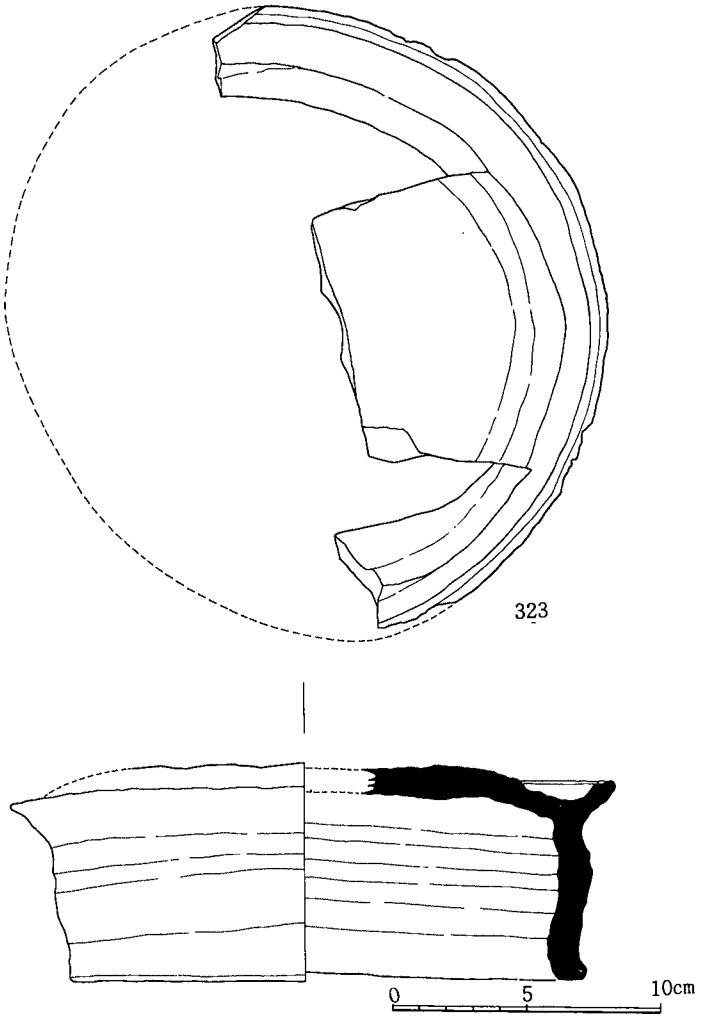
第17図　A地区出土遺物実測図（須恵器268～294）



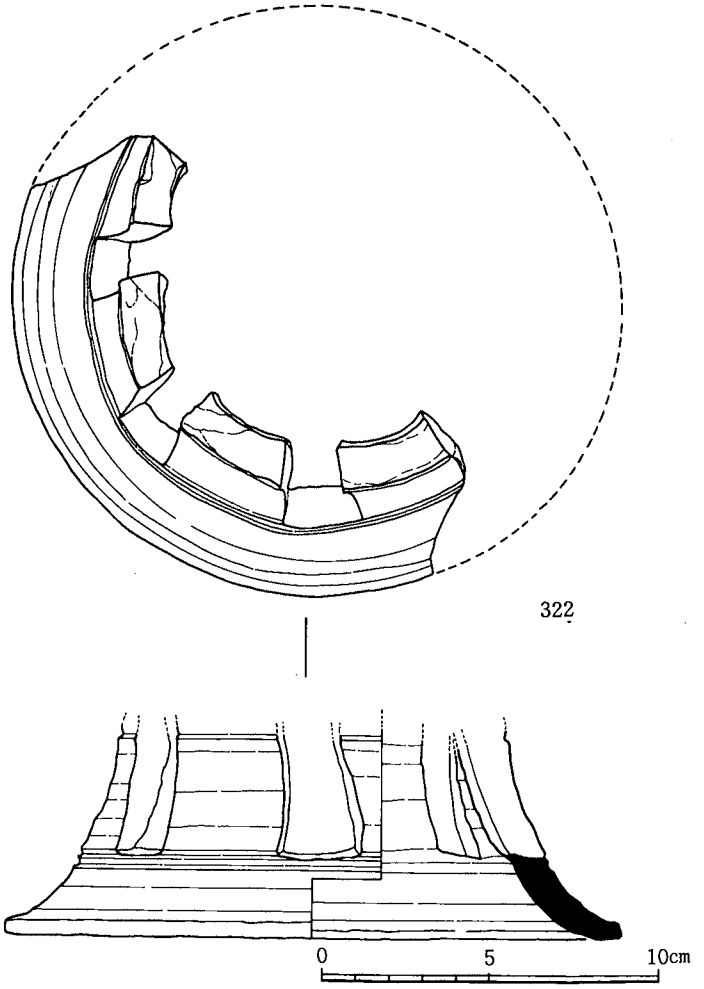
第18図　A地区出土遺物実測図（須恵器295～310）



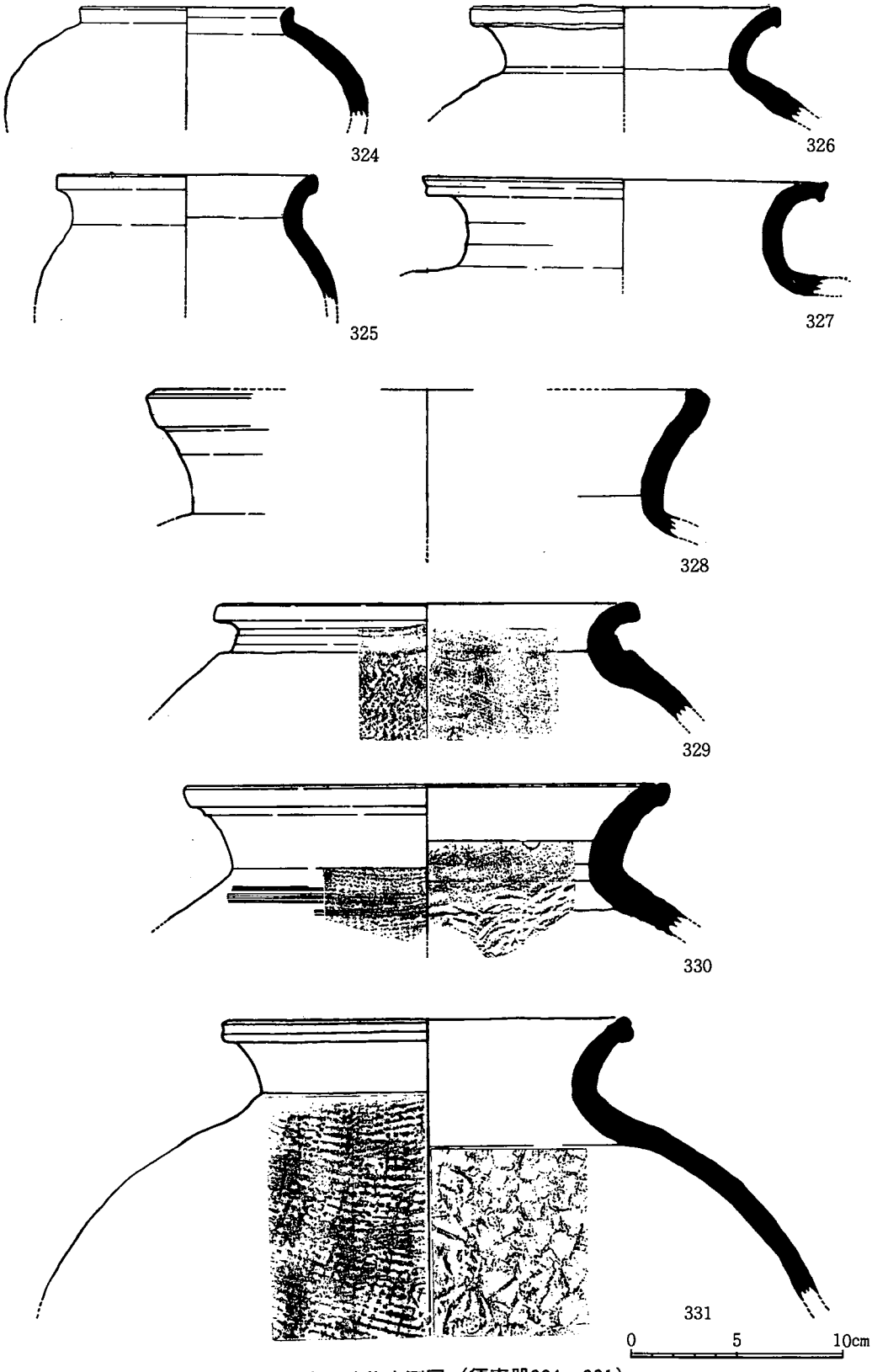
第19図　A地区出土遺物実測図（須恵器311～320）



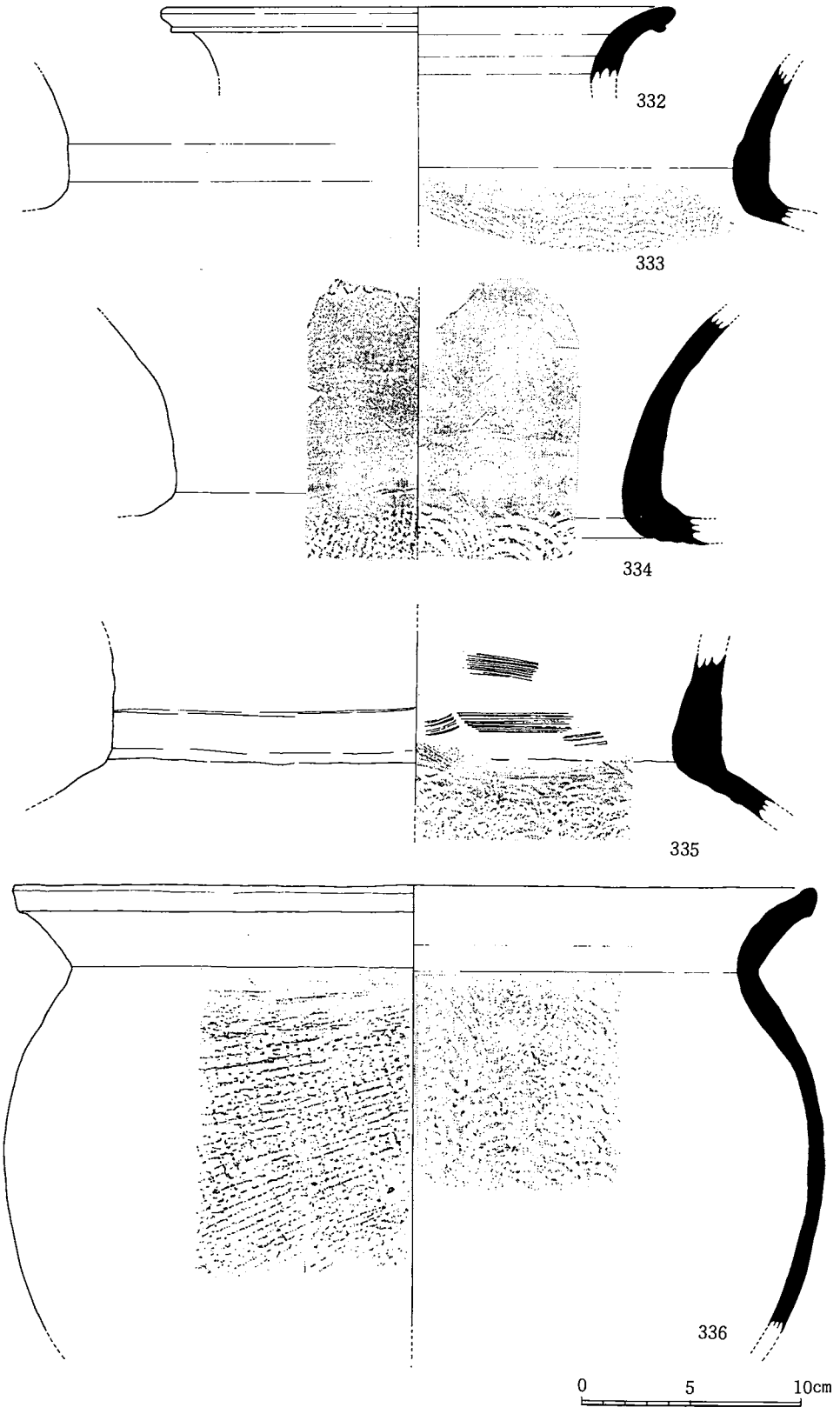
第21図　A地区出土遺物実測図（須恵器323）



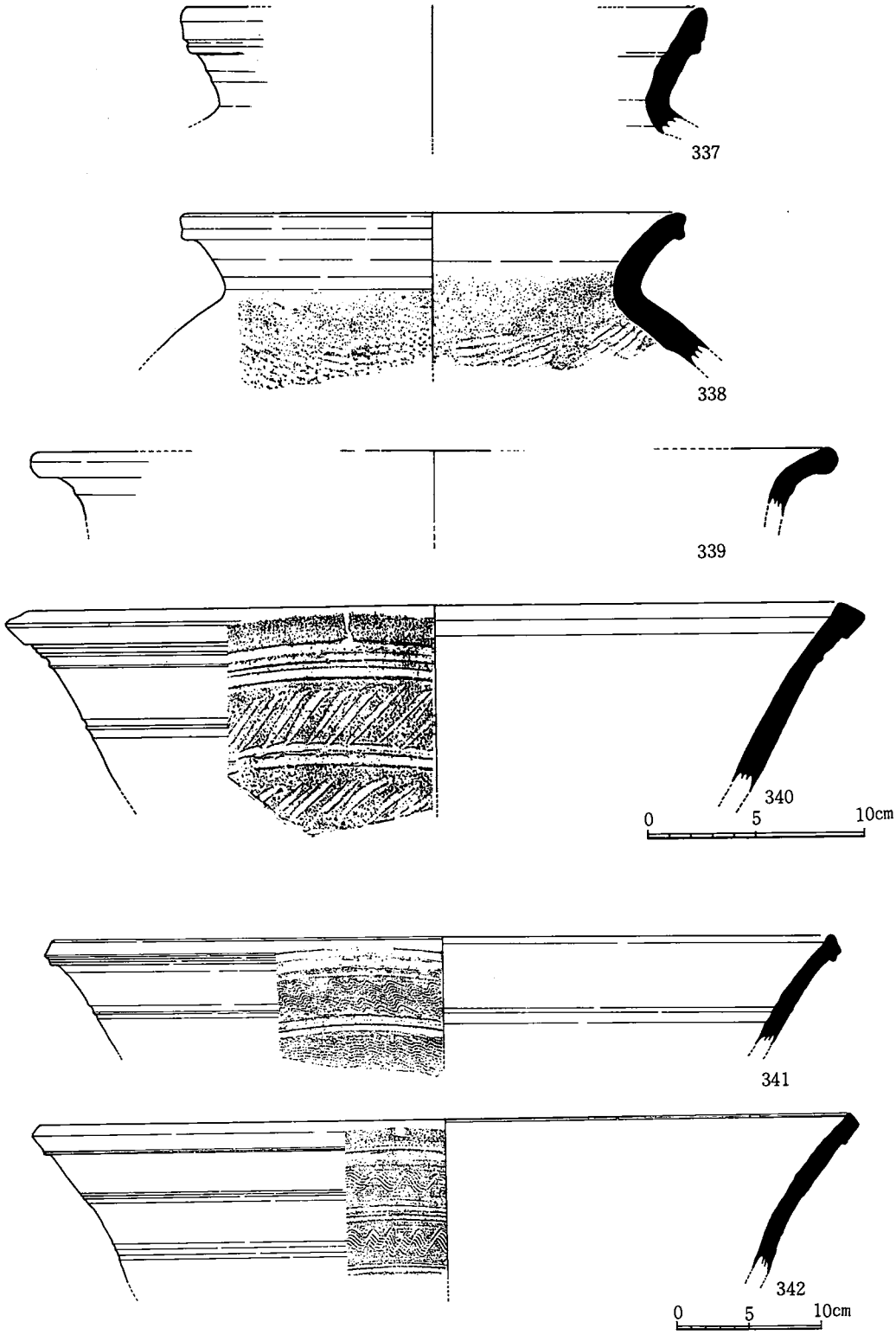
第20図　A地区出土遺物実測図（須恵器322）



第22図　A地区出土遺物実測図（須恵器324～331）



第23図　A地区出土遺物実測図（須恵器332～336）



第24図　A地区出土遺物実測図（須恵器337～342）

する。その他の端部はつまる形状をなし、なかでも011は焼成の際、外圧を受け天井部・口縁部の区別が出来ない程偏平化している。また010は天井部も高く、端部は内反している。

蓋ＢⅠⅱ類（第６図012～021、第７図060、第８図073）

偏平な形状のつまみを持つ一群であり、総数12個体である。図上では器高が0.6～1.4cm、口径が12.9～14.0cmまでの間に集中して分布する。特につまみ高については0.2cm前後に集中する傾向がある。端部の形状から３つに分類できる。ａ類は端部が屈曲して外反するもの、即ち012～019、060、073の一群である。ｂ類は端部がつまるもので020の一点のみである。しかしながら手法上は全く同様で、つまみ部は丁寧なヨコナデ調整、天井部は回転ヘラケズリ調整、そして内面は回転ヨコナデ調整を施している。しかしＣ類の021のつまみ径は３cmを越える大型のものであり、前述のａ・ｂ類とは別個のものと考えられる。

蓋ＢⅡ類（第６図022～第９図102、内第７図060、第８図073を除く）

蓋類中でつまみを持たないもので、総数79個体である。端部の形態によって５つに分類した。概要は下記の通りである。

蓋ＢⅡａ類（第６図022～024）

総数３個体であり、器高は低く、端部は内弯する。ＢⅡ類中では比較的に古手の一群で、天井部は回転ヘラケズリ調整を、他は回転ヨコナデ調整を施す。

蓋ＢⅡｂ類（第６図025～第７図043）

端部の形状が直行するもので、総数19個体である。口径13～16cm、器高1.0～1.8cmの間に広く分布するが、その中心をなすのは口径13.6～15.2cm、器高1.8～2.7cmの間である。この類ではさらに二つに分かれ、一方は026に代表される所の端部がずっくりしたもので、他方は029における口縁部から内弯気味に下り、端部が外傾し凹形をなすものである。

蓋ＢⅡｃ類（第７図044～049、第８図090、091）

端部が内反気味になるもので、総数８個体である。044～049は口径が12～12.5cm、 器高が1.4～2.4cmまでの間に分布する一群で口径に大小はあるが、器高にはさほど大差がない。それに対して090、091は器高が非常に高いという特徴を有する。

蓋ＢⅡｄ類（第７図050～第８図089、内第７図060、第８図073は除く）

端部付近で一度屈曲して外反し、ピンと跳ねる形状で、端部は鋭さを持っている。総数は38個体である。この類はさらに図上から二群に分けられよう。まず一群は口径12.5～15.5cm、器高1.0～3.0cmの間に分布するもので、他方は口径15.9～17.2cm、器高0.8～2.2cmの間に分布するものである。前者にはこの類の大多数が含まれ、後者には050～052、079、080の口径が広く、器高が低いという特徴を持つものが含まれる。

蓋ＢⅡｅ類（第８図092～第９図102）

端部が逆三角形状を、つまる形状をなすもので、総数11個体である。この類は口径が10.6～

17.0cmと大小のバラつきがあるが、器高では大多数が1.0～1.5cmの間に分布するのが特徴と言える。

蓋C類（第9図103～106）

C類は形態的特徴から9世紀以降のものと判断されるものの類で、総個体数は4個である。さらにつまみを持つⅠ類と、持たないⅡ類に分けられる。

蓋CⅠ類（第9図103）

つまみ径は6.2cmの輪状つまみで、端部は外傾し、凹形をなすものである。

蓋CⅡ類（第9図104～106）

つまみを持たない類で、総数3個体である。器高は低く、端部が直行した凹形をなしている。

(2) 蓋杯（杯）

杯は総数172個体出土した。これらを形態上からまず3分類した。A類は古墳時代に属する類。B・Cは古墳時代以降と判断されるものであり、B類は高台を有するもの、またC類は高台を持たないものの類である。

杯A類（第9図107～118）

たちあがりを有する所謂「身」として分類できる一群である。総数12個体で、たちあがりの形状によって更に3分類した。

杯Aa類（第9図107～109）

たちあがりが直立し、図上では口径9.5～11.4cm、器高2.4～3.5cmの間に分布し、受部径も小型の部分に集中して一群をなす。

杯Ab類（第9図110～115）

たちあがりが内傾し、総数16個体を数える。図上では口径、受部径ともに比較的に大型の部分に集中して一群をなす。

杯Ac類（第9図116～118）

前出の2類に対し、受部とたちあがり部の境界が不明瞭でシャープさに欠ける。前二類に比べ退化した要素が見られ、分布も重複する。

杯B類（第9図119～第16図250）

高台を有する杯類で、総数132個体である。高台の形態の違いによりⅠ～Ⅶ類に分類した。

杯BⅠ類（第9図119～第10図124）

総数6個体で、高台がハの字形に底部端に付き、高台高が高い。高台接合部の内外面、端部に丁寧なヨコナデ調整を行い、古手の要素を残している。

杯BⅡ類（第10図125～128）

高台が内弯する形状を持ち、総数4個体である。高台接合部の内面に強くヨコナデ調整を、また外面や端部にも弱く同様の調整を行なう。杯BⅠ類の手法と類以し比較的に古い要素を残

している。

杯ＢⅢ類（第10図129、130）

総数２個体である。高台が直行する形状をなし、手法的にはＢⅡ類と同様であり、形状の違いは調整の強弱の差によるものと思われる。

杯ＢⅣ類（第10図131～第12図173）

総数43個体である。高台は底部端に付き、断面は「ハの字形」である。また、高台の接地は内側にあり、接合部から高台にかけては「逆くの字形」をなす特徴がある。さらにこれらのものを高台接合部に調整を加えたものと、そうでないものとに分類した。

杯ＢⅣｉ類（第10図131～第11図142）

高台接合部に丁寧な調整を施し、総数12個体である。131～134は口縁部が外弯気味で、135～140は口縁部が直立したものである。中には137のように杯ＢⅠ類に似て、古手の要素を残したものもある。

杯ＢⅣⅱ類（第11図143～第12図173）

高台接合部外側には調整を加えず、形態上から接合部が明瞭にくびれたものであり、総数31個体である。143～150は口縁部が外弯気味に立ち上がるもので、151～160は口縁部が直立するものである。中には161のように高台径が11cmを越える大型のものも含まれる。

このＢⅣ類は高台の形態に特徴があり、後出するＢⅦ類に比べ高台高が最低でも0.6cmと高くなる。この類は八代地方のこの地区にのみ分布する須恵器で「興善寺式」とも呼べる特色あるものである。

杯ＢⅤ類（第12図174～181）

総数８個体で、高台が平行四辺形状をなしている。高台接合部内側はヨコナデ調整を行うが、外面には特に施さない為、形態上接合部は明瞭にくびれる。更に端部外側は未調整の為、鋭さを持つ。175～179は口縁が外弯気味のもので、174は内弯気味である。また177は底部が1.2cmと非常に厚く、二重に底部を貼り付けたものと思われる。181は高台径が5.2cmとこの類にしては小型のため、他の器種とも考えられる。

杯ＢⅥ類（第12図182～第13図186）

高台が逆三角形状をなすもので、総数５個体である。182～184は口縁部が外弯気味のものである。高台は内外側から強くヨコナデ調整を受けて逆三角形状を呈したもので、手法上からみれば杯ＢⅦ類の台形高台より年代的に新らしいものと判断できよう。

杯ＢⅦ類（第13図187～第16図250）

高台が凹形で逆台形状を呈しており総数は63個体を数える。これは杯全体では35％、高台を持つ杯では48％の高率を占める。これらを高台が底部に付く位置で３大別した。

杯ＢⅦア類（第13図187、188）

高台が底部端よりかなり内側に付くもので187は直立しており、BⅦ類中では古手の要素を持つものであろう。

杯BⅦイ類（第13図189～第15図241）

高台が底部端に近い位置に付くものであり、総数53個体である。これを高台接合部への調整の有無で２つに分類した。

杯BⅦイⅰ類（第13図189～第14図215）

高台接合部外側に特別な調整を加えず、形態上からは接合部が明瞭にくびれたもので、総数27個体である。

杯BⅦイⅱ類（第14図216～第15図241）

高台接合部に丁寧な調整を加えたもので、総数26個体である。216～232は口縁部が直行するもので、233、234は口縁部が外弯気味になるものである。

杯BⅦウ類（第15図242～第16図250）

高台が底部端側にほぼ連続して付くもので、総数９個体である。高台接合部の調整は特に丁寧である。242～244は口縁部が外弯気味のものであり、245～248は口縁部が直行するものである。

このBⅦ類は図上では高台径が８～10cmの間に、高台高も0.5cm前後に集中する特徴がある。

杯C類（第16図251～第17図278）

高台を持たない杯類で、総数28個体である。形態によってⅠ～Ⅴ類までに分類した。

杯CⅠ類（第16図251～256）

小型で、杯C類中では比較的に古い要素を持つ類である。251、252は口縁部が内弯する。253はⅢの285に類似し、Ⅲでの分類も可能かもしれない。

杯CⅡ類（第16図257～262）

口縁部が直行したもので、総数６個体である。257～259は大型で椀としても分類が出来よう。[註2] また260～262は小型のもので、両者は図上からも明確に２分できる。

杯CⅢ類（第16図263～第17図273）

口縁部が外弯したもので、総数11個体を数える。263～266は大型のもので、これもまたCⅡ類のそれと同様に椀として分類できるかもしれない。また268～273は小型のもので、両者は図上からも２大別できる。

杯CⅣ類（第17図274～276）

総数３個体で、所謂椀にも分類できよう。[註3] 口縁部が直行してのび、底部が平らなものである。

杯CⅤ類（第17図277、278）

その他のもので、277は図上で端部が屈曲しているが、実際はやや内弯して立ち上がっている。278は器高が非常に低い。

(3) 皿

皿類は総数16個体で高台を持つものと、そうでないものに大きく分けた。

皿Ⅰ類（第17図279～293）

皿類の大部分であり、高台を持たない。これを口縁の形状によって２分類した。

皿Ⅰａ類（第17図279～285）

口縁部が外傾後内弯気味に立ち上がるもので、総数７個体である。285はきわめて小型であり、283は全体的に大きくひずむ。

皿Ⅰｂ類（第17図286～293）

口縁部が外反するもので、総数８個体である。290は全体的に大きくひずみを持つ。

皿Ⅱ類（第17図293）

台形の高台を有するが、口縁部の形状は不明である。

(4) 高杯

高杯は総数19個体出土しており、その内ヘラ記号を持つものが３個体ある。時代的に古墳時代に属するものと、そうでないものに分類した。

高杯Ａ類（第18図295～298）

総数４個体で、古墳時代に属し脚部がやや長めでスマートな形状である。295はヘラ記号を有し、脚部に二条の沈線を持つ古い要素の残る有蓋高杯であろう。

高杯Ｂ類（第18図299～第19図313）

総数15個体で、Ⅰ～Ⅴ類にさらに分類される。

高杯ＢⅠ類（第18図299、302）

両者ともに基部が太く、脚部が大きくひろがる。299は二段すかし様のヘラ記号を持ち、この類中では古い要素を残している。

高杯ＢⅡ類（第18図300、301）

ともに基部が太いが、その割に裾が広がらない。301は×印のヘラ記号を持つ。

高杯ＢⅢ類（第18図303～306）

高杯ＢⅡ類よりも小型で、総数４個体である。304の端部では特に整形はなされないが、305、306は端部付近で水平にのび端部が外傾し鋭さを持つという特徴がある。後者は高杯ＢⅣ類の端部調整の手法と似る。

高杯ＢⅣ類（第18図307～310）

総数４個体で、高杯ＢⅡ類よりさらに小型である。308、309は前出の高杯ＢⅡ類の306と同様の手法である。307の端部調整は接地部に強い調整を行うため、一部内側にとび出し特異な形状を成している。

高杯ＢⅤ類（第19図311～313）

総数３個体で、所謂「高台盤」としても分類できるものである。基部から外弯気味に大きく下り、端部は外傾し、杯部は径19cm内外と大型である。

(5) 壺

壺として分類できるものは総数９個体で、形態上からⅠ～Ⅳ類に分類した。

壺Ⅰ類（第19図314～317）

いずれも壺底部のみで、総数４個体である。314、315は平底で、315には内面にヘラ状工具により施文が明瞭に残っている。316、317は逆台形状の高台を持つ。

壺Ⅱ類（第19図318、319）

壺蓋である。318はつまみを有する小型の蓋で、319は宝珠形のつまみを持つ短頸壺の蓋である。時代的には後者の方が新らしくなると思われる。

壺Ⅲ類（第19図321）

台付壺である。口頸部は大きくラッパ状に開き、基部がしまり肩部から胴部にかけて２本の凸帯を持ち、内一本は胴部最大径になるのが特徴である。手法上口頸部外面は調整の跡が顕著に残り、体部内面には円孤状の叩きによる調整を行う。

壺Ⅳ類（第22図324、325）

短頸壺の上半分である。324は口頸部が短く外反しており、325は口頸部が外弯気味に立ち上がっている。

(6) 瓶

第19図320は瓶の頸部と思われる。口径は約８cmを測る。

(7) 円面硯

本遺跡では円面硯が２点出土している。第20図322は脚部のみの残存であり、脚体部には３孔の縦長方形のスカシ孔を切っており、復原では８孔になる。またスカシ上部に一条の沈線を、下部に二条の沈線を持っており、これは仕切りの意図を持つものかもしれない。第21図323はほぼ全容がつかめるが全体的に大きくひずみを持っている。スカシは持たず、陸部と海部の区別が不明確である。

(8) 甕

甕類は総数で17個体出土した。形態上からⅠ～Ⅲ類に分類した。

甕Ⅰ類（第22図326、327、329～332、第23図336、第24図338、339）

総数９個体である。口頸部は外弯気味に立ち上がり、端部で種々の形状をなす。327、329は特に外弯の具合が強く、後者は基部に段を有して、特異な形状をなす。329は肩部に格子目の叩きを、330も同じく肩部に格子目の叩きを、内面に青海波状文を施す。331は内外面とも格子目の叩きを行なうが、内面はこの単位がより大である。336はかなり大型であり体部最大径が37cmを測り、外面は格子目の叩きを、内面は青海波状文を施す。338は外面に格子目の叩きを、内面に

は平行叩きを施す。

甕Ⅱ類（第22図327、第24図338）

口縁部が直行し、端部の形状がⅢ類に似たものである。337は口縁部に一条の沈線を持つ特徴がある。

甕Ⅲ類（第24図340～342）

大型の甕の口頸部で、口縁部は長方形状をなしている。340はこの類中では小型のもので、外面に斜方向のヘラ引き文を二段にわたって施している。341、342は共に櫛描波状文を全面にわたって配しているが、341は口縁部が窪むという特色がある。

以上、A地区出土の須恵器について述べてきたが、これらの須恵器の性格等についてはB地区の小結の項にまとめて述べてみたい。（高谷）

註1．B地区出土の須恵器法量図については、出土点数が少数であり、かつ紙面の都合上省略した。

註2．本遺跡に隣接する興善寺馬場遺跡においても同様の須恵器が出土している。馬場遺跡においては、口径・器高により大型のものを椀に、比較的小型のものを杯に分けた。（『熊本県文化財調査報告書第45集　興善寺遺跡Ⅰ』本書と同時に刊行予定）

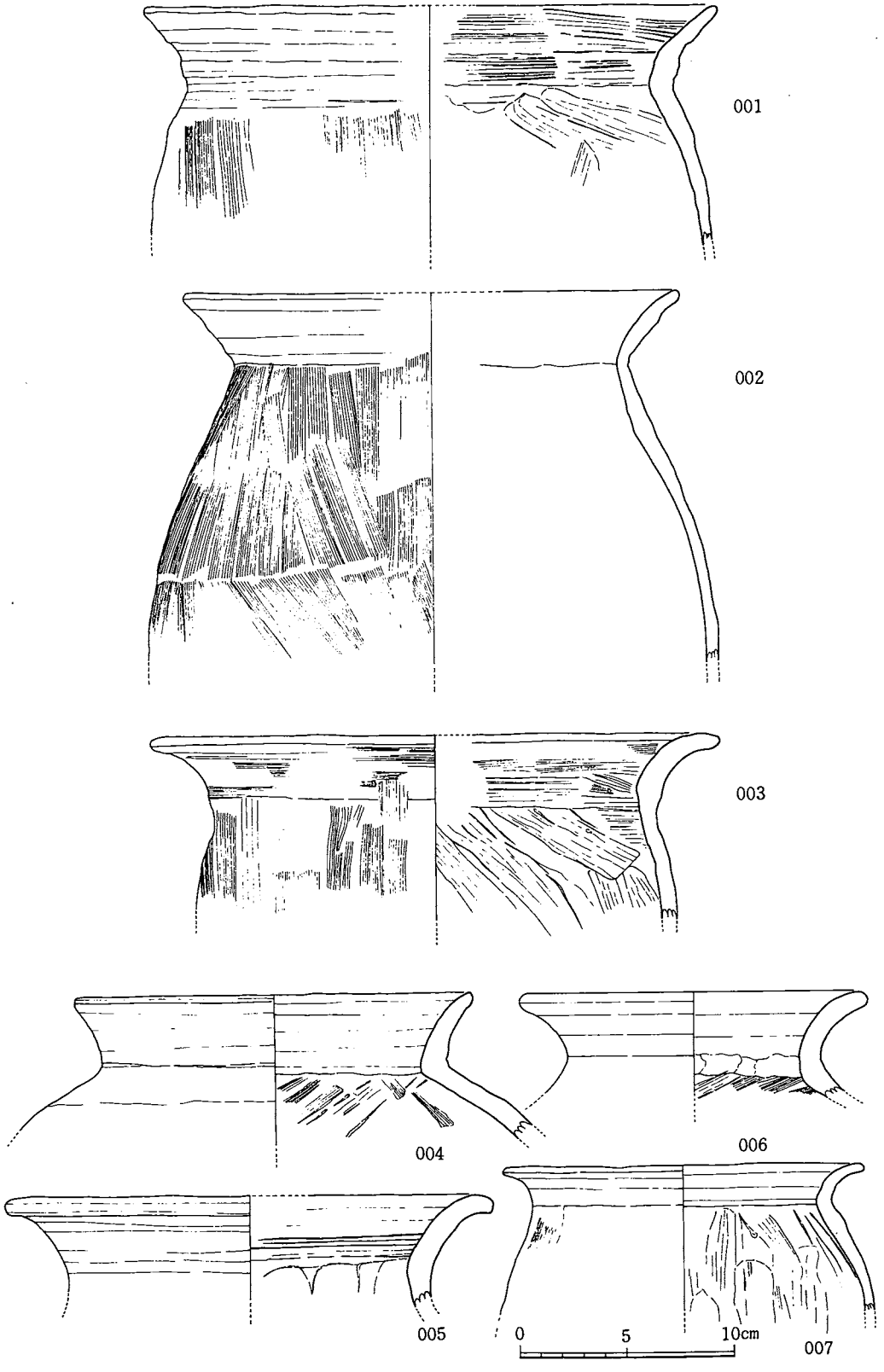
註3．註2と同様

土師器、その他（第25～37図）

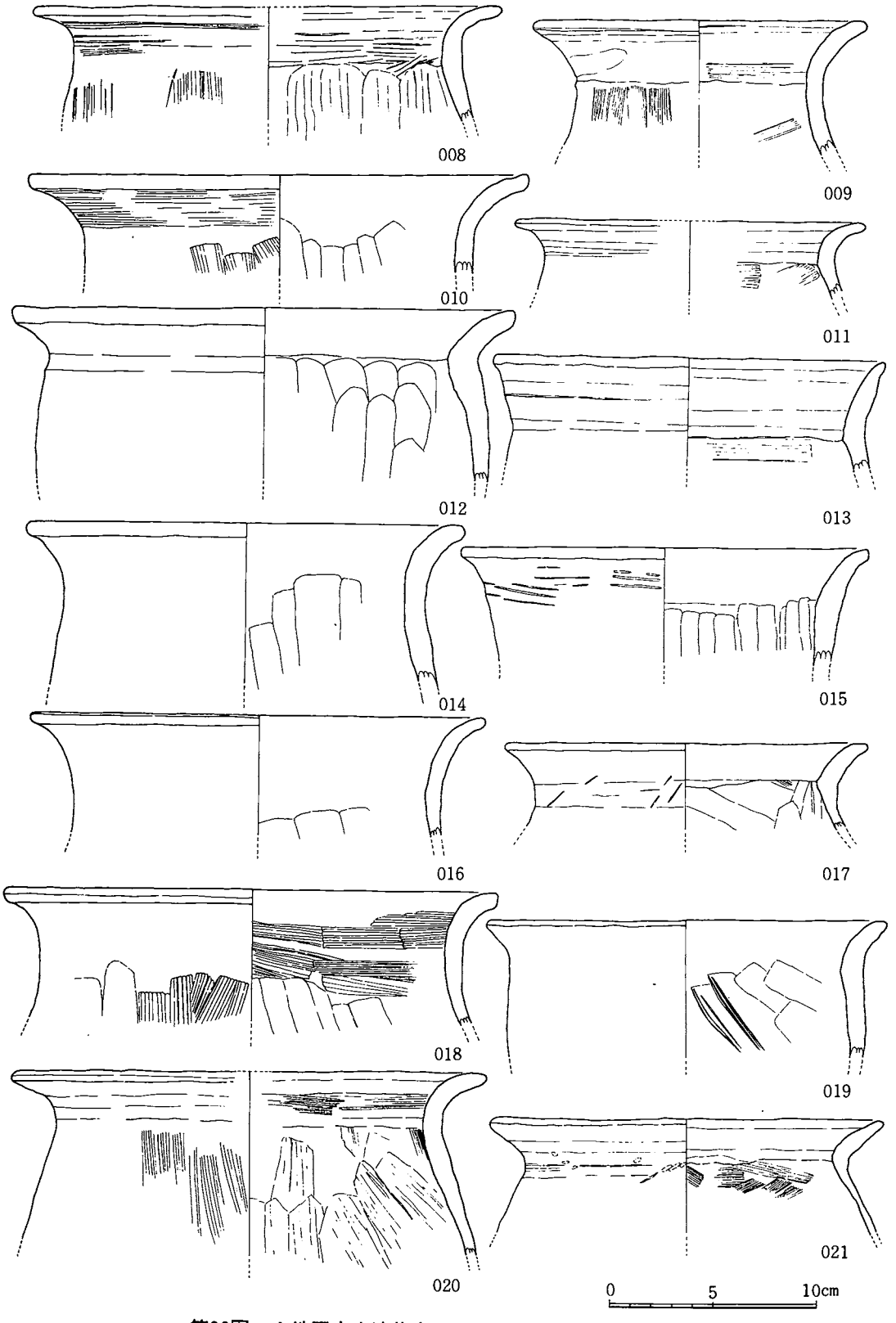
A地区からは多くの土師器が出土しており、器種には甕・甑・鉢形土器・皿・高杯・燈明皿杯蓋・杯・椀形土器・高台付杯があり、紡錘車と土錘も出土した。

甕（第25～28図）

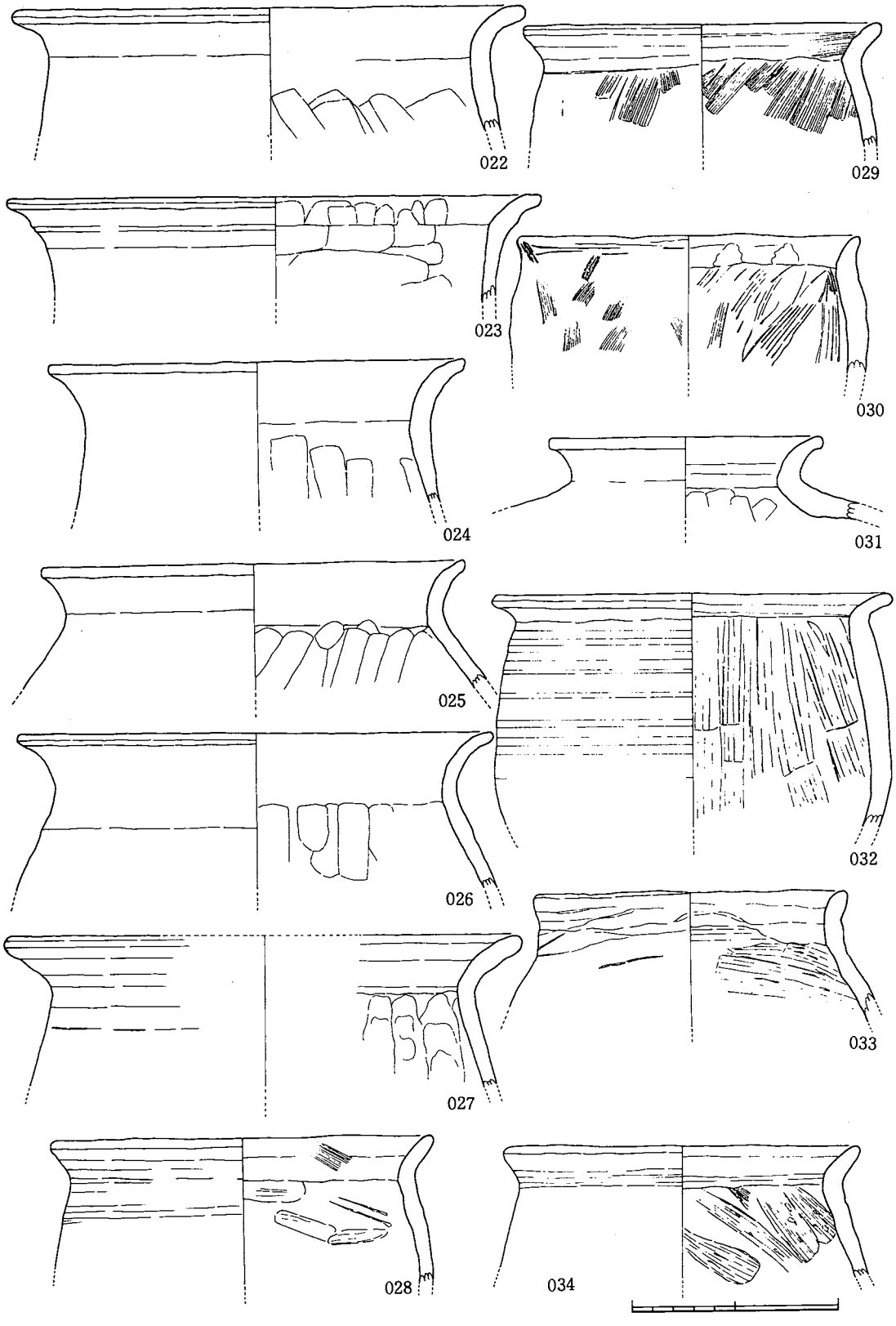
甕は48点をとりあげた。そのほとんどが「く」の字形口縁を有し、内面がヘラ削りで外面はハケ目調整を行っている。色調は褐色ないし赤褐色を呈するものがほとんどで、砂粒混じりの胎土である。(001～3）は大型の甕で外反した口縁部を有し、端部は丸くおさまる。(003）の口縁は大きく外弯している。外面と口縁部内面はハケ目、内面はヘラ削り調整である。(004）は頸部からの開きが大きく、(005・6）は大きく外弯している。(007・8）は薄く短い口縁部で大きく外弯している。(009）は頸部がすぼまり、(013）は口縁部が急角度をもって立ち上がる。(015）は頸部の屈曲がほとんどみられない。(017）は短い口縁部で頸部は稜をなしている。(018・020・022・023）は大きく外反した口縁部で、口径・頸部径とも大きい。(021）は薄い器壁で内面にハケ目調整が認められ、同じく（029）の内面にもハケ目調整がある。(030）は非常に短い口縁部が急角度で立ち上がっている。(031）は口径13.5cmを測り、短い口縁部で端部は丸くおさまる。頸部から肩部へと大きく広がっている。内面は粗いヘラ削りを行い、色調は赤褐色を呈する。(032）は口径19.6cmで、短い口縁部は強く外反する。器壁は厚く精良な胎土である。外面は横方向に丁寧なナデ調整で、内面は縦方向を主調としたヘラ削りを行っている。色調はにぶい黄橙色を呈する。(035）は口縁部が非常に厚いが、肩部からは薄くなっている。(036）は小型で口縁部と肩部との境を明確にしない。



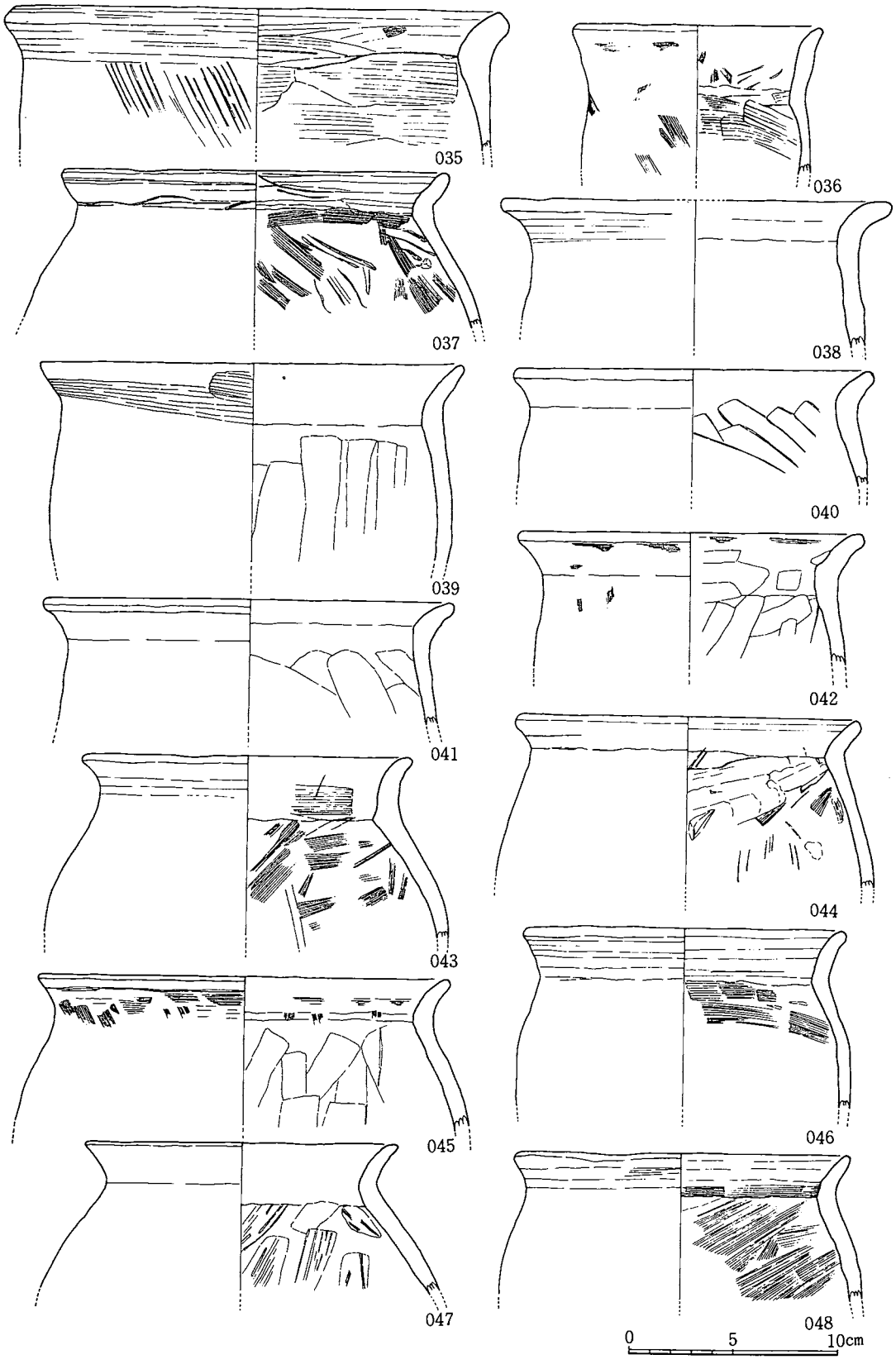
第25図　A地区出土遺物実測図・土師器（001～007）



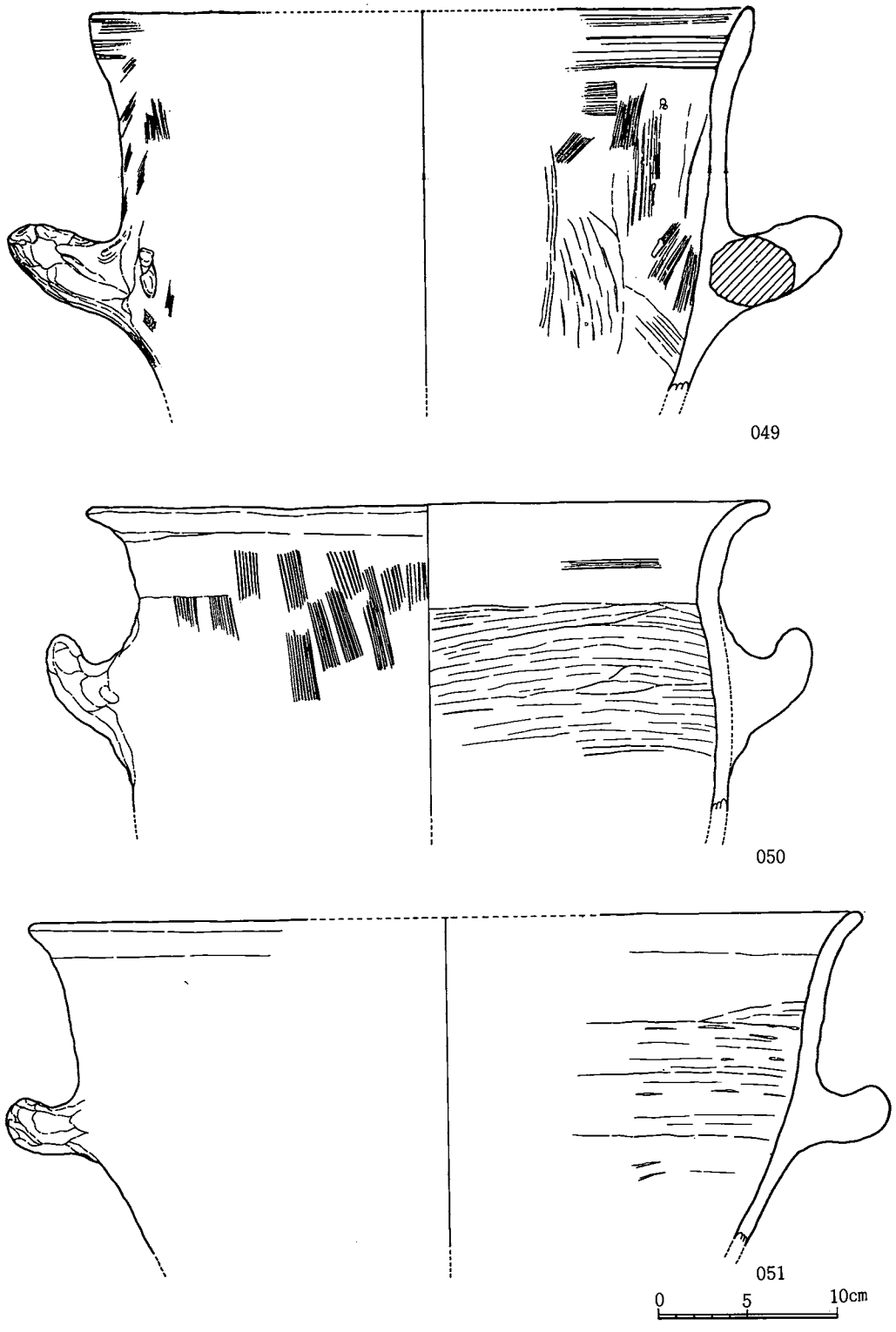
第26図　A地区出土遺物実測図・土師器（008～021）



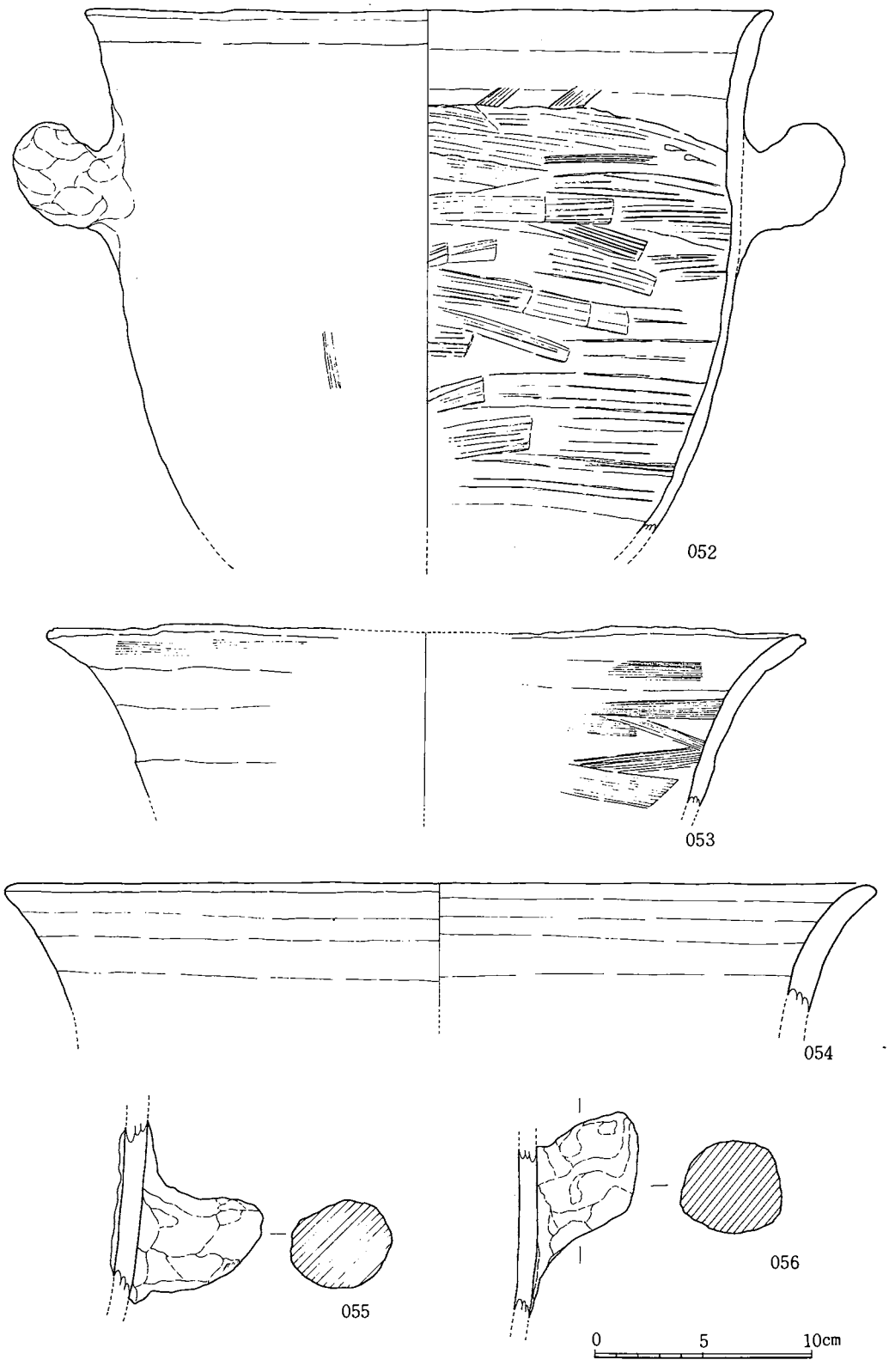
第27図　A地区出土遺物実測図・土師器（022～034）



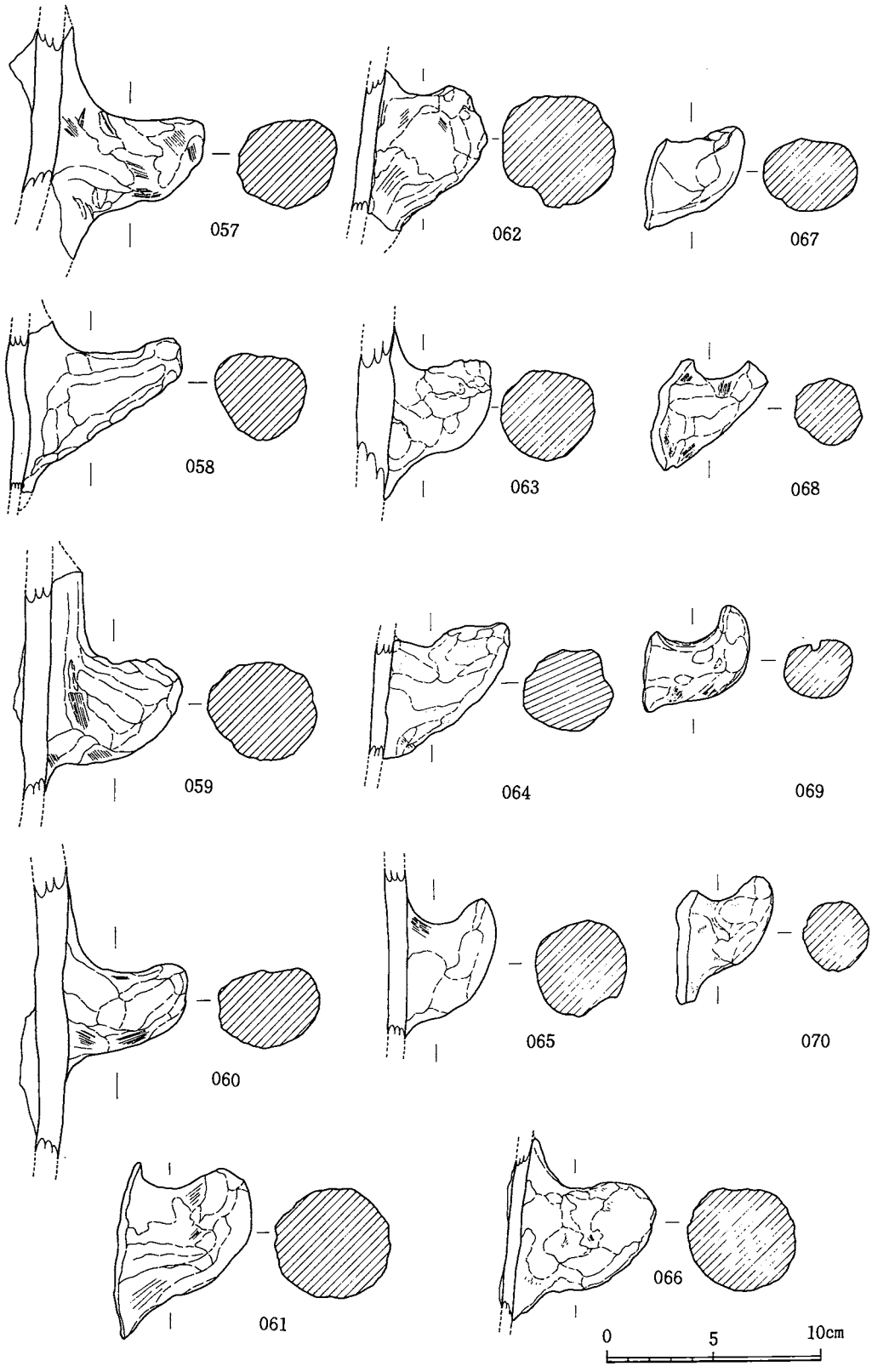
第28図　A地区出土遺物実測図・土師器（035～048）



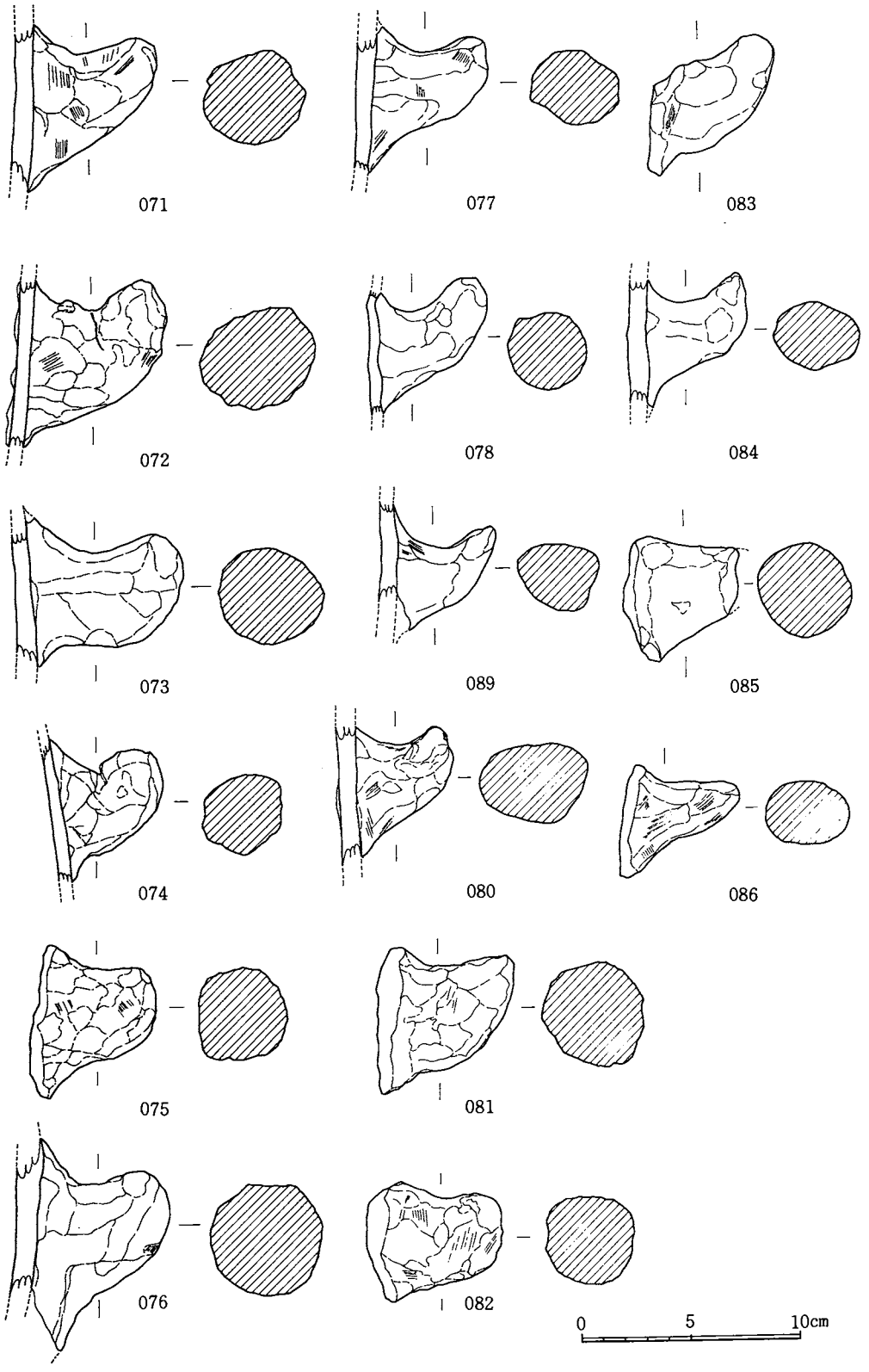
第29図　A地区出土遺物実測図・土師器（049～051）



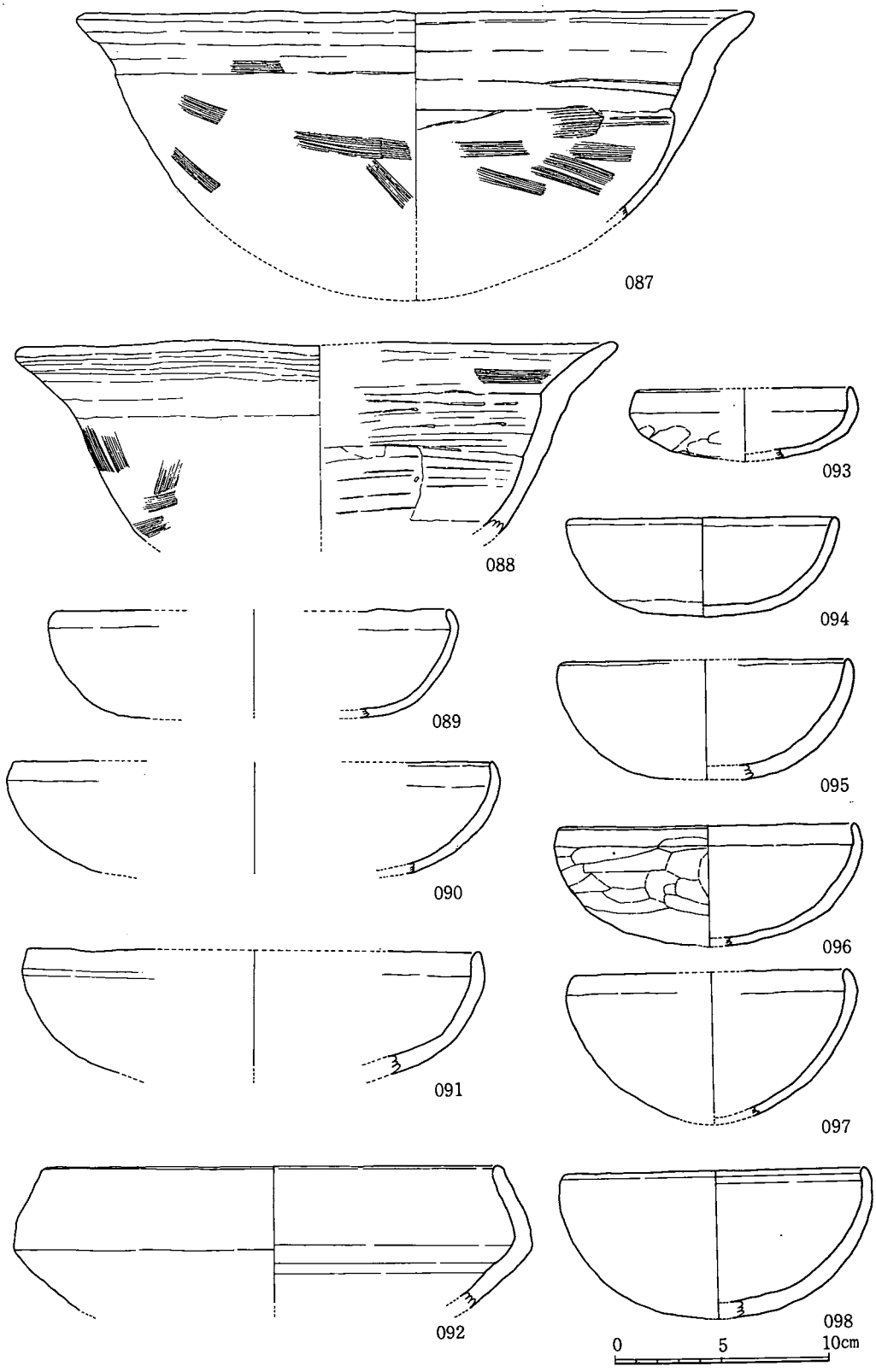
第30図　A地区出土遺物実測図・土師器（052～056）



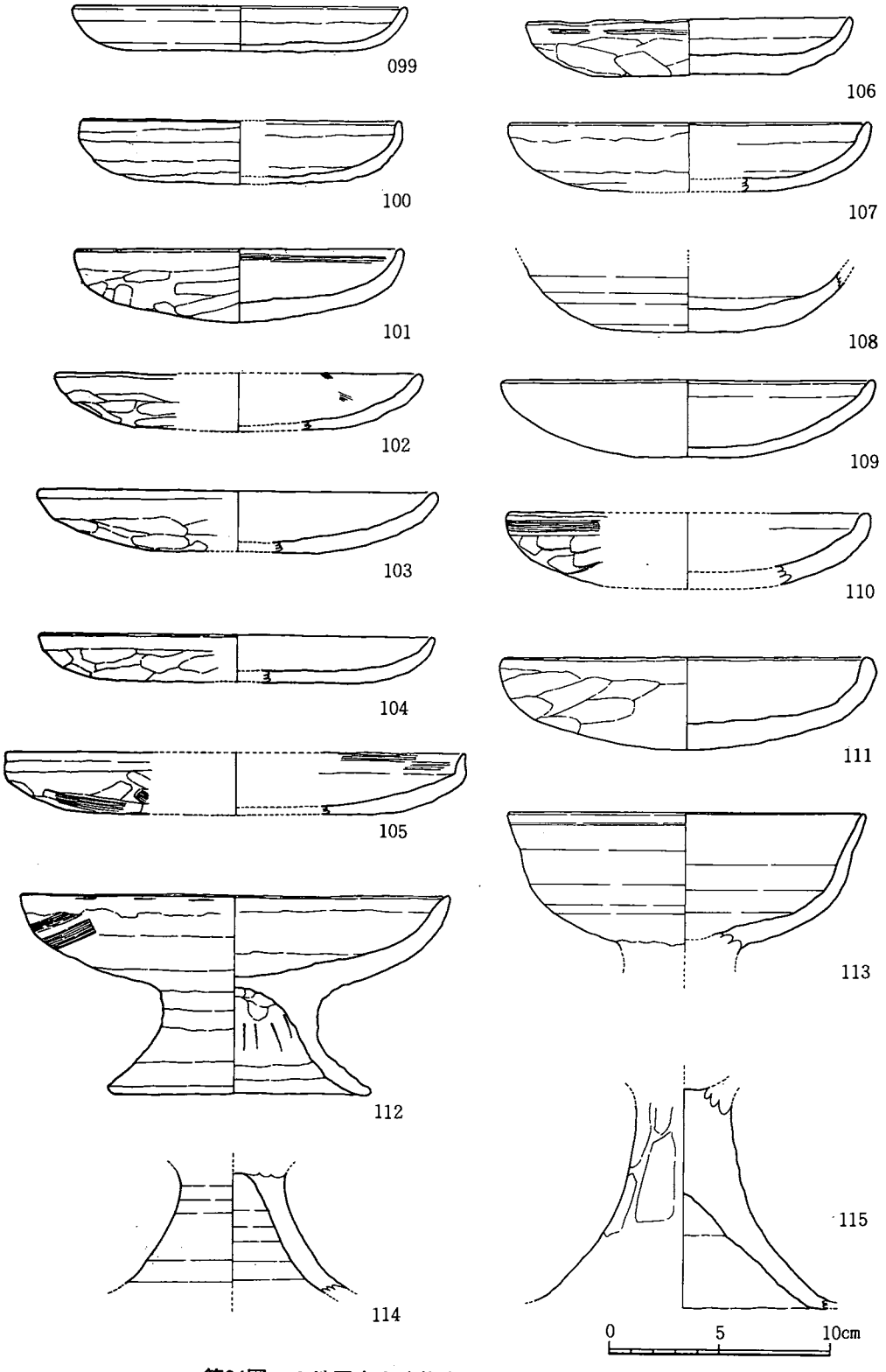
第31図　A地区出土遺物実測図・土師器（057～070）



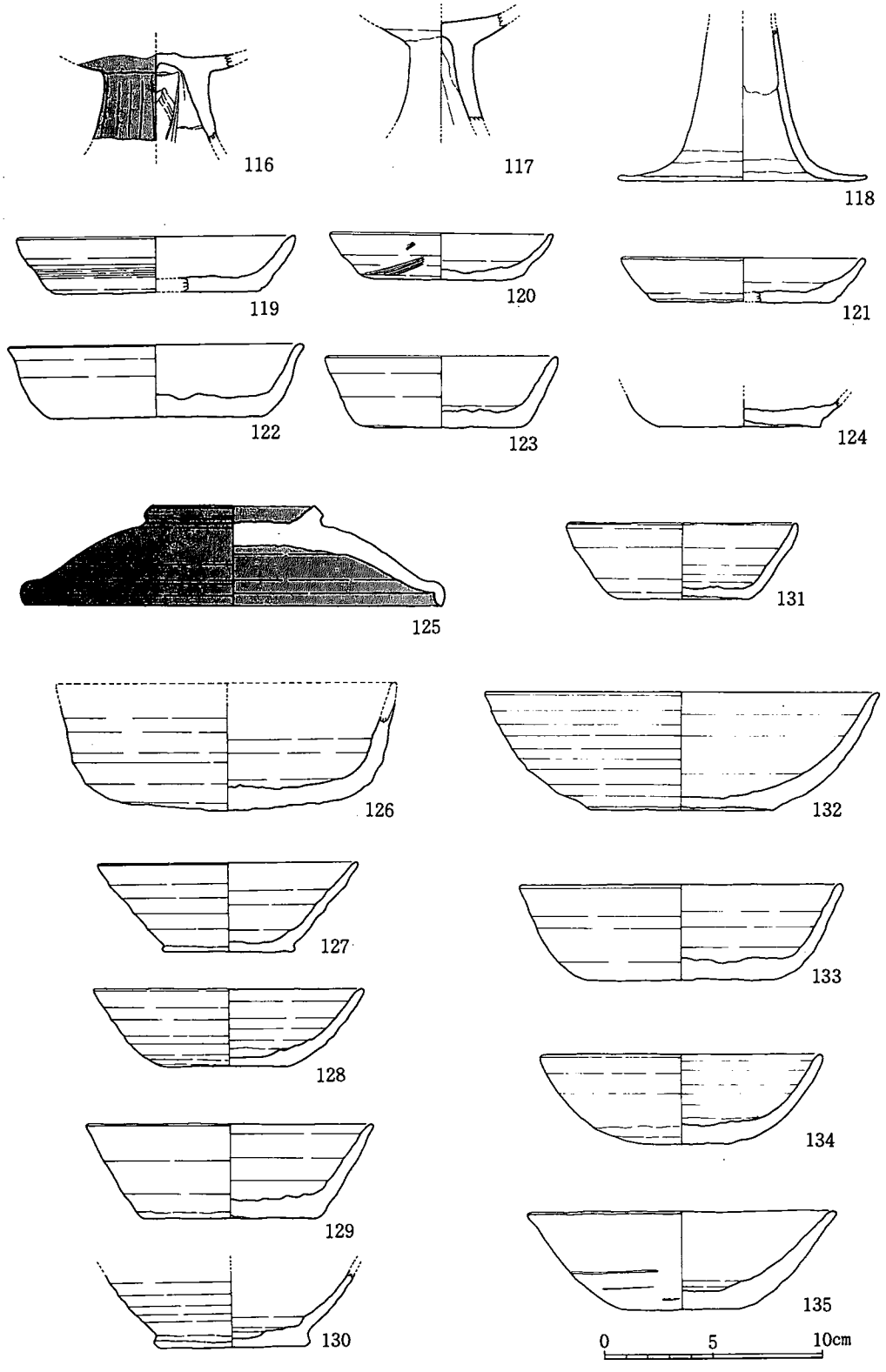
第32図　A地区出土遺物実測図・土師器（071～086）



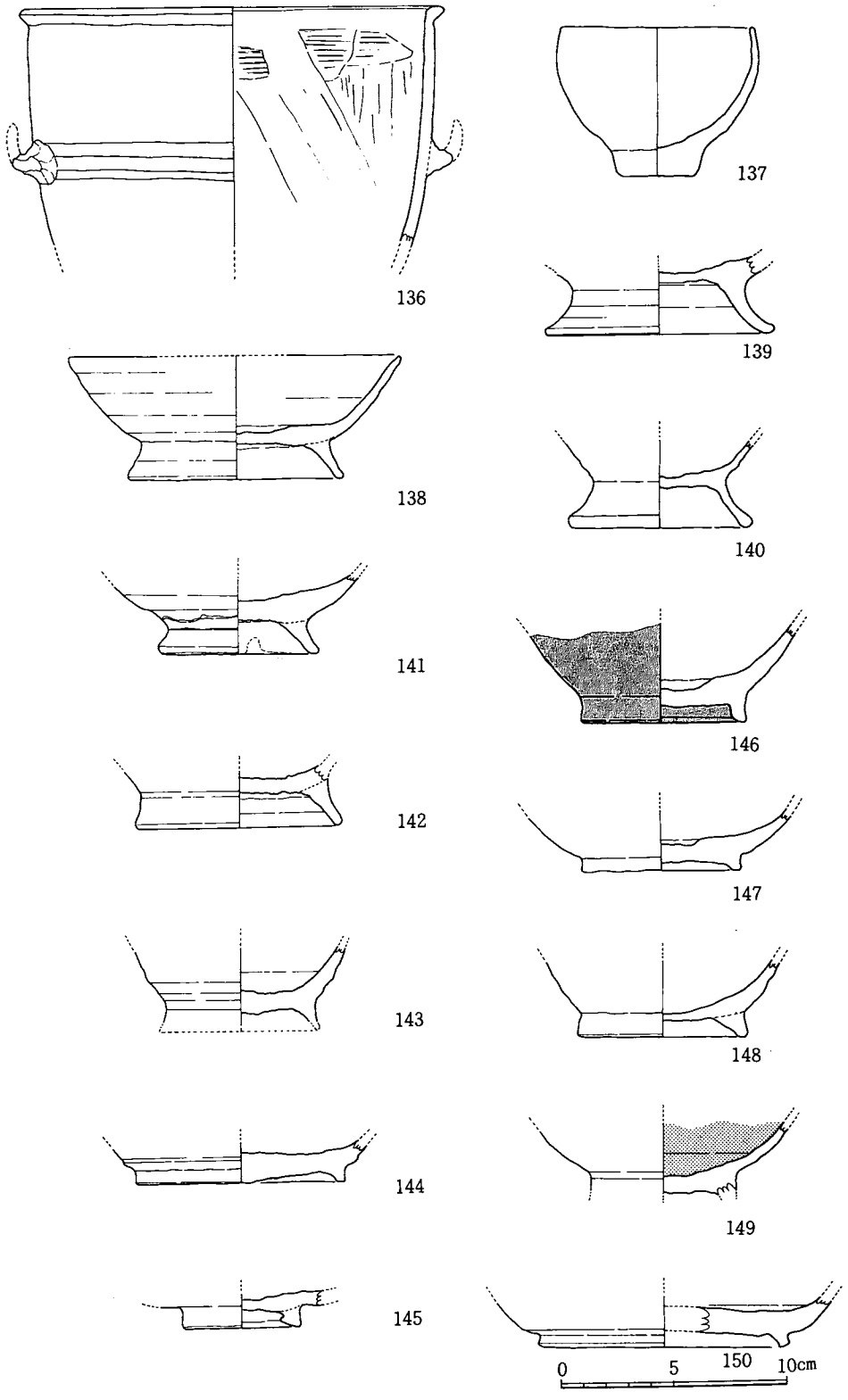
第33図　A地区出土遺物実測図土師器（087～098）



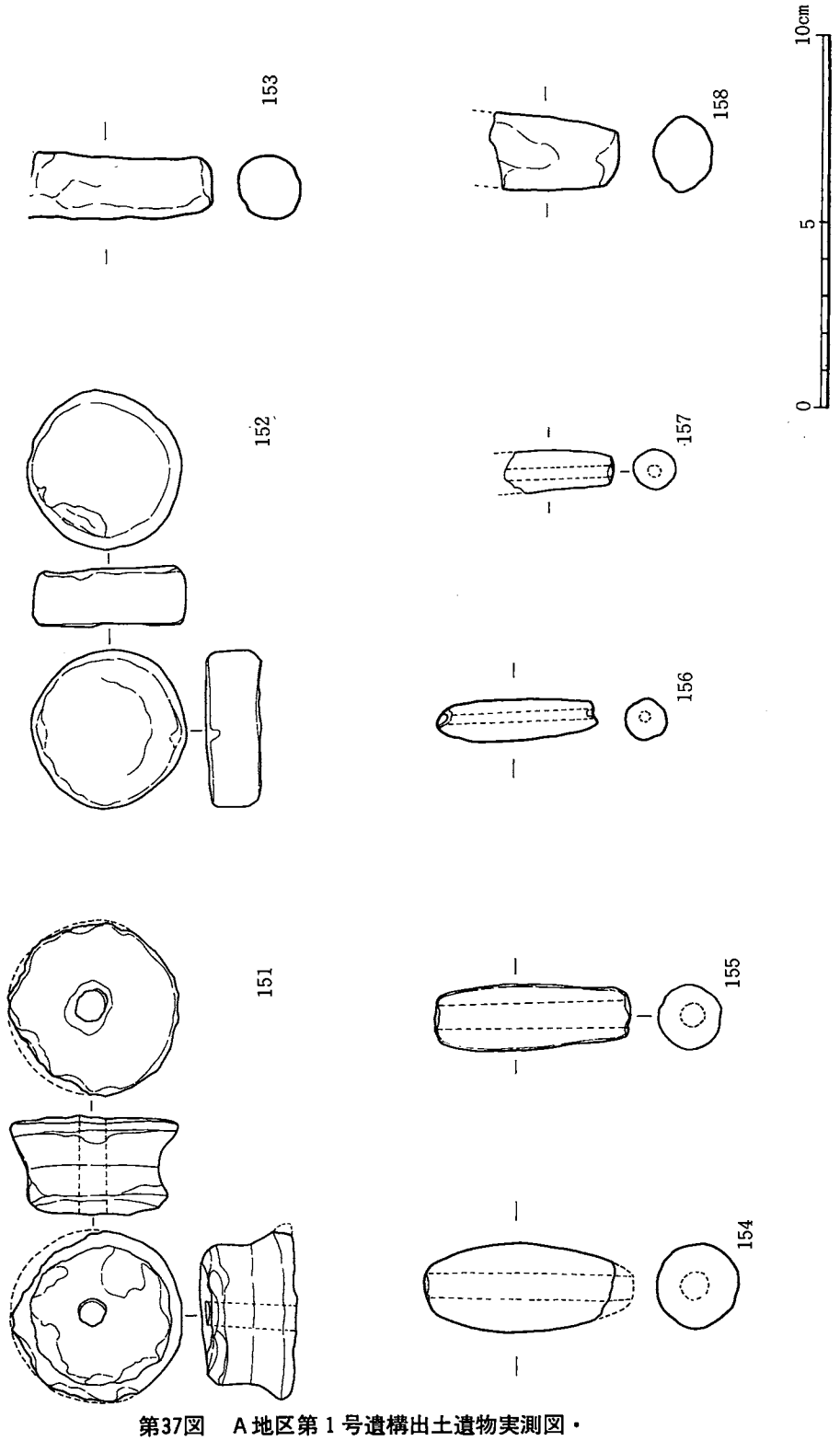
第34図　A地区出土遺物実測図土師器（099～115）



第35図　A地区出土遺物実測図・土師器（116～135）



第36図　A地区出土遺物実測図・土師器（136～150）



第37図　A地区第1号遺構出土遺物実測図・
紡錘車・土錘（151～158）

甑（第29～32図）

（049～054）はいずれも大型の甑である。（049）は推定で口径37.4cmを測る。把手の接合部から垂直に立ち上がり口縁部がいく分外反している。把手はややや平たく直線的に斜上する。把手は手ナデによる調整である。外面はハケ目調整で、内面は縦方向を主調としたヘラ削りである。（050）は推定で口径38.5cmを測る。口縁部は把手接合部から外弯し立ち上がり、端部は丸くおさまる。把手は屈曲し立ち上がり、手ナデによる調整である。外面はハケ目調整で内面は横方向のヘラ削りである。（052）は推定で口径32.1cmを測る。口縁部は把手の接合部からやや外反しながら立ち上がる。胴部はややふくらみながら底部へつづき、胴部の器壁は薄い。内面は綿密なヘラ削りを行っている。（053・054）も甑の口縁部片で、（055～082）はいずれも把手である。把手は大きさに変化があり、形も、屈曲して立ち上がるもの、直線的なもの：一握りにした状態を示すもの等に分けられる。（069）は縦方向に一条の凹線が施こされている。

鉢形土器・鉢（第33図087～098）

（087）は推定で口径31.9cmを測る。口線部は外反し厚い。胴部はややふくらみ底部へ続き、胴部の器壁は非常に薄い。内外面にはハケ目調整が施こされている。（088）も同様の鉢形土器で両者とも煮たきに用いられたものと思われ、甑とセットをなすものであろう。（089）は推定で口径18.5cmを測る。口縁部は内弯し、端部は丸くおさまる。胴部がややふくらみ底部はふくらみを持つものと思われる。色調は赤褐色を呈する。（090）は口径22.4cmで、（091）は21.3cmをそれぞれに測り、非常に大きい。（092）は胴部と口縁部との境に屈曲部を有しており、底部は丸くおさまるものと思われる。精良な胎土で、色調はにぶい黄橙色を呈し、他の鉢と異なっている。（093）は口径10.0cmを測る小型のもので、（097・098）は深い器形である。

皿（第34図099～111）

13点の皿はほとんどが、色調を赤褐色を呈し、雲母を含む胎土を用いている。器面はヘラ削りとナデ調整を施こしている。口縁部は外側へやや広がるもの、直口するものがあり、端部はほとんど丸くおさまる。口径は14.7cm～21.1cmで、器高も2.1cm～4.1cmと幅がある。（105）は口径が最も大きく、口縁部は体部から屈曲し、ほぼ垂直につまみ上げられており端部は細い。

高　杯（第34・35図112～118）

（112）はほとんど稜を有しない皿状の杯部で、ラッパ状に開く脚部との接合をなしている。端部はいずれも丸くおさまり、ほとんどが手ナデによる調整である。筒部内部には一部ヘラ削りが認められる。雲母混じりの胎土で、色調は赤褐色を呈する。（113）の杯部は体部からは明瞭な稜をもつことなく立ち上がり、端部は丸くおさまる。ナデによる調整を行い、精良な胎土で、色調は浅黄橙色を呈している。（116）は筒部片で精良な胎土を用い、器面には丹を施こしている。（118）は脚部で強く屈曲し裾部につづき、端部は非常に細くなっている。精良な胎土であるが、焼成が悪く器面が荒れている。

燈明皿（第35図119～124）

（119）（124）の底部には糸切り痕があり、他はヘラ切り離しである。

杯　蓋（第35図125）

（125）は所謂輪状ツマミを接合した杯蓋である。ツマミの端部はやや丸みをもつ。天井部はやや高く端部は屈曲している。内外面には丹を施こしている。

杯（第35図126～135）

杯の中では（132）が最も大きく口径18.2cm、器高5.3cmを測る。体部は内弯ぎみに立ち上がり、底部はやや上げ底となる。

鉢（第36図136）

（136）は把手を持つ鉢で、口径は19.0cmを測る。胴部は内弯ぎみで、口縁部は外側へそっている。把手部分には二本の凹線をめぐらしている。

椀形土器（第36図137）

（137）は手づくねの土器である。底部は平たく、体部はふくらんで立ち上がる。多量の砂粒が混じり、焼成は不良である。

高台付杯（第36図136～150）

（139～142）の高台に高い。（146）は丹が施こされ、（149）は黒色土器で内面に施こされている。

その他（第37図151～158）

（151・152）は紡錘車で（152）は孔が見られない。（153）は支脚片と思われる。（154～158）はいずれも土錘である。　（江本）

瓦

今回の調査で瓦はA地区から135点出土した。しかし、これは遺構に伴ったものではなく、Ⅰ～Ⅳの各層に渡って散布した状態で出土しているが、これは興善寺廃寺の瓦が散乱したものである事はその瓦の種類から見て間違いない。その135点の内、大半は細片であったが、軒瓦5点、鬼瓦1点が含まれていた。又、丸瓦、平瓦類も叩き目等にいくつかの種類が見られ、それ等の代表的なものについて述べる事にする。

鬼面文軒丸瓦（第38図(1)）

内区のみで、周縁及び丸瓦部は全てはずれて残っていない。内区直径15cm、厚さ3.8～3.0cmを測る。瓦当面はかなりデフォルメされた鬼面を表わしている。瓦当面上縁部中心に半円状の隆起を作り、それから左右に同様のやや小さめな隆起を3個ずつ連接している。しかし向って左側の3個の内、下側の2個は、後の撫で調整により潰れている。この半円状の隆起は瓦当面下縁にも有り、上縁部のものが7個に対し、下縁部は3個の隆起を作っている。この半円状隆起は、恐らく上縁部が頭髪及び鬢髪、下縁部が鬚を表現しているものと思われるが、この手の表

現は他にあまり類例を見ないものである。又、眼は、前記の半円状隆起より約2.0cm下った位置に丸く表現している。顔の表現の中で、頭髪、鬚の表現に次いで最も良く隆起している所である。眼の直径約2.2～2.0cmを測る。両眼の上には三ヶ月形の眉を表わし、眉と眉との間には眉と同じ三ヶ月形を眉と逆方向に2個配し、眉間の皺を表わしている。さらに、両眼の外側にも三ヶ月形の隆起を内側向きに配し、眼の表現を強くしている。又、鼻は「の」字状の渦巻きを向き合わせた形で表現し、眼の下端と隆起線で繋がっている。さらに鼻の下端は左右に隆起線が分かれ、口の表現へと繋がっている。鼻の両脇にはやや幅の広い上方向に反った隆起線で髭を表現している。口の表現は、鼻の下端から分かれた隆起線によって形作られており、口の中に上歯を4個表現しているが、下歯の表現はない。

周縁は全く残っていないが、この志水遺跡の北側に隣接した馬場遺跡で、周縁部の残っている鬼面文軒丸瓦が出土しており、それから判断すると、周縁部には1本の笵によらない手彫りの沈線が巡り、内区より高く突出している。又、瓦当裏面下縁は、丸瓦半截時にやや幅を持たせて切っているので、瓦当裏面中央より高くなっている。しかし、これは、二次調整によって削り取り瓦当裏面と同じ高さにするものと、全く二次調整をしないものとがあるようである。

瓦当裏面は支持土を足した後、指頭によって縦、斜方向に撫でを施し、丸瓦との接合部側はその接合部にそって支持土を撫で付けている。

丸瓦と瓦当面の接合は、半截前の円筒のままの丸瓦に瓦当部を嵌め込む技法で行なっている。そのために、瓦当部側面には、丸瓦内面の布目痕や模骨痕の一部が転写している。

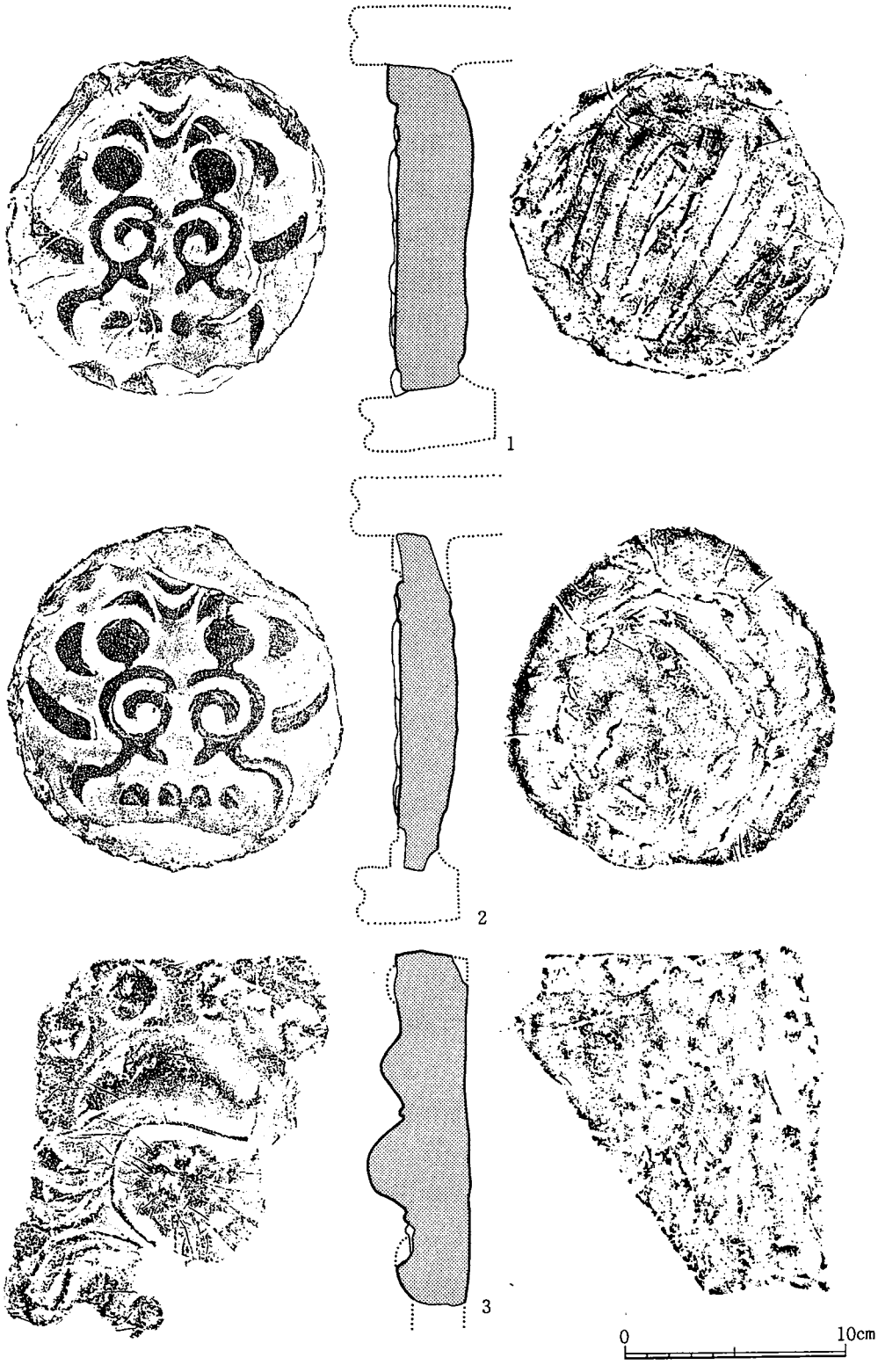
胎土は、若干砂粒が目立つが、良く精製されている。焼成は堅緻であるが、瓦当表面には焼成時の亀裂が縦横に走っており、色調は全面的に灰色を呈している。

○鬼面文軒丸瓦（第38図(2)）

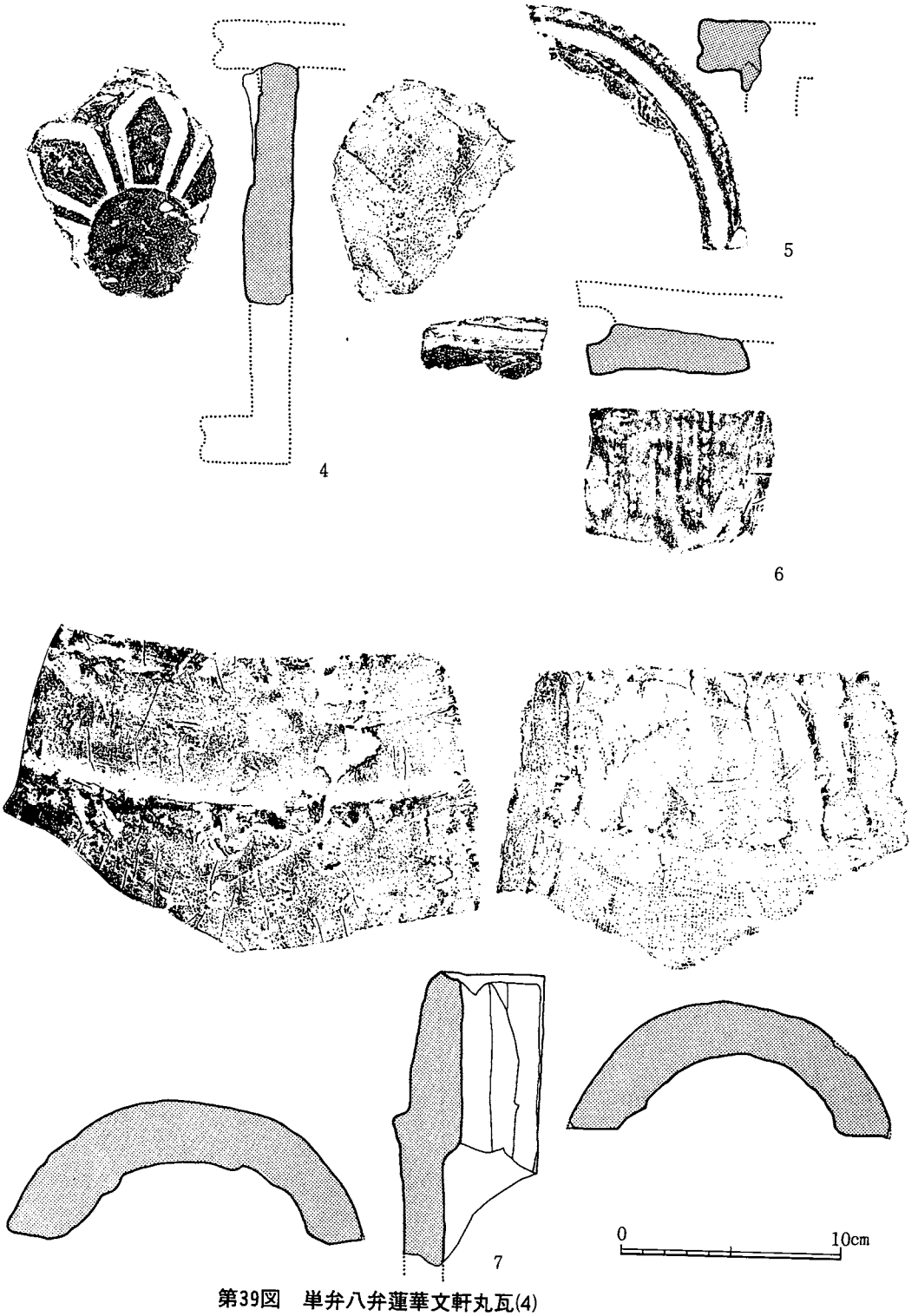
(1)の鬼面文軒丸瓦と同笵の瓦である。瓦当表面の製作は同一であり、又、内区直径も約15cmと同じである。この瓦も周縁が全てはずれており、上縁と下縁にある半円状隆起の連なった部分は上縁部が左端2個のみ残っており、下縁の3個あるべき部分は周縁と共にはずれ、全く残っていない。(1)の瓦との差異は(1)に比べて厚さが最大部で約3.0cmと薄い作りとなっていることである。瓦当裏面は、支持土を薄く足した後、指頭による押圧と丸瓦の円に沿った撫でを施しているが、丸瓦との接合部側は支持土が剝離している。又、瓦当部側面には(1)と同じように、丸瓦内面の布目痕が部分的に転写している。

胎土は良く精製されているが、焼成はあまり良くない。色調はほぼ全面的ににぶい橙色を呈するが、瓦当表面の中心部付近は、一部灰色を呈している。この弱い焼成と色調は本来の焼成のままなのか、二次的な火災等に起因しているのかは判断がつかない。

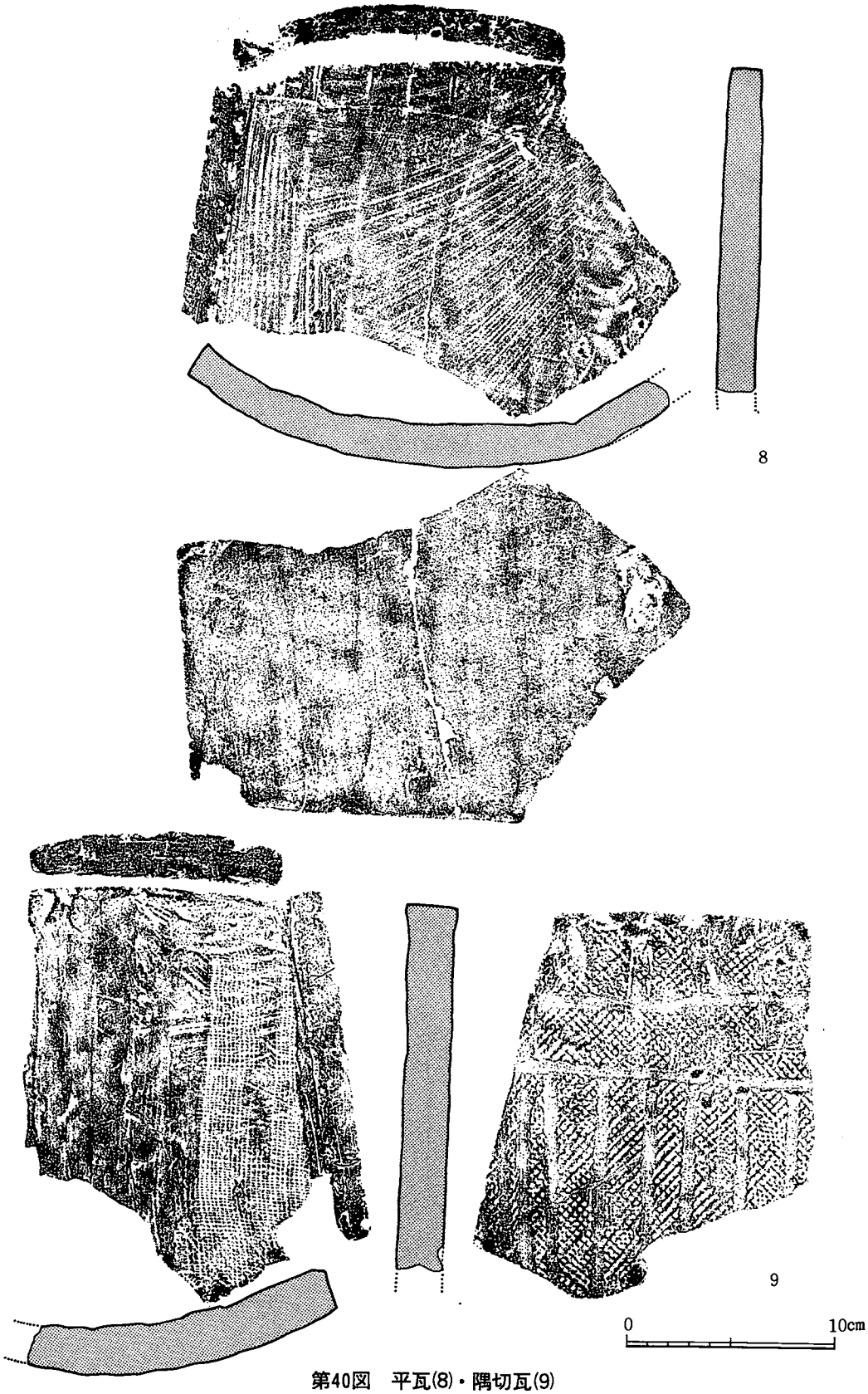
前述のように、この瓦も(1)と同じく周縁は全く残っていないが、周縁の有り方は(1)で想定したものと同じであろう。



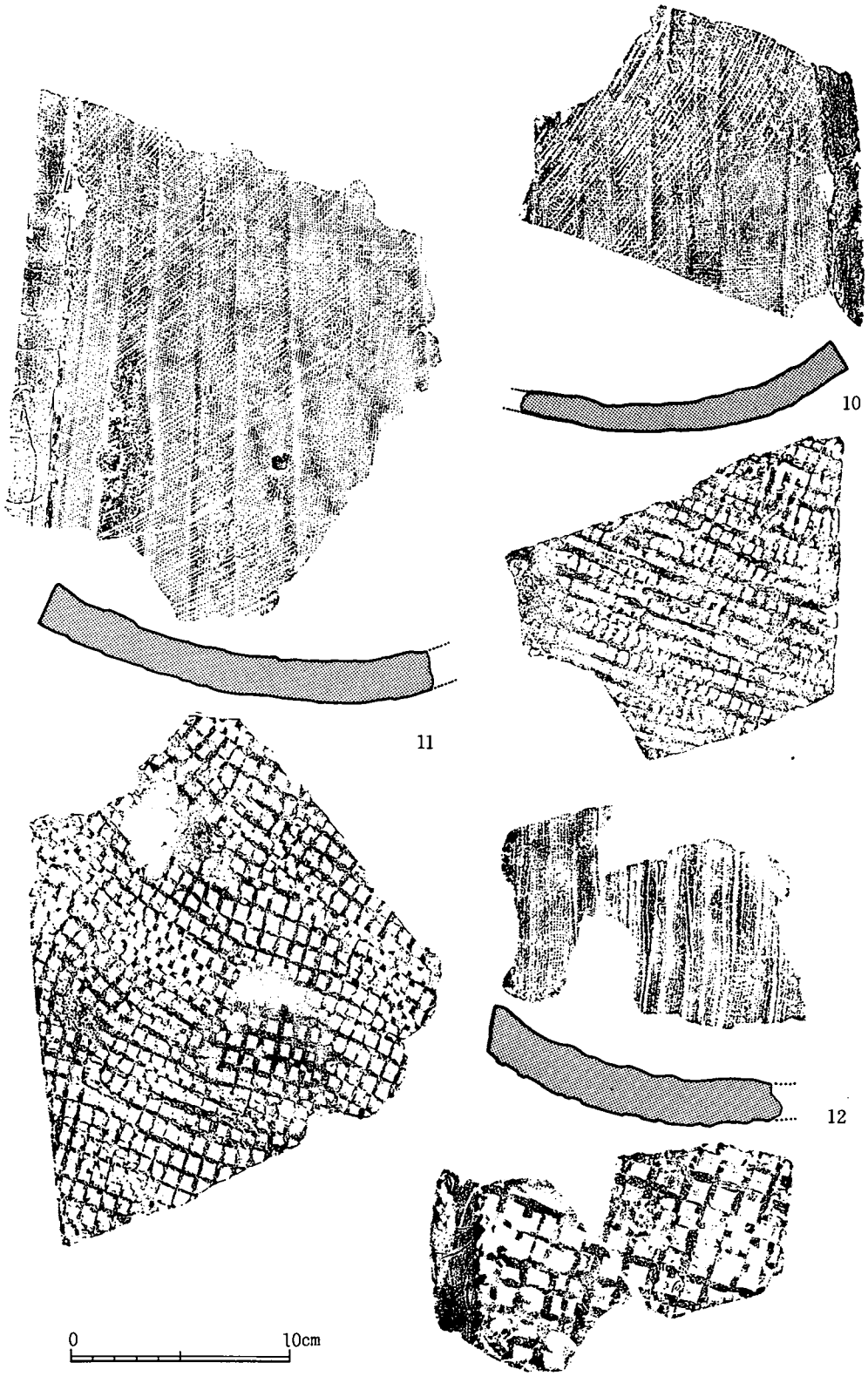
第38図　鬼面文軒丸瓦(1)(2)　　鬼面文鬼瓦(3)



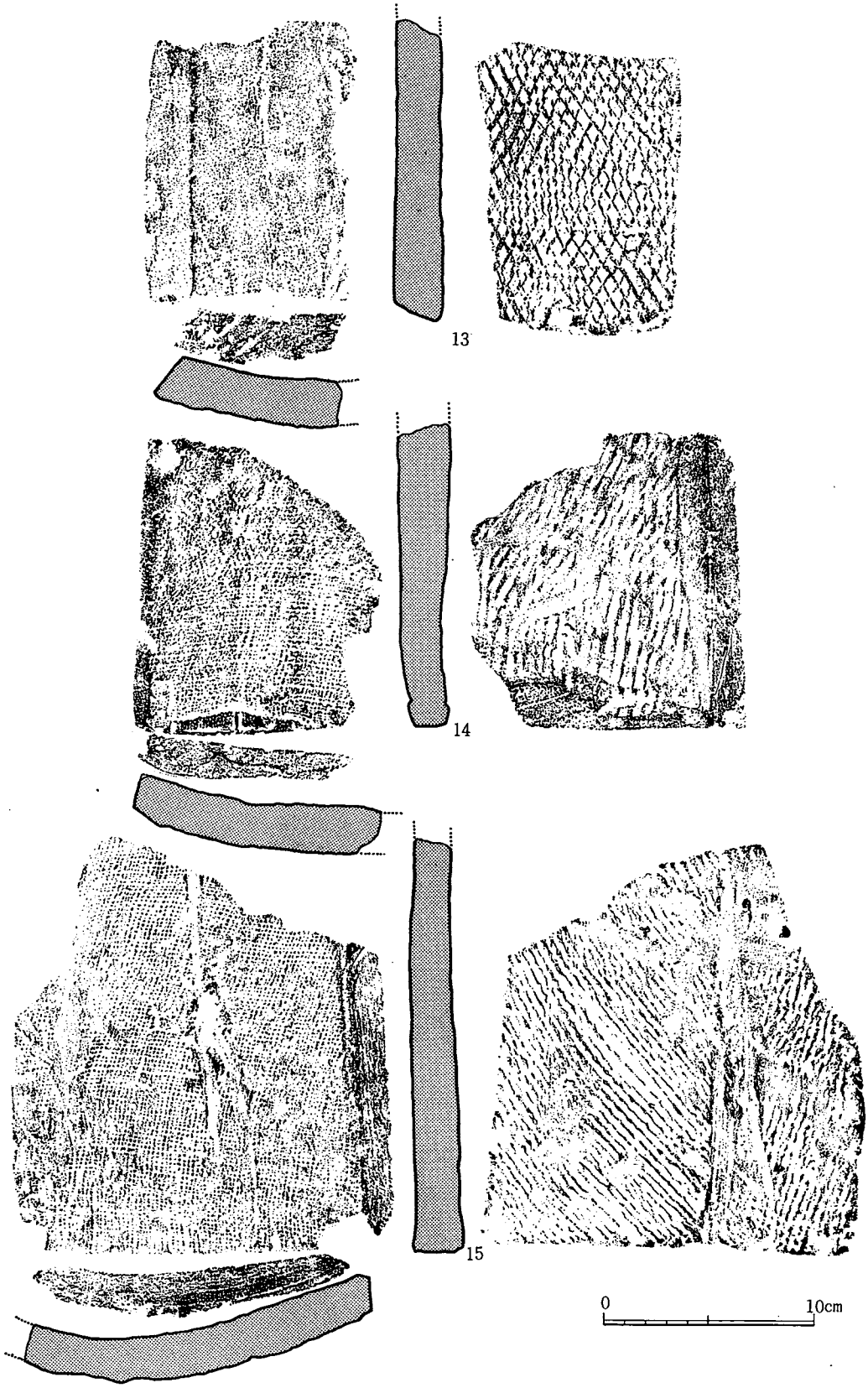
第39図　単弁八弁蓮華文軒丸瓦(4)
鬼面文軒丸瓦周縁(5)　重弧文軒平瓦顎(6)　丸瓦(7)



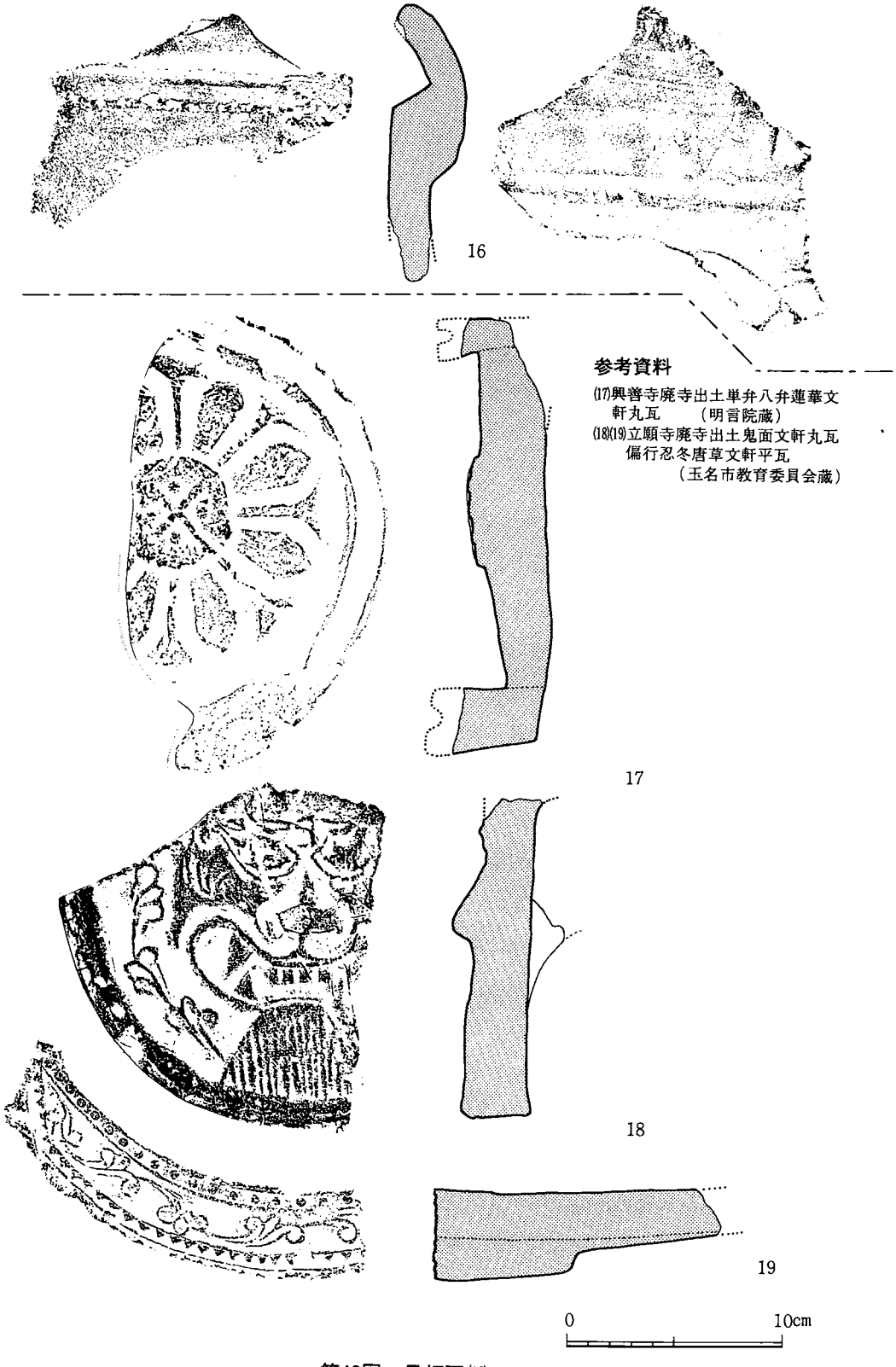
第40図　平瓦(8)・隅切瓦(9)



第41図　平瓦（10～12）



第42図　平瓦



参考資料

(17)興善寺廃寺出土単弁八弁蓮華文軒丸瓦　（明言院蔵）
(18)(19)立願寺廃寺出土鬼面文軒丸瓦
偏行忍冬唐草文軒平瓦
（玉名市教育委員会蔵）

第43図　目板瓦(16)

○鬼面文鬼瓦（第38図(3)）

小型の鬼瓦で全体の約$\frac{1}{4}$程の破片である。残存部最大長径16.3cm、最大器厚4.8cmを測る。全体的に平板な作りであるが、眉と眼は強く隆起し、頬も強く隆起していたものと思われるが、今は剝離している。又、眉の上には、眉のカーブに沿って直径2.5cmの丸く隆起した珠文が4個並んでいる。ただし、4個の内3個は剝離して、その痕跡が残っているだけである。さらに、眉、眼、頬の周囲には、それぞれの形に沿って細い圏線が巡っている。又、眼の外側には3本の隆起線があり、眼尻の皺を表現している。

裏面は、削りと撫で調整を施していると思われるが、器面の風化によりあまり判然としない。側面は削り調整を施している。

胎土は密であるが、点々と小石が混入しており、焼成は普通である。色調は灰白色を呈している。

○単弁八弁軒丸瓦（第39図(4)）

単弁瓦の破片で復原弁数は8弁になる。弁は平板な作りで、弁の周囲に凹線を巡らして弁を形作っている。弁の頭は剣形になり、弁長は約4.5cmを測る。中房の中は無文である。裏面は縦、横方向に削り調整を施している。中房部での厚さ2.2cmを測る。胎土は密であるが、瓦当面に所々小石の抜けた痕跡がある。焼成は堅緻で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

この瓦の類例（第43図(17)）が明言院（日隈正道住職）にあり、弁の作りはほぼ同じであるが、中房には十字形の隆起線と4個の蓮子があり、又、周縁は一重の沈線を巡らしている。恐らくこの明言院の例と基本的には同じ瓦であり、笵の違いによって若干の差異があるものと思われる。

○鬼面文軒丸瓦周縁（第39図(5)）

軒丸瓦の周縁部の破片である。周縁の基部に鬼面文軒丸瓦に特有の半円形の連接した隆起が3個付いている事から鬼面文軒丸瓦の周縁である事がわかる。周縁の中心より若干内寄りに一条の沈線を巡らしている。その沈線は笵を使わず手彫りで、撫で調整施している。周縁基部にに付いている3個の半円状連接隆起は、周縁に楔形に切り込みを設けて接合している。又、この周縁の断面には粘土紐の接合痕があり、この破片はそこから欠けている。さらに周縁の外側表面（丸瓦凸面）には撫で調整を施しているが局部的に1目が4×2mm、刻線幅3mmの小さい格子目の叩き痕がみられる。

この破片の復原部位は、周縁基部に付いている半円状連接隆起文がまだ左に続いている痕跡があり、鬼面文軒丸瓦の場合上端が7個連接、下端が3個連接となっているので、3個以上連接している場合は、上端の隆起文である事になる。それに当て嵌めて考えると、瓦当面内区上端中心の半円状隆起から右側の3個がこの周縁に付いているものという事になり、周縁全体の右上約$\frac{1}{4}$がこの破片である事がわかる。

周縁部の厚さ2.3cmを測り、胎土は密である。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する。

○重弧文軒平瓦顎（第39図(6)）

軒平瓦の顎部の破片であり、平瓦との接合部で外れている。瓦当部にある凹部は重弧文の沈線で、凹部が大きい所から沈線は１本であろう。瓦当面は削り調整を施し、顎部表面には１目の大きさ４×２㎜、刻線幅３㎜の目の小さい格子目の叩きがあるが磨滅のため、あまり判然としない。第39図(5)の鬼面文軒丸瓦の周縁に付いている格子目叩きとほぼ同じものと思われる。又、顎部後面には削り調整を加えている。平瓦との接合面には削り調整を施した痕跡があり、接合前に表面を整えたものと思われる。

顎部の厚さ2.0～1.5㎝、顎の幅7.0㎝を測る。胎土は密であるが焼成はあまり良くない。色調は灰白色を呈し、平瓦との接合部は橙色を呈している。

○丸　瓦（第39図(7)）

玉縁付丸瓦の破片である。凸面は玉縁部まで横方向の撫で調整を施している。玉縁と丸瓦部との境の段差は削り出した上に撫で調整を加えて整形しており段差は浅い。凹面は玉縁の狭端部まで布痕が観察されるが、玉縁部凹面は箆状工具を縦に当てて横方向に回転させて削りを施しており、布痕は局部的にしか残っていない。さらに玉縁部狭端面は削りを施して調整している。この狭端面の削り調整の後、前述した玉縁凹面の削り調整を加えている。凹面における丸瓦部と玉縁部との段差は、桶状工作台そのものの段差により形成されており、２次的加工は施されていない。左右の側面は削り調整を施し、本来の分割方法は不明である。又、凹面の左右側縁には削り調整による縁取りがある。

丸瓦部外径16.4㎝、内径11.2㎝、厚さ3.0～2.2㎝、玉縁部での外径14.8㎝、内径10.0㎝、厚さ2.4㎝を測る。胎土は若干砂粒が目立ち、焼成は普通である。色調は灰白色を呈する。

○平瓦（第40図(8)）

狭端部の破片である。左側面と狭端面が残っている。左側面は削りを施しているが、削りの方向は縦方向ながらも広端→狭端、狭端→広端のいずれかは特定できない。又、この削りが側面の全面に及んでおり、分割方法は不明である。側縁の縁取りはない。狭端面は横方向の削りを施しており、凹凸両面縁の一部に角度の浅い縁取りが見られる。凸面側の表面調整は縦方向の削りと撫で調整を施し、丁寧な仕上げをしている。凹面には８本の模骨痕が認められ、１㎠の糸の経緯13×12本を数える目の小さい布痕が認められる。糸切り痕は部分的に認められる。粘土の継ぎ目は見られない。

厚さ2.0㎝を測り、胎土は若干砂粒の混入が目立ち、焼成は普通である。色調は灰色を呈する。

○隅切瓦（第40図(9)）

隅切瓦狭端部の破片で、右側面と狭端面が残っている。狭端面、右側面共に削りを施し、それぞれ凹面側に部分的な縁取りがある。側面の削り及び縁取りは、狭端→広端方向に行なって

いる。狭端面の削りの方向は凹面を上にして見て右→左である。凸面には、1目3×3㎜、刻線幅1～2㎜の目の小さい格子目叩きが全面に施され、その上から、横方向2本、縦方向8本の撫でが加えられ、その部分だけ格子目叩きが消えている。凹面には7本の模骨痕が見られ、1㎠当りの糸の経緯9×5本を数える布痕がある。しかし、一部には布痕の上から縦方向の削りを加えており、布痕は右側縁寄りだけに残っている。

厚さ2.4㎝を測り、胎土は緻密である。焼成は普通で、色調は灰白色を呈する。

○平　瓦（第41図(10)）

左側面を含む破片である。凸面には1目平均4×4㎜、刻線幅3㎜を測る全体的に右下りの格子目叩きがある。凹面はほぼ全面に布痕があるが、1㎠当りの糸の経緯11×9本を数える。又、糸切り痕は全面に渡って見られ、模骨痕も9本を数える。左側面は、分割時の切断痕が残り、外側から刃物を入れている事が観察されるが、刃物の動いた方向は判然としない。側縁の縁取りはない。

厚さ2.0～1.8㎝を測り、胎土は緻密であるが、一部に小石を含む。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

○平　瓦（第41図(11)）

右側面を含む破片である。凸面には全体的に右下りの格子目叩きを施す。格子の1目は4×4㎜、刻線幅2㎜を測る。凹面は全面に布痕が見られ、1㎠当りの糸の経緯は10×9本を数える。又、部分的に糸切り痕が見られる。模骨痕は9本を数える。右側面は狭端→広端の方向に削りを施している。分割方法は、この削りが側面の全面に及んでいるため、不明である。側縁の縁取りはない。

厚さ1.4～1.0㎝と非常に薄い作りで、胎土は密である。焼成は普通で、色調は灰白色を呈する。

○平　瓦（第41図(12)）

右側面を含む破片である。凸面は1目8×8㎜、刻線幅4㎜を測る目の大きな格子目叩きを全体的に右下りに施す。凹面は布痕の上から縦方向の撫でを加えられて、布痕は1㎠当りの糸の経緯8×8本を数えるものが局部的にしか残っていない。糸切り痕は撫で調整により判然としない。　左側面は削り調整を施しているが、削りの方向等は側面の荒れにより判然とせず、分割方法も不明である。模骨痕は撫での線と重なり判然とせず、又、粘土の継ぎ目は見られない。

厚さ2.2㎝を測り、胎土は緻密である。焼成はあまり良くなく、色調はにぶい橙色を呈する。

○平　瓦（第42図(13)）

広端面と左側面を含む破片である。凸面は全面に斜格子目の叩きを施している。格子目の1目の大きさは6×4㎜、刻線幅2㎜を測る。凹面は目の非常に細かい布痕が局部的に見られる

が、風化のため判然とせず、糸の経緯数も不明である。糸切り痕及び模骨痕は見られない。左側面は削りを施しており、広端→狭端方向へ刃物が動いている。この削り調整は二次的なものと思われ、本来の分割方法は不明である。広端面も削りを施しているが、その方向は不明である。

厚さ2.2cmを測り、胎土は密である。焼成はあまり良くなく、色調はにぶい黄橙色を呈する。

○平　瓦（第42図(14)）

左側面と広端面を含む破片である。凸面は縦方向に走る平行叩きを施している。叩き目の1目の幅4mm、刻線幅2mm、長さ5cmを測るが、長さは叩きの重なりで全長は不明である。凹面は広端縁を除く全面に布痕があり、1cm²当りの糸の経緯は5×5本を数える。又、模骨痕は4本を数えるが、糸切り痕は認められない。左側面は削りを施すが、削りの方向は不明である。分割方法はこの削りのために不明である。縁取りは凹凸両面に見られる。広端面も削りによって整形しているが、削りの方向は判然としない。縁取りは凸面側に見られる。

厚さ2.1cmを測り、胎土は密であるが、焼成は良くない。色調は浅黄橙色を呈する。

○平　瓦（第42図(15)）

右側面と広端面を含む破片である。凸面は全面的に縄目叩きを施しているが、一部は叩きの上からの撫でによって消えている。縄の原体はL〈$^{r}_{r}$である。凹面は一面に布痕があるが、凸面と同じく、一部撫でによって消されている。1cm²当りの糸の経緯は5×5本を数える。又、糸切り痕、模骨痕は見られない。右側面は削りを施しているが、削りの方向は判然としない。又、分割方法も不明である。凹面側に縁取りがある。広端面も削りを施すが、削りの方向は不明である。広端縁には縁取りは見られない。

厚さ2.1cmで胎土は密である。焼成はあまり良くなく、色調はにぶい橙色を呈する。

目板瓦　（第43図(16)）

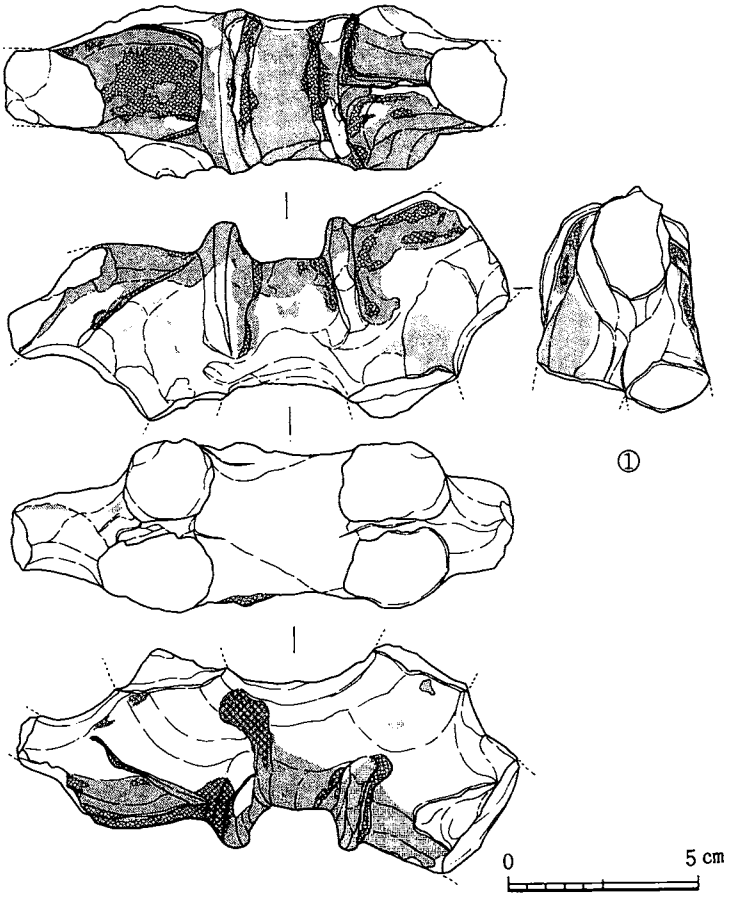
肥後地方独特の目板瓦と呼ばれる近世瓦の破片である。平瓦の一隅に長方形に短く切った丸瓦状の粘土を付けたもので、現在、熊本以外では使用例がないものである。

江戸時代に一般的に使用された桟瓦は、延宝2年（1674年）に創案されたとされているが、目板瓦の場合、熊本市川尻町の寺院に元禄10年[註1]（1697年）銘の瓦があり、肥後では桟瓦と共にこの目板瓦が使用されたのか、桟瓦導入以前[註2]にこの目板瓦が使用されていたのかは判然としない。又、何時頃までこの目板瓦が使用されていたのか等、不明の点が多い。

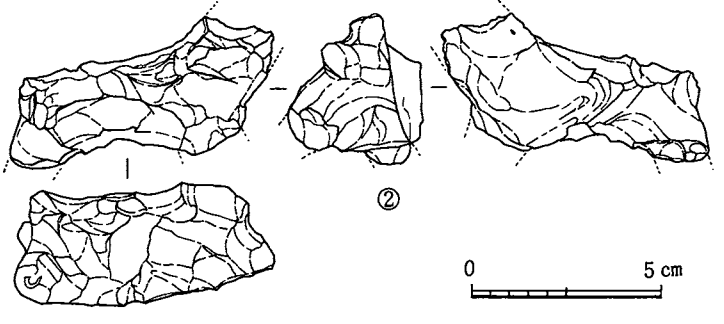
平瓦部の厚さ2.0cmを測り、胎土は密である、焼成は良く、色調は灰色を呈し、現在の瓦のような黒色ではない。　（広瀬）

註1．「日本の瓦屋根」玉置豊次郎、坪井利弘、理工学社　昭和51年

註2．柚原直人氏の御教示による。



第44図　A地区出土遺物実測図土馬(1)



第45図　A地区出土遺物土馬(2)実測図

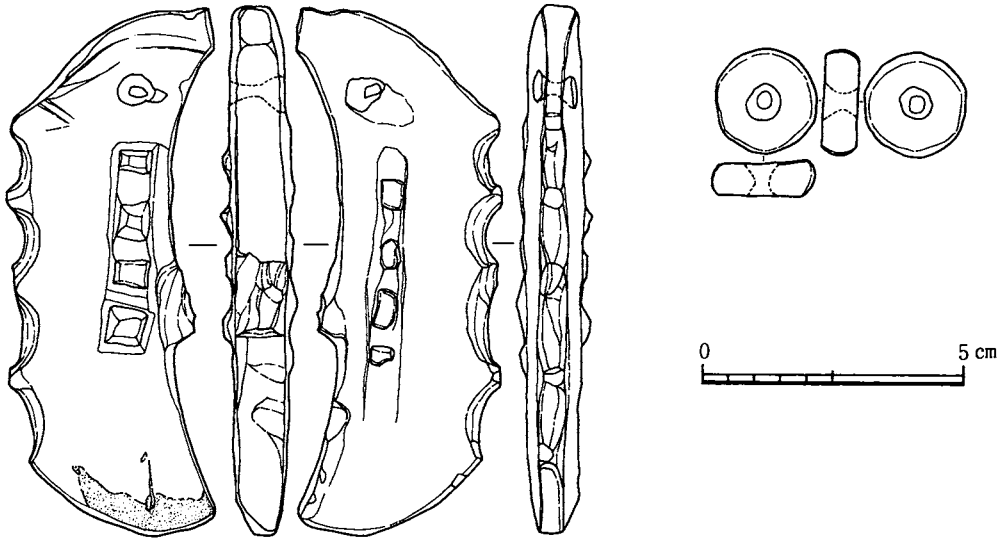
土　馬　（第44・45図1・2）

A地区の第1号遺構から土馬が二点出土した。(1)はE－3グリッドの床面直上にあたる第Ⅳ層の灰褐色粘質土層から出土した。頭部分を北に向け横に倒れた状態で出土し、頭部・四脚・尻部を欠失している。現存の状態で全長13.3cm、高さ5.8cmで幅4.3cmである。鞍および尻繋を表現した飾馬である。鞍部の最も深いところは1.0cmで尻繋は凹線である。首部はツマミ上げたようにして鬣を表現している。精良な胎土で焼成も充分である。色調は灰褐色を呈するが、首から鞍部や腰部に意識したとでも見えるような自然釉がかかっている。県内に出土した土馬の中では須恵器質の飾馬で鞍の表現がある特徴を有するものとして宇土郡不知火町小曽部出土の土馬が類似している。(2)はG－4グリッドの表土剝ぎ作業中に出土したものである。(1)と同じく頭部・四脚・尾部[註]を欠失している。飾りは認められず土師質の裸馬である。現存の状態で全長7.0cm、高さ3.5、幅2.9cmである。砂粒がいくぶん混じった胎土で、焼成は充分である。

註．小田富士雄　「古代形代馬考」『古墳時代遺物の調査と研究』　1979

子持勾玉　（第46図）

子持勾玉は第1号遺構の東壁を検出するために設けた東トレンチの第Ⅱ層の最下部で、第Ⅲ層と接するところから出土した。D－7グリッドの最も東寄りの地点で、頭部を南側に向け横に倒れた状態で出土した。滑石製でほぼ完形である。全長10.1cm、横幅3.2cmで最大厚さは1.2



第46図　A地区出土遺物実測図・子持勾玉・滑石製小玉

cmである。腹と背および横腹にも突起を表現し、頭部には穿孔を施している。背は四ケ所を凹め五個の突起をなし、横腹は片方に方形の形状を呈する四個の突起を施している。他方も同じように四個の突起が認められ、突起は全体的に小さく低い。腹に設けた突出部は一部を欠

失している。突出部先端の正確は形状は不明である。色調は黄褐色と暗オリーブ灰色とがシマ状にはいる。熊本県内で３カ所の遺跡で子持勾玉が出土したことが確認されているが、類似する資料は認められない。九州内においても類似する資料は少なく、わずかに福岡県沖ノ島21号遺跡出土のものに類似性が見られ、地理的には遠く離れるが、兵庫県五色塚の周濠から出土した子持勾玉[註1]も、形状や製作技法など類似している。[註2]

註１．佐田　茂　「滑石製子持勾玉」『宗像沖ノ島』　吉川弘文館　1979

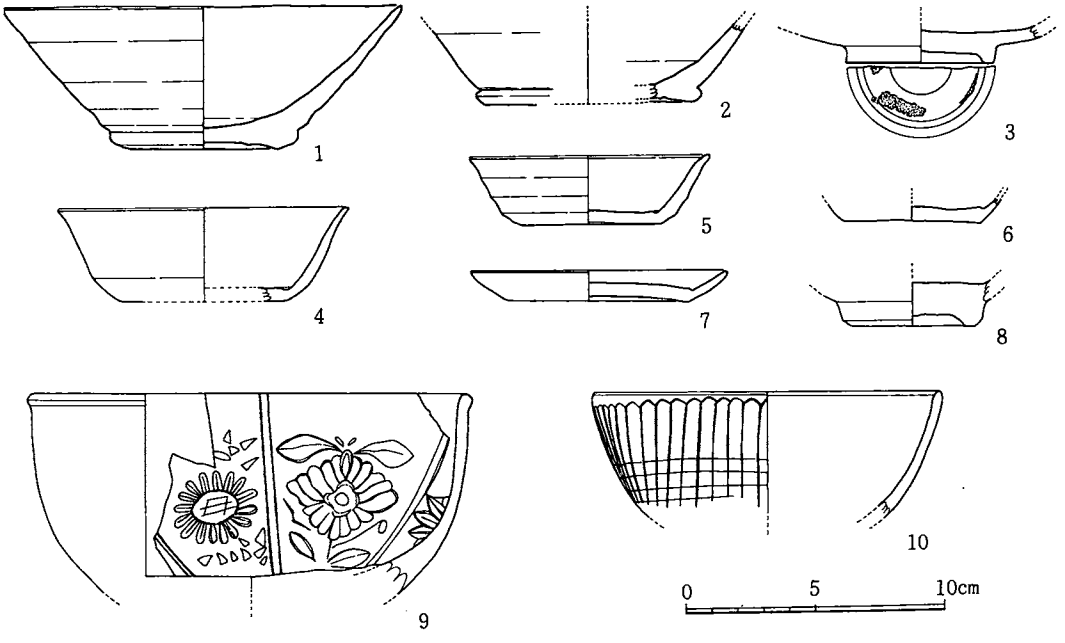
註２．梅原末治　日本古玉器雑攷　吉川弘文館　1971

滑石製小玉　（第46図）

Ａ－４グリッドの第Ⅰ層から出土した。滑石製で円形を呈し、大きさは最大部径2.0cm、最小部径1.85cmで、厚さは0.65cmである。全体的に粗い仕上げである。中央部に穿孔をほどこしており、穿孔は先の尖がった金属器を使用したものと思われる。両面から穿孔しているが先細りになり中央部が最もせまくなっている。全体的に研磨した跡が細いスジとして残っている。

青磁・白磁　（第47図）

(1)は第１号遺構の第Ⅱ層から出土した越州窯青磁である。口径は15.4cm で高5.5cm を測る椀である。灰オリーブ色を呈する施釉があり、細かな嵌入が見られる。ケズリ高台面には重ね焼き痕が残っている。(2)も第１号遺構の第Ⅱ層から出土した越州窯青磁である。ケズリ高台で



第47図　Ａ地区出土遺物実測図青磁・白磁（１～10）

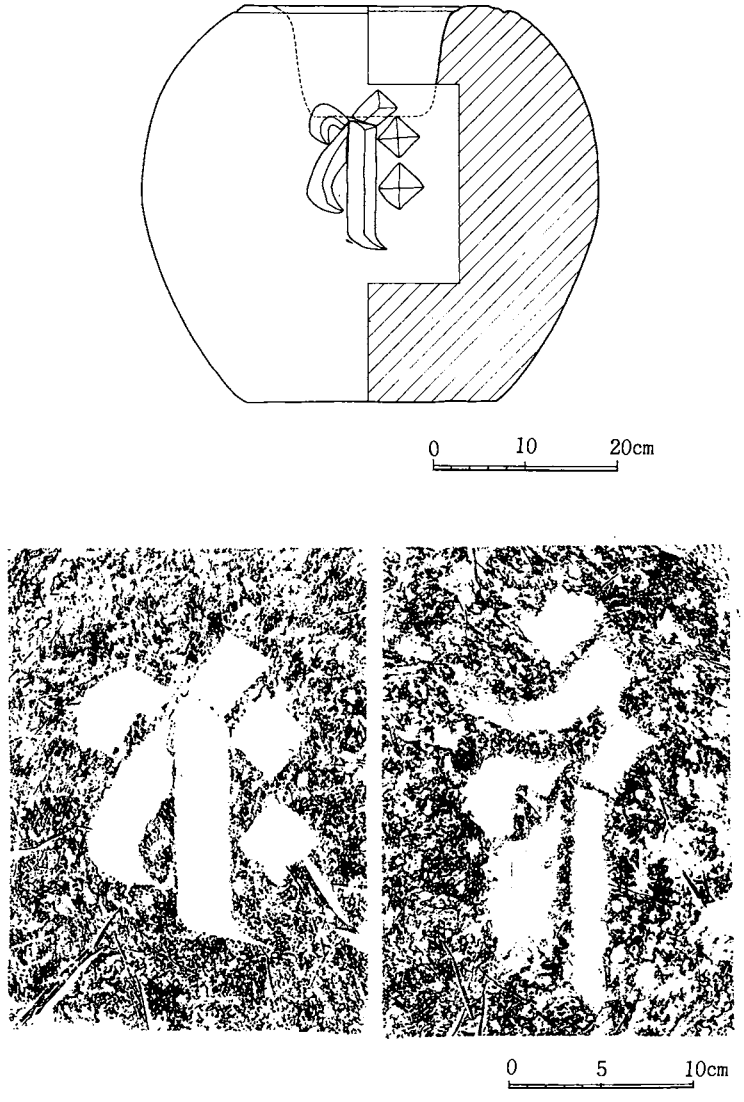
高台径は推定で8.8cmを測る。緑灰色を呈する釉が高台近くまで施されている。高台はジャノ目高台状にあり内面には重ね焼きの際につけられた白色を呈する砂粒状の物質が付着してい

る。(3)も同じく第1号遺構のB－4グリッド第Ⅲ層から出土した越州窯青磁である。ケズリ高台で径は5.7cmである。高台内面の中央部には凹みがあり、周囲に重ね焼きのための砂粒状の物質が付着している。(4)～(8)は白磁でロハゲと称されるものである。(7)が皿で他は椀である。いずれにも見込と体部の境に沈線がめぐっている。(4)、(5)、(7)の口縁端部は施釉が行なわれておらず、(4)はカーボン状の黒い物質が付着している。(8)は青磁底部片であり、オリーブ灰色を呈する施釉がある。竜泉窯産青磁の破片であろう。(9)はA－1トレンチ第Ⅰ層から出土した竜泉窯産青磁である。推定で口径は17.3cmを測る。内面に印花を施し、明オリーブ灰色の施釉を行っている。(10)は第1号遺構の第Ⅰ層から出土した竜泉窯産青磁である。推定で口径は13.5cmである。外面に簡略化した連弁文を施し、オリーブ灰色の施釉を行っている。以上の青磁・白磁のほかにも細片が見られる。それは越州窯のほか竜泉窯青磁では、連弁や連弁細線劃花があり、同安窯青磁も認められる。

五輪塔　(第48・49図)

A地区の調査の契機となったものの一つが鎮守堂の堂前に置かれていた五輪塔である。堂前に置かれていたのは水輪一個であるが、大きくそして刻まれた梵字がしっかりしており、一見して古い時代のものであることが推察できた。

八代郡誌を読めば「境内堂前に五輪塔大小二個……孔等の四梵字を刻せり、何人の墳墓なりしか不明なり、」とあり、大きさか註1



第48図　A地区出土遺物実測図・拓影五輪図(1)

ら見て堂前の五輪塔は前者の大きい方の五輪塔にあたるものと判断できた。調査はこの八代郡誌に述べられた後者の小さい方の五輪塔を調べることが一つと、他にも付近には五輪塔が埋没されている可能性がありそれらの発見に期待がもたれた。

調査の結果、八代郡誌にいう後者の五輪塔はA－5トレンチの北側から出土した。出土した地点は旧宅地内であり、郡誌の調査の後、宅地内に運ばれ、何らかの役をはたしていたのであろう。このほかでは、調査地内からは出土していないが、二・三個の五輪塔が周辺に見られる。一つは、興善寺馬場遺跡にあたる旧村上家宅地内に祀られていた。また、調査地のすぐ東側の傾斜面には近世の墓地があるが、この墓地に火輪と水輪各一点が置かれていた。石材はいずれも凝灰岩である。

第49図　A地区五輪塔実測図・拓影

(1)は堂前に置かれていたもので先に述べたとおり八代郡誌に記されたものと判断できた。水輪で高さ43.0cm、胴径50.2cmである。上部は一条の沈線をめぐらし有段状になっている。上部中央には径19.8cmで深さ12.0cmの凹部を施している。四面に梵字があり、東西南北を表わして、いずれも端正で丁寧に刻まれている。大きくて立派な造りであり、梵字もはっきりと刻まれ、鎌倉時代の所産としての可能性を有している。(2)はA－5トレンチ北側の表土剝ぎ作業中に、旧宅地の炉事場付近から出土したものである。(1)と同じく水輪であるが、(1)よりも一まわり小さい。高さ30.0cm、胴径37.2cmである。上面には径16.7cm、深さ13.9cmを測る先細りの形状をなす凹部を施している。四面に梵字が施されているが、表面が非常に荒れているため判読が困難である。わずかに残存した梵字は北・南と読め、梵字のまわりには浅い沈線で円をめぐらしている。

第50図　鎮守堂板碑拓影　0　5　10cm

板　碑　（第50図）

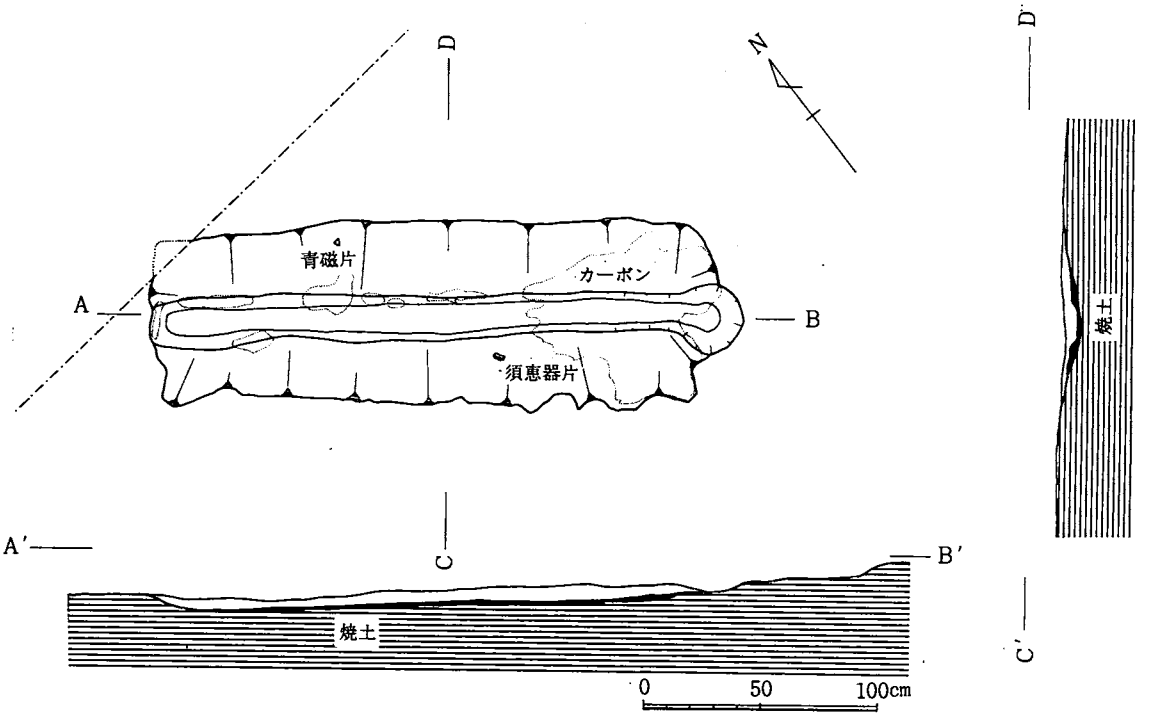
鎮守堂には梵字を施した板碑があり、本尊とされ祀られている。この板碑についても八代郡誌に「征西将軍宮、菊池より八代へ入御の時、当寺に休息し給ひ、御腰を掛けられたる石なりとも云う」と記されている。板碑は板状の砂岩を用いており、縦57.9cm、横33.7cmである。表面は将棋の駒の形に線引きをし、頭部に三本の横線を施している。横線の下方に梵字を刻み、向って左下方に正平拾？五年○月(1360年)と読める年号がある。梵字は𑖮であり、無量寿如来もしくは普賢菩薩を表わしたものと思われる。頭部から肩部にかけては外線[註1]にそってノミによって荒彫りの痕がある。全体を整形する予定でありながら中途で加工を放置したものと思われる。梵字に対して正平拾？五年○月の刻名はやや不揃いで、書体もやや不出来に思える。梵字はともかくとして年号の刻名は追刻された可能性がある。現在、鎮守堂は西側の側道沿いに移転されており、板碑は堂内に祀られ、二個の五輪塔は堂前[註2]に置かれている。（江本）

註

註1．中村瑞隆　梵字事典　1977　雄山閣　　註2．島津義昭　高木正文の教示を得た。

(2)　第2号遺構

第2号遺構はD－7グリッドで検出した。第Ⅱ層下部にあたる部分にカーボンと焼土の集中が見られた。縦に長い形状を示し浅く掘り凹められていた。主軸をN－52°－Eにとり、短冊に円形の頭部をつけた形状にある。大きさは縦2.53m、横0.83mである。浅く掘り凹められた中央部はさらに溝状に低くなっていた。床面上にはカーボンと焼土が堆積しており、床面は赤褐色に焼け2～3cmの厚さで焼土と化していた。床面内に須恵器と青磁の細片が出土している。



第51図　A地区　第2号遺構実測図

二点の遺物から時期的には少なくとも中世以降に生じた遺構であることが述べられる。用途的性格については不明である。（江本）

(3) 小　結

第1・2号遺構の検出・遺物出土状況と出土遺物については報告してきたとおりである。第1号遺構は全体的に形状がいびつであり、床面のレベルの差も大きいことから一まとまりの竪穴遺構として捉えることは困難な状況にある。E・F・G－10・11グリッドやF・G－3・4グリッドを中心としてみられるコーナーや直線的な壁面があり少なくとも二軒の住居跡が存在していたものと判断することができよう。また、F・G－6・7グリッドにある凹地は底部にまで土器が出土しており生活跡に伴う井戸かもしくは貯蔵穴と思われる。B～E－2～6グリッドを中心とする部分は最も遺物が多く出土したところで、皿状の凹地を呈しレベルが最も低いところである。付近の雨水、もしくは生活用水が溜ったのであろうか、第Ⅲ層黒色粘質土層や第Ⅳ層灰褐色粘質土層は、少なくとも一時期凹地に水が溜っていた状態にあったことを示している。

第1号遺構から出土した遺物は須恵器、土師器、瓦、土馬、子持勾玉、滑石製玉、青磁・白磁、獣骨、五輪塔などである。須恵器についてのまとめはB地区と一括して第Ⅲ章(4)(5)で行いたい。

土師器には甕・壺・甑・皿・高坏・坏などがある。この中で6～7Cのものとして捉えることのできる資料は明確にできない。逆に燈明皿の中で糸切り底にあるものは明らかに後行し12～13世紀のものであろう。甕は外面をハケ、内面をヘラ削り調整を行い口縁部は外反しくの字を呈している。甑として38点を取り上げたが、底部まで残るものがなく孔がなく把手付甕となるものも含まっているのであろう。坏や高台付坏は体部が一直線に開き、体部と口縁部との境がはっきりする資料は少ない。皿では一部に口縁部と体部との境が明確になるものが見られる。輪状ツマミを有する坏蓋や鉢形土器、把手のついた鉢(136)なども出土した。以上、須恵器・土師器については特に須恵器で8世紀後半～9世紀前半と考える時期のものが量的に最も多く出土しており、土師器もほとんどがこれらの須恵器に伴うものと思われる。

須恵器の中には6～7世紀と考えられる坏蓋が出土したが、興善寺地区においては古墳の存在が明らかにされていない。付近に古墳もしくは古墳時代の生活跡があったことが示唆される。

興善寺廃寺を瓦の上から見ると、陳内廃寺と立願寺廃寺の影響を受けている。まず陳内廃寺の影響を最も強く受けているものとして、第43図(17)の単弁八弁軒丸瓦[註1]が挙げられる。この瓦のように中房に十字形の隆起線を持つものは肥後に於て陳内廃寺と託麻郡衙[註2]に見られるもので、地理的に陳内廃寺の影響下にあると考えられる。又、立願寺廃寺の影響下[註3]にあると思われるものに、従来より最も多く発見されている複弁八弁で複弁の頭が切れており、さらに半弁だけ余分に多く付いた軒丸瓦がある[註4]が、その瓦の中房の蓮子が39個と異状に多いものがある。このような蓮子の数の多いもの[註5]は、立願寺廃寺の初期の瓦と考えられる瓦に複弁八弁軒丸瓦の中房一坏に21個あるものが見られる。さらにこの2つの瓦共に周縁についている鋸歯文が[註6]、普通肥後では陽起鋸歯文が多いのに対して、陽線鋸歯文となっている。[註7]

興善寺廃寺の瓦の中で特異なものは、鬼面文軒丸瓦であるが、他にこの手の瓦を出土する遺跡として、熊本県玉名市の立願寺廃寺がある。立願寺廃寺の鬼面文軒丸瓦の例（第43図(18)）は、興善寺廃寺のものと比較すると大きく相違している。立願寺廃寺のものは、鼻が高く隆起し、眼は瞼が弧線を描き、口は大きく開いて牙がのぞき、いかにも憤怒の表情を呈しそのモチーフから新羅系の瓦という事が出来る。又、鬼面の下顎部には縦縞の半円状の部分があり、これは大棟や降り棟に付く鬼瓦の丸瓦をまたぐための刳り貫きを写したものと思われ、この瓦の祖型となったものが鬼瓦である事を示している。さらに、この瓦の特徴的な部分は、前述した半円状の部分から左右に忍冬唐草文が上へ延びている事である。このように鬼面文軒丸瓦に唐草文の表現があるものは他に例のないものである。[註8]

しかし、この唐草文のある事によって、軒平瓦とのセットを摑む事が出来る。立願寺廃寺ではいくつかの忍冬唐草文系の軒平瓦が出土しているが、第43図(19)に掲載した軒平瓦のものが、最も鬼面文軒丸瓦の唐草文に近く、恐らくセットを為すと見て間違いないものと思う。[註9]

これに対して、興善寺の例は遺物の項でも述べたように、全体的に平板な作りで顔の表情も

非常にデフォルメされており高句麗の鬼面瓦をうかがわせるものがある。さらに、製作技法では立願寺廃寺の例の場合、半截した丸瓦を瓦当部に差し込んでいるのに対して、興善寺廃寺の場合、半截前の円筒状の丸瓦に瓦当部を嵌め込んだ後、丸瓦を瓦当裏面まで半截している。
この技法は陳内廃寺の単弁八弁軒丸瓦に見られるものであり、技法的には陳内廃寺の流れを汲むものであろう。[註10]この事は同じ興善寺廃寺の瓦の中で前述した単弁八弁軒丸瓦にも共通しており、この瓦の場合、瓦当面の文様から技法まで陳内廃寺の単弁瓦に祖型を求めているといえる。
又、この単弁八弁軒丸瓦は、陳内廃寺の例と同じく、重弧文軒平瓦とセットをなすものと見られ、恐らく鬼面文軒丸瓦も同じように重弧文軒平瓦とセットをなすと考えて良いものと思う。

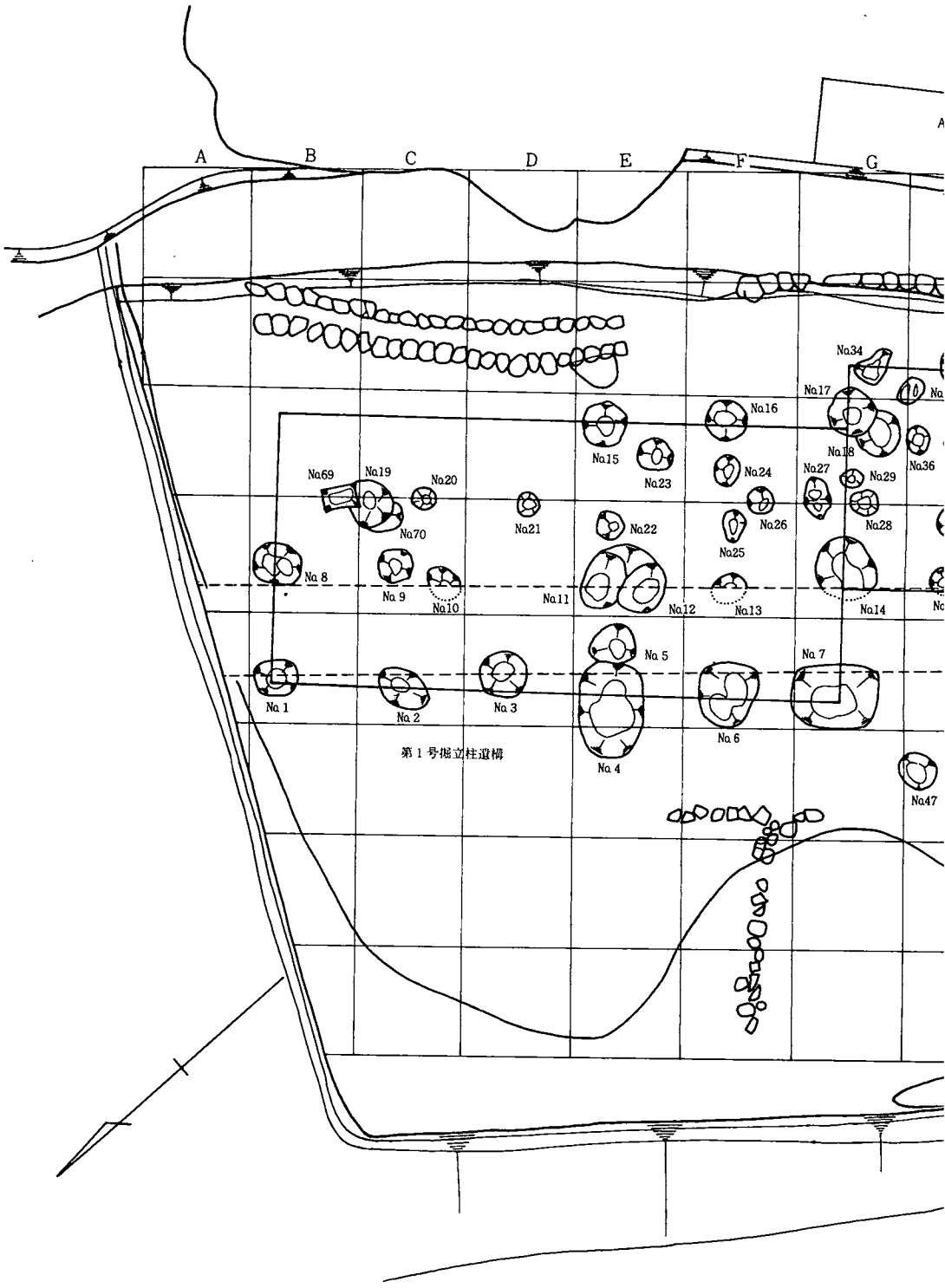
それ等の事から考えると、立願寺の鬼面文軒丸瓦とは、瓦当面のモチーフ、製作技法、軒平瓦とのセット関係等、大きく相違している。

立願寺廃寺の年代については、他の寺院址と同じく決め手を欠いているが、鬼面文軒丸瓦とセットをなすと考えた偏行忍冬唐草文軒平瓦は、退化型式が同じ立願寺廃寺や稲佐廃寺の瓦にあり、稲佐廃寺の場合、奈良時代末までは遡らないと考えられる事や、同じ立願寺廃寺の中に[註11]退化型式がある事などから考えると、8世紀中葉から、後葉にかけての瓦と考えるのが妥当と思われる。

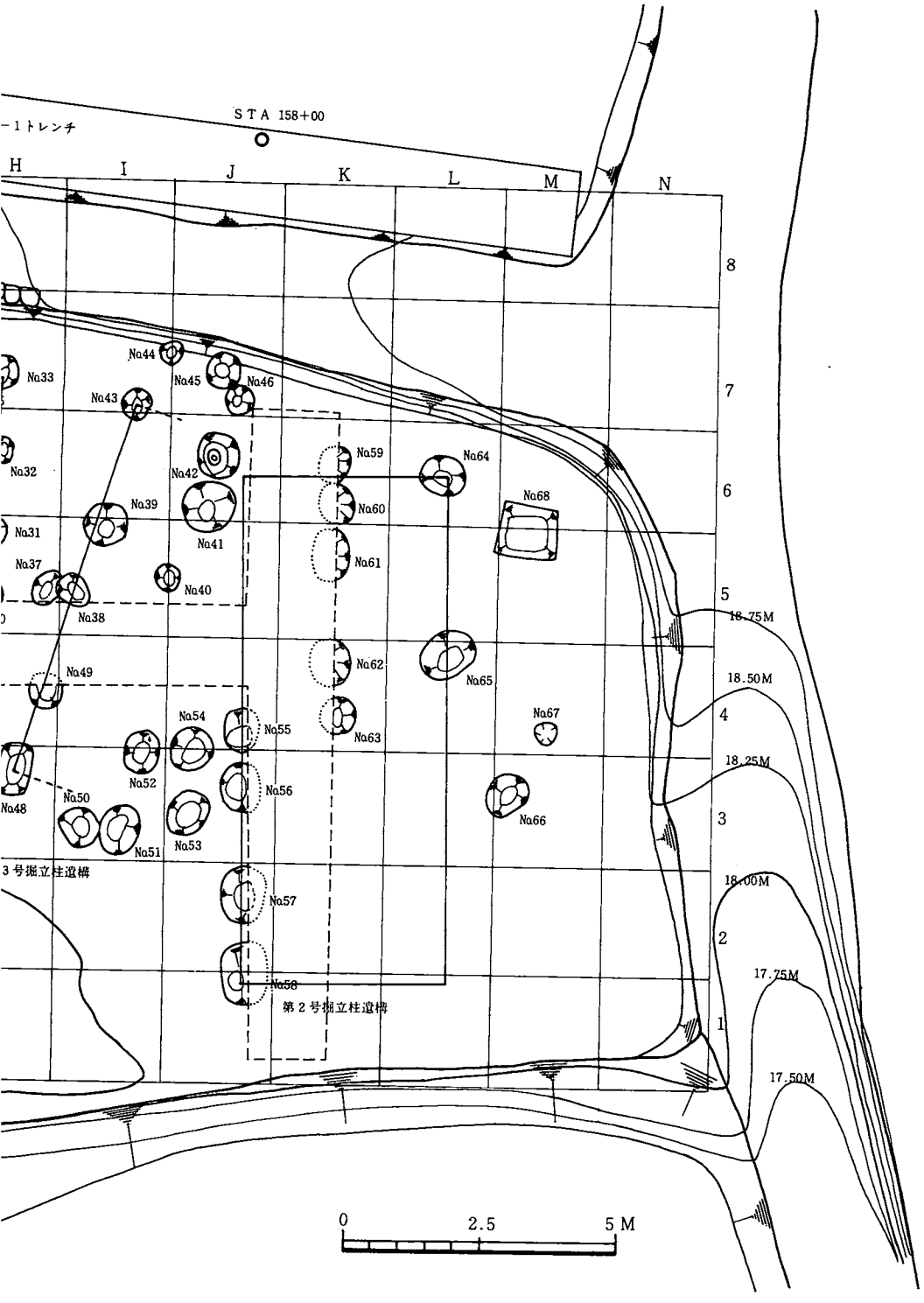
興善寺廃寺の場合鬼面文軒丸瓦に限らずモチーフの退化したものが多く、製作技法的には陳内廃寺のような8世紀前半と考えられる古い時期の寺院とのつながりをうかがわせながらも、全体的にはその技法を消化しきれず、又、モチーフの模倣すら完全に行っていない。このような現象はやはり年代的に後退したものと考えられるもので、鬼面文軒丸瓦や単弁八弁軒丸瓦や重弧文軒平瓦については、立願寺廃寺や陳内廃寺のものより明らかに後行し、少くとも8世紀後葉まで下るものと考えたい。
しかし、これ等の瓦が興善寺廃寺の瓦の中でどの位置を占めるかという事は、従来、最も古いとされている複弁軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦のセットとの前後関係を含めて、検討する必要があろう。

この志水遺跡では前述の鬼面文軒丸瓦の他に小型の鬼面文鬼瓦が出土している。これは、太い眉の表現などから、鬼面文軒丸瓦より時期の下るもので、豊野村の八の瀬戸窯址では興善寺廃寺のものよりさらに退化しているものが採集されていることから、この興善寺志水遺跡の鬼瓦は一応9世紀初頭頃と考えたい。[註12]

最後に、この興善寺志水遺跡では135点の瓦が出土したものの、瓦を伴うような遺構は検出されておらず、又、発見された瓦もA地区の鎮守堂付近から散布した状態で出土している。瓦そのものは、興善寺廃寺の瓦が散乱したものの一部であるといえる。そのため、丸瓦、平瓦については、いくつかの代表的なものだけを紹介したが、それ等の組み合わせや年代については判断する材料がなく不明といわざるをえない。ただ、鬼面文軒丸瓦の丸瓦部に付いていたわず



第52図　A地区　柱穴群全図


STA 158+00
-1トレンチ
H
I
J
K
L
M
N
8
7
6
5
4
3
2
1
No.33
No.32
No.31
No.37
No.38
No.39
No.40
No.41
No.42
No.43
No.44
No.45
No.46
No.48
No.49
No.50
No.51
No.52
No.53
No.54
No.55
No.56
No.57
No.58
No.59
No.60
No.61
No.62
No.63
No.64
No.65
No.66
No.67
No.68
3号掘立柱遺構
第2号掘立柱遺構
18.75M
18.50M
18.25M
18.00M
17.75M
17.50M
0
2.5
5 M

かな格子目叩きが、目の細いものであった事から考えると、平瓦等の中で目の細い叩き目を持つものが、鬼面文軒丸瓦等と同時期に製作された可能性があるが、それを判定するにはあまりにも資料不足である。

又、瓦と共にA地区では多くの須恵器が出土しており、その年代は8世紀後半から9世紀に及んでいる。しかし、その須恵器の中には竪穴住居跡に伴っていたと見られるものもあり、寺院とその外の生活址との関連や出土状態を吟味する必要がある。志水遺跡においては、残念ながら瓦は各層位にわたって散乱した状態で出土し、須恵器は住居跡等の包含層を中心として出土している為須恵器の年代を瓦の年代に対比させる事は不可能である。しかし、いずれにせよ、現状では瓦、須恵器共に編年作業は大きく遅れており、一概に対比出来るものではない。今後はこの基礎的作業こそ急務とされなければならない。

子持勾玉・滑石製小玉各一点が出土している。子持勾玉は従来県内には全く類をみない形状を示している。子持勾玉は古墳時代を主に出土している遺物であるが、子持勾玉としては最後の時期のものと思われる。土馬は二点出土しており、須恵質のものと土師質のものである。特に須恵質の土馬はタテガミや鞍、それに尻ガイを表現した飾馬であり、あたかも意識して施したような釉がかかっている。以上の遺物は第1号遺構の中でも東側の凹地から出土したものであり、この部分について祭祀的様相が非常に強いといえよう。土馬については水霊奉祀や峠神奉祀のために用いられたといわれている。今回の調査地は両者ともに符合する。すなわち調査地は竜峰山への登り口にあたり、近くには生活水にも使ったであろう谷水が多いところである。また、付近は各所に砂防ダムが建設されているように崩れやすい地帯であり、自然災害からの防御をも祈ったのであろうか。(137)の手捏ね土器が出土していることもつけ加えておこう。

以上のように第1号遺構はおよそ8世紀後半から9世紀を主とする生活跡と祭祀的様相が非常に強い遺構であることを述べることができよう。さらに多量の須恵器が出土していることは近くに須恵器窯がありその灰原にあたるのではないかと疑いたくもなるが、いわゆる使用に耐えうる須恵器が多いこと、一緒に出土する土師器も生活に密着した土器であることなどから直接的に結びつけることはできない。いずれにしろ須恵器に焼きひずみのあるものが多くみられることは、周辺に窯跡が存在したであろうことを示唆している。

第1号遺構に関して少なくとも二軒の住居跡が存在したであろうことは先に述べたが、仮にあと二、三軒の住居跡があったとしても、住居面積に比較して遺物の出土量が非常に多く、また甑など非常に大きく、一般的住居跡とは異なった様相を示している。集団生活的住居跡として捉えるべき状況を示している。

青磁・白磁は中国越州窯、竜泉窯、同安窯産が出土している。これらの中で竜泉窯・同安窯青磁は第Ⅰ・Ⅱ層から出土しているが、2点の越州窯青磁は第Ⅲ・Ⅳ層から出土したものである。第1号遺構に直接的に結びつく遺物と見られる。当時として越州窯青磁と存在はごく限られ

たものであったろうし加えて二点の円面硯の出土がある。このことは、「興善寺」とのつながりを非常に強くしているものである。すなわち、寺域の近くに設けられた住居跡で、僧侶が住んだり修業者が集団で生活をしていたところにあたる可能性が強い。

（広瀬・江本）

註

註1．松本雅明「興善寺廃寺調査報告」　熊本県文化財調査報告書第1集　1961

註2．松本雅明「陳内廃寺調査報告」　城南町史、城南町誌編纂会　1965

註3．田辺哲夫「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」　熊本史学10号　1956

註4　明言院住職日隈正道氏より資料の提供を得た。

註5．「渡鹿A遺跡について」松本雅明
熊本市文化財調査報告書　東部地区
熊本市教育委員会　1972

註6．註1に同じ

註7．「九州の古瓦」　松本雅明
熊本日日新聞社　1965

註8．玉名市教育委員会より資料の提供を得た。

註9．註8に同じ。

註10．註2に同じ。

註11．「稲佐廃寺発掘調査報告」玉名高校考古学部　1953

註12．城南町史に記事のみ所載。現物は豊野村教育委員会蔵。

3．柱穴群と出土遺物（第52図～56図）

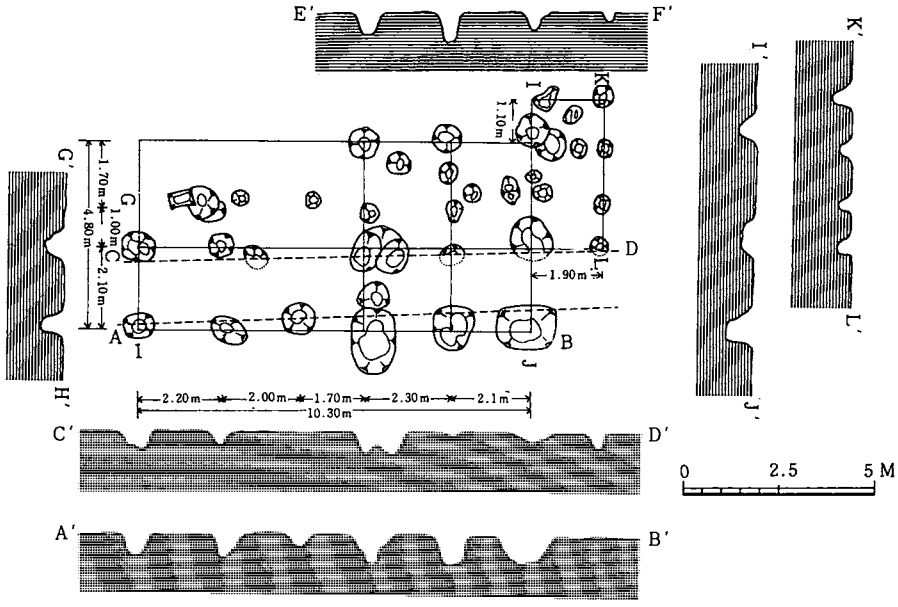
A－2・5トレンチから柱穴を検出し、青磁片等の遺物も出土したため両トレンチの周辺、1646、1647番地については可能なかぎり全面の表土剝ぎを行って柱穴の調査を行った。

柱穴は合計70個を検出した。この中で建物としてまとめることのできるのは2棟である。北側の掘立柱建物は2間×5間で東西4.80m、南北10.30mである。南隅に1間×3間の建増と思われる付設を行っている。柱間は南北で210m、230cm、170cm、200cm、220cm、東西は210cm、170cmを測る。付設部分の柱間は東西が1.3m、1.4m、1.3mで南北は1.9mである。

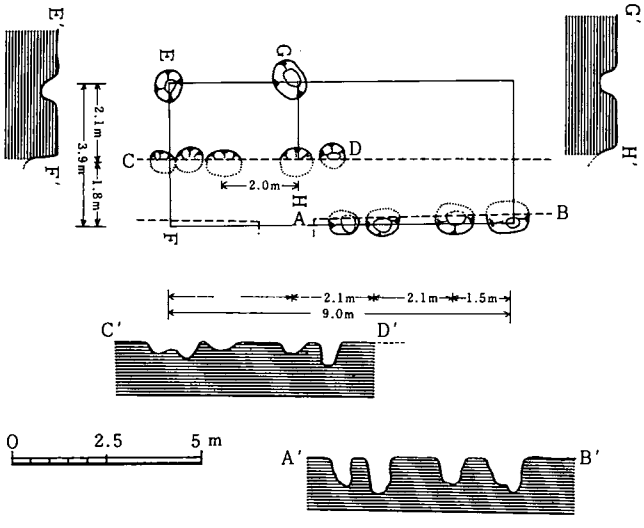
南側の掘立柱建物は消滅した柱穴が多いため確実性に乏しいが、2間×5間と推定しておきたい。東西9.0m、南北3.9mの規模で、柱間は東西で2.1m、2.1m、1.5m、の3間が求められる。南北の柱間は2.1m、1.8m、の2間が測れる。このほかでは2棟の掘立柱建物の中間地点に一列に並ぶ柱穴が認められる。4間の規模を持つが並列する柱穴を定かにしえない。柱間は2.3m、1.3m、2.0m、1.6mを測る。

出土遺物（第56図）

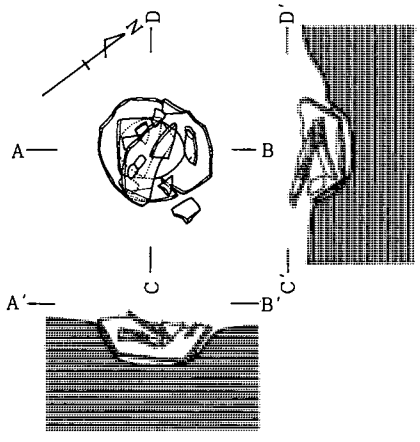
(1)はNo.30の柱穴内から出土した磁器である。復原口径は10.7cmで器高は2.8cmである。内外面



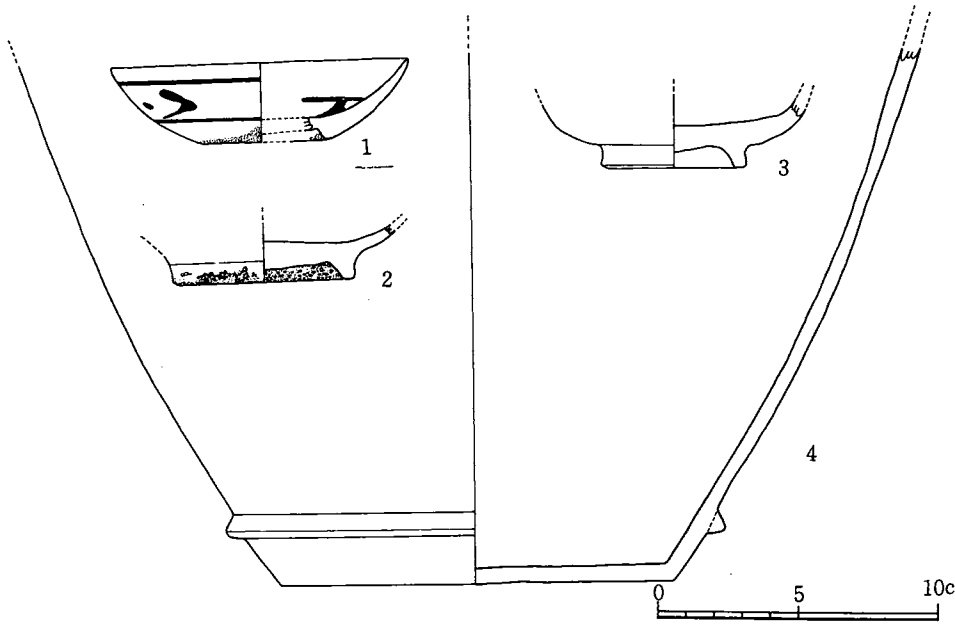
第53図　A地区第1号掘立柱建物実測図



第54図　A地区第2号掘立柱遺構実測図



第55図　A地区遺物出土状況実測図（No.67）



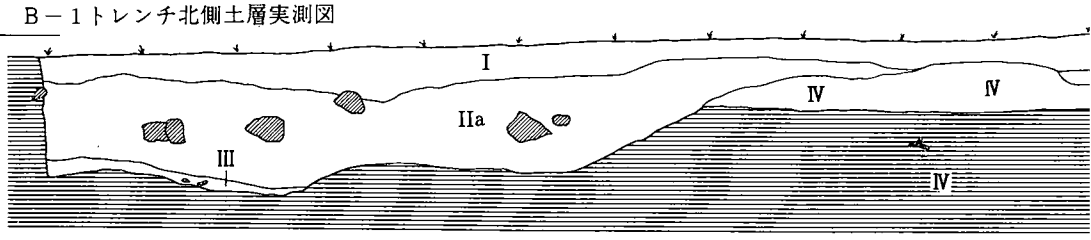
第56図　A地区出土遺物・近世磁器・甕（1～4）実測図

に梁付がある。明オリーブ灰色の施釉には嵌入がはいる。底部はケズリ込んでおり、細かな離れ砂が付着している。(2)はNo.55の柱穴から出土したもので椀の底部片である。底部径は6.5cmを測る。明緑灰色の釉がかかる。内面には重ね焼きのための蛇目剝ぎがあり、底部には多量の離れ砂が付着している。古伊万里の波佐見青磁である。(3)はNo.56の柱穴から出土したもので椀の底部片である。底部径は5.2cmを測る。灰オリーブ色や黒色を呈する釉がかかっている。底部には縮緬皺の痕跡が残り、唐津窯産と思われる。(4)はNo.67のピットから出土した瓦質土器である。底部径26.8cmを測る大型の甕で底部近くに突帯を有している。突帯は断面が三角形を呈する。胎土は白色砂粒を含み、焼成がやや不充分で器面は荒れている。色調は外面がオリーブ黒色で、内面は灰色を呈している。

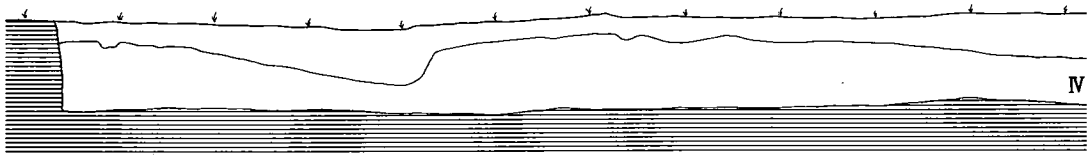
このほかではNo.3・7・9・30・46・55・56・58の柱穴から破片が出土している。No.3の柱穴からは古伊万里梁付や銅釉を施した嬉野内野山窯産の椀の破片と土師器片が出土した。No.7からは滑石製石鍋の破片、No.9からは武雄南部庭木窯産と思われる磁器片各一点が出土している。No.30からは燈明皿片・須恵器片・土師器片と嬉野窯の黒牟田窯産と思われる磁器が出土している。No.58からは土師器片と磁器片で、磁器片は古伊万里白磁と武雄庭木窯産の鉢片である。鉢には櫛描紋色釉流しがみられる。

柱穴からは以上のような遺物が出土している。近世の磁器は佐賀県伊万里や唐津・嬉野・武雄窯産のものがあり、多くは江戸時代中期頃のものである。したがって、2棟の掘立柱建物は江戸時代中期以降のものと判断がなされよう。建物の規模からみて、北側の建物が母屋で、南側の建物が納屋に相当するものと思われる。（江本）

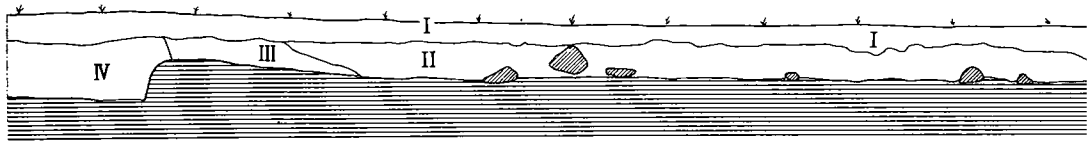
B－1トレンチ北側土層実測図



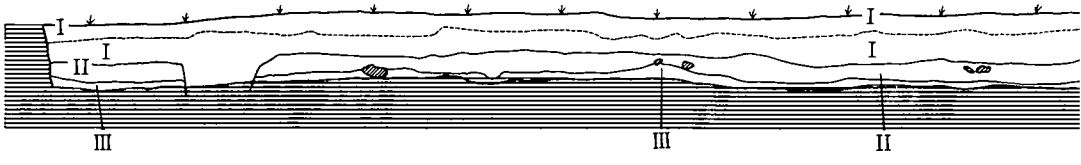
B－2トレンチ東側土層実測図①



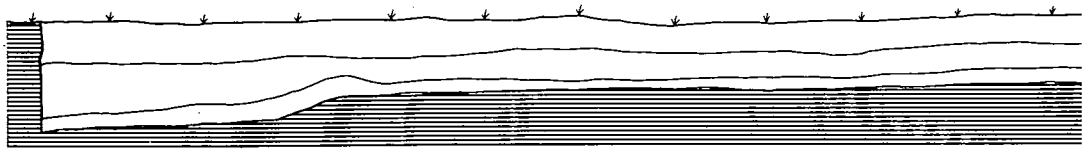
B－2トレンチ東側土層実測図②



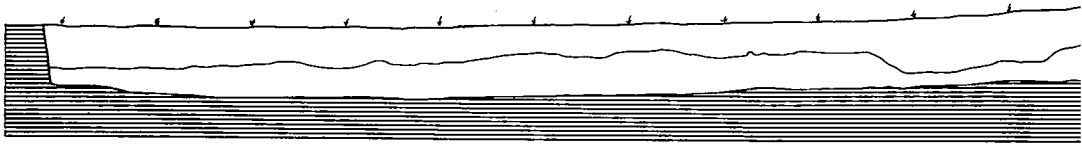
B－3トレンチ北側土層実測図



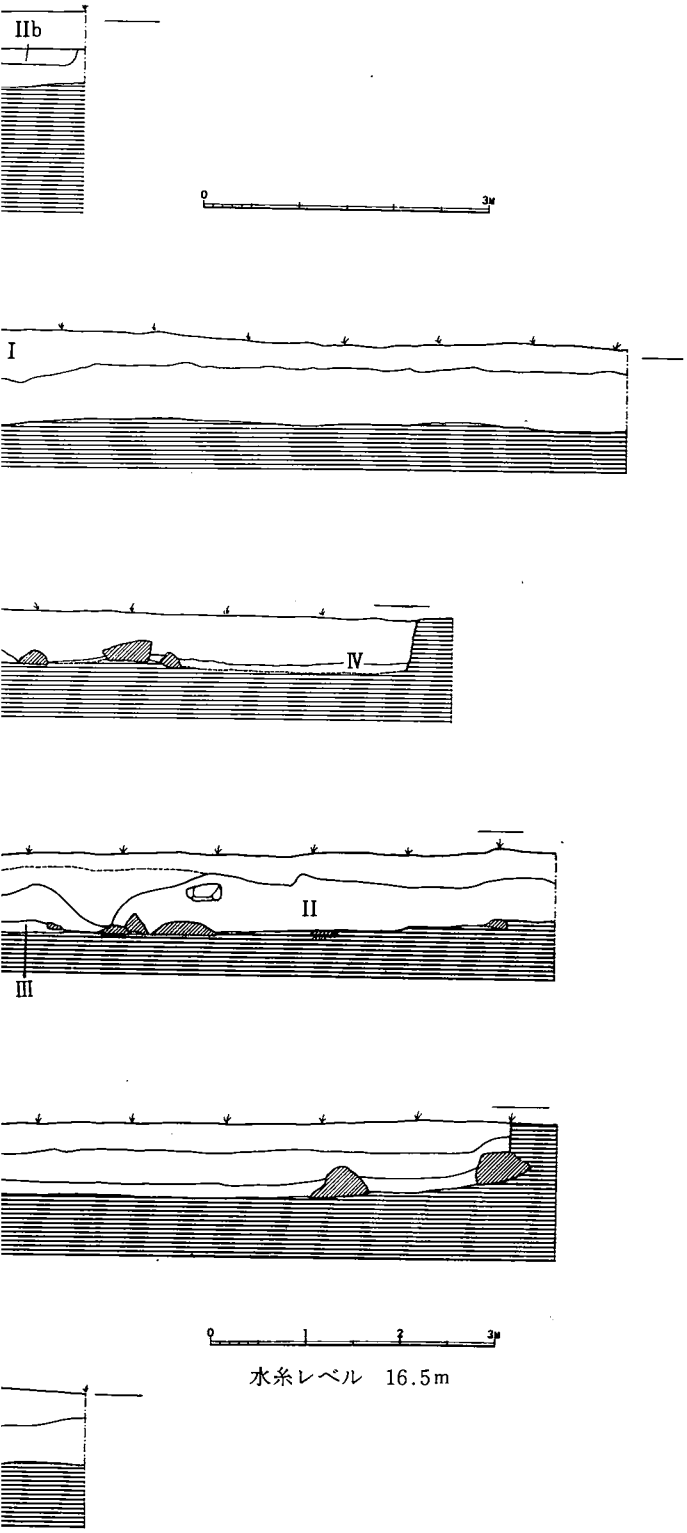
B－4トレンチ北側土層実測図



B－5トレンチ北側土層実測図



第57図　B地区各トレンチ土層実測図


IIb
0
3M
I
IV
II
III
0
1
2
3M
水糸レベル　16.5m

4．B地区の調査

B地区はB－1～5トレンチを設けて調査を行った。その結果、B－1トレンチとB－2トレンチとが接する部分を中心に遺物が出土したため両トレンチの包含層の掘り下げを行うとともに、トレンチの拡張を行った。B－1トレンチは南側に4.0m×3.0m、B－2トレンチは東側に4.5m×2.5mの拡張を行った。以下、各トレンチの土層と遺物の出土状況および出土遺物について報告したい。

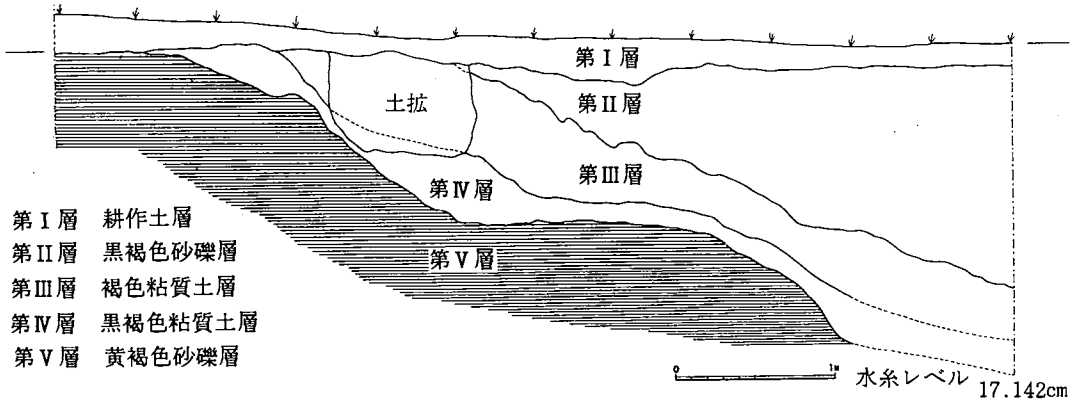
(1)土　層（第57図）

B－1トレンチ北側断面図の土層は次のとおりである。第Ⅰ層は表土層で黒褐色を呈し砂礫を主とする。砂礫は不規則な堆積状態を示し人為的作用によるものと思われる。第Ⅱ層は黒褐色砂礫層であるが、第Ⅰ層に比較して黒色度が強く、大きな岩石が混じっている。加えて規則的な堆積状態を示し第Ⅰ層との分離は容易である。西端に大きな落ち込みがあり、この傾斜面に土器片が出土している。第Ⅱ層は赤褐色を呈する。第Ⅲ層は褐色土層で比較的粘性があり礫石の含まる割合が少ない。第Ⅳ層は黄褐色砂礫層でB地区の基盤となっている。B－2トレンチはB地区で最も長く設定した。北側はほとんど第Ⅰ層のすぐ下が第Ⅳ層となっている。北側より20.3m地点から第Ⅱ・Ⅲ層が表われはじめ、西層は遺物を包含している。この部分の土層と遺物の出土状況については後述したい。南側は第Ⅱ層に石灰岩や砂岩の転石が多く砂礫層となっている。南隅には第Ⅵ層が一部認められる。B－3トレンチは第Ⅰ層が厚く覆っており、土層が茶褐色・下層が明るい褐色を呈しており分離が可能である。第Ⅱ層は暗褐色を呈する砂礫層で大きな転石を多く含んでいる。第Ⅲ層は茶褐色を呈し砂礫の含まる割合が少ない。粘質性もいくぶん認められる。B－4トレンチもB－3トレンチとほぼ同じ層序状態を示すが、西隅近くで第Ⅱ・Ⅲ層のゆるやかな落ち込みがある。B－5トレンチでは第Ⅰ層の直下に第Ⅳ層があり、B－2トレンチの北側と同じくする。

B－2トレンチ東側断面（第58図）

B－2トレンチで遺物が出土した部分を掘り下げたが、東側断面での土層は次のとおりであった。第Ⅰ層は少し赤味をおびた黒褐色を呈する。砂・小石を含み耕作のため土質は不規則な混在状態を示している。第Ⅱ層は黒褐色を呈する。大きな石灰岩や砂岩を含み小礫や砂は規則的な堆積状態を示している。第Ⅲ層は褐色を呈し比較的粘質が強い。第Ⅳ層とはカーボンや焼土を含んでいないことや小石の混入が少ないことで分離ができる。黄褐色粘質土も一部含んでいる。第Ⅳ層は基本的には第Ⅲ層と同質層があるが、多くのカーボン・焼土を含み、小石の量も多くなる。したがって第Ⅲ層よりもさらに黒っぽくなっている。第Ⅴ層は黄褐色砂礫層である。

以上の第Ⅱ～Ⅳ層はいずれも南側に向って深く落ち込んでいる。なお、北側に方形の落ち込



第58図　B地区・B－7　トレンチ東側断面実測図

みがある。B－1トレンチにも同様のものがあり近世の土坑と思われる。

(2)土　坑（第60図）

B－1トレンチ拡張部の東南隅に土坑が見られた。形状は隅丸方形を呈する。底の部分がわずかに残存していたものであるが、近世の墓坑と思われる。

(3)遺物の出土状況

イ，B－1トレンチ拡張部（第59図）

南側に向って急な落ち込みがあり、傾斜面に滑り落ちるような状態で遺物が出土した。土器は須恵器と土師器とが入り混じっているが、量的には土師器の方が多い。主な遺物としては、須恵器杯蓋(1)、土師器高杯(15)、竈(21)などがあり、(7)の地点では紡錘車が出土している。下位にいくに従い大きな破片が多くなる傾向がある。西側への遺物の広がりは少ないと思われた。

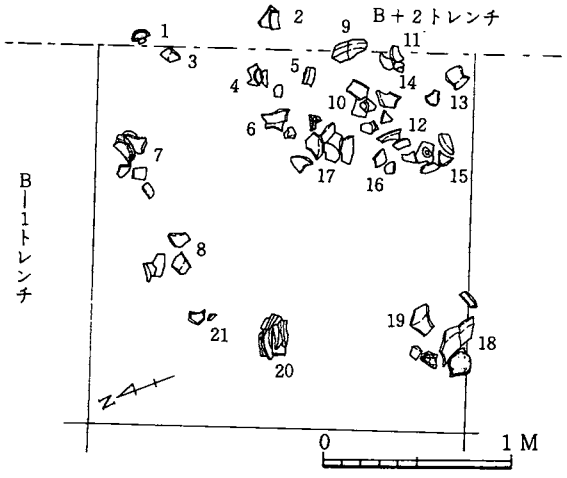
ロ，B－1トレンチ　（第61、62図）

B－1トレンチと同じく南側へ向って大きく傾斜し滑り落ちるような状態で多くの遺物が出土した。トレンチのほぼ全面に亘って遺物は出土した。遺物は土器のほか獣骨・紡錘車(26)、砥石(44)なども出土している。土器は須恵器と土師器で大きい破片も多く出土した。量的には土師器の方が多く、甕・高杯・皿・杯等の器種が見られた。須恵器は甕と高台付杯がほとんどである。

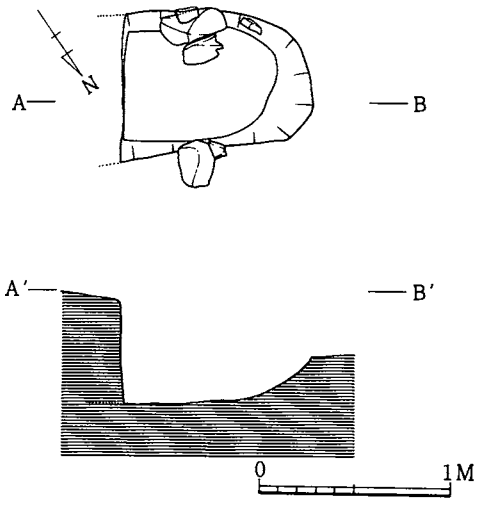
ハ，B－2トレンチ東側拡張部

B－1トレンチと同じく南側への傾斜面にそって遺物が出土した。遺物は土器のほか獣骨や鉄鏃も出土した。(50)はほぼ完形の須恵器の杯蓋で(49)の獣骨の直ぐ近くから出土している。他の調査区よりも獣骨の出土量が多い。

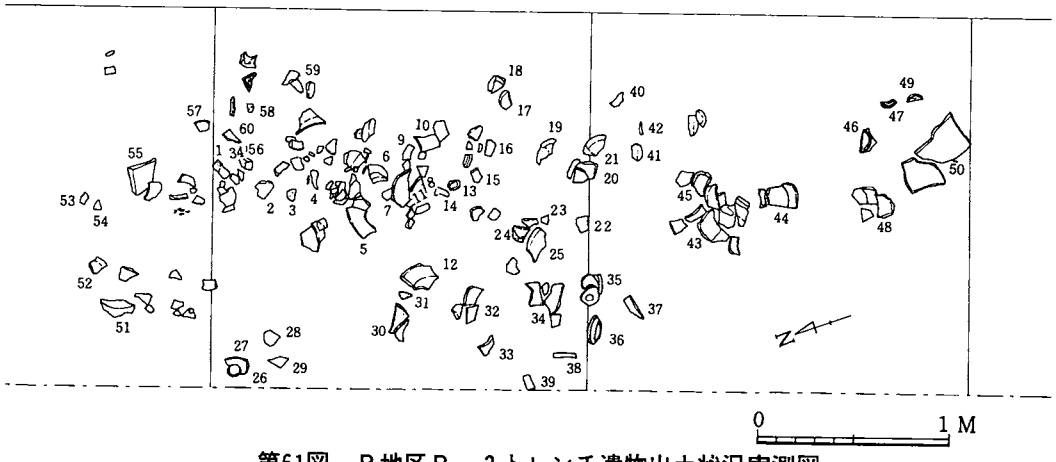
各トレンチは以上のような土層と遺物の出土状態を示していた。B地区の地形は現在と大き



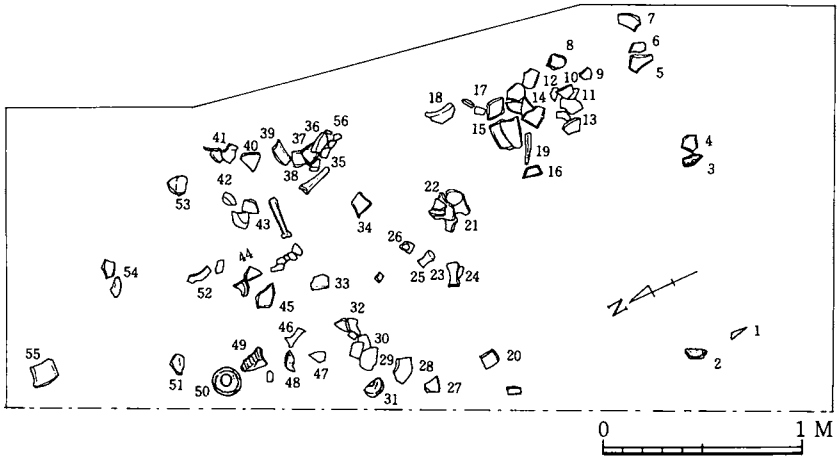
第59図　B地区B－1トレンチ南側拡張部遺物出土状況実測図



第60図　B地区土拡実測図



第61図　B地区B－2トレンチ遺物出土状況実測図



第62図　B地区B－2トレンチ東側拡張部遺物出土状況実測図

く違っていたことがうかがわれる。B－1・2トレンチに認められた落ち込みは、B－1トレンチの西端やB－3トレンチの西端にも認められることから西側へ続いているものと思われた。現在、東側の竜峰山麓からの小谷川はB－4トレンチの南側へと弯曲して流れているが、もともとはB－2トレンチを横切り、B－1・2トレンチに並行した状態で流れていたものと思われる。B－1トレンチの第Ⅱ層や第Ⅲ層、B－2トレンチの第Ⅲ層・第Ⅳ層はこの谷川によって堆積されたもので、その際に大きな石灰岩や砂岩も転石しながら堆積したものと考えられる。B－1トレンチから北側は第Ⅰ層の直下に第Ⅳ層があり基盤となっている。上面が削平されていることがうかがわれる。B－1トレンチよりも南側は当時谷川が南側に向って直線的に流れ低い場所であったため、北側の高い部分の土を埋め現在のように平担な畑地にしたものと思われ、その際に直線的に流れていた谷川を南側に弯曲させることによって、広い平担な耕作地を獲得したものと思われる。遺物はこの耕地の整理が行なわれる以前に谷川へ落ち込んだ状態にあったものと考えられる。

（江本）

(4) 出土遺物

イ、須恵器（第63～66図）

B地区では総数42個体が出土しており、蓋杯類が全体の82.4%を占めている。器種はA地区とほぼ同様であり、分類も基本的に同様である。但し器種によってはA地区の分類基準に適応しないものがあった為、更に細分化を行なった。

(1) 蓋　杯（蓋）

蓋は17個体出土した。A地区の分類に準じて蓋A・B類に大別し、さらに細分化した。

蓋A類（第63図345）

短いかえりを有し、天井部につまみの剝離の跡が残る。

蓋BⅠ類（第63図348、350）

つまみの形状は不明であるが、つまみの剝離の跡が残る。348は端部が屈曲し外反する。350の端部は直行した形状をなす。

蓋BⅡ類（第63図343、344、346、347、349、351～359）

つまみを持たない類で、分類はA地区同様a～e類に分類した。

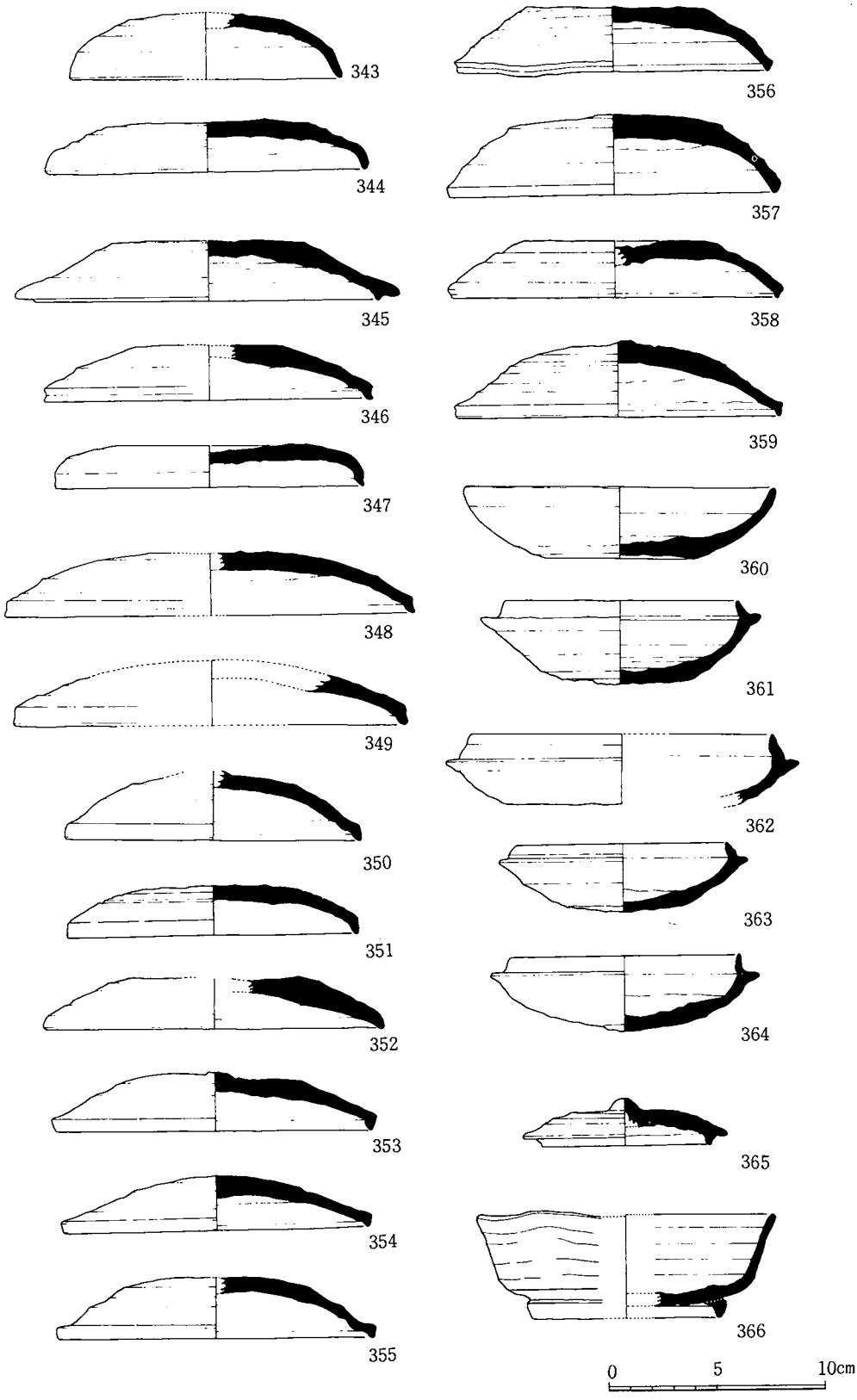
蓋BⅡa類（第63図343、344）

2個体である。器高が低く、端部が内弯するものである。344は比較的に偏平である。

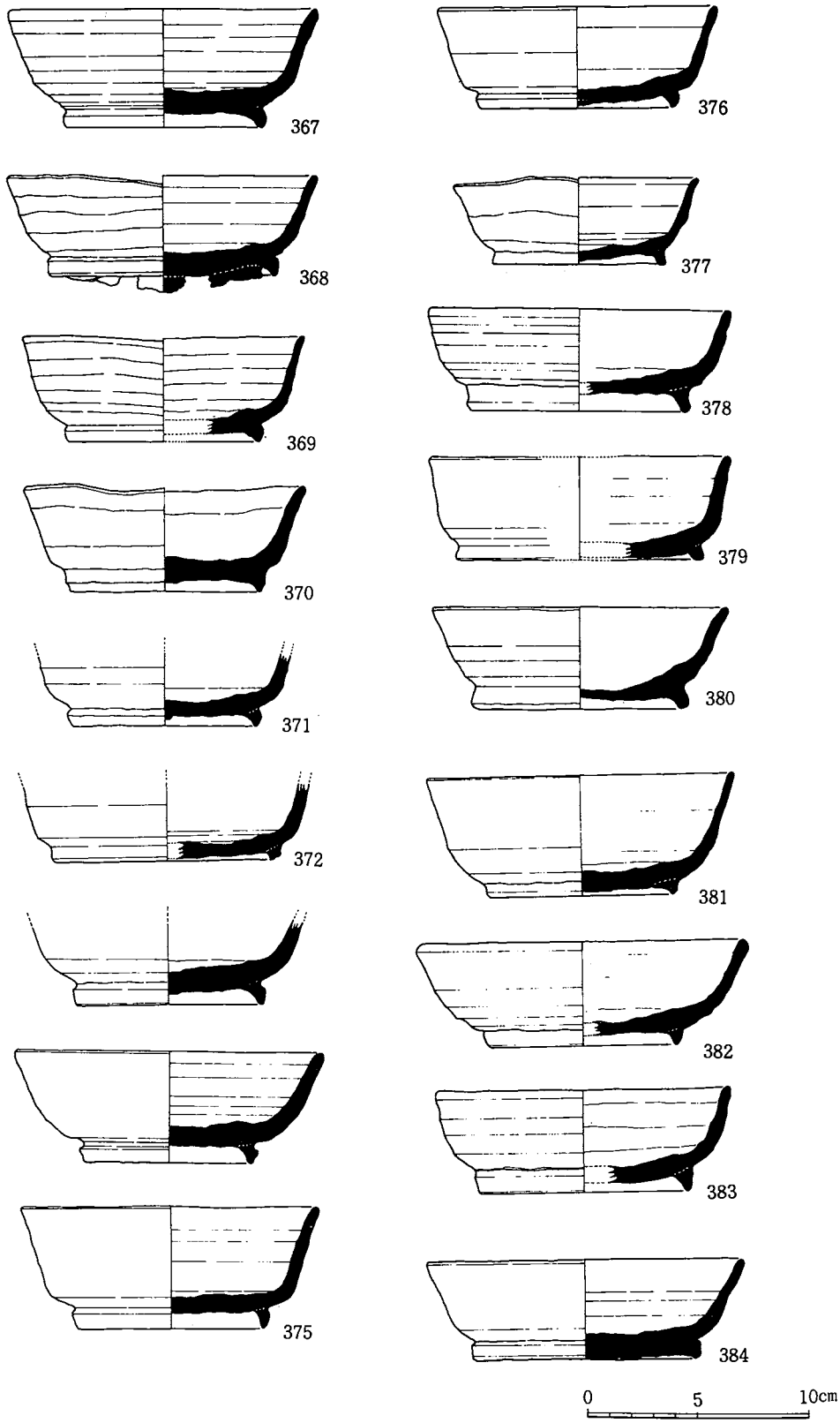
蓋BⅡb類（第63図351、352）

端部が直行する形状を持つ2個体である。351は端部が直行し外傾するのに対し、352は天井部からそのまま下方に下り、端部がズックリする。

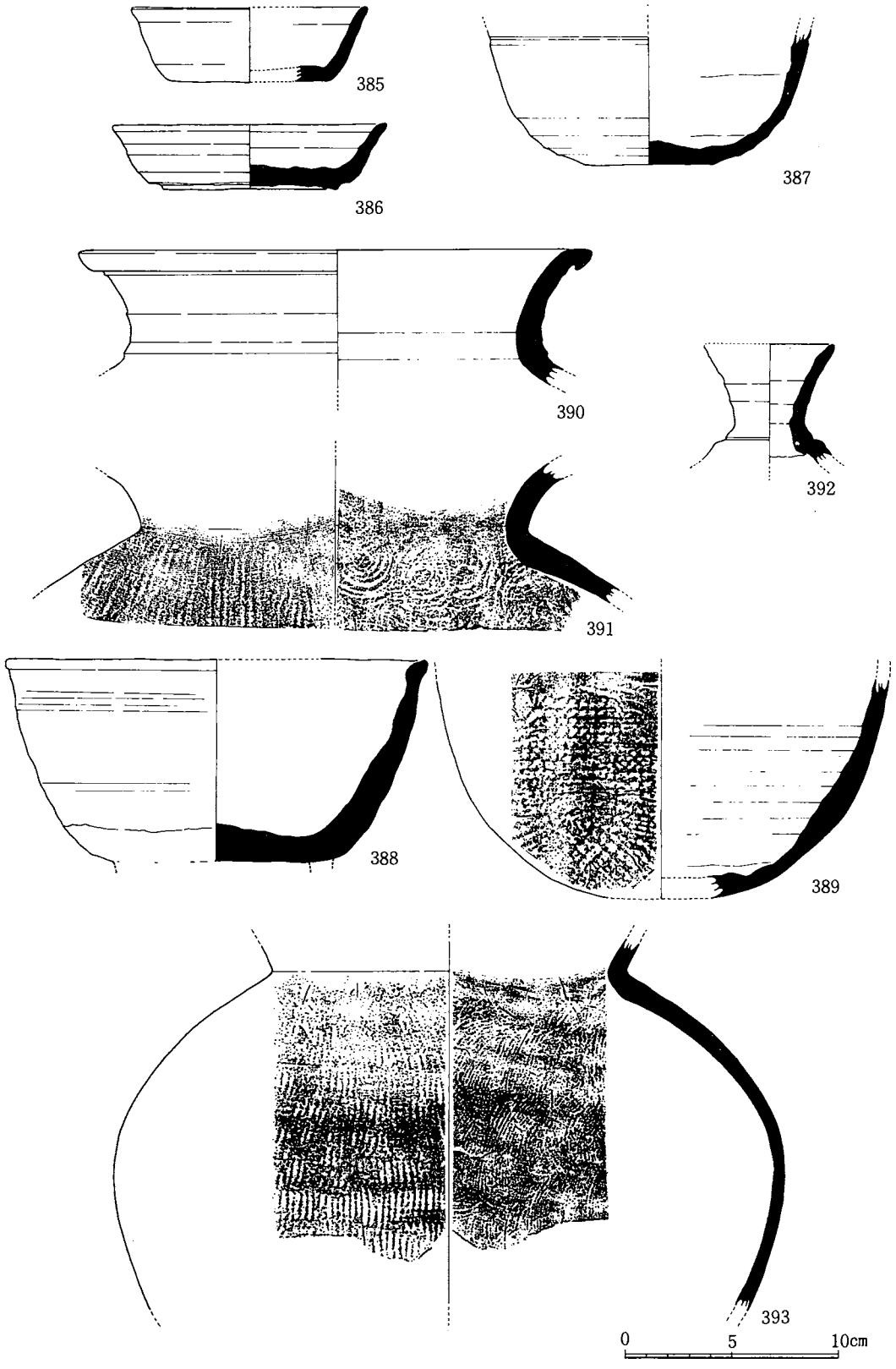
蓋BⅡc類（第63図353）



第63図　B地区出土遺物実測図（須恵器343～366）



第64図　B地区出土遺物実測図（須恵器367～384）



第65図　B地区出土遺物実測図（須恵器385～393）

端部付近が屈曲し、端部が内反する特徴を持つ。

蓋B Ⅱd 類（第63図346、347、349）

端部付近で一度屈曲し、外反してピンと跳ねるもので、総数３個体である。346は内面に重ね焼きの際の跡が残り、347ではひずみの為に端部付近が大きく内弯する。

蓋B Ⅱe 類（第63図354～359）

端部が逆三角形状をなし、つまる形状をなす。B地区のB Ⅱ類ではこの類が最も多数である。355は天井部から端部にかけて段を有するが、これは調整の強弱が現われたものと考えられる。

(2) 蓋　杯（杯）

杯は総数26個体が出土した。A地区の分類に準じてA～C類に大別し、さらに細分化した。

杯A 類（第63図361～364）

この類はたちあがりを有し、古墳時代に属するもので、総数４個体である。

杯A a 類（第63図364）

たちあがりが直立した形状を持つ。

杯A b 類（第63図361～363）

たちあがりが内傾するもので、中には 363のように小型のものも含まれる。361は内面受部付近に一条の沈線を有する。

杯B 類（第63図366～第64図384）

高台を有する、総数19個体の一群である。

杯B Ⅱ類（第63図366～368、第64図370、371、373、375、376）

高台が内弯する形状を持つもので、総数８個体で、B地区B類では最大数を数える。 366～368、370は口縁部が外弯気味に立ち上がり、375、376は直行して立ち上がっている。また類中で、特異なものは368である。これは底部に不純物が多数付着し、安定が悪く、実用に耐えられない。

杯B Ⅳ類（第64図369、372、374）

総教は３個体のみで、A地区におけるこの類の膨大さに比べれば非常に少ない。372はB Ⅳi 類に、他はB Ⅳii 類に相当する。369は口縁部が外弯気味に、374は直行して立ち上がる。

杯B Ⅵ類（第64図381～383）

高台が逆三角形状をなし、総数は３個体である。ともに外弯気味に立ち上がるが、383は高台が特に高い。

杯B Ⅶ類（第64図377～380）

A地区にはみられない類であり、高台が凹形をなしている。基本的にはB Ⅳ類に含まれるものであろう。内外面から強くヨコナデ調整を行なうが、Ⅳ類とことなり端部の内外側ともに接地する。377、380は端部付近で外反する。

384は特異なものであり、底部が1.2cmと非常に厚く、底部を二重に貼り付けた痕跡が残る。

杯C類（第63図360、第65図385、386）

高台を持たないもので、総数3個体である。

杯C Ⅰ類（第63図360）

比較的に古手の要素を残すもので、端部が内弯気味になる。

杯C Ⅲ類（第65図385、386）

端部が外反するもので、386は偏平である。

(3) 壺（第63図365、第65図389、393）

365は天井部に円形のつまみを有する。これはA地区318と同型式で、長頸壺の蓋と思われる。389は壺の底部で、外面には格子目文の叩きを施す。393は壺の頸部から胴部にかけての部分で、外面は格子目文の叩きを、内面には櫛状施文具による調整を行う。

(4) 瓶（第65図392）

瓶の口縁部と思われ、口径は6.0cmを測る。

(5) 鉢（第65図387、388）

鉢の底部と考えられ、387はやや丸底で体部中位に一条の沈線を持つ。388は高台を持つものだが、現存は剝離しており、接合部に二条の沈線を持つ。

(6) 甕（第65図390、391）

A地区甕Ⅰ類の分類に含まれ、390は口縁が330に類似する。391は肩部外面に格子目文を叩き、内面には青海波状文を施す。

ロ、土師器・その他（第67～75図）

B地区からも多くの土師器が出土しており、器種には甕・壺・鉢形土器・杯蓋・皿・高杯。高台は杯などがあり、移動式竈が一点出土した。このほかでは紡錘車と砥石が各一点出土した。

甕（第67～70図165～190）

甕として26点をとり上げた。A地区出土の甕とほとんど同じくしている。(186)は大きな口径で4.7cmを測る。口縁部は厚く短かくつくられ、胴部は大きくふくらんでいる。(189)は全体的に器厚が非常に薄い。

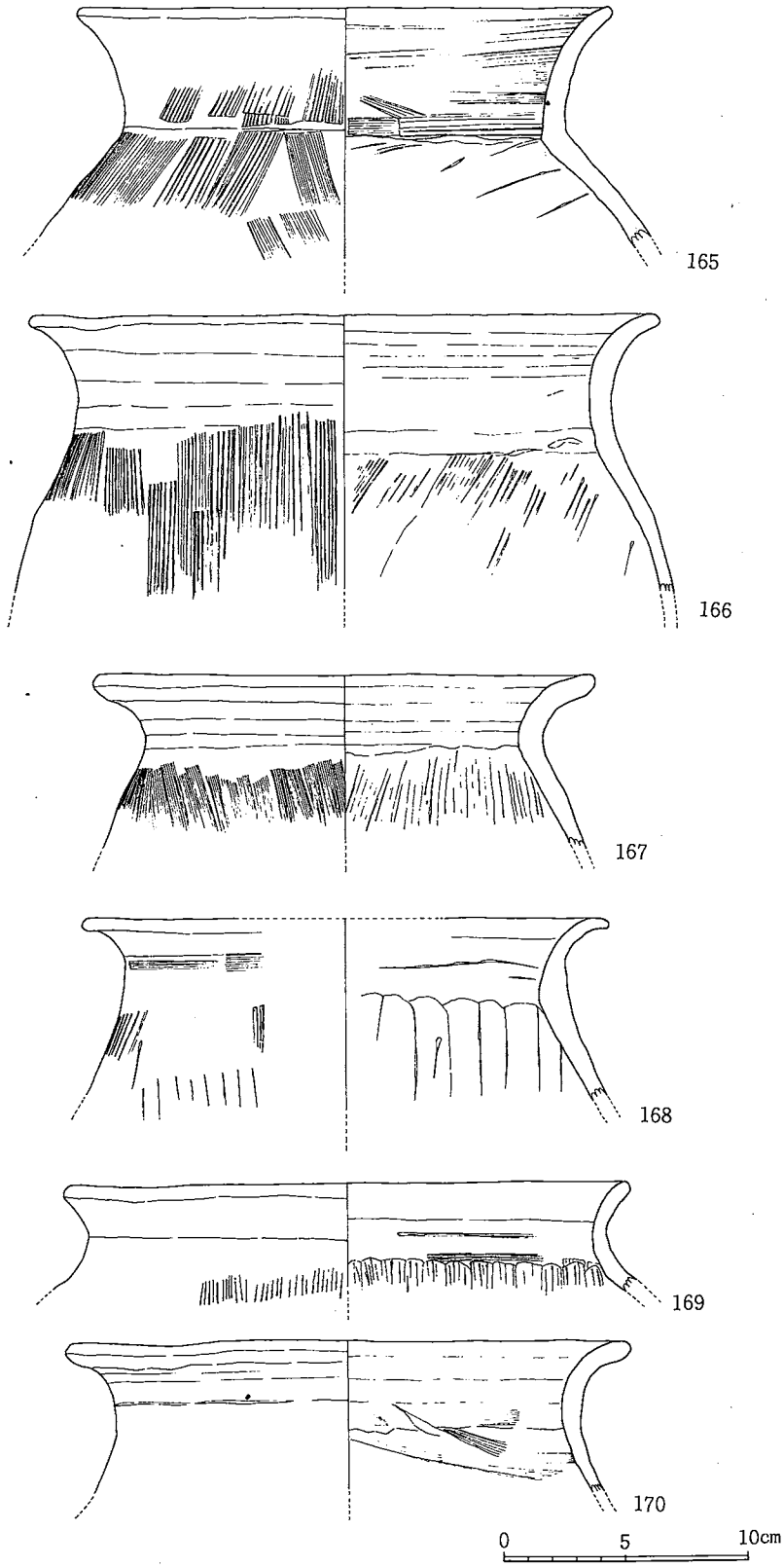
壺（第70図121）

(191)は直口する口縁部で口径12.3cmを測る。肩部が大きく広がる器形で蓋を有するものと思われる。白色砂粒、雲母混じりの胎土で色調は赤褐色を呈している。

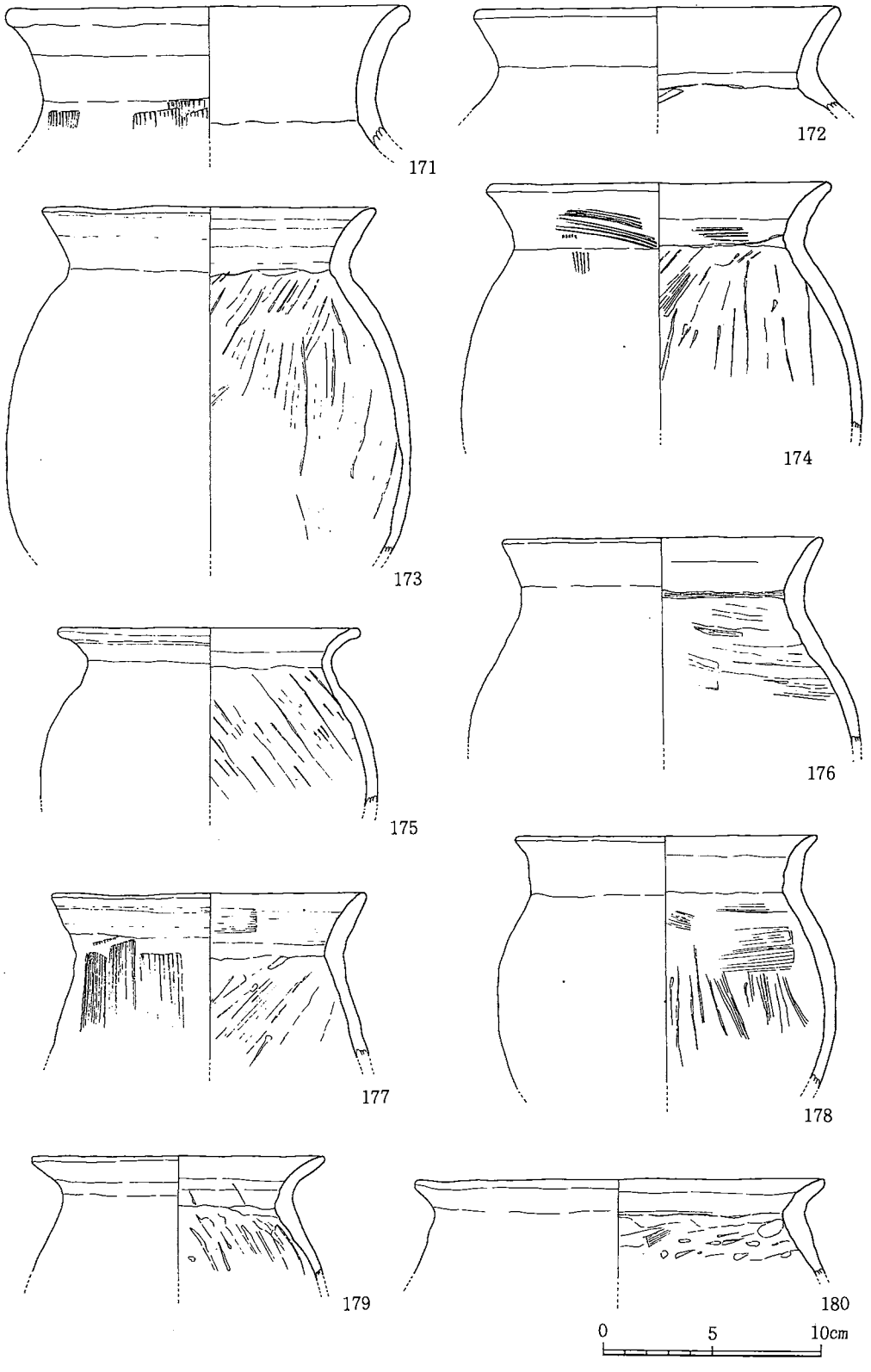
鉢形土器（第70図192、193）

(192)は口径33.8cmを測る鉢形土器である。外反する口縁部で、肩部の張りは小さい。(193)は口径30.4cmを測り、短い口縁部で胴部のふくらみが大きい。器壁は厚く9～10mmである。

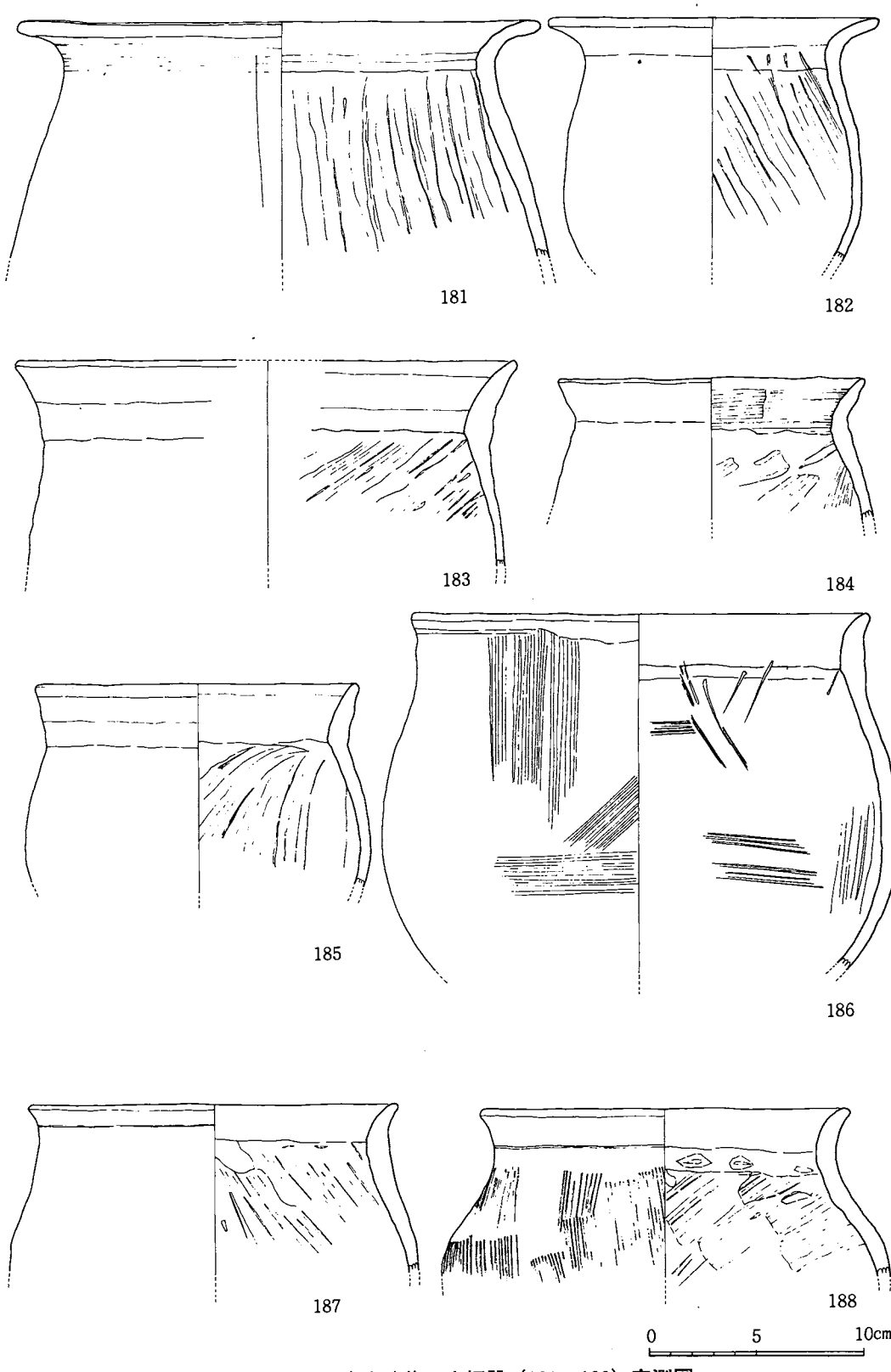
甑（第71・75図194～196・246）



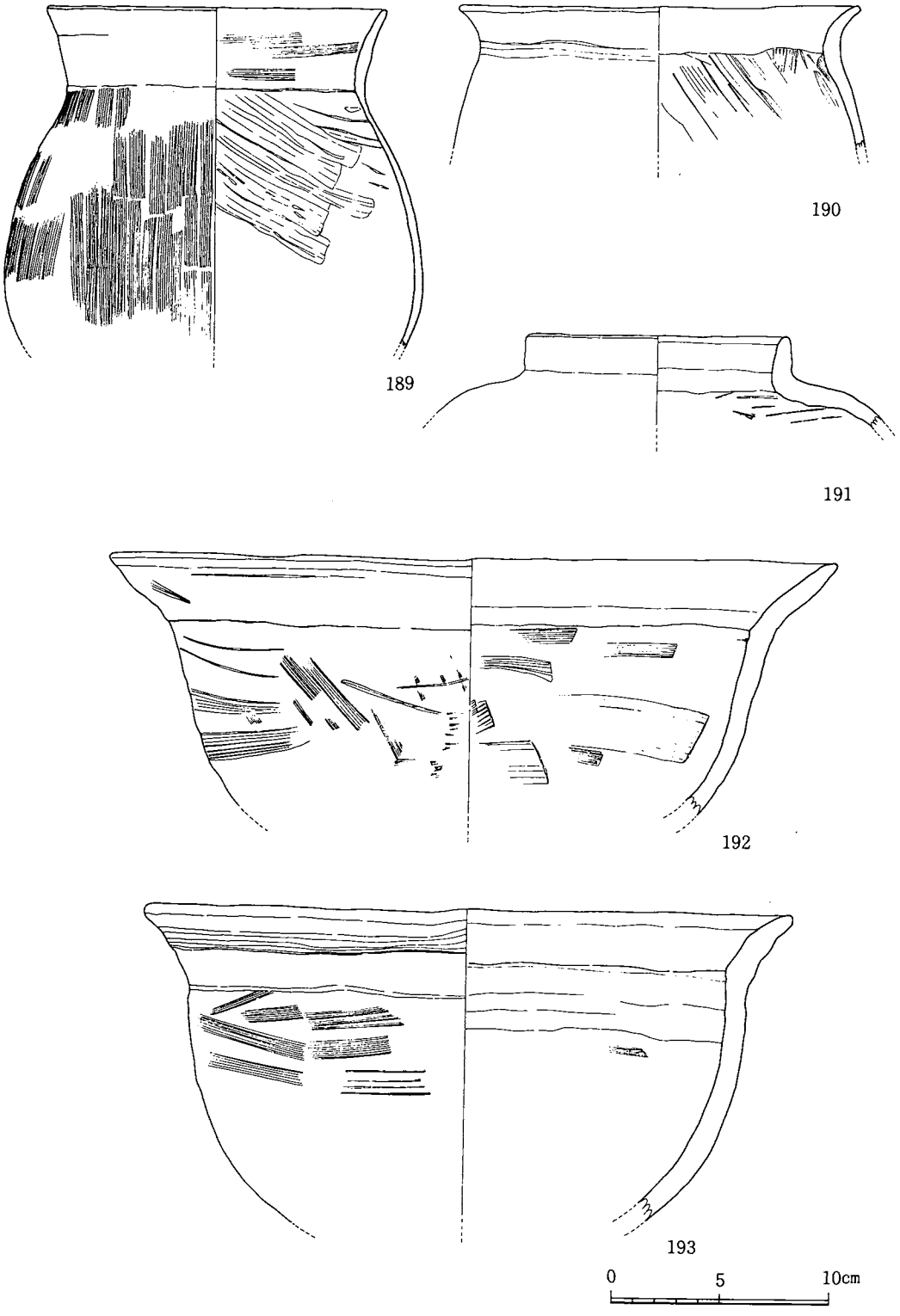
第67図　B地区出土遺物・土師器（165～170）実測図



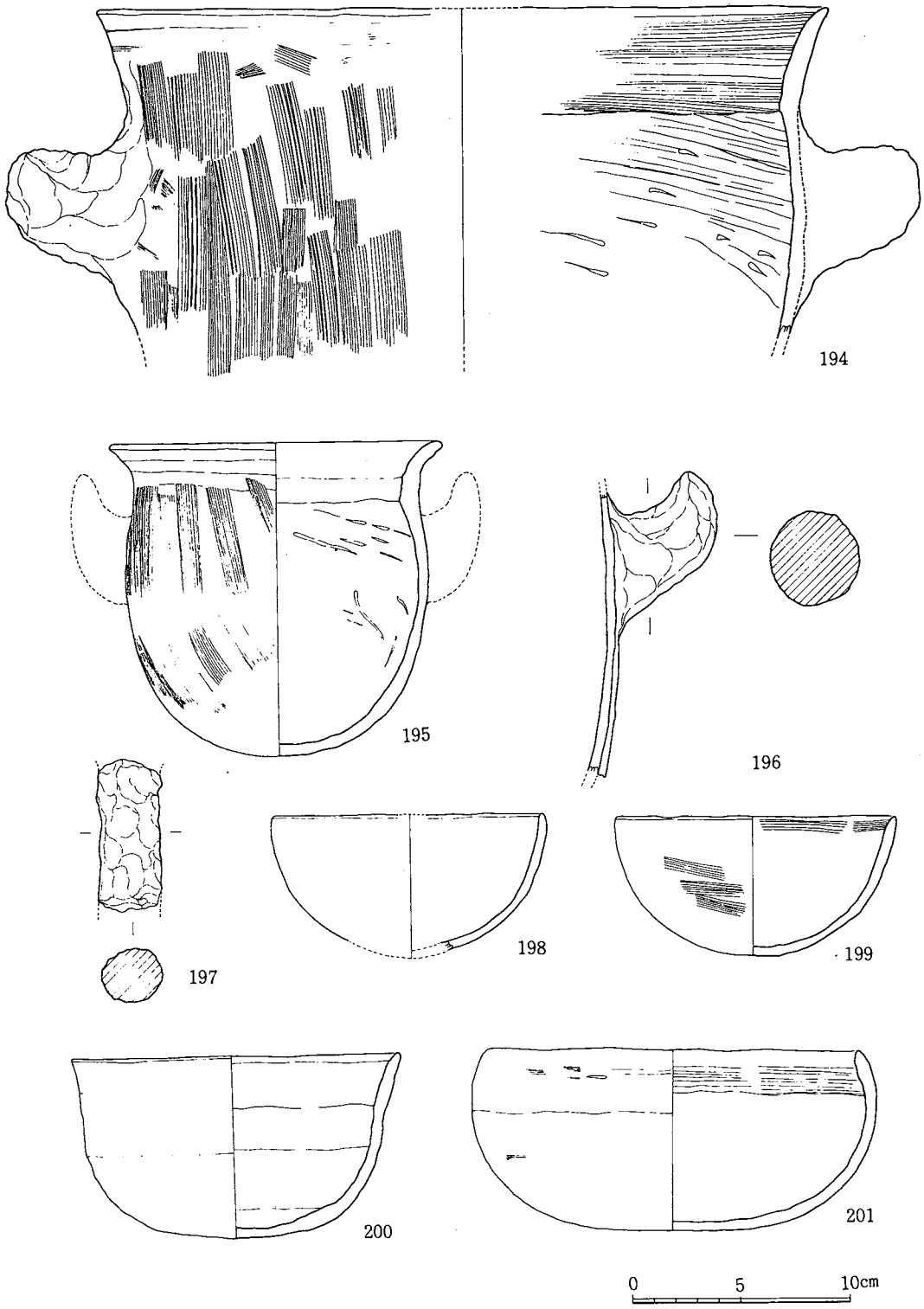
第68図　B地区出土遺物・土師器（171～180）実測図



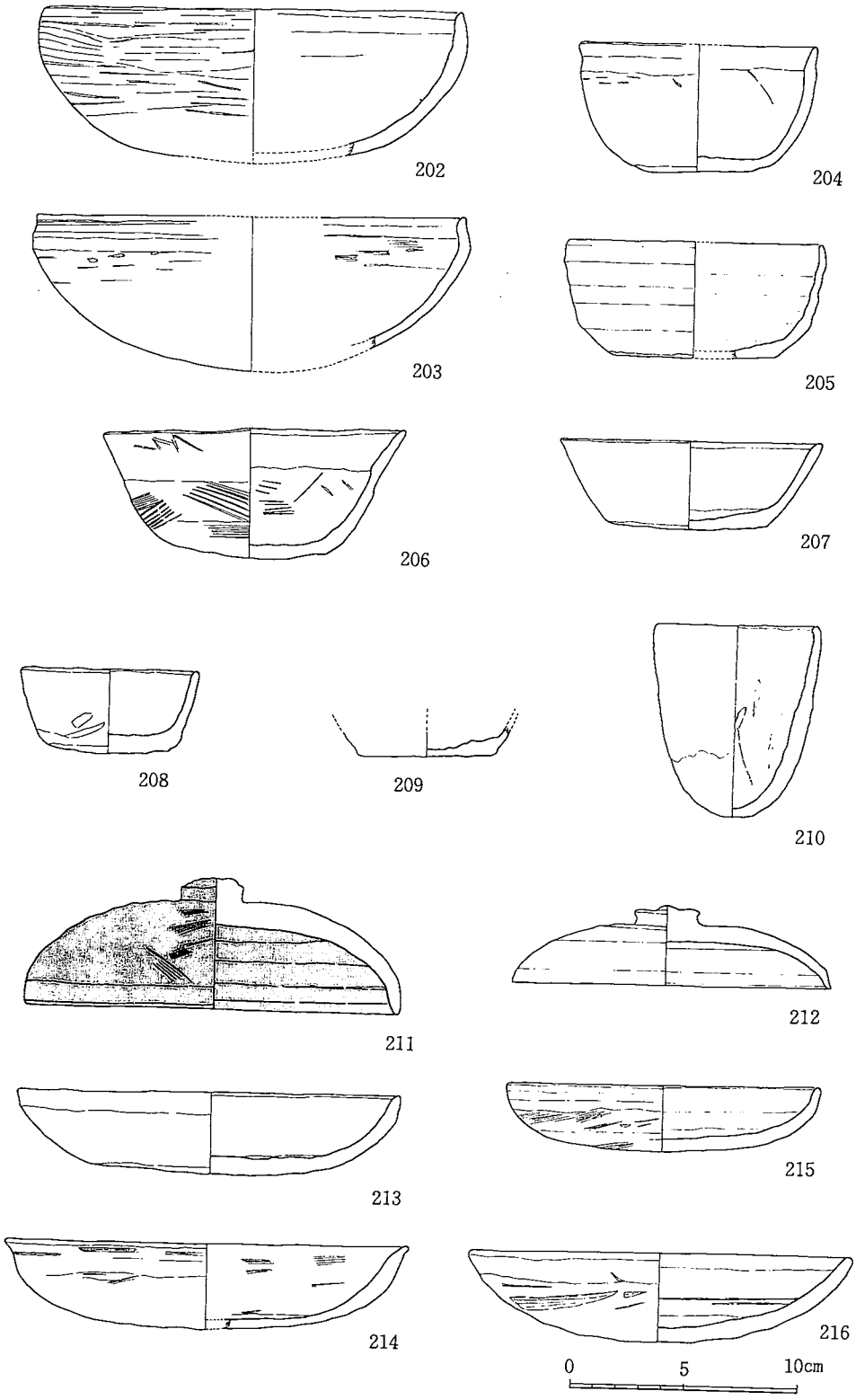
第69図　B地区出土遺物・土師器（181～188）実測図



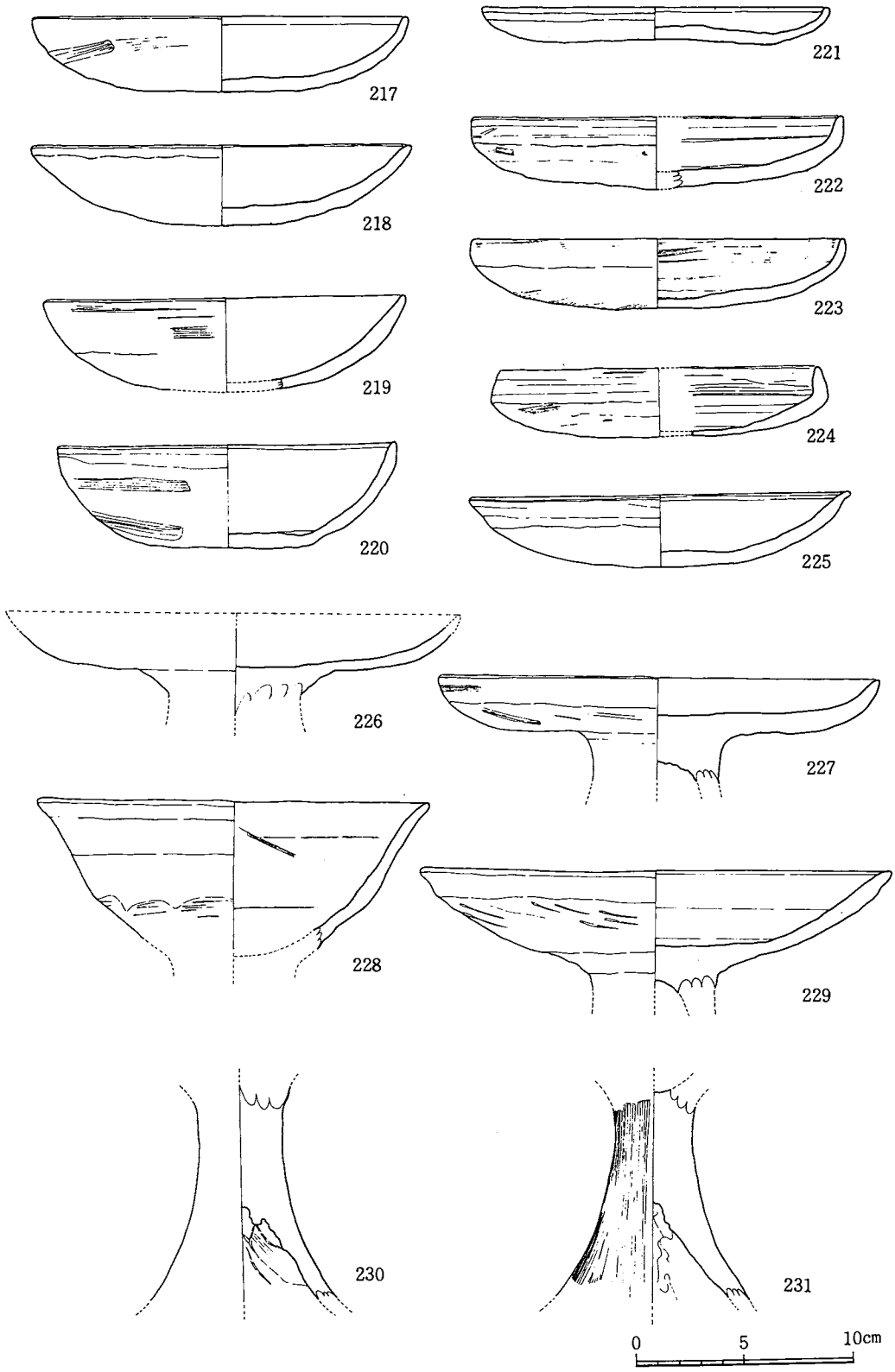
第70図　B地区出土遺物・土師器（189～193）実測図



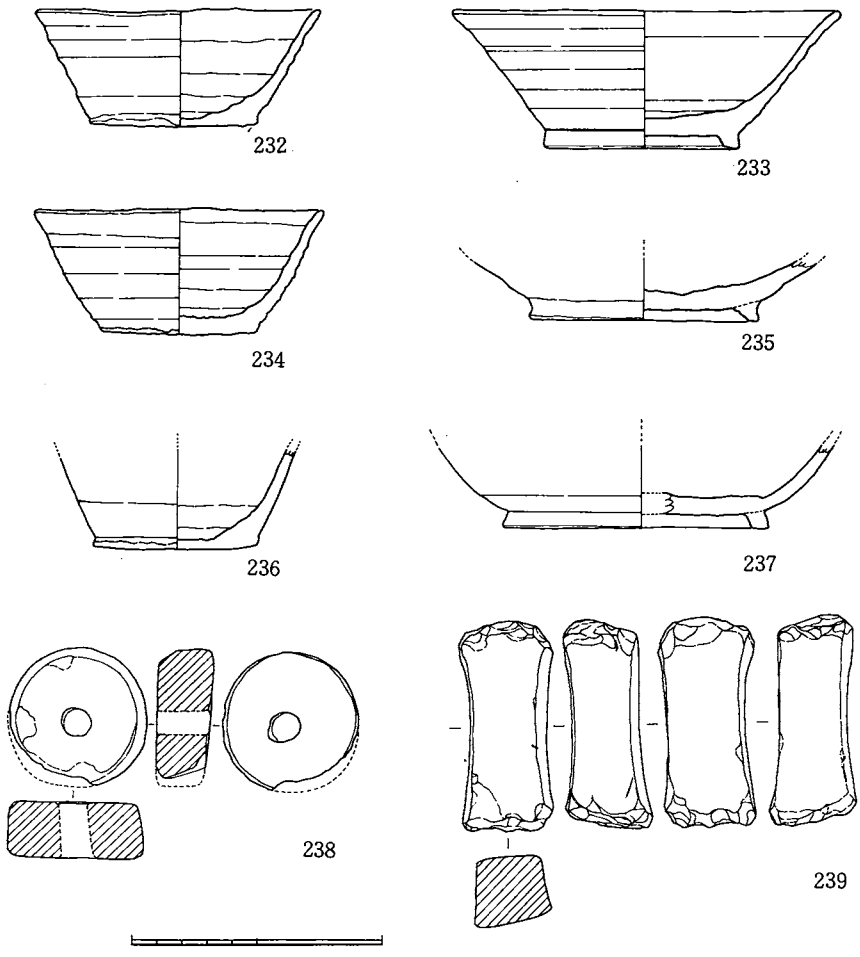
第71図　B地区出土遺物・土師器（194～201）実測図



第72図　B地区出土遺物・土師器（202～216）実測図



第73図　B地区出土遺物・土師器（217～231）実測図

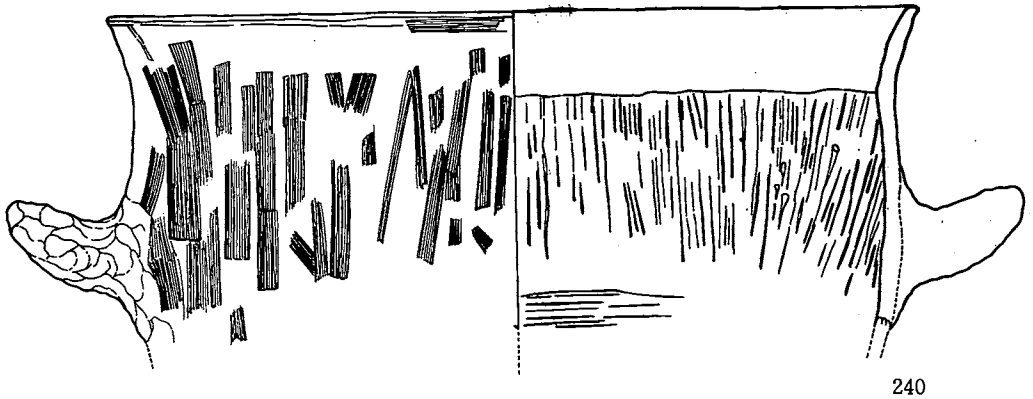


第74図　B地区出土遺物・土師器・紡錘車・砥石（232～239）実測図

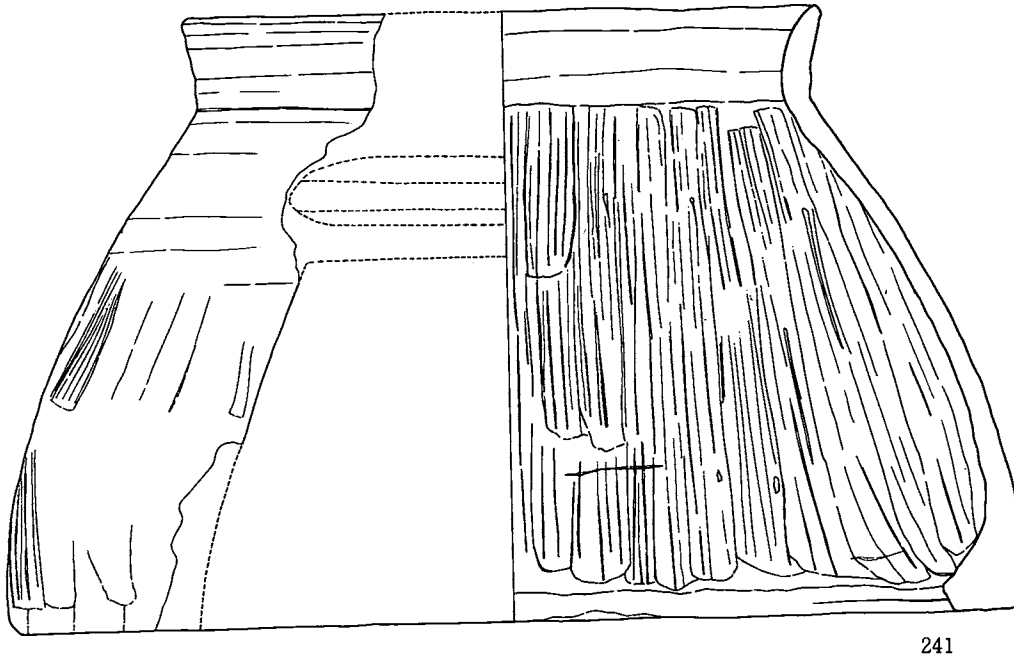
194～196・250は甑である。(194)は口径33.9cmを測る。やや外反する口縁部で端部は細くなる。全体的に器厚は薄い。把手はずんぐりと寸ずまりの形状を示している。(195)は口径15.4、器高14.4cmを測り小型の甑である。外弯する口縁で胴部がら底部へとふくらみを持ったプロポーションである。底部に孔をもつものと思われる。(240)は非常に大型の甑である。口径42.9cmを測る。ゆるく外反する口縁部である。器厚はさしたる厚さをもたず把手は斜上する。(197)は甑の底部のブリッジの破片である。直径は 2.8cmで手ナデによる調整を行っている。

鉢（第71・72図198～219）

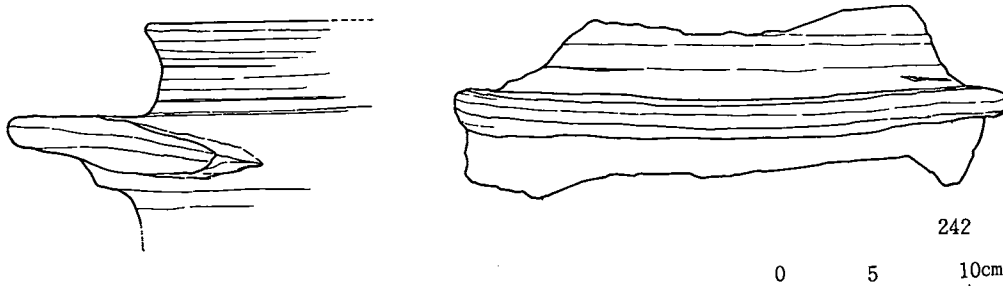
鉢として9点をとり上げた。(198 ・200)は半球状にあり、(200)は口縁部がやや外反している。(201)は最も大きく胴部径18.7cmを測る。胴部から口縁部は内弯しており、口縁端部は細く仕上げられている。(202・203) も同様の形状を示すが、(203)は口縁部と胴部との区別ができる。(204)は短い口縁でわずかに外反している。(206)は胴部と口縁部とが明確に分かれ、口縁部は大きく外反している。



240



241



242

0 5 10cm

第75図　B地区出土遺物実測図・土師器（240～242）

杯（第72図207～210）

(207) は口径11.7cm、器高3.9cmを測る。底部と胴部との境は明瞭である。器厚は底部が薄くなり、口縁部はやや厚くなり端部は丸くおさまる。(208)は手捏ね土器で口径7.9cm、器高 3.6cmを測る。粗い整形を行っている。(210)も同じく手捏ね土器であり、口径7.3cm、器高8.4cmを測る。口縁端部は内弯している。粗い整形で焼成も不充分である。

皿（第72・73図213～225）

皿は13点をとり上げた。口径は17.9cm～13.9cm、器高は4.6cm～1.5cmを測る。いずれも白色砂粒、雲母混じりの胎土で色調は赤褐色を呈している。ほとんどがゆるい丸底であるが、(220、221)は平底である。口縁もほとんどが外反し立ち上がっている。(214・225)は端部が細くつまみ上げられ外反している。(223・224)は屈曲しやや内傾している。

高　杯（第73図226～231）

(227・229)）は前記の皿に脚部を接合したような高杯である。(227)の杯部の口径は21.9cmを測り大きい。(228)は深い杯部で口径は18.2cmを測る。

杯・高台付杯（第74図232～237）

(232) は口径11.3cm、器高4.5cmを測る。整形が不充分で口縁はいく分波状している。(234)も同様の形状にある。(233)は高台を持ち、体部と口縁部とは一直線に外反し、端部は丸くおさまる。口径15.5cm、器高5.4cmを測る。精良な胎土で色調は明褐色を呈する。(236)の高台は外側へ跳ね、(237)はやや内弯し端面は平たい。

ハ，その他（第74図238・239）

(238)は直径5.5cm、厚さ2.2cmの紡錘車である。ほぼ中央部に孔があり、孔径は中間部で 1.2cmを測る。色調は赤褐色である。(239)は砥石で四面とも磨り滅らされている。淡黄褐色を呈しシマ模様があり、所謂、天草砥石と同じくするものと思われる。

竈形土製品（第75図241・242）

(241) は竈形土製品である。甕と同じような外反する口縁部を有し、底部は厚く安定があるように仕上げられている。口径は34.0cm、底部径は53.4cm、器高は31.5cmを測る。焚口があり、底部が広く33cm、上部は21cmで高さは19cmで平たく面どりがされている。外面はハケ目、内面はヘラ削りで調整を行っている。(242)はA地区の第1号遺構から出土した鍔である。(241)も同様の鍔を有していたものと思われる。両者とも多量の砂粒が混じる胎土で、色調は赤褐色を呈する。焼成も良好である。

(5) 小　結

B－1～5トレンチの調査の結果はB－1とB－2トレンチとが交わる地点で多くの遺物が出土したがB地区の南側を迂回している小谷川が、当時はB地区を東西に横切る形で直線的に

流れていたものと判断できた。当時のこの小谷川への傾斜面に滑り落ちるような状態で遺物が出土したものである。

遺物に須恵器・土師器・獣骨などがある。須恵器では杯蓋・高台付杯・杯・高杯・甕などがある。

須恵器

興善寺志水遺跡では、土師器・瓦類に伴って多数の須恵器が出土した。原形を復原できるものは、A・B両地区を合わせて400点弱を数え、本報告ではその全てを実測し、観察表を作成した。A地区・B地区の項で各々の須恵器の詳細については述べてきたので、ここでは本遺跡出土の須恵器の性格等について考えてみたい。

(1) ヘラ記号について

本遺跡出土の須恵器は総数393個体を数える。その内でヘラ記号を有するものは6個体であり、蓋杯と高杯にのみみられ、全てA地区からの出土である。ここでは本遺跡出土の須恵器のヘラ記号について整理してみたい。[註1]

蓋杯

蓋：107個体中の1個体にヘラ記号が見られる。天井部一杯に記され、ほぼ平行する二条の直線を持つ。

杯：172個体中の2個体にヘラ記号が見られる。228は高台を持つ杯の底部に、直交するように二本の直線を引いている。185は同じく高台を持つ杯の底部に描かれる。まず2本の短く平行する直線を引き、更にその上から直行するように重ねる。内一本は前述の二本と直交するが、他の1本は重ならない。焼成・胎土ともに2つは異なり、228の方が良好である。

高杯

19個体中の3個体にヘラ記号が見られる。301は脚部に、まず縦線が引かれて次に斜線が交差する形で描かれている。295も同じく脚部に描かれ、まず二本のほぼ平行する縦線を引き、次にその二本に交差する形で二本の斜線が引かれている。記号化の順序は301と基本的に同様である。299は脚部に描かれている。一見して上下2段のスカシ孔を思わせるが、他の面には描かれていない。ここでは6本の直線を刻みこんでいるが、記号化の順序は不明である。

以上が本遺跡におけるヘラ記号の概要であり、以下要点をまとめてみると次の通りである。

○蓋杯・高杯にのみヘラ記号が認められ、特に高杯の比率が高い。

○記号は直線を基本として、2～6本引かれており、平行するもの交差するものがあり、多様である。

(2) 焼成について

本遺跡の須恵器を実測中特に強く感じられたのは、焼成の際の焼きひずみが多く見られることである。ちなみに蓋杯類のみに限って、ひずみが強く見られるものの数値を上げてみたい。

表1　A地区蓋　BⅠ類　法量図

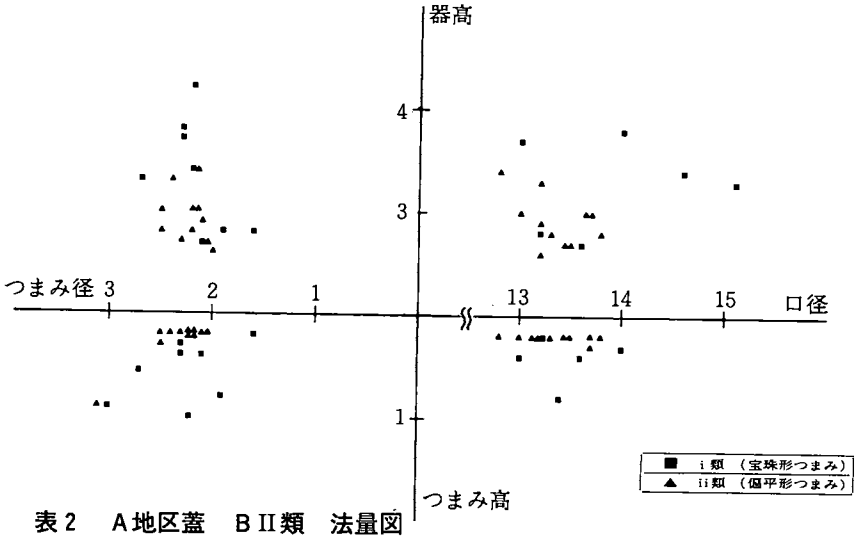


表2　A地区蓋　BⅡ類　法量図

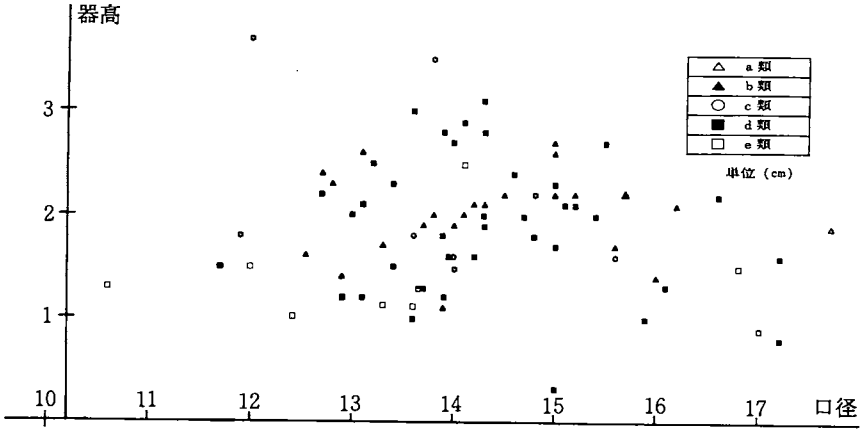


表3　A地区杯A類

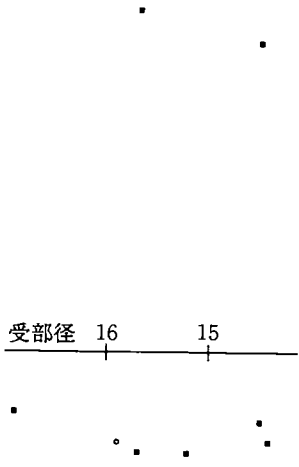
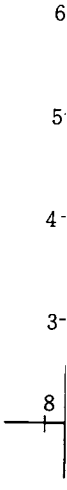
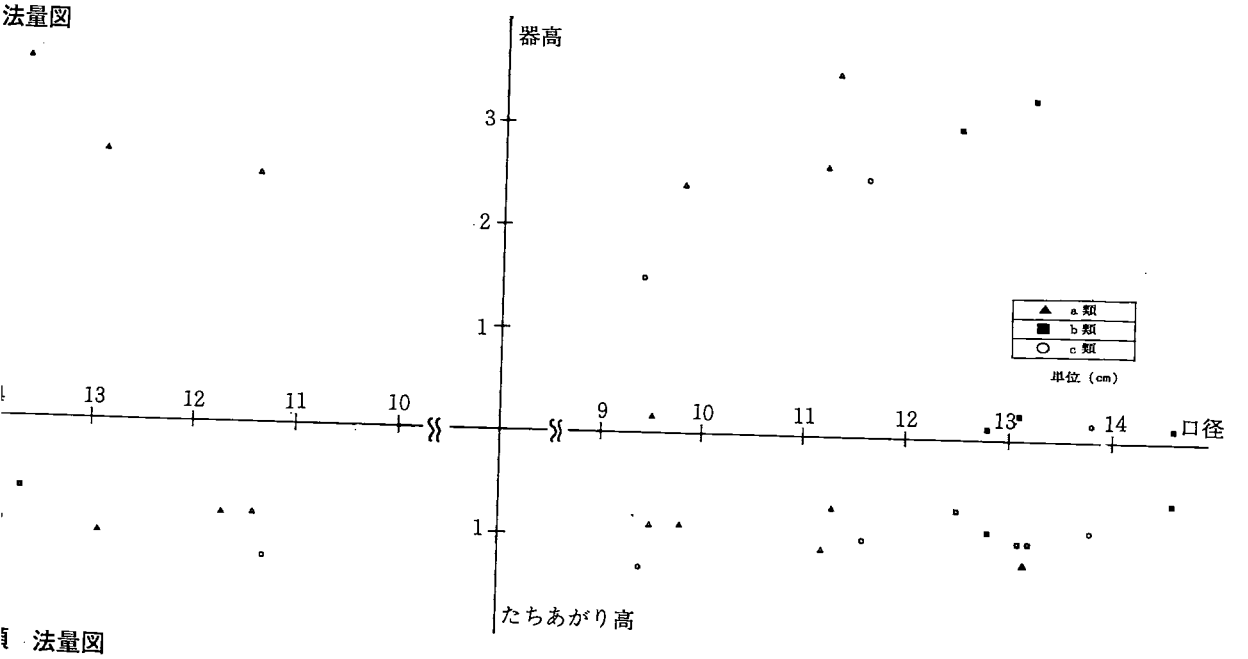


表4　A地区杯C



法量図


器高
3
2
1
1
13
12
11
10
9
10
11
12
13
14
口径
たちあがり高
a類
b類
c類
単位（cm）

頸 法量図

器高

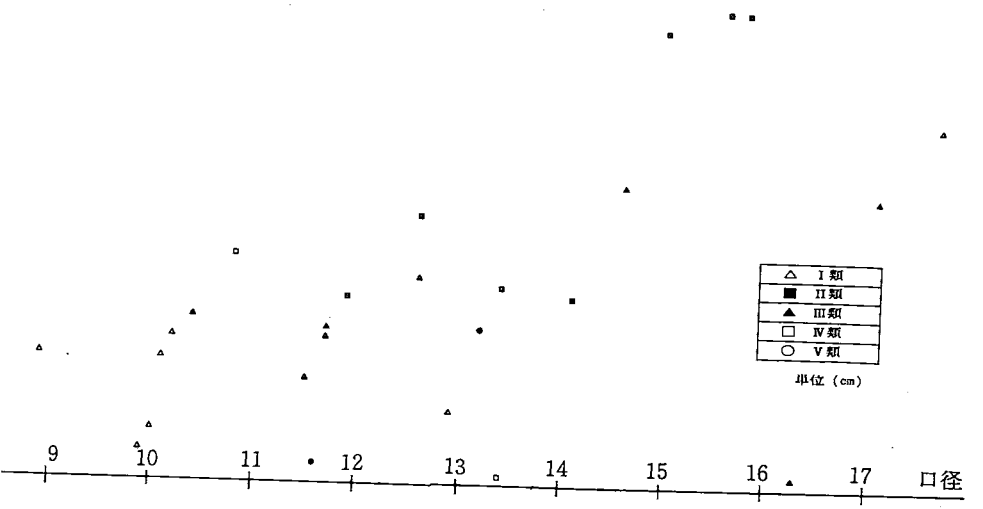
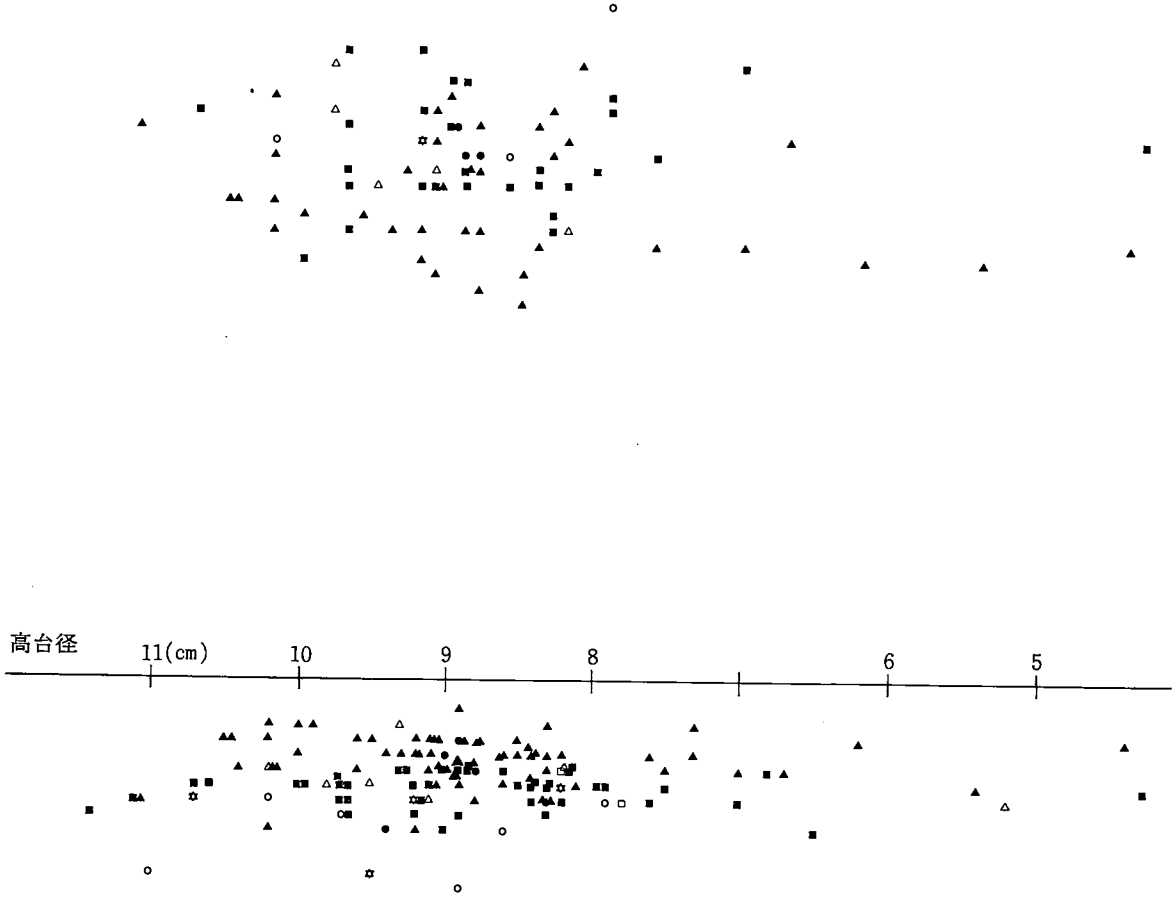
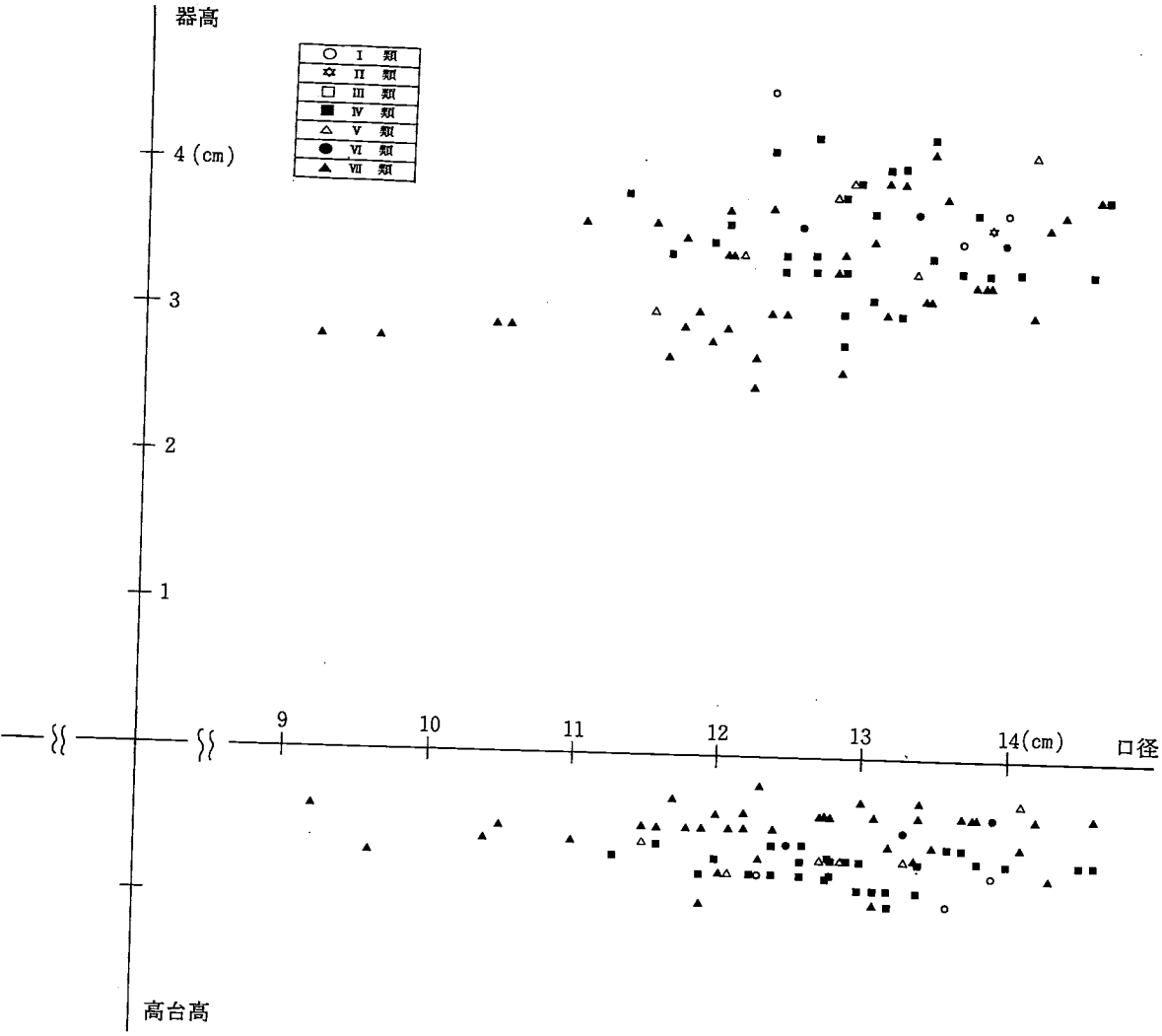
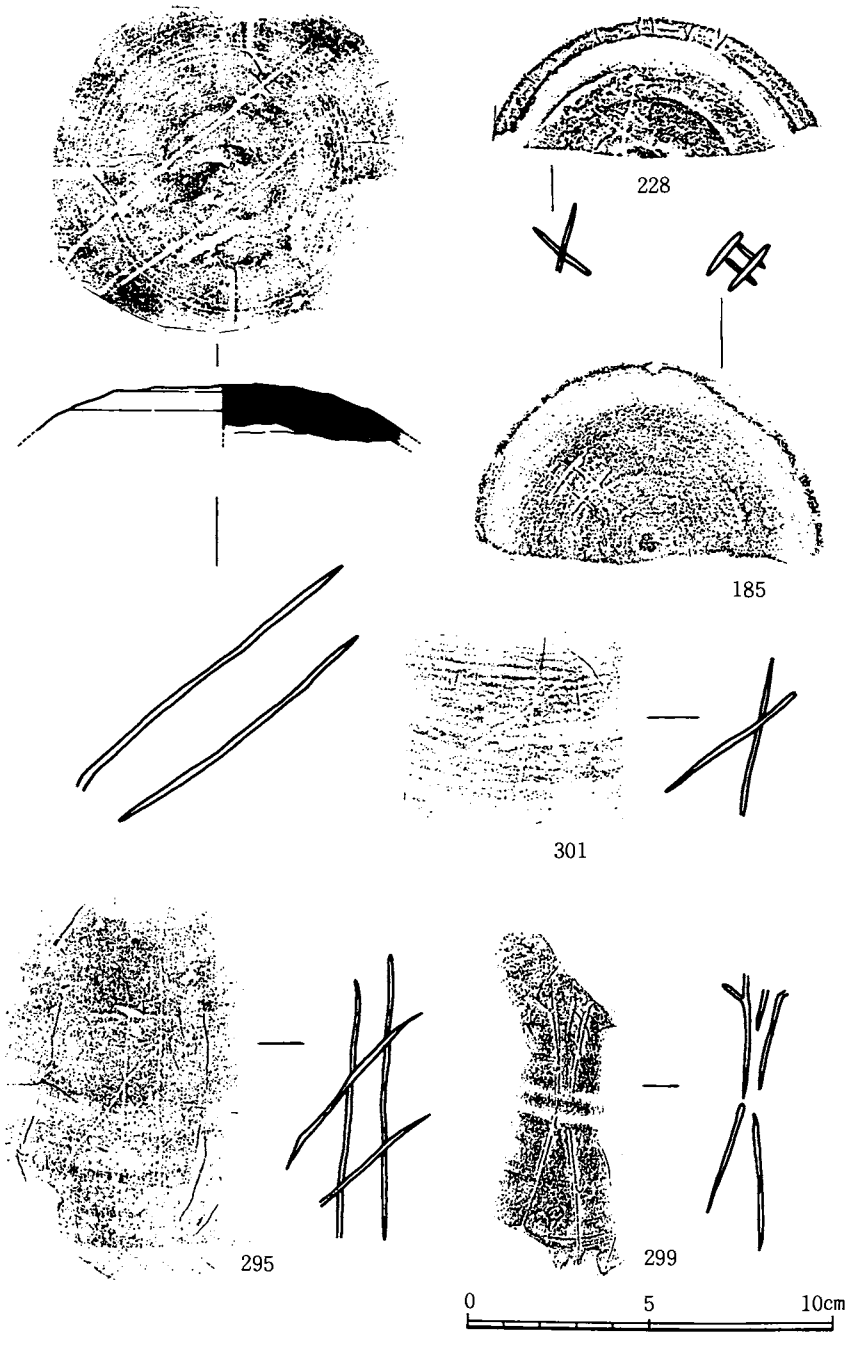

I類
II類
III類
IV類
V類
単位（cm）
9
10
11
12
13
14
15
16
17
口径

表５　　Ａ地区杯Ｂ類　法量図




器高
I 類
II 類
III 類
IV 類
V 類
VI 類
VII 類
4 (cm)
3
2
1
9
10
11
12
13
14(cm)
口径
高台高



第66図　出土須恵器ヘラ記号

	総数	全体的に大きくひずむ	大きくひずみ実用に耐えない	計
A地区蓋	106	11 (10.1)	5 (4.8)	16 (5.7)
〃 杯	165	4 (2.4)	1 (0.6)	5 (0.3)
〃 総計	271	15 (5.5)	6 (2.2)	21 (7.7)
B地区蓋	17	2 (11.8)	0	2 (11.8)
〃 杯	25	2 (8.0)	1 (4.0)	3 (12.0)
〃 総計	42	4 (9.5)	1 (0.2)	5 (11.9)
両地区総計	313	19 (6.1)	7 (2.2)	26 (8.3)

表6　須恵器焼成表　　(　　) は全体のパーセント

この結果ではひずみを持つものが全体で8.3%と低いように思えるが、実際はB地区368(高台付杯)にみられる様に底部に不純物が付着し、全く実用に耐えられないものも含まれている。また本遺跡の北側に隣接した興善寺馬場遺跡においても、同様の須恵器が出土している。

さらにA地区の項[註2]でも述べたように、杯BⅥ類は八代地方のこの地域のみ出土する様式で、この地方の窯で生産された可能性も考えられる。

よってこれらの諸事象から、現在の所この附近では窯跡はまだ確認されていないが、付近に窯跡があった可能性が高いのではなかろうか。

(3)　ロクロの回転方向について

本遺跡出土の蓋杯類について、各分類ごとにロクロの回転方向を調べてみた。以下数値を上げてみたい。なお数値はA・B両地区の計である。

蓋	総数	右方向	左方向	方向不明	杯	総数	右方向	左方向	方向不明
AⅠ	2	1	1	—	Aa	4	4	—	—
Ⅱ	1	—	1	—	b	9	4	1	4
BⅠ	2	1	1	—	C	3	1	2	—
Ⅰ i	9	1	5	3	BⅠ	6	3	2	1
ii	12	2	6	4	Ⅱ	12	9	1	2
Ⅱ a	5	1	3	1	Ⅲ	2	1	—	1
b	21	5	10	6	Ⅳ i	13	9	4	—
c	9	2	5	2	ii	33	22	7	4
d	41	18	14	9	Ⅴ	8	5	2	1
e	17	6	10	1	Ⅵ	8	7	1	—
CⅠ	1	—	1	—	Ⅶア	2	1	1	—
Ⅱ	3	—	1	2	イ i	27	12	12	3
					ii	2	10	12	4
					ウ	9	5	4	—
					CⅠ	7	5	1	1
					Ⅱ	6	5	—	1
					Ⅲ	6	5	—	1
					Ⅳ	3	3	—	—
					Ⅴ	2	2	—	—

註
右方向：順方向：時計まわり
左方向：逆方向：逆時計まわり

表7　須恵器ロクロ回転方向一覧表　(No.1)

この結果を各時代ごとにまとめてみると下記のようになる[註3]

	統数	右方向	左方向	方向不明
6世紀後半	21	10(47.7)	6(28.6)	5(23.7)
7世紀前半	9	4(44.4)	4(44.4)	1(11.2)
8世紀後半	266	129(48.5)	96(36.5)	40(15.0)
9世紀前半	17	10(58.8)	2(11.8)	5(29.4)

(　　) は全体のパーセント

表8　須恵器ロクロ回転方向一覧表　(No.2)

これを陶邑古窯址群の事例と比較してみたい。陶邑ではⅠ・Ⅱ期に属する各窯出土の蓋杯を対象に調査したところ「はじめロクロを逆まわりに回転させやがて次第に順まわりに固定した」という結果が得られている。

本遺跡では、直接陶邑古窯址群と時代的にも、空間的にも一致しないが、一方は8世紀代の関西の古窯址の事例、他方は8世紀後半時期の九州地方の事例ということで、一つの資料を提供できるのではなかろうか。

(3) 須恵器の年代について

本遺跡出土の須恵器については、A地区では遺構に伴わず、B地区においても包含層中ではあったが、包含層自体きわめて弱いものであった。

須恵器の年代等を考える場合、以上の理由から本遺跡では他遺跡の資料等を参照にして考えてみたい。

須恵器の形態上からは前述のように古墳時代のものと、古墳時代以降のものに大別できる。[註4]

古墳時代に属するもの

蓋身ではたちあがりを有し、蓋では段をなくした類が第Ⅱ期に担当する。また上下器形の逆転現象が現われる第Ⅱ期の後半時期では、蓋に身受けが付き、かえりを有するものが含まれる。本遺跡で前者に含まれるものが、蓋BⅡa類で6世紀末葉、身A類中でもAa類は6世紀中葉までさかのぼるのではなかろうか。また後者では蓋AⅠ、Ⅱ類と杯CⅠ類のセットが考えられ、これらは7世紀前半に位置されるものであろう。高杯A類もこの時期と思われる。

古墳時代以降に属するもの

第Ⅳ期にほぼ相当するものである。蓋では宝珠形つまみが偏平つまみよりも先行する。また杯ではBⅠ類に古い要素が見られるが、他は時期的に近接したものと思われ、ほぼ同時期のものと考えられる。さらに円面硯もこの第Ⅳ期に現われ、本遺跡出土の円面硯も8世紀後半時期のものと思われる。[註5] また長頸台付壺もこの時期で一括できるのではなかろうか。[註6]

第Ⅴ期に属するものは蓋ではCⅠ、Ⅱ類、杯ではCⅣ類が考えられる。[註7]

以上の通り本遺跡での須恵器の初源は6世紀中葉にさかのぼることができ、[註8] その後一時期途切れるが、8世紀後半時期にピークを迎え、一部9世紀前半時期まで残る。このように年代を考えてきたが、なにぶんにもこれらの資料が遺構に伴った出土でない為、説得力に欠ける。今後類例の資料の増加を待ちたい。

註1．広石古墳群の調査において山崎純男氏はヘラ記号の集成を成されており、その結果「集落址にみられる須恵器のヘラ記号が5％前後あるいはそれ以下であること」を想定されている。本遺跡ではこの見地に立って集成を行なってみたが、時代的にかなり広い幅があった為に、統計的な処理が出来なかった。今後類例の資料の増加を待って再検討したい。（『福岡市広石古墳群、福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集』1977、福岡市教育委員会）

註2．興善寺馬場遺跡調査担当者野田拓治氏の御教示による。

註3．個体数が数ない為に8世紀後半時期以外のものは数値的にバラついているが、この表でおおまかな傾向は知ることができよう。

註4．『世界陶磁全集第二巻』昭和54年小学館所収の「九州の須恵器」小田富士雄氏の論文等を中心に時期的な判断を行なった。なお区分は陶邑古窯址群Ⅰに従がった。

註5．前述の興善寺馬場遺跡では同一の包含層から出土している。手法的な流れとしてはⅡ・Ⅲ類→Ⅳ類→Ⅴ類→Ⅶ類→Ⅵ類と考えられる。

註6．県内における出土の類例は不充分であるが、以下出土地名表を付したい。なお時期は『天観寺山窯跡群』1977。北九州市埋蔵文化財調査会によった。

表9　熊本県内における円面硯出土遺跡一覧表

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	遺跡の性格	年代・共伴遺物	備　考
1	洗　出　窯　跡	荒尾市府本土井内	窯　跡	9世記前半	1個体
2	駄　の　原　遺　跡	鹿本郡鹿央町駄の原	住居址	平安時代・墨書土器	1個体
3	住吉神社境内遺跡	菊池郡泗水町住吉	—	土師・須恵器	1個体、十字形のスカシ有り
4	熊　本　高　校　遺　跡	熊本市新大江一丁目	住居址	須恵、土師器	1個体、十字形大型スカシ有り
5	益　城　国　府　推　定　地	下益城郡城南町陣内舞ノ原	国　府	古墳～平安時代	1個体
6	上　の　原　遺　跡	〃　上の原	集落址	土師、須恵器	1個体、長方形スカシ有り
7	土　穴　瀬　遺　跡	八代郡竜北町土穴瀬	—	平安時代、須恵器	1個体、4型粗形
8	沖　片　遺　跡	八代市西片町沖	散布地	土師、須恵器	1個体、縦長方形スカシ有り
9	霊　符　山　下　遺　跡	〃　妙見町	—	平安時代、土師器	1個体、形状不明のスカシ有り
10	下　り　山　窯　跡	球磨郡錦町一武	窯　跡	須恵器	1個体

註7．大宰府跡ＳＥ400遺跡から同様のものが、久留米市西谷火葬墓群、熊本県久保遺跡等から多数出土している。(『西谷火葬墓群、久留米市文化財調査報告書第3集』1971、久留米市教育委員会、『久保遺跡、熊本県文化財調査報告第18集』1975、熊本県教育委員会)

註8．前掲の大宰府ＳＥ400遺構による。「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」横田賢次郎、森田勉　『九州歴史資料館研究論集2』、及び1979年9月、九阪集会「大宰府出土の平安時代土器、陶磁器の編年について」森田勉氏発表資料による。

土師器には甕・壺・高杯・甑・杯蓋・高台付杯・鉢・鉢形土器・移動式カマドがある。主なものの中で移動式カマドは口縁部が甕の口縁部に類似し、底部が厚く安定よくつくられている。焚口は台形状にあり、上面に鍔がつくものである。鉢形土器が煮たきに使われたものと思われ、甑がこの上に重ねて用いられたのであろう。(195)は約$\frac{1}{3}$が残る底部に孔がみられないことから把手付甕とした方がよいかもしれない。食器としての皿はほとんどが体部と口縁部との境界がないものである。(232)だけが屈曲し口縁が直口している。時期を異にするというよりもバリエーションの一つとして考えてよいだろう。

杯蓋は天井部から端部へとふくらみをもち、宝珠形のツマミを有している。土師器はＡ地区に比較して時期的にやや古い様相を示しているが、大きな差はない。むしろ8世紀後半から9世紀前半にかけての土師器・須恵器のセット関係を明らかにする好資料を提供したといえよう。

（高谷・江本）

第Ⅳ章　む　す　び

今回の調査は九州縦貫自動車道建設に伴なう事前の埋蔵文化財発掘調査として実施したものである。興善寺志水遺跡は「興善寺廃寺」の寺院からは南側へいくぶん離れた地点にあり、調査前の踏査では少量の土器片が採集できる程度の状況であった。調査可能な地点をＡ～Ｃ地区としてトレンチを設け調査を行った結果、Ａ・Ｂ両地区に豊富な遺物の包含層が存在することが判明した。調査状況および結果についてはすでに述べてきたとおりであるが、最後に今回の調査の成果についてまとめむすびとした。

A地区で検出した第1号遺構は少なくとも二軒の住居跡と祭祀遺構とが複合する遺構であると判断した。出土した多量の遺物は須恵器・土師器・青磁・白磁・布目瓦・子持勾玉・土馬・滑石製小玉・獣骨などである。須恵器には杯蓋・杯・甕・高杯・高台付壺・円面硯などの器種がみられ、6世紀後半～9世紀前半のものである。量的には杯蓋・高台付杯など8世紀後半から9世紀前半と考えるものが最も多く出土した。土師器には甕・杯・鉢形土器・高台付杯・甑・カマド鍔・皿・高杯などが出土している。糸切り底を呈する燈明皿については明らかに後行する時期のものといえるが、その他についてはほとんどが須恵器の盛行期8世紀後半から9世紀前半のものと判断したい。このほかの遺物として中国熱州窯産青磁や円面硯があるが、いずれも一般的な住居跡からは出土しないような遺物である。
このことは第1号遺構が「興善寺」に深く係わりを持った遺構であることを述べることができよう。また、非常に多量の遺物が出土し、甑など特に大型の器形であることなど集団的住居跡の可能性が強い。

子持勾玉・滑石製小玉・土馬・手捏ね土器などの出土は祭祀遺構として捉えることが可能である。土馬については水霊奉祀や峠神奉祀が考えられているが、第1号遺構の堆積土の中で第Ⅲ・Ⅳ層は一時期沼池的様相を持つ状態であったことを示している。また東側には竜峰山があり、山の神奉祀も充分考えられる。加えて子持勾玉が伴出しており自然災害から守り、さらには豊かな五穀や動物獲得の祈願宿祷を行ったものであろうか。布目瓦を用いる建物が建立されていた痕跡はなく、鬼瓦や鬼面軒丸瓦など祭祀の場所に運び置かれたものではないかと想像される。

竜泉・同安窯産青磁と糸切りの痕跡がある燈明皿などは中世時代のものであるが、直接的に中世期に関連する遺構を捉えることはできなかった。五輪塔の出土もあるが、中世期の生活跡は場所を異にしている可能性が強い。正平拾？五年の刻銘を持つ板碑については追刻ではないかとの疑問が残る。

柱穴群の調査によって2軒の掘立柱建物を明らかにすることができた。柱穴内からの出土遺物は青磁や滑石製石鍋など中世紀のものもあるがほとんどは近世期に佐賀県伊万里・唐津・武雄・嬉野窯らで生産された磁器が認められた。主に江戸時代中期～後期のものと判断され、掘立柱建物は少なくとも江戸時代中期以降に建てられたものといえよう。

B地区は竜峰山からの谷水が流れる小谷川が、当時B地区を直線に横切っていたことが判明し、その河底への傾斜面に多くの遺物を検出することができた。土器は須恵器・土師器ともA地区に比較して時間差がやや少い傾向が見られ、8C後半から9C前半期における土器の共伴関係を語る上に好材料を提供したといえよう。A地区のみならず、B地区にも住居が営なまれていたであろうことを以上の遺物は証明するものである。A地区については祭祀遺構としても捉えられた。B地区では祭祀的様相をもつものとして、手捏ね土器の出土があるが、量的に少ない。

一つの住居内における小規模の祭祀的痕跡として考えておきたい。このほかでは小型の砥石の出土がある。小刀を研ぐのに適し、四面とも大きく凹みよく使用された状態を示している。A地区からは円面硯が二個出土しているが、小刀が木簡を削るのに使用されたのではないかと想像される。調査の前に行なわれた踏査結果による『興善寺廃寺に関連する遺構が検出される可能性がある』を実証できたものといえよう。（江本）

蓋杯・蓋（1～106）

法量（　）は復原値

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯（蓋）	6－1 図版10－1	・口径(14.1)・器高2.4・つまみ径2.1・つまみ高0.4	・残存¼。・口縁は、下方に内弯気味。端部は丸い。偏平化したつまみ。・短いかえり。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ調整。・他は回転ナデ調整内面）・回転ナデ。・かえり部分は特に丁寧なナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・右	・住北東北西上層、不純物付着・全体的にひずむ。
蓋杯（蓋）	6－2	・口径(15.5)・残存高2.4	・残存⅙。・口縁部は、内弯気味。端部はやや外反気味で丸い。・短いかえり。・稜は鋭い。	外面）・回転ナデ調整。内面）・回転ナデ。・かえり部分は特に丁寧なナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・青灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯（蓋）	6－3 図版10－3	・残口径(17.7)・器高2.2・つまみ径2.2・つまみ高1.0	・残存½。・ゆるやかに下り、端部はピンと外反しはね気味。宝珠形のつまみ。	外面）・回転ナデ。・つまみ部は特に丁寧なヨコナデ調整。内面）・½は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・３Ｔ東拡張上層
蓋杯（蓋）	6－4	・残口径(13.0)・残存高1.8・つまみ径(3.0)・つまみ高0.9	・残存⅓。・つまみ部から口縁部にかけては外反ぎみ。端部に向って内弯気味。・宝珠形のつまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部は回転ヘラケズリ他は回転ナデ調整。内面）・不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・明緑灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯（蓋）	6－5	・口径(13.2)・器高0.8・つまみ径1.6・・つまみ高0.2	・残存½。・端部にかけ内弯ぎみで凹形。・宝珠形のつまみ	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色	・住Ｇ～６Ｇ・天井部がひずむ。
蓋杯（蓋）	6－6	・口径(15.1)・器高1.3・つまみ径(2.7)・つまみ残存高0.4	・残存¼。・口縁部は外弯気味。・端部は外弯ぎみにピンとはねる。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層・全体的にひずむ。
蓋杯（蓋）	6－7	・口径13.0・器高1.7・つまみ径2.3・つまみ高0.4	・残存⅓・口縁部から外反ぎみに下る。端部で直立する。・端部は丸い。・稜は鋭い・宝珠形つまみ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・口縁部ヨコナデ調整。内面）・⅓がヨコナデ、他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色	・住北東北西上層
蓋杯（蓋）	6－8	・口径13.6・器高0.7・つまみ径2.1・つまみ高0.4・全高2.1	・残存½・口縁部から内弯ぎみに下る。端部は直立し丸い。・稜は鋭い。・宝珠形つまみ。	外面）・ヨコナデ調整。・・つまみ部は丁寧なヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ、他は無調整。	・緻密、・良好、堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住下～４Ｇ
蓋杯（蓋）	6－9	・口径14.6・器高1.4・つまみ径2.2・・つまみ残存高0.3	・残存¼・口縁部から、内弯ぎみに下る。端部は直立し鋭い。・稜は鋭い。・宝珠形つまみ。	外面）・天井部はヘラケズリ・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・他はヨコナデ。内面）・⅓がヨコナデ、他は不定方向のナデ	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯（蓋）	6－10 図版10－10	・口径(14.0)・器高1.8・つまみ径2.3・つまみ高0.3	・残存⅓・口縁部から大きく内弯し下り、端部は内傾。・端部は鋭い。・宝珠形つまみ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓がヨコナデ、他は不定方向のナデ。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住Ｅ～６Ｇ
蓋杯（蓋）	6－11 図版10－11	・口径13.4・器高0 0.8・つまみ径1.9・つまみ高0.8	・残存⅓・天井部、口縁部とも偏平。・端部は鋭い。短く凹む。・宝珠形つまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・他はヨコナデ。内面）・全面ヨコナデ。	・緻密、・良・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住Ｃ～５Ｇ・偏平な形。
蓋杯（蓋）	6－12	・口径(13.5)・器高0.7・つまみ径2.3・つまみ高0.2・全高1.8	・残存½・天井部、口縁部とも偏平。・端部は鋭くピンと外反。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ他は不定方向のナデ。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面)明オリーブ灰色・右	・ひずむ。
蓋杯（蓋）	6－13	・口径(13.3)・器高0.8・つまみ径2.2・つまみ高0.2・全高2.1	・残存⅓・口縁部から、内弯気味に下り、端部はピンと外反する。・端部は鋭い。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部な丁寧なヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ他は不定方向のナデ。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層・天井部がひずむ。
蓋杯（蓋）	6－14	・口径(13.7)・器高1.0・つまみ径2.5・つまみ高0.3	・残存¼・口縁部から、外弯気味に下り、端部はピンと外反気味。・端部は鋭い。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部はヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ、他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色	・住北東北西上層
蓋杯（蓋）	6－15 図版10－15	・口径12.8・器高1.4・つまみ径2.2・つまみ高0.2	・残存½・口縁部から、外弯気味に下り、端部はピンと外反気味。・端部は鋭い。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・全面ヨコナデ。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住Ｇ～６Ｇ

器種	捜図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯(蓋)	6 —16 図版10—16	・口径13.2・器高1.3・つまみ径2.4・つまみ高0.2	・残存⅘・口縁部から、内弯気味に下り、端部はピンと外反気味。・端部は鋭い。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部はヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ、他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層 ・天井部、ひずむ。
蓋杯(蓋)	6 —17	・口径(13.8)・器高0.8・つまみ径2.5・つまみ高0.2	・残存¼・口縁部から、内弯気味にのび、端部はピンと外反気味。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部はヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他はヨコナデ。内面）・⅓はヨコナデ、他は未調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色　—	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —18	・口径(13.5)・器高0.7・つまみ径2.1・つまみ高0.2・全高1.3	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下り、端部はピンとはね外反ぎみ。・端部は鋭くなる。・偏平なつまみ。	外面）・天井部回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・つまみ部　丁寧なヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色	・住北東北西上層 ・天井部がひずむ。
蓋杯(蓋)	6 —19	・口径(13.2)・器高0.9・つまみ径(2.1)・つまみ高0.2・全高1.0	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下り、端部はピンとはね外反ぎみ。・端部は鋭くなる。・偏平なつまみ。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・つまみ部　丁寧なヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ調整、他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —20	・口径(13.2)・器高0.6・つまみ径(2.0)・つまみ残存高0.2・全高1.0	・残存⅓。・口縁部から、内弯気味に下り、端部は直立気味。・偏平なつまみ。	外面）・天井部はヘラケズリ後、回転ナデ。・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色　—	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —21	・つまみ径3.1・つまみ高0.9	・残存つまみ部分のみ。・偏平なつまみ。	外面）・天井部は、回転ナデ。・つまみ部は丁寧なヨコナデ。内面）・不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰黄色、・右	・鎮付上層
蓋杯(蓋)	6 —22	・口径(11.7)・残存高2.0	・残存　口縁の破片。・端部にかけて、内弯気味でやや外傾。・端部は丸い。	外面）・回転ヘラケズリの後、回転ナデ調整。内面）回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・明オリーブ灰色、内面）・青灰色　—	・住北南上層
蓋杯(蓋)	6 —23	・口径(13.3)・器高1.7	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。端部は短く直立し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリのまま。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ調整他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、	・３Ｔ東拡上層
蓋杯(蓋)	6 —24 図版10—24	・口径(17.7)・残存高1.9	・残存¾端部欠落。・口縁部から、内弯気味に下る。・端部は直立気味。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。・他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —25	・口径(12.9)・器高1.4	・残存⅓。・口縁部から、内弯気味に下る。端部は外傾し凹形を成し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は、回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。・他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好、外面）・灰色、内面）・白色	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —26	・口径(16.2)・器高2.1	・残存⅛。・口縁部から、内弯気味に下る。・天井部にヘラケズリの残欠。・端部は丸みを持つ。	外面）・天井部はヘラケズリの後ナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・不良・表面が粗い。外面）・灰白色、内面）・灰白色	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —27 図版10—27	・口径15.0・器高2.7	・残存¾。・天井部はやや陥没。口縁部から内弯気味。端部は外傾し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、回転ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・½は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	—
蓋杯(蓋)	6 —28	・口径(15.0)・残存高2.2	・残存⅓。・口縁部から内弯気味。端部は短く外傾しやや鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	6 —29	・口径(15.6)・残存高1.7	・残存⅙。・口縁部から内弯気味。端部は外傾し鋭い。	外面）・観察不能。内面）・⅓は回転ナデ。他は未調整。	・密、・良、外面）・暗オリーブ灰色、内面）・灰白色　—	・住北東北西上層 ・不純物が付着。
蓋杯(蓋)	6 —30 図版10—30	・口径14.1・器高2.0	・残存　ほぼ完形。・口縁部からストレートに下る。端部は外傾し、逆三角形状で鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・¼は回転ナデ調整。他は一部不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯 (蓋)	6 —31 図版10—31	・口径15.0・器高2.6	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側わずかに回転ナデ調整。	・密、・不良：表面がもろくなっている、外面）・灰白色、内面）・淡黄色、・右	—
蓋杯 (蓋)	7 —32	・口径(15.2)・器高2.2	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全体に回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色 —	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —33 図版10—33	・口径(13.1)・器高2.6	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は短く凹形で丸みを持つ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —34	・口径(12.7)・残存高2.4	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は短く凹形で丸みを持つ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・鎮付上層
蓋杯 (蓋)	7 —35	・口径(12.8)・器高2.3	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾しやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中心部は未調整。他は回転ナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —36	・口径(13.8)・残存高2.0	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾しやや鋭い。	外面）天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。不定方向のナデ調整。	・密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —37	・口径(13.7)・器高1.9	・残存⅔。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外傾し鋭い。・天井部はやや陥没気味。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰色 —	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —38 図版10—38	・口径(14.5)・器高2.2	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。端部は凹形をなす。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ調整。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰白色、・右	・A～3T東拡上層
蓋杯 (蓋)	7 —39	・口径(14.0)・器高1.9	・残存¼。・口縁部からストレートに下る。・端部は短く凹形で丸みを持つ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ調整。他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —40 図版10—40	・口径14.2・器高2.1	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾し鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・口縁部は回転ナデ調整。内面）・½は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —41	・口径(13.9)・器高1.1	・残存⅙。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は短く外傾しやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリの後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・½は回転ナデ。他は不定方向のナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —42	・口径(14.3)・器高2.1	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は外傾しやや鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に回転調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —43	・口径(16.0)・器高1.4	・残存¼。・口縁部からストレートに下る。端部は外傾する。・端部は外傾し鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から¼まで回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7 —44	・口径(14.0)・残存高1.6	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部は内傾ぎみに凹形をなし鋭い。	外面）・袖の付着のため観察不能。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・オリーブ灰色、内面）・灰白色、—	・住北東北西上層。大きくひずみ実用に耐えない。・不純物付着。
蓋杯 (蓋)	7 —45	・口径(14.0)・残存高1.5	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。端部は内傾ぎみに凹形をなし鋭い。・天井部はやや陥没気味。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ調整。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰白色、・左	・住E～4G

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯 (蓋)	7－46	・口径15.6・残存高1.6	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。端部は短く内反気味。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部より⅓までは、回転ナデ。他は未調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－47	・口径(14.8)・残存高2.2	・残存⅙。・口縁部から内弯気味に下る。・端部は内反しやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に、回転ナデ調整。	・粗、・良、外面）・明オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－48 図版10－48	・口径13.6・器高1.8	・残存¾。・口縁部から内弯気味に下る。端部は逆三角形状を成す。内傾し鋭い。・内面中央部に成形時の凸を持つ。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住E～4G
蓋杯 (蓋)	7－49	・口径(11.9)・残存高1.8	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。端部は逆三角形状を成す。内傾しやや鋭い。・天井部に凹帯。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－50	・口径(16.6)・残存高2.2	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンとはねる。	外面）天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－51	・口径(17.2)・残存高1.6	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンとはねる。	外面）天天井部はヘラケズリの後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に、回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、－	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－52	・口径(16.1)・残存高1.3	・残存⅙。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し弱くはねる。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色－、	・鎮付上層 ・天上部がひずむ
蓋杯 (蓋)	7－53 図版10－53	・口径(15.1)・残存高2.1	・残存½・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し弱くはねる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－54	・口径(15.5)・器高2.7	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部は外反しピンとはねる。・天井部は高く丸い。	外面）・天井部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に回転ナデ調整。	・粗、・良、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－55	・口径(14.3)・器高3.1	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部はつまるが、外反し弱くはねる。・天井部は高く丸い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に回転ナデ。・中央部に指圧痕あり。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住D～6G
蓋杯 (蓋)	7－56 図版10－56	・口径(14.3)・残存高2.8	・残存¼。・口縁部からストレートに下る。・端部は短く、外反し弱くはねる。	外面）・観察不能。内面）・⅓は回転ナデ。他は未調整。	・密、・不良、外面）・灰色、内面）・灰白色、－	・住一括。・大きくひずみ、不純物が付着する。・実用に供しない。
蓋杯 (蓋)	7－57 図版13－57	・口径(13.6)・器高(3.0)	・残存½。・口縁部からやや内弯。端部は短く、外反し弱くはねる。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は未調整。	・密、・不良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住G～11G。 ・大きくひずみ、実用に供しない。
蓋杯 (蓋)	7－58	・口径(14.3)・器高1.9	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。端部は、外反し弱くはねる。	外面）・天井部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面に回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住G～3G
蓋杯 (蓋)	7－59	・口径(14.7)・器高2.0	・残存⅓。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (蓋)	7－60	・口径(13.0)・器高1.0・つまみ径2.2・つまみ高0.2・全高1.2	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンとはねる。・端部は鋭い。・偏平な形状のつまみ。	外面）・つまみ部は特に丁寧なヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・鎮付上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(蓋)	7 —61	・口径(13.9)・残存高1.8	・残存1/6。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し弱くはねる。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面にわたり回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住溝南西部
蓋杯(蓋)	7 —62	・口径(13.7)・器高1.3	・残存1/6。・口縁部からストレートに下る。端部は外反し弱くはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側1/3は回転ナデ。他は未調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・・明オリーブ灰色、・左	・住南西上層
蓋杯(蓋)	8 —63	・口径(14.0)・器高1.6	・残存1/6。・口縁部からストレートに下る。端部は外反し弱くはねやや丸い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・回転ナデ調整？。	・密、・良、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・住北南上層
蓋杯(蓋)	8 —64	・口径(14.2)・残存高1.6	・残存1/4。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンと弱くはねる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —65	・口径(14.3)・器高2.0	・残存1/2。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンとはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から1/3は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層 不純物付着
蓋杯(蓋)	8 —66 図版10—66	・口径13.1・器高2.1	・残存3/4。・口縁部からストレート気味に下る。端部は外反しピンと弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から1/3は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —67	・口径13.0・器高2.0	・残存4/5。・口縁部から外弯気味に下る。端部は外反し弱くはねる。・稜は強く、鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリの後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から1/2は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —68	・口径(15.2)・器高2.1	・残存1/4。・口縁部からストレートに下る。端部はやや外反しはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から1/2まで回転ナデ。他は未調整。	・密、・良好、内面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —69 図版10—69	・口径(15.0)・残存高2.3	・残存1/4。・口縁部からストレートに下る。端部は、外反気味。弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から1/2まで、回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —70	・口径(14.8)・器高1.8	・残存1/4。・口縁部から内弯気味に下る。端部はやや外反。弱くはねやや丸い。	外面）・天井部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側の1/3は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住F～4G
蓋杯(蓋)	8 —71	・口径(15.4)・残存高2.0	・残存1/2。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反しピンとはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側1/3は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・・灰白色、・右	・鎮付上層
蓋杯(蓋)	8 —72	・口径(13.9)・残存高1.2	・残存1/3。・口縁部から大きく外弯。端部は、やや外反気味。弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・黒色、内面）・灰色、・左	・鎮付上層。・ひずみが大きく、実用に耐えない。
蓋杯(蓋)	8 —73	・口径13.7・器高1.0・つまみ径2.2・つまみ高0.2	・残存1/2。・口縁部からゆるく内弯し、端部はやや外反気味に弱くはねる。・偏平なつまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ。内面）・端部側1/3は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯(蓋)	8 —74	・口径(13.6)・器高1.0	・残存1/4。・天井部と口縁部の境不明瞭。・口縁部からほぼストレートに下る。端部は外反ぎみで弱くはねる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層 ・ひずむ
蓋杯(蓋)	8 —75	・口径(13.1)・残存高1.2	・残存1/8。・口縁部からやや外弯。端部は外反しピンとはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他はナデ調整。内面）・端部側の1/4は回転ナデ。他は未調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住溝南西部

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(蓋)	8 −76	・口径(13.4)・残存高1.5	・残存⅓。・口縁部からやや外弯気味。端部は外反気味に弱くはねやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・異色、内面）・灰色・右	・住F～7G 器壁膨脹。
蓋杯(蓋)	8 −77	・口径(12.7)・器高2.2	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部は外反気味に弱くはねる。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、内面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −78	・口径(11.7)・残存高1.5	・残存⅓。・口縁部からやや外弯気味。端部は外反し、弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側から⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、一	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −79	・口径(15.9)・残存高1.0	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部はやや外反気味。・弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部の付近は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −80	・口径(17.2)・残存高0.8	・残存¼。・天井部と口縁部の境は不明瞭。端部は大きく外反し強くはねる。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、一	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −81 図版10−81	・口径15.0・残存高1.7	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し強くはねる。	外面）・袖の付着で観察不能。内面）・全面回転ナデ調整。	・粗、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰色、一	・住北東北西上層 大きくひずむ。
蓋杯(蓋)	8 −82	・口径(15.0)・残存高2.0	・残存⅙。・端部は外反し、ピンとはねる。	外面）・口縁部、端部は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰白色、一	・鎮付上層
蓋杯(蓋)	8 −83	・口径(14.0)・器高2.7	・残存½。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し、弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は未調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −84	・口径(13.2)・器高2.5	・残存¼。・口縁部から、ほぼストレートに下る。端部は外反しピンとはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −85	・口径(13.4)・残存高2.3	・残存⅙・。口縁部から内弯気味に下る。端部は外反し、ピンとはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住G～11G
蓋杯(蓋)	8 −86 図版10−86	・口径14.1・器高2.9	・残存¾。・口縁部から内弯ぎみに下る。端部は外反気味に強くはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住G～7G
蓋杯(蓋)	8 −87	・口径(14.6)・器高2.4	・残存½。・口縁部から内弯ぎみに下る。端部は外反気味に強くはね鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側¼は回転ナデ。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 −88	・口径(13.9)・器高2.8	・残存¼。・口縁部から内弯気味に下る。端部は外反気味に強くはねやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰色、一	・住F～4G
蓋杯(蓋)	8 −89	・口径	・残存½。・口縁部から内弯し下る。・口縁部は外反し弱くはね鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住F～3G
蓋杯(蓋)	8 −90	・口径13.8・器高3.5	・残存½。・口縁部からストレートに下る。端部は内傾しやや丸い。・天井部は高く、やや丸い。	・外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ。一部ナデ調整が重なる。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住F～4G

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(蓋)	8 —91	・口径(12.0)・残存高3.7	・残存⅓。・口縁部からストレートに下る。端部は内傾しやや丸い。・天井部は高い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・一	・住北東北西上層 ・部分的にひずむ
蓋杯(蓋)	8 —92	・口径(16.8)・残存高1.5	・残存¼。・口縁部からストレートに下る。端部は逆三角形状でつまる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	8 —93	・口径(17.0)・残存高0.9	・残存⅛。・口縁部からストレートに下る。端部は逆三角形状でつまる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —94 図版10—94	・口径(15.2)・残存高1.8	・残存⅓。・天井部からストレートに下る。端部は逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側⅓は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —95	・口径(14.1)・残存高2.1	・残存⅛。・天井部からストレートに下る。端部は短く逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面にわたり回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・住南西上層
蓋杯(蓋)	9 —96	・口径(13.7)・器高1.3	・残存¼。・天井部からストレートに下る。端部は凹形をなし外傾する。端部はやや鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部側¼は回転ナデ。他は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —97	・口径(13.3)・残存高1.1	・残存¼。・天井部から内弯気味に下る。端部は逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・ひずむ。 ・不純物付着。
蓋杯(蓋)	9 —98	・口径(13.6)・残存高1.1	・残存⅛。・天井部から内弯気味に下る。端部は短く逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・鎮付上層。・全体的に大きくひずむ。
蓋杯(蓋)	9 —99	・口径(12.9)・残存高1.2	・残存⅛。・天井部からストレートに下る。端部は短く逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住F～8G
蓋杯(蓋)	9 —100	・口径(12.4)・残存高1.0	・残存½。・天井部から内弯気味に下る。端部は短く逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —101 図版10—101	・口径(12.0)・器高1.5	・残存½。・天井部からストレートに下る。端部は短く逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・端部から⅓は回転ナデ。他は不定方向。ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —102	・口径(10.6)・器高1.3	・残存½。・天井部から内弯気味に下る。端部は逆三角形状でつまり鋭い。	外面）・天井部回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(蓋)	9 —103 図版10—103	・口径(18.5)・器高2.0・つまみ径6.2・つまみ高0.8	・残存⅓。・天井部に輪状のつまみ。・稜は強く鋭い。・天井部からストレートに下る。端部は外傾しやや鋭い。	外面）・つまみ部は、丁寧なヨコナデ。・天井部はヘラケズリ。・端部はナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰白色、・右	・住H—14上層
蓋杯(蓋)	9 —104	・口径(13.8)・残存高0.7	・残存⅙。・天井部から外弯気味に下る。端部は外傾しやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰色、内面）・灰白色、一	・住G～3G。 ・大きくひずみ実用に耐えない。
蓋杯(蓋)	9 —105	・口径(13.4)・残存高0.9	・残存½。・天井部から内弯気味に下る。端部は外傾しやや丸い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、一	・住北東北西 ・天井部がひずむ

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯 (蓋)	9－106	・口径(12.6) ・残存高1.4	残存½・天井部からストレートに下る。端部はつまり、鋭い。	外面）・天井部は外面へラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層 ・全体に大きくひずむ。・実用に耐えない

蓋　杯・杯　(107～278)

蓋杯 (身)	9－107 図版11－107	・口径(9.8)・器高2.4・たちあがり高0.9・高部径(11.4)	・残存¼。・たちあがりは外弯、端部は外傾。・受部は短く水平にのび、端部は鋭い。・底部はやや深く平ら。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・・灰色、内面）・灰白色、・右	
蓋杯 (身)	9－108	・口径(9.5)・残存高2.8・たちあがり高0.9・受部径(11.6)	残存¼。・たちあがりは外弯し上方へのび、端部は鋭い。・受部は長く、上外方にのび、端部は鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯 (身)	9－109 図版11－109	・口径(11.2)・器高2.6・たちあがり高1.1・受部径(12.9)	・残存½。・たちあがりは長く、外弯し上方へのび、端部は鋭い。・受部は短く、水平にのび端部はやや鋭い。・底部はやや深く平ら。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ。中央部は、不定方向のナデ調整を重ねる。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住D～3G。・底に重ね貼り付け跡有り。
蓋杯 (身)	9－110 図版11－110	・口径11.3・器高3.5・たちあがり高0.7・受部径13.7	・残存½。・たちあがりは長く、外弯気味。端部はやや鋭い。・受部は短い。・底部は深く丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ。中央部は不定方向のナデ調整を重ねる。	・密、・不良、外面）淡黄色、内面）・浅黄色、・右	・鎮付上層
蓋杯 (身)	9－111	・口径(13.1)・残存高1.0・たちあがり高1.0・受部径(15.2)	・残存⅛。・たちあがりは外弯気味で、端部は鋭い。・受部は短く水平にのび端部は鋭い。	外面）・全面回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白・　一	・住E～7G
蓋杯 (身)	9－112 図版11－112	・口径(13.2)・器高3.3・たちあがり高1.0・受部径(15.7)	・残存½。・たちあがりは、長く、内傾し端部はやや鋭い受部は短く端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、表面は剝離外面）・にぶい、黄橙色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯 (身)	9－113	・口径(12.5)・器高3.0・たちあがり0.7・受部径(14.5)	・残存⅓。・たちあがりは長く、内傾し端部はやや鋭い。・受部は水平にのび、端部はやや鋭い。・底部はやや深く丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。中央部はナデ調整を重ねる。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色—	・住北東北西上層
蓋杯 (身)	9－114	・口径(12.8)・残存高2.5・たちあがり高0.9・受部径(14.4)	・残存⅛。・たちあがりは長く、ほぼ直立し端部は鋭い。・受部はやや上方に向かってのび、端部はやや丸い。	外面）・底部の一部にカキ目。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、—	・鎮付上層
蓋杯 (身)	9－115	・口径(14.6)・残存高1.7・たちあがり高(0.6)受部径(16.9)	・残存　口縁部のみ⅙。・たちあがりは、外反気味に上り、段を有し直立する。端部は強く鋭い。・受部は長く、水平にのび端部は鋭い	外面）・全面回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・灰色・右	・鎮付上層
蓋杯 (身)	9－116	口径(13.8)・残存高1.7・たちあがり高(0.9)・受部径(15.9)	・残存　口縁部のみ¼。・たちあがりは、内弯気味に直立し端部は鋭い。受部は、やや上方に向ってのび、端部は丸い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・鎮付上層
蓋杯 (身)	9－117	・口径(9.4)・残存高1.5・たちあがり高1.3・受部径(11.4)	・残存⅙。・たちあがりは、外反気味に直立し、端部はやや丸い。・受部は、ほぼ水平にのび、端部はやや丸い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯 (身)	9－118	・口径(11.6)・残存高2.5・たちあがり高1.0・受部径(13.9)	・残存¼。・たちあがりは、外反気味に直立し、端部はやや鋭い。・受部はほぼ水中にのび、端部はやや鋭い。	外面）・底部⅔は回転ヘラケズリ。・他は回転ヨコナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯 (身)	9－119 図版9－119	・口径(13.9)・器高3.7・高台高0.8・高台径0.2	・残存½。・底部はやや浅く平ら。高台はハの字形。外反気味にはね、端部は鋭い。・口縁部は、外反し、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・底部中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・暗灰色、・左	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　特　徴	胎土・色調・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯 (杯)	9－120 図版11－120	・残存高1.0・高台高1.3・高台径(11.0)	残存½。底部は平らで、高台は細く「逆くの字形」をなす、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・高台部は丁寧な回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面）・黄色・内面）・灰白色、右	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	9－121	・口径(13.6)・器高3.5・高台高1.0・高台径(8.6)	・残存¼。・底部はやや浅く、平ら。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い・口縁部はやや弯し、端部は丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・底部中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、、右	―
蓋杯 (杯)	10－122 図版11－122	・口径(12.3)・器高4.5・高台高0.8・高台径(7.9)	・残存⅓。・底部はやや深く平ら。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部はやや内弯し、端部は丸い。・接合面は凹線を2本刻む。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部⅓を除き、他は回転、ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・オリーブ灰色内面）・明オリーブ灰色、左	・住E～6G・接合面が明瞭
蓋杯 (杯)	10－123	・残存高2.3・高台高1.4・高台径8.9	・残存　底部のみ。・底部は平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ。・接合面の調整は不充分。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	10－124	・残存高2.1・高台高0.9・高台径9.7	・残存　底部⅓。・高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。	外面）・全面回転ナデ。高台は丁寧なナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色―	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	10－125	・口径13.8・器高3.6　高台高 0.8・高台径9.2	・残存½。底底部は浅く平ら。高台は内弯気味で、端部は鋭い。・口縁部は外反し、端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰色・右	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	10－126	・残存高1.9・高台高0.8・高台径10.7	・残存　口縁部のみ。・底部は平らで、高台は内弯気味。端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）・オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、―	・住D～7G
蓋杯 (杯)	10－127	残存高2.3・高台高0.7・高台径(8.2)	・残存⅓。・底部は平らで、高台は内弯気味。端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ。高台は丁寧な調整。内面）・中央部は不定方向のナデ、他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住F～3G
(杯)	10－128	・残存高0.8・高台高1.3・高台径9.6	・残存　底部のみ。・底部はやや丸い。・高台は内弯気味で端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ。高台は丁寧なナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、―	・住一括
蓋杯 (杯)	10－129	・残存高2.4・高台高0.8・高台径(7.8)	・残存¼。・底部はほぼ平ら。高台は、八の字形に付く。・口縁部は外傾し立ち上がる。	外面）・回転ナデ。・底部端側の接合面は未調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・鎮付上層
蓋杯 (杯)	10－130	・残存高1.2・高台高0.6・高台径8.2	・残存　底部のみ½。・底部はほぼ平ら。高台はハの字形に付く。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・底部端側の接合面は未調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、―	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	10－131	・口径14.5・器高3.3・高台高0.7・高台径9.7	・残存½。・底部はほぼ平ら。高台は「逆くの字形」で、端部は鋭い。・口縁部は外弯気味で端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部が不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色・左	・住D～3G
蓋杯 (杯)	10－132 図版11－132	・口径13.1・器高4.0・高台高0.9・高台径8.9	・残存½。・底部はほぼ平ら。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外弯気味で端部はやや鋭い。	外面）・庭部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗紫灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯 (杯)	10－133	・口径(11.9)・器高3.5・高台高0.8・高台径(7.6)	・残存½。・底部はほぼ平ら。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外弯気味で端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	―
蓋杯 (杯)	10－134	・口径(12.6)・器高3.4・高台高0.7・高台径(8.4)	残存¼。・底部はやや傾斜を持つ。・高台は「逆くの字形」で、端部は鋭い。・口縁部は外反気味で、端部は丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方転	出土地点 備考
蓋杯(杯)	10—135	・口径(13.0)・器高3.7・高台高0.9・高台径(9.7)	・残存¼。・底部はほぼ平ら、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は直立気味。端部はやや丸い。	外面)・底部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)・中央部が不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密・良好、外面)・灰色、内面)・明オリーブ灰色、・左	・鎮付上層
蓋杯(杯)	10—136	・口径(13.4)・器高4.2・高台高0.9・高台径(9.2)	・残存½。・底部はやや丸い。高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。・口縁部やや外弯気味で、端部は鋭い。	外面)・底部はヘラケズリ調整の後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面)・中央部は未調整。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面)・灰色、内面)・灰白色、・右	—
蓋杯(杯)	10—137	・口径(12.6)・器高4.2・高台高0.8・高台径(9.7)	・残存½。・底部はほぼ平ら。高台は「逆くの字形」で、端部は平い。・口縁部はストレートに立ち上がる。端部はやや丸い。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・灰色、内面)・明オリーブ灰色、・左	・溝状遺溝
蓋杯(杯)	10—138 図版11—138	・口径(13.4)・器高3.4・高台高0.7・高台径(9.7)	・残存½。・底部はほぼ平ら。高台は「逆くの字形」をなし、端部は平い。・口縁部は外反し、端部はやや鋭い。	外面)・底部は観察不可能。・他は回転ナデ調整。内面)・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面)・灰色、内面)・灰色、・右	・A—1トレンチ東側・全体にひずむ。裏面に砂が付着。
蓋杯(杯)	10—139	・口径(12.4)・器高3.4・高台高0.6・高台径(8.9)	・残存½。・底部は平らで、やや浅い、高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後ストレートに立ちあがり端部は鋭い。	外面)・回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧。内面)・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面・灰色、内面)・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	10—140	・口径(11.6)・器高3.4・高台高0.6・高台径8.0	・残存⅔。・底部は平らで、やや浅い。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後ストレートにのび、端部はやや鋭い。	外面)・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧に。内面)・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・オリーブ灰色、内面)・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	10—141	・残存高0.9・高台高0.6・高台径(9.3)	・残存　底部のみ¼。・底部は平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。	外面)・底部は粗い回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)・不定方向のナデ調整。	・密、・良、外面)・明オリーブ灰色、内面)・オリーブ灰色、・右	・鎮府上層
蓋杯(杯)	11—142	・残存高1.1・高台高1.0・高台径6.5	・残存　底部のみ½。・底部はやや平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部はやや鋭い。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧。内面)・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、良好・堅緻、外面)・灰色、内面)・灰白色、・右	・鎮府上層
蓋杯(杯)	11—143	・口径(14.0)・器高3.3・高台高0.7・高台径9.2	・残存½。・底部は平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後、外弯し端部はやや鋭い	外面)・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面)・灰色、内面)・灰白色、・右	・住北東北西上層。・高台接合面に二条の沈線。
蓋杯(杯)	11—144	・口径(13.7)・器高3.7・高台高0.6・高台径(9.0)	・残存¼。・底部は平らで浅い。高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後、外弯し、端部はやや鋭い。	外面)・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面)・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・灰色、内面)・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—145	・口径(13.2)・器高3.0・高台高0.8・高台径9.7	・残存¾。・底部は平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯し、端部はやや鋭い	外面)・底部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面)・灰色、内面)・暗灰色、・右	・住E～4G
蓋杯(杯)	11—146	・口径(12.8)・器高2.8・高台高0.7・高台径(10.0)	・残存¼。・底部はほぼ平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後大きく外弯する。端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面)・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・灰色、内面)・灰白色、・右	・住F～4G
蓋杯(杯)	11—147	・口径(12.8)・器高3.3・高台高0.8・高台径(8.2)	・残存¼。・底部は平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯し端部はやや丸い。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。中央部はケズリ残し。・他は回転ヨコナデ。・高台部は特に丁寧なナデ調整。内面)・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・明オリーブ灰色、内面)・オリーブ灰色、・左	・住E～4G
蓋杯(杯)	11—148 図版11—148	・口径(12.8)・器高3.0・高台高0.7・高台径8.3	・残存½。・底部は平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯し端部はやや鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し。・他は回転ナデ。特に高台部は丁寧なナデ。内面)・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面)・灰オリーブ色、内面)・灰色、・左	・住F～4G
蓋杯(杯)	11—149	・口径(12.3)・器高4.1・高台高0.8・高台径(7.0)	・残存½。・底部は平らで深い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯し端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面)・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し。・他は回転ナデ調整。内面)・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面・灰白色、内面)・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	11—150	・口径(12.0)・器高3.6・高台高0.7・高台径(4.3)	・残存¼。・底部は平らでやや深い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。接合部は明瞭にくびる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ。特に高台部は丁寧なナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—151	・口径(14.6)・器高3.8・高台高0.7・高台径(10.7)	残存½。・器高はやや深く、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾しそのまま立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ調整。・他は全部ヨコナデ調整。特に高台部は丁寧。内面）・全面にわたって回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住F～3G
蓋杯(杯)	11—152 図版11—152	・口径(13.8)・器高3.3・高台高0.7・高台径(9.1)	・残存¾。・底部は平らでやや浅く、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾しそのまま立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は全面ナデ調整。特に高台部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面））・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—153	・口径(13.6)・器高3.3・高台高0.6・高台径(8.9)	・残存⅕。・器高はやや浅く、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し、そのまま立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は全面ナデ調整。高台部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住F～4G
蓋杯(杯)	11—154	・口径(13.2)・器高4.0・高台高1.0・高台径(9.0)	・残存¼。・器高はやや深く、高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。・口縁部は外傾しそのまま立ち上がる。・接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は観察不可能。・体部下位はヘラケズリ。他は回転ヨコナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東上層
蓋杯(杯)	11—155	・口径(12.9)・器高3.9・高台高0.7・高台径(7.9)	・残存¾。・底部はほぼ平らで、やや浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁は外傾後そのまま立ち上がる。・接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住G～3G
蓋杯(杯)	11—156	・口径(13.0)・器高3.1・高台高0.7・高台径(8.3)	・残存½。・器高は浅く、高台は「逆くの字形」で、端部は鋭い。・口縁は外傾後そのまま立ちあがり、接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は粗い回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・緑灰色、・右	・住E～3G
蓋杯(杯)	11—157	・口径(12.6)・器高3.3・高台高0.6・高台径(8.6)	・残存½。・底部は平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。・口縁は外傾後そのまま立ちあがり、接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明青灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—158	・口径(12.8)・器高3.8・高台高0.8・高台径(9.2)	・残存⅙。・器高はやや深い。・高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は観察不可能。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—159	・口径(12.4)・器高3.3・高台高0.8・高台径(8.4)	・残存⅕。・器高はやや浅い。・高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾後そのまま立ちあがる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・回転ナデ。・高台接合部の調整は不充分。内面）・中央部は未調整。他は全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—160 図版11—160	・口径(11.3)・器高3.8・高台高0.7・高台径(7.9)	残残存½。・底部はほぼ平らで、やや浅い。・高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。・口縁部は外傾後そのまま立ち上がる。	外面）底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	11—161	・残存高3.7・高台高0.9・高台径(11.4)	・残存½。・高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は未調整。他は回転ナデ。	・密、砂粒が多く混入する。・良、外面・にぶい黄橙色、内面）・灰白色、—	・住一括
蓋杯(杯)	12—162	・残存高4.3・高台高0.7・高台径10.6	・残存¼。・高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ調整を行う。・他は回転ナデ調整。接合面の調整は不充分。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・明青灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯(杯)	12—163	・残存高2.4・高台高0.8・高台径(11.1)	・残存¼。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ調整後ナデ。・体部下位はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—164	・残存高 2.7・高台高0.6・高台径(9.3)	・残存¼。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は全面ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住E～6G

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	12—165	・残存高2.5・高台高0.7・高台径(9.7)	・残存 底部のみ½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。・口縁部は外傾し立ち上がる。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は全面ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・一	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—166	・残存高2.6・高台高0.6・高台径8.2	・残存 底部のみ½。・底部はほぼ平らで高台はやや弱い「逆くの字形」をなす。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。ケズリ残しがある。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は未調整。他は全面ナデ調整。	・密、・良好、外面・灰色、内面）・灰色・一	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—167 図版11—167	・残存高2.6・高台高0.7・高台径7.5	・残存 底部½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・体部下位はヘラケズリ。他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・灰色、・右	・住D～4G
蓋杯(杯)	12—168	・残存高3.4・高台高0.6・高台径6.8	・残存 底部½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は全面回転ナデ調整。調整は粗く明瞭。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住E～7G
蓋杯(杯)	12—169	・残存高2.1・高台高0.6・高台径(8.2)	・残存 底部½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他はナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層 ・接合面に一条の沈線。
蓋杯(杯)	12—170	残存高1.8・高台高0.7・高台径(8.5)	・残存 底部のみ。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は全面回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は全面ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯(杯)	12—171	・残存高1.0・高台高 0.7・高台径(10.0)	・残存 底部のみ½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住E～4G
蓋杯(杯)	12—172	・残存高0.8・高台高0.7・高台径8.4	・残存 底部のみ½。・底部はほぼ平らで、高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部はヘラケズリの後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密・良好、外面）・灰色内面）・明オリーブ灰色・左	・M—14上層 ・接合部に一条の沈線。
蓋杯(杯)	12—173	・残存高1.1・高台高0.9・高台径8.3	・残存 底部のみ。・底部はやや丸い。高台は「逆くの字形」をなし、端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し。・他は回転ナデ調整。内面）・他は全面ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—174	・口径(12.9)・器高3.9・高台高0.7・高台径(8.6)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台は平行四辺形」をなし、接地面は平らで、端部は鋭い。・口縁部は内弯し、端部はやや鋭い。接合部は明瞭。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は全面回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、外面）灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—175 図版11—175	・口径(14.1)・器高4.1・高台高0.3・高台径(9.8)	・残存½。・底部はやや丸く深い。・高台は「平行四辺形」状で低い。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾後ストレートに立ち上がり、端部はやや丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。接合部内側はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—176	・口径(13.3)・器高3.3・高台高0.7・高台径(9.5)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台は「平行四辺形」状で低い。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾後ストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住E～6G。 大きくひずみ実用に耐えない。
蓋杯(杯)	12—177	・口径(12.8)・器高3.8・高台高0.7・高台径(9.8)	・残存¼。・器高はやや浅い。・高台は「平行四辺形」状で端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾後ストレートに立ちあがり、端部は鋭い。	外面）・接合部は特に丁寧なヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—178 図版11—178	・口径(12.1)・器高3.4・高台高0.8・高台径9.1	・残存½。・底部はほぼ平らで、やや浅い。・高台は「平行四辺形」状でやや高い。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾後、外反気味に立ち上がり端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、部分的に回転ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部に不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住E～3G
蓋杯(杯)	12—179	・口径(11.5)・器高3.0・高台高0.6・高台径(8.2)	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台は「平行四辺形」状で端部は鋭い。・接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾後、外弯気味で、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は全面ナデ。・高台部は特に丁寧なヨコナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・住D～8G

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	12—180	・残存高2.2・高台高0.6・高台径(10.2	・残存 底部のみ½。・底部は平らで高台は「平行四辺形」状を呈し、端部は鋭い。・接合部は明瞭にくびれる	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は全面ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	12—181	・残存高1.0・高台高0.8・高台径5.2	・残存 底部を½。高台は「平行四辺形」状で、端部は鋭い。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は全面ナデ調整。内面）・中央部は未調整で押圧痕有り。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・一	・北東北西上層
蓋杯(杯)	12—182	・口径(13.3)・器高3.7・高台高0.5・高台径(9.0)	・残存½。・底部は平らで深い。・高台は「平行四辺形」状で低い。・口縁部は外傾後外弯気味に立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・高台は両側よりつまみ上げ、ヨコナデ。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色・右	—
蓋杯(杯)	13—183	・口径(12.5)・器高3.6・高台高0.6・高台径8.8	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は粗く、回転ヘラケズリ。高台は両側よりつまみ上げ、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	13—184	・口径(13.9)・器高3.5・高台高0.4・高台径(8.9)	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯気味に立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・高台は両側よりつまみ上げ、ヨコナデ。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・溝状遺構
蓋杯(杯)	13—185 図版11—185	・残存高3.5・高台高1.0・高台径(9.4)	・残存½。・底部はやや丸く浅い。・高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾して立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・高台は両側よりつまみ上げ、ヨコナデ。他は回転ヨコナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住G～11G ・底部にヘラ記号。
蓋杯(杯)	13—186	・残存高1.9・高台高0.8・高台径(8.3)	・残存 底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台は「逆三角形」状で、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・高台は両側よりつまみ上げ、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色・右	・３Ｔ東拡上層
蓋杯(杯)	13—187	・口径(13.1)・器高3.0・高台高0.4・高台径(8.8)	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台は底部端内側に凹形で貼り付く。・口縁部は外傾後直立する。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	13—188	・残存高2.3・高台高0.4・高台径(9.5)	・残存¼。・底部は平ら。・高台は底部端内側に凹形で貼り付く。・口縁部は外傾。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・体部下位はヘラケズリ。・他は全面ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯(杯)	13—189	・口径(12.1)・器高3.4・高台高0.8・高台径(8.8)	・残存 ½。・底部はほぼ平らで浅い。・高台はやや凹形で貼り付き、接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し外弯気味。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し有り。・他は全面回転ナデ調整。内面）中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・左	・住G～７G
蓋杯(杯)	13—190 図版11—190	・口径 12.1・器高3.4・高台高0.5・高台径9.3	・残存¾。・底部はほぼ平らで深い。・高台はやや凹形で貼り付き、接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、外弯気味。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・青灰色、・左	・住Ｔ～３Ｇ
蓋杯(杯)	131 191	・口径(14.6)・器高3.8・高台高0.4・高台径(9.1)	・残存½。・底部は平らで、やや浅い、・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。口縁部は外傾しストレートに立ち上がる。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住上層 ・部分的にひずむ。
蓋杯(杯)	13—192	・口径(14.1)・器高3.0・高台高0.6・高台径10.2	・残存¾。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部は明暗にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・左	・住Ｅ～２Ｇ。・外面に不純物が多く付着。
蓋杯(杯)	13—193	・口径(13.5)・器高3.8・高台高0.6・高台径8.3	・残存¾。・底部はほぼ平らで、深い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾しストレートに立ちあがる。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・３Ｔ東拡上層
蓋杯(杯)	13—194 図版13—194	・口径(12.8)・器高3.4・高台高0.4・高台径(8.9)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾しストレートに立ち上がる。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住Ｄ～４Ｇ

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯(杯)	13—195	・口径(12.2)・器高 2.7・高台高 0.5 ・高台径 9.1	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色・右	・住E～6G
蓋杯(杯)	13—196	・口径(12.2)・器高 2.5・高台高 0.4 ・高台径(8.5)	・残存⅓。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部はヘラケズリ調整後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・灰色、内面）・紫灰色、左	—
蓋杯(杯)	13—197 図版11—197	・口径11.5・器高 3.6・高台高0.5 ・高台径 8.2	・残存⅚。・底部は平らで、やや深い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し有り。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗紫灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	13—198	・口径10.5・器高 2.9・高台高 0.5 ・高台径 7.6	・残存½。・底部は平らで、やや浅い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北南上層
蓋杯(杯)	13—199	・口径(9.6)・器高 2.8・高台高 0.7 ・高台径(5.4)	・残存⅓。・底部はやや傾斜し浅い。・高台断面は方形。接合面は明瞭にくびれる。・口縁部は外傾し、ストレートに立ち上る。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・鎮付上層
蓋杯(杯)	13—200	・残存高 1.9・高台高 0.6・高台径 10.2	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部はヘラケズリ。中央部にケズリ残し。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住C～5G
蓋杯(杯)	13—201	・残存高 0.8・高台高 0.6・高台径 (10.4)	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・青灰色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	13—202	・残存高 0.6・高台高 0.7・高台径9.1	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰色、—	・鎮付上層
蓋杯(杯)	13—203	・残存高 1.6・高台高 1.0・高台径9.2	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部に大きくケズリを残し。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、左	—
蓋杯(杯)	13—204	・残存高 2.0・高台高 0.5・高台径 (8.3)	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部に不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・住D～3G
蓋杯(杯)	14—205	・残存高 1.3・高台高 0.7・高台径8.6	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—206	・残存高 1.0・高台高 0.6・高台径 (8.9)	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は粗く回転ヘラケズリ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—207	・残存高 2.0・高台高 0.5・高台径 (10.0)	・残存、底部のみ¼。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—208	・残存高 1.6・高台高 0.6・高台径 (9.1)	・残存、底部のみ。・底部はやや丸い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部に不定方向のナデ。・他は回転ヨコナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯(杯)	14—209	・残存高 1.4・高台高 0.6・高台径 (9.0)	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	14—210	・残存高 1.5・高台高 0.6・高台径 8.9	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—211	・残存高 1.5・高台高 0.8・高台径 8.3	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリの後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、　内面）・灰黄褐色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—212	・残存高 2.0・高台高 0.5・高台径 (8.6)	・残存、底部のみ。・底部はやや丸い。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、丁寧な、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—213	・残存高 2.1・高台高 0.8・高台径 8.3	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—214	・残存高 1.0・高台高 0.5・高台径 8.4	・残存、底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・中央部にケズリ残し。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—215	・残存高 1.0・高台高 0.5・高台径 7.3	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は粗く回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住D～6G
蓋杯(杯)	14—216	・口径(14.3)・器高 3.7・高台高 0.8・高台径(11.1)	・残存、¾。・底部はほぼ平らで浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は未調整。・他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・淡黄色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—217	・口径(13.4)・器高 4.1・高台高 0.7・高台径(8.1)	・残存½。・底部はやや丸く深い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—218 図版11—218	・口径(13.1)・器高 3.9・高台高 1.0・高台径(10.2)	・残存¾。・底部はほぼ平らで、やや浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—219	・口径(13.7)・器高 3.2・高台高 0.4・高台径(10.2)	・残存½。・底部は平らで浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、丁寧なナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住E～2G
蓋杯(杯)	14—220	・口径(13.8)・器高 3.2・高台高 0.4・高台径(10.5)	・残存¼。・底部は平らで浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は粗い回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・紫灰色、・左	・鎮付上層
蓋杯(杯)	14—221	・口径(12.0)・器高 3.7・高台高 0.6・高台径(8.8)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	・外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住一括
蓋杯(杯)	14—222	・口径(13.4)・器高 3.1・高台高 0.4・高台径(9.6)	・残存⅓。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、堅緻外面）・灰色、内面）・灰色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	14—223	・口径(13.8)・器高 3.2・高台高 0.4・高台径(10.5)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は未調整。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・紫灰色、・左	・鎮付上層
蓋杯(杯)	14—224	・口径(12.8)・器高 2.6・高台高 0.4・高台径(8.8)	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北南上層。・全体的にひずみ不純物も付着。

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	14—225	・口径(12.8)・器高3.3・高台高 0.4・高台径(9.1)	・残存¼。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・鎮付上層
蓋杯(杯)	14—226	・口径(11.7)・器高2.9・高台高 0.5・高台径(8.4)	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—227	・口径(12.4)・器高3.0・高台高 0.5・高台径(9.4)	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—228 図版11—228	・口径(11.9)・器高2.8・高台高 0.5・高台径(9.2)	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、丁寧なナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・左	・1トレンチ。・底部にヘラ記号。
蓋杯(杯)	15—229	・口径12.0・器高2.9・高台高 0.4・高台径 4.4	・残存¾。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する°	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・・他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・左	・住一括
蓋杯(杯)	15—230	・口径11.6・器高2.7・高台高 0.5・高台径 8.5	・残存¾。・底部は平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・住E～6G
蓋杯(杯)	15—231	・口径(11.0)・器高3.6・高台高 0.6・高台径(6.7)	・残存⅙。・器高はやや深い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—232	・口径(10.4)・器高2.9・高台高 0.6・高台径 7.0	・残存 ½。・底部はほぼ平らで浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がり口縁部は直行する。・高台接合部の調整が不充分で、土塊が残る。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。	・緻密、・良好、・堅緻、外面）・オリーブ灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—233	・口径(11.8)・器高3.0・高台高 0.5・高台径(9.2)	・残存¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。・口縁部は端部付近で外反する。	・外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	—
蓋杯(杯)	15—234	・口径(9.2)・器高2.8・高台高 0.4・高台径(6.2)	・残存⅓。・底部はやや丸みを持ち、浅い。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。・口縁部は端部付近で外反する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住北南上層
蓋杯(杯)	15—235	・残存高 1.7・高台高 0.6・高台径 9.6	・残存⅓。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は未調整。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、—	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—236	・残存高 3.5・高台高 0.7・高台径 8.9	・残存⅓。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形を成し、接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は未調整。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・青灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15—237	・残存高 2.3・高台高 0.5・高台径(8.6)	・残存、底部のみ⅓。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。・内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・鎮付上層
蓋杯(杯)	15—238	・残存高 2.0・高台高 0.4・高台径 9.2	・残存、底部のみ。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。・底部はほぼ平ら。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住南西上層
蓋杯(杯)	15—239	・残存高 1.5・高台高 0.5・高台径(8.4)	・残存、底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、—	・住南西上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	15－240	・残存高2.0・高台高0.7・高台径8.4	・残存底部のみ¼。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15－241	・残存高1.1・高台高0.6・高台径7.5	・残存底部のみ½。・底部はほぼ平ら。・高台断面は方形。接合部からゆるやかに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15－242	・口径(14.2)・器高3.6・高台高0.4・・高台径(9.1)	・残存½。底部はやや丸く浅い。・高台断面は方形。・口縁部は外弯気味で端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住北西上層
蓋杯(杯)	15－243	・口径12.3・器高3.7・高台高0.7・高台径8.4	・残存½。・底部は平らで、浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁部は外弯気味に立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・１Ｔ一括
蓋杯(杯)	15－244	・口径(11.7)・器高3.5・高台高0.3・高台径8.3	・残存¾。・底部はやや丸く浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁部は外傾後、外弯気味に立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	15－245	・口径(13.2)・器高3.9・高台高0.6・高台径(9.0)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁部はストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	—
蓋杯(杯)	15－246	・口径(13.4)・器高3.1・高台高0.3・高台径(10.0)	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁部はストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	—
蓋杯(杯)	15－247	・口径(13.0)・器高3.5・高台高0.3・高台径(10.2)	・残存½。・器高はやや浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁はストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－248	・口径(12.3)・器高3.0・高台高0.2・高台径(8.9)	・残存½。底部は平らで、浅い。・高台は底部外方につき断面は方形。・口縁部はストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	—
蓋杯(杯)	16－249	・残存高1.9・高台高0.3・高台径10.9	・残存底部のみ½。・高台は底部外方につき断面は方形。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－250	・残存高1.5・高台高0.3・高台径(7.3)	・残存底部のみ⅓。・高台は底部外方につき断面は方形。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。特に接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住Ｂ～５Ｇ
蓋杯(身)	16－251	・口径(10.1)・器高3.2	・残存⅓。・底部はやや丸く浅い。・底部から内弯気味に立ち上がり、端部付近で内反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部から口縁にかけての⅔は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・溝状遺構。・内外面に不純物付着
蓋杯(身)	16－252	・口径(8.9)・器高3.2	・残存⅓。・底部はやや丸く浅い。・底部から内弯気味に立ち上がり、端部はやや丸みを持つ。	外面）・底部は粗いヘラケズリ。・口縁部への⅓は回転ヘラケズリ後回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色・左	・鎮付上層
蓋杯(身)	16－253	・口径(12.9)・器高2.7	・残存⅓。・底部はやや丸く、浅い。・底部から外傾後、ストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住Ｄ～３Ｇ
蓋杯(身)	16－254	・口径(10.2)・器高3.4	・残存¾。・底部はやや丸く、浅い。・底部から外傾後ストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、回転ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯(身)	16－255	・口径(10.0)・器高2.5	・残存⅙。・底部はやや平らで、浅い。・底部から外傾後ストレートに立ち上がり、底部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(身)	16－256	・残存高2.3	・残存¼。・底部はやや平ら。・底部から外傾後、ストレートに立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、一	—
蓋杯(杯)	16－257 図版11－257	・口径(15.6)・器高6.6	・残存½。・底部はやや平らで、深い。・底部から外傾後、ストレートに立ち上がり端部は鋭い。	外面）・底部から体部下位は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	—
蓋杯(杯)	16－258	・口径(15.0)・器高6.4	・残存½。・底部はやや平らで、深い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部から体部下位は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・A－1トレ東側 ・全体にひずむ。
蓋杯(杯)	16－259	・口径(15.8)・器高6.6	・残存½。・底部はやや平らで、深い。・底部からストレートに立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ヨコナデ調整。内面）・全面回転ヨコナデ調整。	・密、・不良、外面）・浅黄橙色、内面）・浅黄橙色、・右	・住一括
蓋杯(杯)	16－260	・口径(14.1)・器高3.8	・残存⅓。・底部は平らで、やや浅い。・底部から外傾後、ほぼストレートに立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－261	・口径(12.6)・器高4.6	・残存½。・底部は平らで、やや深い。・底部から外傾後、ほぼストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－262	・口径(13.4)・器高3.9	・残存¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後、ほぼストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰黄色、一	・K－14上層
蓋杯(杯)	16－263	・口径(17.7)・残存高5.5	・残存¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後、内弯気味に立ち上がり、端部付近から外反する。・端部は鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－264	・口径(17.1)・残存高4.8	・残存¼。・器高はやや浅い。・底部から外傾後、内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部は鋭い。	外面）・底部は不明。他は回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－265	・口径(16.3)・残存高4.5	・残存口縁部のみ¼。・口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部は鋭い。	外面）・底部は不明。他は回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	16－266 図版12－266	・口径(14.6)・器高4.9	・残存⅓。・底部は平らで、やや深い。・底部から外傾後、内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・全面回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色。・右	・鎮付上層
蓋杯(杯)	16－267	・口径13.4・残存高3.3	・残存口縁のみ¼。・底部から外傾後、内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は不明。他は回転ナデ調整。内面）・・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	17－268	・口径12.8・残存高4.8	・残存½。・底部は丸く深い。・底部から内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	17－269	・口径(11.5)・器高3.0	・残存¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり端部付近で外反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・右	・鎮付上層

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	17－270	・口径(11.7)・器高3.4	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、一	・住北東北西上層
蓋杯(杯)	17－271	・口径(11.7)・器高3.5	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右、一	—
蓋杯(杯)	17－272	・口径(10.4)・器高3.6	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや丸みを持つ。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住E～3G
蓋杯(杯)	17－273	・口径(12.6)・器高4.0	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、やや深い。・底部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。・端部はやや鋭さを持つ	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰黄色、内面）・灰白色、・右	・住北南上層
蓋杯(杯)	17－274 図版12－274	・口径(11.9)・器高3.8	・残存½。・底部は平らでやや深い。・底部から外傾後、ストレートに立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・明オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・AT一括
蓋杯(杯)	17－275	・口径(10.8)・器高4.2	・残存½。・底部は平らで、やや深い。・底部から外傾後ストレートに立ち上がり端部は鋭い。	外面）・底部はヘラケズリの後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・淡黄色、内面）・灰白色、・右	・住D～4G
蓋杯(杯)	17－276	・残存高2.5	・残存底部のみ⅓。・底部は平らである。・底部から外傾後立ち上がる。	外面）・底部はヘラケズリの後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住上層
蓋杯(杯)	17－277	・口径13.2・残存高3.5	・残存口縁のみ¼。・底部はほぼ平らで、やや深い。・底部から外傾後、内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。	外面）・底部はヘラケズリの後、ナデ。・他は回転ヨコナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層 ・全体的にひずむ
蓋杯(杯)	17－278	・口径(11.6)・残存高2.2	・残存¼。・底部は平らで、浅い。・底部から外傾後ストレートに立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ヨコナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・にぶい黄橙色、内面）・にぶい黄橙色、・右	・住C～4G

皿　(279～294)

皿	17－279	・口径(19.7)・残存高2.7	・残存口縁のみ¼。・口縁部は外傾し、ストレートにのびる。・端部はやや鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・住北西上層
皿	17－280 図版12－280	・口径(16.8)・器高3.3	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、浅い。・口縁部は外傾後内弯気味にのび、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。凹状のヘラ痕が多く残る。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住北東北西上層
皿	17－281	・口径(17.2)・器高2.4	・残存⅓。・底部は平らで、浅い。・口縁部は外傾後、内弯気味にのび、端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
皿	17－282	・口径(16.8)・器高2.2	・残存¼。・底部は平らで、浅い。・口縁部は外傾後、内弯気味にのび、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・住溝
皿	17－283	・口径(16.4)・器高1.9	・残存⅓。・口縁部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は観察不能。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰色、・右	・住E～3G

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
皿	17—284	・口径(16.1)・器高2.6	・残存¼。・底部は平らで浅い。・口縁部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は観察不能。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
皿	17—285	・口径(13.0)・器高2.4	・残存⅔。・底部は平らで、浅い。・口縁部から、外傾後内弯気味に立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・オリーブ灰色、内面）・灰白色、・左	・住北東北西上層
皿	17—286	・口径(18.1)・器高2.9	・残存¼。・底部は平らで、浅い。・口縁部から外傾後内弯気味に立ち上がり、端部付近で外反する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
皿	17—287	・口径(17.1)・器高2.0	・残存　口縁部のみ⅙。・底部は平らで浅い。・口縁部から外傾後外弯気味に立ち上がり、端部付近で大きく外反する。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、自然釉が付着。内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
皿	17—288	・口径(17.7)・器高2.6	・残存½。・底部は平らで、浅い。・口縁部から外傾後、外弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
皿	17—289	・口径(17.8)・器高2.3	・残存　口縁のみ¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・口縁部から外傾後、外弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）黒褐色、内面）・灰色、・右	・住北東北西上層
皿	17—290	・口径(15.8)・残存高0.9	・残存½。・口縁部から外傾後、外反気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層 ・全体ひずむ。
皿	17—291	・口径(14.4)・器高2.0	・残存⅙。・口縁部から外傾後、外反気味に立ち上がり、端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・—	・北東北西上層
皿	17—292	・口径(14.4)・器高2.0	・残存¼。・底部はほぼ平らで、浅い。・口縁部から外傾後外弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）観察不能。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・北東北西上層 ・表面に釉が付着
皿	17—293 図版12—293	・口径(14.2)・器高1.5	・残存½。・底部はほぼ平らで、浅い。・口縁部から外傾後外弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・１Ｔ一括 ・全体的にひずむ
皿	17—294	・残存高0.8・高台高0.6・高台径13.6	・残存　高台部のみ。底部はほぼ平らである。・高台断面は方形で接合部は明瞭にくびれる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ。・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧。内面）観察不能。	・密、・不良、外面）・明褐灰色、内面）・明褐灰色、・—	— ・剝離が著しい。

高　林（295～313）

高杯(脚部)	18—295 図版12—295	・残存高15.5・基部径4.9	・杯部は、基部から外上方に立ち上がり、・脚部は外弯気味に下る。二条の沈線を有し、途中段をなし外弯して下る。	外面）・杯部はカキ目。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・橙色、内面）・橙色、・右	・住Ｆ～11Ｇ ・脚部にヘラ記号有り。
高杯(脚部)	18—296 図版12—296	・残存高11.3・基部径4.2	・杯部は基部から外上方に立ち上がる。・脚部は外弯気味に下る。基部に一条の沈線を、下位に二条の沈線を有し、外下方に下る。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）灰白色、内面）・灰白色、・右	・住Ｆ～４Ｇ
高杯(杯部)	18—297	・残存高5.5・基部径4.5	・杯部は基部から外上方に立ち上がる。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・杯部は回転ナデ。稜が顕著に残る。・基部内面はヘラケズリ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・住Ｅ～７Ｇ

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
高杯 (脚部)	18—298	・残存高7.7・基部径5.2	・杯部は基部から外上方に立ち上がる。・脚部は外弯気味に下り、下位に二条の沈線を有し、更に下方に下る。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）杯部は観察不能。・基部内面はヘラケズリ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	— ・剝離が著しい。
高杯	18—299 図版12—299	・残存高8.9・基部径4.2・底径11.2	・杯部は基部から外上方に内弯気味に立ち上がる。・脚部は外弯気味に下り、中位に二条の沈線を有し、更に外反して下る。・端部は短く凹形をなし、やや外傾し、鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。・特に端部は丁寧。内面）・杯部は回転ナデ。　・脚部は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	— ・表面に袖が付着
高杯 (脚部)	18—300	・残存高8.6・基部径4.5・底径9.8	・脚部は基部から外弯気味に下り、端部に到る。・端部はやや丸い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・基部付近にヘラケズリ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	・住北東北西上層
高杯	18—301 図版12—301	・残存高9.5・基部径5.6・底径10.6	・杯部は基部から外上方に内弯気味に立ち上がる。・脚部は外弯気味に大きく下り、端部に到る。・端部は丸みを持っている。	外面）・全面回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、・内面）・灰色、・左	・住E～4G ・脚部にヘラ記号有り。
高杯 (脚部)	18—302	・残存高8.1・基部径4.0	・脚部は基部から外弯気味に大きく下り、中位に二条の沈線を有し、端部側へ到る。	外面）・全面回転ナデ。内面）全面回転ナデ調整。	・密、不良、外面）・にぶい橙色、内面）・にぶい橙色、・—	・住F～7G
高杯 (杯部)	18—303	・残存高4.2・口径(12.6)	・残存 杯部のみ½。・杯、口縁部は上外方へ内弯気味に立ち上がり、端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、内面）・灰色、—	・住G～11G
高杯 (脚部)	18—304	・残存高5.7・基部径3.2・底径9.2	・残存 脚部のみ。・脚部は基部から外弯気味に下る。・端部はやや鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住F～10G
高杯	18—305	・残存高5.4・基部径4.1・底径(9.3)	・杯口縁部 欠損。・杯部は基部から外上方に内弯気味に立ち上がる。・脚部は基部から外弯気味に下る。・端部はやや鋭い。	外面）・全面回転ナデ。杯部中位にヘラ押の跡有り。内面）・杯部はヘラ調整後ナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・住D～9G
高杯	18—306	・残存高5.5・基部径5.3・底径10.2	・杯部 欠損。・脚部は基部から外弯気味に下る。端部付近で内弯気味。端部はストレートにのび、やや鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・杯部は不定方向のナデ。・脚部は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）灰白色・右	・住E～8G
高杯 (脚部)	18—307 図版12—307	・残存高4.4・基部径2.3・底径5.0	・残存 脚部のみ。・脚部は基部から外弯気味に下る。端部は内反しやや鋭い。	外面）・全面回転ナデ。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・暗灰色、・—	・鎮南上層一括 ・全体的にひずむ。
高杯 (脚部)	18—308	・残存高2.4・基部径3.3・底径7.6	・残存 脚部のみ。・脚部は基部から外弯気味に下る。端部は短く、外傾し、鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・にぶい黄橙色、内面）・にぶい黄橙色、・—	・住南西上層
高杯 (脚部)	18—309 図版12—309	・残存高3.2・基部径3.6・底径8.7	・残存 脚部のみ。・脚部は基部から外弯気味に下る。端部は短く外傾し、鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・杯中央部は不定方向のナデ。脚は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・Ⅰ～13上層
高杯 (脚部)	18—310	・残存高4.0・基部径3.2・底径9.4	・残存 脚部のみ。・脚部は基部から外弯気味に下る。端部は外反しピンとはねやや鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、不良、外面）・浅黄橙色、内面）・浅黄橙色、・—	・住F～9G
高杯	19—311 図版12—311	・口径(18.8)・器高7.7・基部径4.7・底部径9.9	・残存 口縁部½。・基部から内弯気味にのび、途中段をなす。・端部はやや丸い。・基部から外弯気味に下る。端部付近で外反する、端部はやや丸い。	外面）・杯部の中央にヘラ調整。他は回転ナデ調整。内面）杯部は全面ヨコナデ。・脚部は全面ヨコナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・黒灰色、内面）・灰色、・左	・住遺床一括
高杯	19—312	・口径(18.6)・器高8.0・基部径4.1・底部径9.2	・残存 口縁は½。・基部から内弯気味にのび、途中強い稜をもつ。端部はやや丸い。・基部から外弯気味に下る。端部付近で外反する。端部は外傾し、やや鋭い。	外面）・杯底部はヘラケズリ。他は回転ナデ。・脚部は全面ヨコナデ調整。内面）・杯中央部は未調整。他は回転ナデ。・脚は回転ナデ。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・左	—

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
高杯	19—313	・口径(19.9) ・残存高3.5	・残存 口縁のみ¼。・基部から内弯気味にのび、外傾し端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）明オリーブ灰色、内面）・灰色、・右	・住D～3G

壺　(314～321，324～325)

壺 (底部)	19—314	・残存高5.8・底径(10.7)	・残存 底部のみ⅙。・底部はほぼ平らで、体部は上外方へと立ち上がる。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・体部下位はヘラ調整後、回転ナデ調整。内面）・不定方向のナデ調整。	・密、・良好、外面）灰色、内面）・灰白色、・左	・住鎮付上層
壺 (底部)	19—315	・残存高4.3・底径(13.6)	・残存 底部のみ¼。・底部は平らで、体部は上外方へと立ち上がる。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・体部下位はヘラ後回転ナデ調整。内面）・不定方向のハケ目調整。	・密、・良好、外面）・灰色、・内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
壺 (底部)	19—316	・残存高2.3・高台高1.1・高台径(8.3)	・残存 底部のみ⅙。・底部はほぼ平らである。・高台は底部端にハ字状に貼り着き、端部断面は方形。	外面）・他は回転ナデ調整。特に高台接合部は丁寧。内面）・中央部は未調整。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色・右	・住北東北西上層
壺 (底部)	19—317	・残存高2.0・高台高1.3・高台径(10.4)	・残存 底部のみ⅙。・高台は底部端にハ字状に貼り着き断面は方形。端部は鋭い。	外面）・全面回転ナデ。特に高台接合部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・	・H14上層
壺 (蓋)	19—318	・残存高1.4・つまみ高0.7・つまみ径1.1	・残存 天井部のみ。・宝珠形の小型のつまみ。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・天井部側½は回転ヘラケズリ後ヨコナデ。他は回転ナデ調整。内面)・中央部は不定方向のナデ、他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・—	・住東上層
短頸壺 (蓋)	19—319 図版12—319	・口径13.2・器高2.7・つまみ高1.3・つまみ径2.4	・残存½。・宝珠形のつまみ。・天井部はほぼ平ら。口縁は外下方へ。端部付近でやや外反。・端部はやや鋭い。	外面）・つまみ部は丁寧なヨコナデ。・全面回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・北東北西上層
瓶 (頸部)	19—320	・口径(7.9)・残存高4.8	・残存 頸部のみ½。・肩部よりやや上方に外傾。一条の沈線。・端部は平担。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・3T東拡上層
台付壺	19—321 図版12—321	・口径20.6・基部径10.4・体部最大径25.5・残存高27.7	・高台部 欠損。・口頸部は外弯して大きく上外方に上る。口縁部付近に段。短くやや内傾し、端部はやや鋭い。・肩部は丸みを持つ。・肩部に2条の凸帯を　す。	外面）・全面回転ナデ。凸帯は丁寧な仕上げ。内面）全面回転ナデ。・肩から体部は円弧状の叩き、後回転ナデ調整。	・密、良好、外面）・灰色、部分的に灰白色、内面）青灰色、・左	・住南西上層
短頸壺	22—324	・口径(10.0)・残存高5.1	・残存⅛。・口頸部は短くやや外反気味。端部は鋭い。・肩部は丸みを持ち下る。	外面）体部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・褐灰色、内面）・黒褐色、・右	・住南上層
短頸壺	22—325	・口径(12.2)・残存高13.0	・残存 頸部のみ¼。・口頸部は外弯気味。端部は平担。・肩部は弱く内弯気味に下る。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、・外面）・灰色、内面）・青灰色、・右	—

円面硯 (322～323)

円面硯	20—322 図版12—322	・残存高6.2・脚部径(18.2)	・残存 脚部のみ½。・脚部は下外方に外弯気味に下り、端部は付近でやや強く外反する。端部は平担。・脚体部には3孔の縦長方形スカシ窓を外側から切る。推定で8孔。スカシ上部には一条、下部には二条の沈線	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。・調整後、スカシを切り、その後の調整は無い。	・緻密、・良好、・堅緻外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・北東上層・鎮付上層・2地点での接合資料
円面硯	21—323 図版12—323	・周縁径(22.5)・器高8.2・脚部径(19(19.0)	・残存½。・周縁は、海部より上外方にのび端部付近は段を成し、端部はやや鋭い。・脚部は内弯気味に下り、端部付近で外反する。端部は平担。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・住G～11G、・住F～11G・2地点での接合資料・全体的ひずむ

甕　(326～342)

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
甕 (口頸部)	22－326	・口径(14.4)・残存高5.3	・残存　頸部のみ¼。・口頸部は外弯気味。端部は偏平で下方に一部はみ出る。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・住F～4G
甕 (口頸部)	22－327	・口径(19.2)・残存高5.3	・残存　頸部のみ¼。・口頸部は外弯気味。口縁部は中央に凹状を成し、端部は鋭い。	外面）頸部はヘラ状工具で縦方向調整。その後ヨコナデ。・他は回転ナデ。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗緑灰色、内面）・灰色、・一	―
甕 (口頸部)	22－328	・口径(25.2)・残存高7.0	・残存　頸部のみ⅛。・口頸部は外弯気味に立ち上がり、端部は付近でやや内傾し、端部は平担。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	―
甕 (口頸部)	22－329 図版13－329	・口径(19.9)・残存高5.5	・残存　頸部のみ⅙。・口頸部は強く外弯気味。端部は外傾し平担。・肩部は外下方へ内弯気味。	外面）・肩部は格子目叩き。・頸部は回転ナデ調整。内面）・頸部はクシ状工具で調整。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・1T東側表土層一括
甕 (口頸部)	22－330	・口径(22.7)・残存高7.1	・残存　頸部のみ⅓。・口頸部は外弯気味。端部付近に段。・肩部は下外方にストレートに下る。	外面）・肩部は格子目、叩き後、ヨコナデ。・頸部は回転ナデ調整。内面）・頸部は青海波状文。・他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・灰白色、・右	・住北東北西上層
甕 (口頸部)	22－331 図版13－331	・口径(19.3)・残存高13.8	・残存　頸部周辺½。・口頸部は外弯気味。端部は外傾し平担。・肩部から内弯気味に下る。	外面）・肩部から体部は格子目叩き。・他は回転ナデ調整。内面）・肩部から体部は、格子目文。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・黒褐色、・左	・住D～5G
甕 (口頸口)	23－332	・口径(23.1)・残存高3.1	・残存　口縁部のみ¼。・頸部から外弯気味。端部中央は凹む。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰色、・一	・住D～4G
甕 (頸部)	23－333	・基部径(32.1)	・残存　頸部のみ¼。・肩部より大きく外弯し外上方へ。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・肩部は青海波状文。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・明オリーブ灰色、部分的に灰白色内面）・オリーブ灰色・一	―
甕 (頸部)	23－334	・基部径(22.4)	・残存　頸部のみ⅔。・肩部より大きく外弯し外上方へ、更に段を成す。	外面）・肩部は格子目の叩き。・頸部の上位は格子目後回転ナデ。他は回転ナデ。頸部の最上位にヘラ描き波状文。内面）頸部は回転ナデ。他は青海波状文。	・密、・良、外面）・灰褐色、内面）・オリーブ灰色、・一	・住C～5G
甕 (頸部)	23－335	・基部径(28.5)	・残存　頸部のみ¼。・肩部より大きく外弯し、外上方へ。	外面）・観察不能。内面）・頸部はヘラ状工具による調整。・肩部は青海波状文。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・緑灰色、・一	・住G～9G
甕	23－336	・口径(36.8)・基部径(31.4)・体部最大径(37.6)・残存高20.4	・残存 ⅓。・口頸部は外反して立ち上がり、端部は内傾し平担。	外面）・肩部から体部は格子目叩き。他は回転ナデ調整。内面）・肩部から体部は青海波状文。部分的にナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）明オリーブ灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住F～4G
甕	24－337	・口径(23.8)・残存高	・残存　口頸部のみ⅛。・口頸部は肩部より外弯気味。口縁部に一条の沈線。端部はやや丸い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）灰色、内面）灰オリーブ色、・右	・鎮付上層一括
甕	24－338 図版13－338	・口径(23.3)・残存高7.1	・残存　口頸部のみ⅓。・口頸部は肩部より外弯気味。端部は直立し、平面。中央部がやや窪む。・肩部はやや内弯気味。	外面）・肩部から体部にかけて格木目状の叩き。・他は回転ナデ調整。内面）・肩部から平行叩き。・他は回転ナデ調整。	・粗、・良、外面）・灰白色部分的に灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・住E～3G
甕	24－339	・口径(36.7)・残存高3.2	・残存　口頸部のみ⅙。・口頸部は肩部より外弯気味。端部は玉縁状。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・観察不能。	・密、・良、外面）・暗灰色、内面）・暗灰色、・一	・住溝南西部
甕	24－340	・口径(39.6)・残存高8.8	・残存　口頸部のみ⅙。・口頸部は外反気味。・口縁部は長方形状。端部は平担。	外面）・端部下側に三条の平行沈線。その下に斜方向のヘラ引き文。やや密で二段。更に二条の平行沈線。内面）回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰白色、・一	・住F～6G

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
甕	24－341 図版13－341	・口径(54.0) ・残存高7.5	・残存 口頸部のみ1/6。・口頸部は外弯気味。・口縁部は凸帯を貼り付けた様に中央に窪み。端部は鋭い。	外面）・頸部は2段に仕切り、櫛描波状文。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・一	・住F～4G
甕	24－342	・口径(56.2) ・残存高11.0	・残存 口頸部のみ1/8。・口頸部は外弯気味。口頸部は長方形状。沈線を一条持つ。・端部は平担。	外面）・頸部は3段に仕切り、上2段に櫛描波状文。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・住G～9G

B．蓋杯・蓋 (343～359)

蓋杯(蓋)	63－343	・口径(12.4) ・器高3.0	・残存1/4。・天井部から内弯気味に下る。端部付近で、内弯し、端部は外傾し、鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(蓋)	63－344	・口径(14.2) ・器高2.3	・残存1/4。・天井部はほぼ平ら。内弯気味に下り。端部付近で内弯する。・端部はやや鋭い。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・オリーブ灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(蓋)	63－345 図版13－345	・口径(17.6) ・器高2.8	・残存1/2。・天井部につまみ剝離跡有り。・天井部は平ら。内弯気味に下り、端部は短いかえりを持ち、鋭い。・かえりは端部よりもとび出る。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整・特にかえり部は丁寧。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	―
蓋杯(蓋)	63－346	・口径(12.3) ・残存高2.5	・残存1/3。・天井部は平ら。口縁部から内弯気味に下り、端部は強くピンとはねる。・内面に焼成の際の重ね跡有り。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰色、内面）・灰色・左	・1T南拡張溝遺構3層一括・全体にひずむ
蓋杯(蓋)	63－347	・口径(14.1) ・器高1.9	・残存1/2。・口縁部は強く内弯気味に下り、端部は外傾し、鋭い。・天井部は中央部が陥没する。	外面）・天井部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・一	・BIT南拡張溝遺構3層
蓋杯(蓋)	63－348	・口径(18.9) ・器高3.0	・残存1/6。・天井部につまみ剝離の跡有り。・口縁部はやや内弯気味に下り、端部は鋭く、そして弱くはねる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ヨコナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・明オリーブ灰色、・左	・1T南拡張溝遺構
蓋杯(杯)	63－349	・口径(18.1) ・残存高（2.3	・残存 口縁部のみ1/6。内弯気味に下り、端部はやや丸く弱くはねる。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・にぶい黄橙色。・一	・2T西拡張上層一括
蓋杯(蓋)	63－350	・口径(13.6) ・器高3.3	・残存1/3。・天井部につまみ剝離跡有り、・天井部はやや高く傾く。口縁部は内弯気味に下り、端部付近で屈曲する。端部は外傾し、鋭い。	外面）天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・明オリーブ灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(蓋)	63－351	・口径(13.4) ・器高2.3	・残存2/3。・天井部は平ら。口縁部は内弯気味に下り、端部は外傾し、鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(蓋)	63－352	・口径(15.6) ・器高2.4	残存1/3。・天井部はほぼ平ら。口縁部は、ほぼストレートに下り、端部はやや外傾し鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・一	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	63－353	・口径(14.5) ・器高2.7	・残存2/3。・天井部はほぼ平ら。口縁部はほぼストレートに下り、端部は短く内傾し鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し有り。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・一	・1T拡張溝遺構3層
蓋杯(杯)	63－354	・口径(14.0) ・器高2.6	・残存1/3。・天井部はやや傾斜。口縁部はそのままストレートに下り、端部は「逆三角形」状でつまる。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・左	・2T西拡張上層一括

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(蓋)	63—355	・口径(14.6)・器高2.8	・残存1/3。・天井部はやや傾斜。口縁部は内弯気味に下る。端部付近で水平にのび、端部は短く凹形。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(蓋)	63—356	・口径(14.4)・器高3.0	・残存1/2。・天井部はほぼ平ら。口縁部は内弯気味に下る。端部は逆三角形状でつまる。	外面）・天井部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・1T車拡張3層
蓋杯(蓋)	63—357	・口径(15.1)・器高3.7	・残存1/2。・天井部はほぼ平ら。口縁部は内弯気味に下る。端部は平担でつまる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、—	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(蓋)	63—358	・口径(15.0)・器高2.6	・残存1/4。・天井部はほぼ平ら。口縁部は内弯気味に下り、端部は平担でつまる。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し有り。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・左	・1T南拡張 ・全体的にひずむ。
蓋杯(蓋)	63—359	・口径(15.0)・器高3.5	・残存1/4。・天井部はやや丸い。口縁部は内弯気味に下る。端部は逆三角形でつまり鋭い。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括

B 蓋 杯・杯（360～364、366～386）

蓋杯(杯)	63—360	・口径(14.2)・器高3.3	・残存1/3。・底部はほぼ平らで浅い。・底部から内弯気味に立ち上がり、端部付近で更に内弯する。・端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ後、ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・黄灰色、・右	・1T南拡張溝遺構一括
蓋杯(杯)	63—361 図版13—361	・口径10.7・器高3.1・たちあがり高0.8・受部径12.9	・完形。・たちあがりは短く内傾し、上方へとのび、端部は鋭い。・受部は短く、水平にのび端部は鋭い。・底部は平らでやや浅い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰オリーブ色、・右	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(杯)	63—362	・口径(13.8)残存高2.0・たちあがり高1.3・受部径(16.2)	・残存　口縁部のみ1/6。・たちあがりは長く、内弯気味。更にほぼまっすぐ立ち上り端部は鋭い。・受部は短く外上方へのび、端部は鋭い。	外面）観察不能の箇所があるが、全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、部分的に白色、内面）・灰色、・左	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	63—363	・口径(9.7)・器高2.5・たちあがり高0.7・受部径(11.4)	・残存1/2。・たちあがりは短く内傾し端部は鋭い。・受部は短く水平にのび端部は鋭い。・底部は丸く浅い。	外面）観察不能。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色に灰白色のまだら、内面）・灰色、—	・1T拡張溝遺構3層 ・不純物付着
蓋杯(杯)	63—364	・口径10.5・器高2.6・たちあがり高0.9・受部径12.4	・残存3/4。・たちあがりは長く、やや外弯気味で端部は鋭い。・受部は短く水平にのび、端部はやや鋭い。・底部はやや浅く丸い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色部分的に灰白色、内面）・灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(杯)	63—366	・口径(13.7)・器高4.1・高台高0.7・高台径(8.5)	・残存1/3。・底部はやや深く平ら。・高台は内弯気味で凹形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後外反し、端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・2T西拡張上層一括 ・全体にひずむ
蓋杯(杯)	64—367 図版13—367	・口径(13.8)・器高4.6・高台高0.7・高台径(8.9)	・残存1/2。・底部はやや浅く平ら。・高台は内弯気味で凹形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後外弯気味。端部は丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は未調整。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・1T拡張部最下層一括
蓋杯(杯)	64—368 図版13—368	・口径(13.8)・器高3.6・高台高0.7・高台径10.3	・残存2/3。・底部は平らでやや浅い。・高台は内弯気味で凹形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後、外弯気味。端部はやや丸い。	外面）・底部は観察不能。他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝3層一括。 ・底部に不純物多数付着。大きくひずみ実用に耐えない。
蓋杯(杯)	64—369	・口径(12.7)・器高4.1・高台高0.5・高台径(8.6)	・残存1/3。・底部はやや浅い。・口縁部は外傾後、内弯し端部付近で外弯。端部は鋭い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・2T西拡張上層一括。

器種	挿図番号 図版番号	法　量cm	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備　考
蓋杯(杯)	64－370	・口径(12.6)・器高3.9・高台高0.7・高台径8.6	・残存⅔。・底部は平らでやや浅い。・高台は内弯気味で断面は方形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後内弯し、端部付近で外弯。端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残す。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・左	・2T西拡張上層一括。・全体的にひずむ。
蓋杯(杯)	64－371	・残存高2.8・高台高0.5・高台径8.3	・残存　底部のみ⅔。・底部はやや丸い。・高台は内弯気味で断面は方形。端部はやや鋭い。・口縁部は外傾後内弯気味。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・2T西拡張上層一括
蓋杯(杯)	64－372	・残存高3.0・高台高0.4・高台径(9.8)	・残存　底部のみ½。・底部はやや丸い。・高台は「逆くの字形」で端部は鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－373	・残存高3.0・高台高0.7・高台径8.4	・残存底部のみ。・底部はほぼ平ら。・高台は内弯気味で断面は方形。端部はやや鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・緑灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層
蓋杯(杯)	64－374	・口径(13.7)・器高4.2・高台高0.8・高台径7.6	・残存⅓。・底部はほぼ平らで浅い。・高台は「逆くの字形」で、端部は鋭い。・口縁部は外傾後内弯気味。端部付近で外弯し、端部は丸い。	外面）・底部はヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰オリーブ色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－375 図版13－375	・口径(13.2)・器高4.7・高台高0.9・高台径8.4	・残存⅓。・底部はほぼ平らで、やや深い。・高台は内弯気味で断面は方形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後ほぼストレートに立ち上がり、端部付近で外反し、やや丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－376	・口径(12.5)・器高4.0・高台高0.6・高台径(8.8)	・残存¼。・底部はやや丸く平ら。・高台は内弯気味で断面は方形。端部は鋭い。・口縁部は外傾後ストレートに立ち上がり、端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ。中央部にケズリ残し。・体部下位に回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・暗灰色、内面）・明青灰色、・右	・1T拡張溝
蓋杯(杯)	64－377	・口径(11.1)・器高3.4・高台高0.5・高台径7.8	・残存½。・底部はやや丸く浅い。・高台はやや外傾した断面は方形。端部は平担。・口縁部は外傾後内弯気味。端部付近で外反し、端部は鋭い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・1T拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－378	・口径(13.5)・器高3.7・高台高0.9・高台径(9.7)	・残存½。・底部はほぼ平らで浅い。・高台はやや外傾した断面は方形。端部は平担。・口縁部は外傾後内弯気味。端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・左	・2T西拡張上層一括
蓋杯(杯)	64－379	・口径(13.6)・器高4.3・高台高0.4・高台径(11.2)	・残存⅓。・底部は丸くやや深い。・高台はやや外傾した断面は方形。端部は平担。・口縁部は外傾後内弯気味。端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・2T西拡張上層一括
蓋杯(杯)	64－380	・口径13.3・器高3.9・高台高0.7・高台径9.8	・残存¾。・底部は丸くやや深い。・高台はやや外傾した断面は方形。端部は平担をなす。・口縁部は外傾後内弯気味。端部付近で外傾する。端部はやや丸い。沈線が一条。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・2T西拡張上層一括
蓋杯(杯)	64－381	・口径(13.9)・器高5.0・高台高0.4・高台径8.3	・残存½。・底部は平らで深い。・高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後内弯気味。端部はやや丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。中央部にケズリ残し。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・緻密、・良好・堅緻、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・2T西拡張上層一括
蓋杯(杯)	64－382	・口径(14.6)・器高4.1・高台高0.6・高台径(8.4)	・残存½。・底部はやや丸くやや深い。・高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後内弯気味。端部は太く丸い。	外面）・底部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－383	・口径(13.3)・器高3.9・高台高0.7・高台径9.5	・残存⅓。・底部はやや丸くやや深い。・高台は「逆三角形状」で端部は鋭い。・口縁部は外傾後内弯気味。端部はやや丸い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
蓋杯(杯)	64－384	・口径(14.2)・器高4.3・高台高0.2・高台径(10.2)	・残存¼・底部はほぼ平らで、浅い。・底部は二重の貼り付けで低い。・口縁部は外傾後内弯気味。端部はやや鋭い。	外面）・底部は回転ヘラケズリ後ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）・中央部は不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。	・密、・良、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・南拡張溝遺構3層一括

器種	挿図番号 図版番号	法量cm	形態特徴	手法の特特徴	胎土・焼成・色調・回転方向	出土地点 備考
蓋杯(杯)	65－385	・口径(11.0) ・器高3.5	・残存1/6。・底部はほぼ平らで、浅い。・口縁部はやや外弯気味。端部はやや丸い。	外面）・底部はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・不良、外面）・浅黄橙色、内面）・黄橙色、・一	—
蓋杯(杯)	65－386	・口径(12.9) ・器高3.0	・残存1/2。・口縁部は外傾後内弯気味。端部付近で外反。・端部はやや鋭い。	外面）・底部は粗いヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・右	・2T西拡張上層一括

B. 壺・鉢・甕・瓶 (365.387～393)

長頸壺	65－365	・口径9.4・器高1.7・つまみ高0.5・つまみ径1.4	・残存1/5。・天井部に円形のつまみ。・天井部はほぼ平ら。内弯気味に下り、端部は短いかえりを持ち鋭い。・かえりは端部よりもとび出る。	外面）・天井部は回転ヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。特につまみ部は丁寧。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
鉢	65－387	・残存高6.3	・残存1/2。・底部より内弯気味に体部へ。・体部中位に一条の平行沈線。	外面）・底部はヘラケズリ後ヨコナデ。・体部下位はヘラケズリ後ヨコナデ。他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層一括
鉢	65－388	・口径19.9 ・器高9.5	・残存1/2。・底部は平らで深い。・底部より外傾後、内弯気味。端部付近でせまくなる。端部は外傾し、やや鋭い。二条の沈線。	外面）・底部はヘラケズリ。・体部下位はヘラケズリ。・他は回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・灰色・一	・1T南拡張溝遺構3層
壺	65－389	・残存高10.3	・残存　底部のみ1/3。・底部から内弯し体部へ。	外面）・体部下位から底部は格子目文の叩き。・他は回転ナデ調整。内面）・底部は粗い押圧。・他は回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰白色、内面）・灰白色、・右	・1T南拡張溝遺構3層
甕	65－390	・口径(24.1) ・器高8.0	・残存　口頸部のみ1/6。・口頸部は外弯気味。端部は鋭い。一部下方にはみ出る。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・局部は同心円文の叩き。他は回転ナデ調整。	・密、・良行、外面）・暗灰色、内面）・灰色、・右	・2T西拡張上層一括
甕	65－391	・基部径(18.4)	・残存　頸部のみ1/3。・口頸部は外弯気味に立ち上がる。	外面）・肩部は格子目文の後に回転ナデ。・他は回転ナデ調整。内面）肩部は青海波状文。他は回転ナデ調整。	・密、・良行、外面）・オリーブ灰色、内面）・灰色、。左	・3T3層
瓶	65－392	・口径(6.0) ・残存高5.5	・残存　口頸部のみ。・口頸部は外弯気味。端部は鋭い。	外面）・全面回転ナデ調整。内面）・全面回転ナデ調整。	・密、・良好、外面）・灰色、内面）・オリーブ灰色、・右	・2T西拡張上層一括
壺	65－393	・基部径(16.9) ・残存高17.4	・残存　口頸部のみ1/3。・肩部は下外方に内弯気味に下り、底部側へと到る。	外面）・局部は格子目文の叩き。内面）・当板の文様は特にみられない。その後櫛状施文具で調整。	・密、・良好、外面）黄褐色、内面）・灰色・一	・1T南拡張溝遺構3層一括

図　　版

図版 1

調査地全景

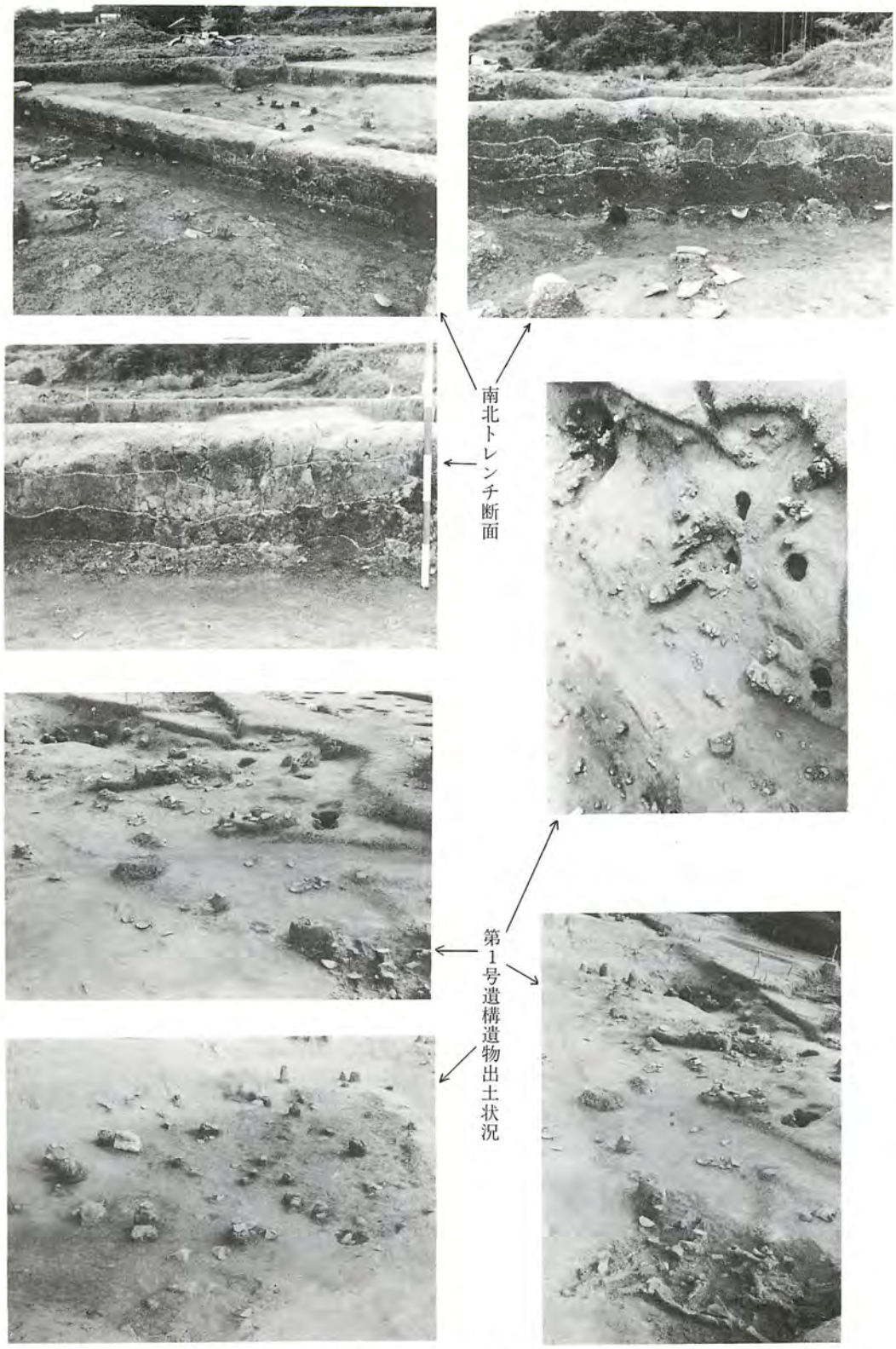
A 地区調査風景

図版 2

第１号遺構全景

南北トレンチ断面

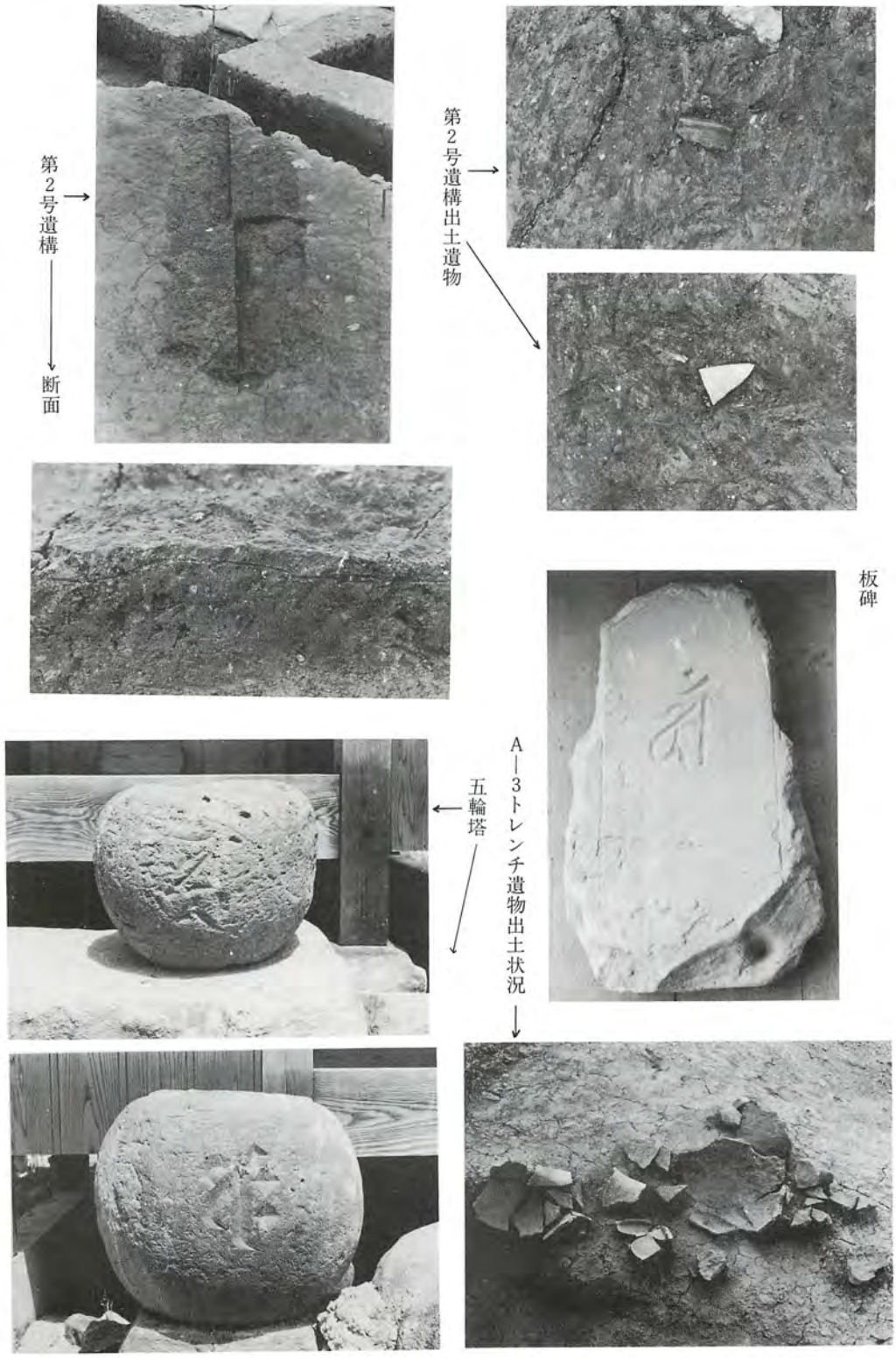
A 地区第１号遺構全景　南北トレンチ断面



A 地区南北トレンチ断面・第 1 号遺構遺物出土状況

図版 4

A地区第1号遺構・東西トレンチ断面・凹地



A地区第2号遺構・板碑・五輪塔・A－3トレンチ遺物出土状況

図版 6

①

⑤

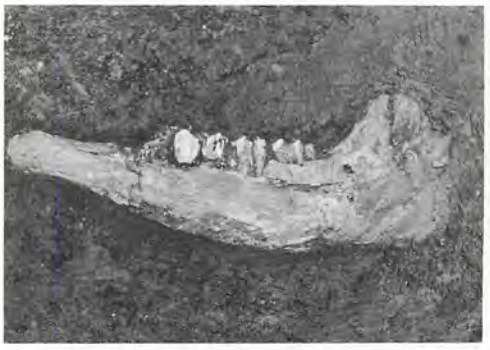
②

⑥

③

⑦

④



⑧

A 地区遺物出土状況　①②⑦須恵器　③越州窯青磁　④⑧獣骨　⑤⑥土師器

柱穴（南から）

柱穴（北から）

柱穴（東から）

↓Ｂ地区調査前状況

↓Ｂ－１トレンチ調査風景

Ｂ－１トレンチ拡張部 遺物出土状況↑

↑Ｂ－２トレンチ拡張部 遺物出土状況

Ａ地区　柱穴・Ｂ地区　Ｂ－１・２トレンチ調査状況

図版 8

←B－1トレンチ遺物出土状況↓

↑B－2トレンチ遺物出土状況↓

B－1トレンチ調査風景↓

B－2トレンチ調査風景←

B地区B－ 1.2トレンチ調査状況

①

⑤

②

⑥

③

⑦

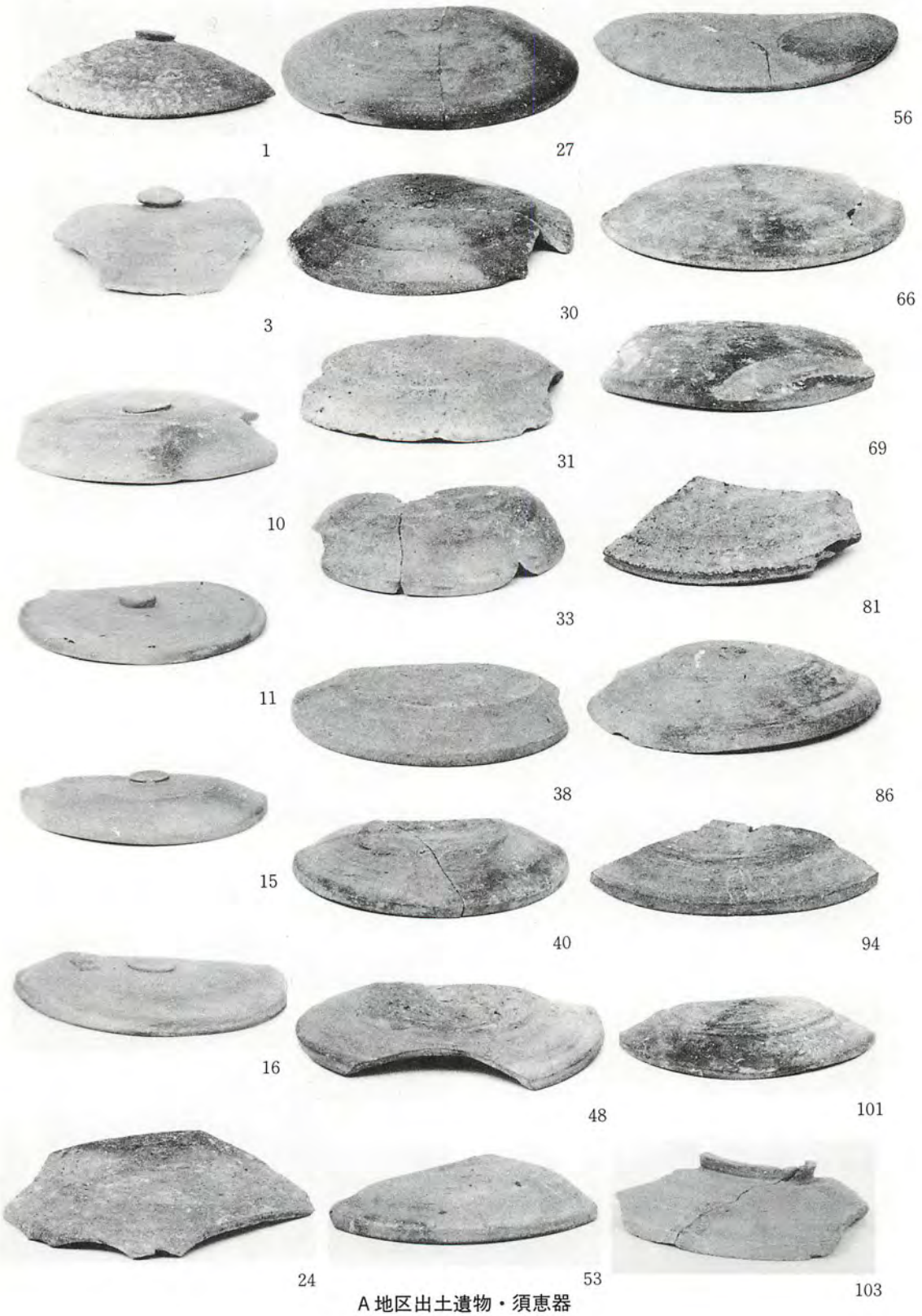
⑨

④

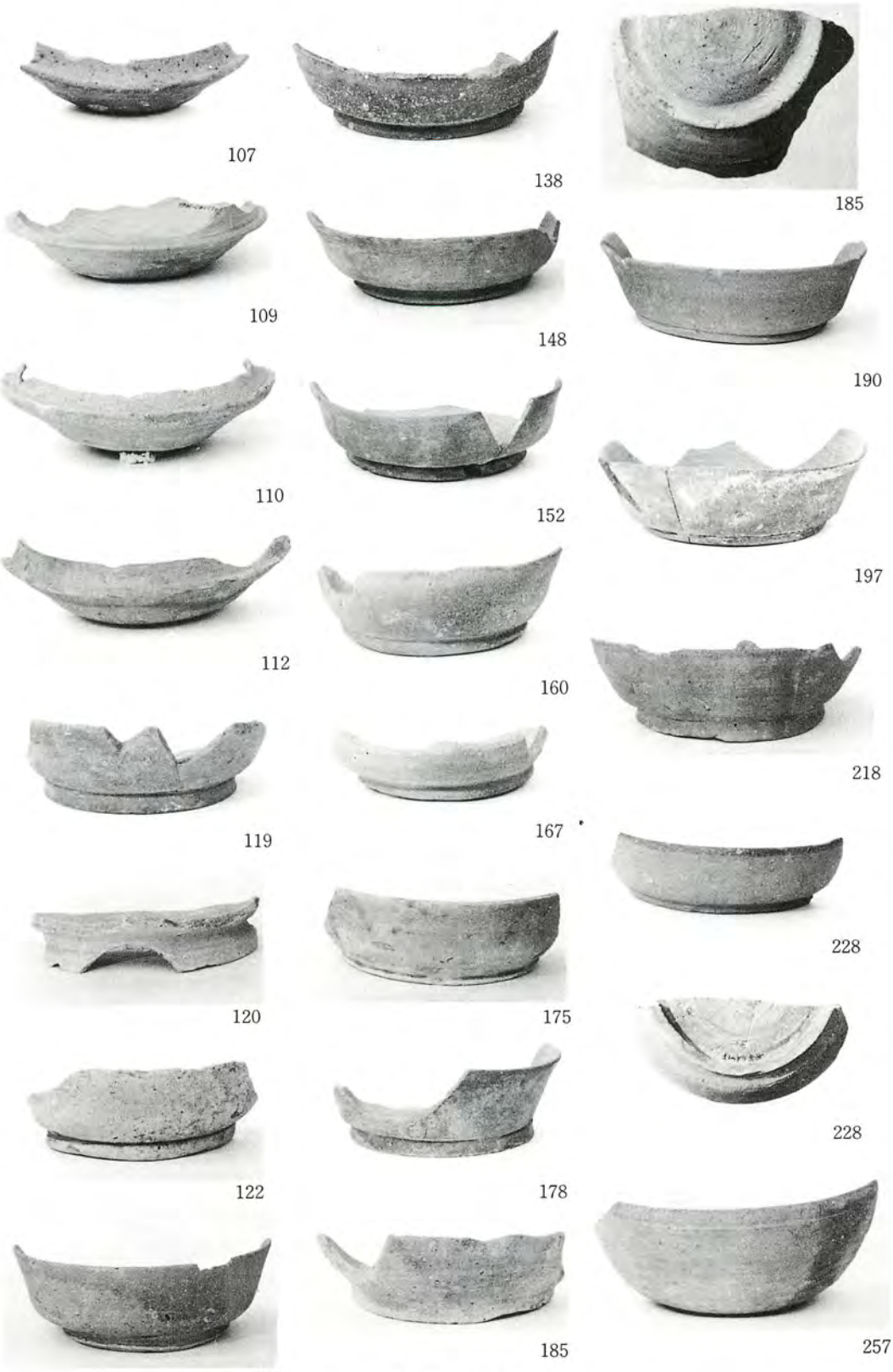
⑩

B地区　遺物出土状況　土師器　①②③④⑥　須恵器　④⑤⑥
獣骨　⑤⑦⑧⑨⑩

図版10



A地区出土遺物・須恵器


107
138
185
109
148
190
110
152
197
112
160
218
119
167
228
120
175
228
122
178
132
185
257

A地区出土遺物・須恵器

図版12

266

299

319

274

301

321

280

293

307

322

295

309

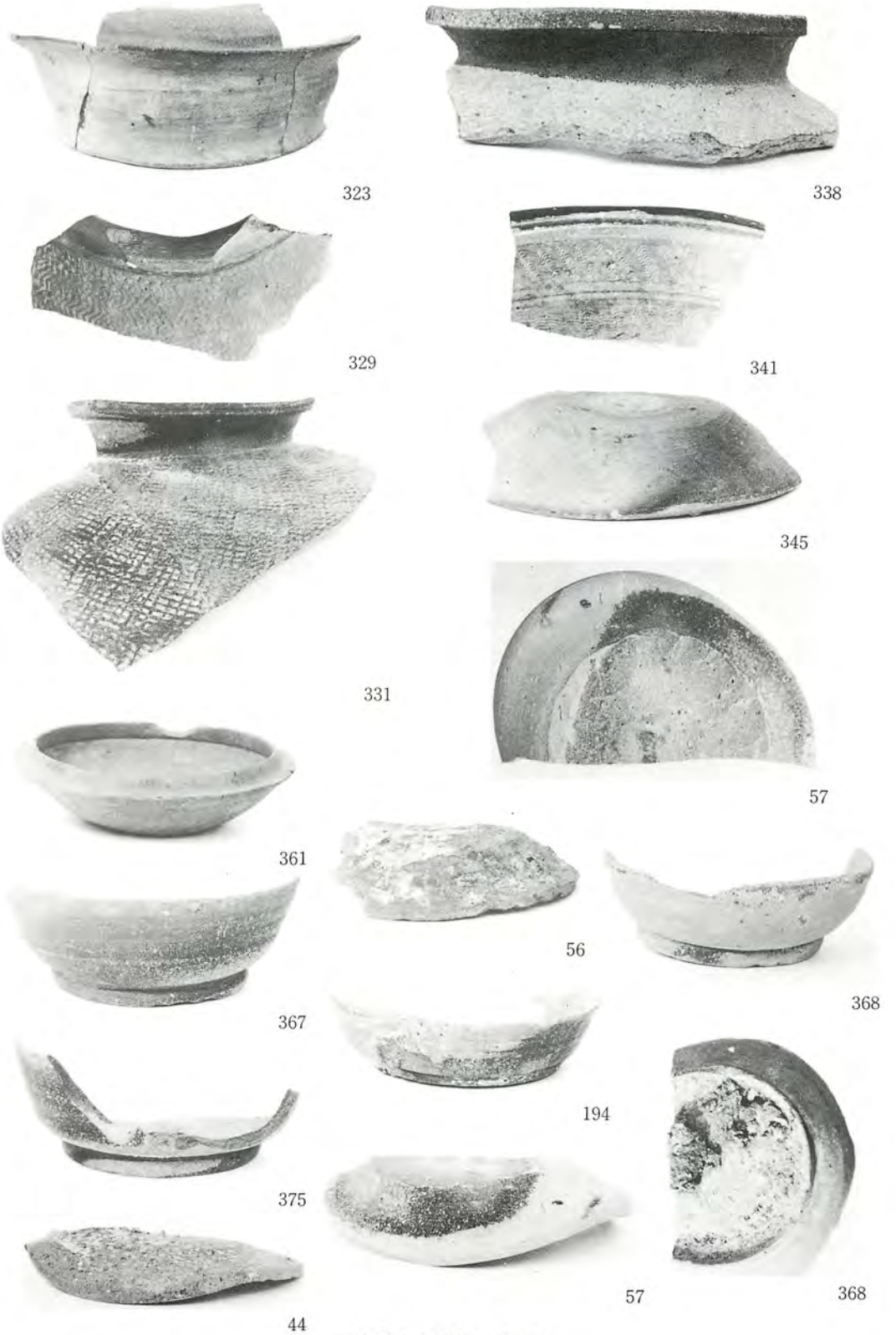
311

296

319

323

A地区出土遺物・須恵器



A・B地区出土遺物・須恵器

図版14

1

2

3

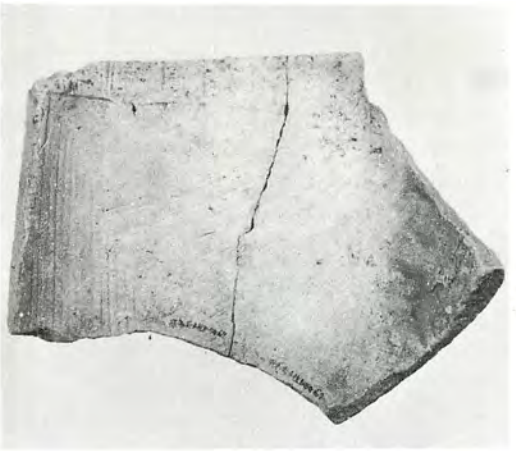
4

5

6

鬼面文軒丸瓦(1)(2)(5) 鬼面文鬼瓦(3) 単弁八弁蓮華文軒丸瓦(4) 垂弧文軒平瓦(6)　（約$\frac{1}{4}$）

7



8

9

丸瓦(7) 平瓦(8) 隅切瓦(9)　　(約$\frac{1}{4}$)

図版16

10

11

12

平瓦(10)(11)(12)　　(約$\frac{1}{4}$)

13

14

15

16

平瓦(13)(14)(15)　自板瓦(16)　(約$\frac{1}{4}$)

図版18

007

034

048

050

111

112

116

125

136

132

134

A地区出土遺物・土師器

137

151

(1)

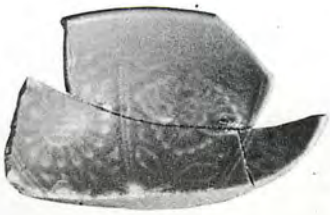
(2)

1

2

1

3



9

5

7

A地区出土遺物・土馬(1・2)・土師器(139)・子持勾玉・滑石製小玉・紡錘車(151)・青磁(1～3・9)・白磁(5・7)

189

195

199

200

208

207

212

210

213

B地区出土遺物・土師器

220

227

231

233

238　239

241

242

241

A・B地区出土遺物・土師器

熊本県文化財調査報告　第45集

興　善　寺　II

昭和55年３月31日

編集　熊本県教育委員会 ©
発行　〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　コロニー印刷
〒860 熊本市二本木３丁目12－37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 45 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：興善寺
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/